

- 第六類 土木ニ關スル建築構造及諸器械
- 第二十八條 審査第四課ニ於テハ左ノ各類ニ屬スル發明ノ審理ニ關スル事務ヲ掌ル
- 第一類 化學製造品並合成劑ノ類
- 第二類 化學工業用並化學ニ關スル器具裝置ニ係ルモノ
- 第三類 化學上ノ製造方法
- 第四類 冶金及鑛山等ニ關スルモノ
- 第二十九條 審査第五課ニ於テハ他課ニ屬セザル發明ノ審理ニ關スル事務ヲ掌ル
- 第三十條 庶務課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル
 - 一 公文往復ニ關スル事項
 - 二 會計ニ關スル事項
 - 三 特許願書檢閱ニ關スル事項
 - 四 原簿登錄ニ關スル事項
 - 五 賣買讓與共有及書入ノ登錄ニ關スル事項
 - 六 登錄通知ニ關スル事項
 - 七 特許證及登錄證ノ發行ニ關スル事項
 - 八 明細書及公報ノ編纂配付ニ關スル事項
 - 九 圖面調製及書類原本ニ關スル事項
 - 十 他課ノ主宰ニ屬セザル事項
- 第三十一條 圖書館ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル
 - 一 圖書標本ノ出納保管及觀覽ニ關スル事項
 - 二 刊行物及其出納保管ニ關スル事項
 - 三 出願中ニ係ル雛形見本ノ出納及管理ニ關スル事項
 - 四 特許發明及登錄意匠ノ陳列所ニ關スル事項
 - 五 内外國文書ノ翻譯ニ關スル事項

- 第三十二條 地質調査所ニ地質課土性課分析課及地形課ヲ置ク
 - 第三十三條 地質課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル
 - 一 地質ノ關係地層ノ構造及鑛床ノ鑑定ニ關スル事項
 - 二 有用鑛物ノ鑑定ニ關スル事項
 - 三 地質圖及其說明書編纂ニ關スル事項
 - 第三十四條 土性課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル
 - 一 土性調査ニ關スル事項
 - 二 主産植物及土性ノ關係試驗ニ關スル事項
 - 三 土性圖及其說明書編纂ニ關スル事項
 - 第三十五條 分析課ニ於テハ有用物料ノ分析試驗ニ關スル事務ヲ掌ル
 - 第三十六條 地形課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル
 - 一 地形測量ニ關スル事項
 - 二 實測地形圖編製ニ關スル事項
- 臨時博覽會事務局官制 明治二十四年六月 勅令第五十二號
- 臨時博覽會事務局官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
- 臨時博覽會事務局ハ明治二十六年北亞米利加合衆國イリノイ州シカゴ府ニ於テ開設スルコロンプス世界博覽會ニ關スル一切ノ事務ヲ掌ル
- 本局ハ農商務省中ニ之ヲ置ク
- 第二條 臨時博覽會事務局ニ左ノ職員ヲ置ク
總裁 一人

- 副總裁 二人
- 評議官 若干名
- 事務官 五人
- 書記 若干人
- 第三條 總裁ハ農商務大臣副總裁ハ勅任官事務官ハ委任官書記ハ勅任官ヲ以テ之ニ充ツ
- 第四條 評議員ハ官吏其他ニ就キ學識又ハ經驗アル者ヨリ選定シ總裁ノ奏請ニ依リ裁可ヲ經テ内閣ニ於テ之ヲ命ス
- 第五條 總裁ハ諸部ノ職員ヲ統督シ局務ヲ總判ス
- 副總裁ハ總裁ヲ輔ク總裁事故アルハ其職務ヲ代理ス
- 評議員ハ總裁ノ諮詢ニ應シ局務ニ關スル重要ノ事項ヲ審議調査ス
- 事務官ハ總裁ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス
- 第六條 總裁ハ局務ニ關シ諸規則ヲ定メ及警視總監北海道廳長官府縣知事ニ訓令又ハ指令スルコトヲ得
- 第七條 總裁ハ局務ニ關シ實業者ヲ招集シテ諮詢スルコトヲ得
- 第八條 總裁ハ經費豫算定額内ニ於テ備員ヲ使用スルコトヲ得
- 第九條 總裁ハ經費豫算定額内ニ於テ外國人ヲ雇入シ又ハ本局ノ事務ヲ外國人ニ囑託スルコトヲ得
- 第十條 本局職員ハ無給トス但事務ノ繁閑ニ依リ經費豫算定額内ニ於テ高等官及評議員ニハ一箇年金千圓以下判任官ニハ同金五百圓以下ノ手當金ヲ給與スルコトヲ得
- 第十一條 總裁ハ經費豫算定額内ニ於テ職員ノ特別勤勞アル者ヲ賞與スルコトヲ得

- 富岡製絲所官制 明治二十三年七月 勅令第百十六號
- 朕富岡製絲所官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
- 富岡製絲所官制
- 第一條 富岡製絲所ハ農商務大臣ノ管理ニ屬シ製絲ノ事業ヲ經營シ其ノ改良ヲ圖リ及之ニ關スル必要ノ事務ヲ處理スルコトヲ掌ル
- 第二條 富岡製絲所ニ左ノ職員ヲ置ク
- 所長 一人
- 屬 六人
- 技手 五人
- 第三條 所長ハ委任二等以下トス農商務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所中全部ノ事務ヲ掌理ス
- 第四條 屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ書記計算ノ事ニ從事ス
- 第五條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ製絲ニ關スル技術ニ從事ス
- 大小林區署官制 明治二十四年七月 勅令第百四十四號
- 朕大小林區署官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
- 大小林區署官制
- 第一條 大林區署ハ農商務大臣ノ管理ニ屬シ左ノ事務ヲ掌ル
- 一 官林ノ施業ニ關スル事項
- 二 官林ノ產物賣拂ニ關スル事項
- 三 官林ノ境界調査分合ニ關スル事項
- 四 官林ノ賣拂及貸渡ニ關スル事項

五 小林區署業務監督ニ關スル事項
 第二條 大林區署ニ職員ヲ置ク左ノ如シ
 林務官
 技師
 林務官補
 書記
 第三條 林務官ハ委任トシ十六人ヲ以テ定員トス大林區署長トナリ農商務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ署中全般ノ事務ヲ掌理ス
 第四條 技師ハ十六人ヲ以テ定員トス各大林區署ニ分屬シ署長ノ指揮ヲ承ケ署務ヲ掌ル
 第五條 林務官補ハ判任トシ八十人ヲ以テ定員トス上官ノ指揮ヲ承ケ署務ヲ分掌ス
 第六條 書記ハ判任トシ百二十八人ヲ以テ定員トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス
 第七條 小林區署ハ大林區署ニ屬シ左ノ事務ヲ掌ル
 一 官林ノ保護ニ關スル事項
 二 官林ノ栽培及土功ニ關スル事項
 三 官林ノ產物採取及賣拂ニ關スル事項
 四 官林ノ測量製圖ニ關スル事項
 第八條 小林區署ニ職員ヲ置ク左ノ如シ
 營林主事
 營林主事補
 森林監守
 第九條 營林主事ハ判任トシ三百八十七人ヲ以テ定員トス小林區署長トナリ上官ノ指揮ヲ承ケ署務ヲ掌理ス

第十條 營林主事補ハ判任トシ六百八十八人ヲ以テ定員トス上官ノ指揮ヲ承ケ署務ヲ分掌ス
 第十一條 森林監守ハ判任トシ七百二十八人ヲ以テ定員トス上官ノ指揮ヲ承ケ官林ノ保護ニ従事ス
 第十二條 農商務大臣ハ事務ノ必要ニ依リ營林主事又ハ營林主事補ヲ大林區署ニ臨時勤務セシムルコトヲ得
 第十三條 大小林區署ノ名稱位置並管轄區域ハ農商務大臣ノ定ムル所ニ依ル
 附則
 第十四條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス
 ○大林區署長處務規程
 明治二十四年九月
 農商務省訓令第三十七號
 本年三月當省戌第一三一號ノ一並ニ五月戌第二八六號大林區署長委任條件ヲ廢シ更ニ左記ノ通り大林區署長處務規程相定候條自今右ニ據リ取扱フヘシ
 大林區署長處務規程
 第一條 大林區署長ハ官制ノ定ムル處ニ從ヒ所轄官林ノ總務ヲ處理シ主管事務ノ整理及法律命令ノ執行ニ付凡テ其實ニ任ス
 第二條 大林區署長ハ主管ノ事務ヲ執行スルヲ必要アルトキハ其實施ノ順序ヲ設ケテ之ヲ公告シ又ハ府縣ノ令達告示ヲ要スル場合ニ於テハ其旨ヲ地方廳ニ照會スルコトヲ得
 第三條 大林區署長ハ主管ノ事務ニ付各官廳ニ對シ照會往復スルコトヲ得

第四條 大林區署長ハ事務整理ノシメ經伺ノ上處務細則ヲ設ケ署中處務ノ分掌ヲ命スヘシ
 第五條 大林區署長ハ管内ヲ巡視シ及部下ノ職員ニ管内巡回ヲ命シ又ハ臨時緊急ノ場合ニ於テ管外出張ヲ爲シ及之ヲ命スルコトヲ得
 第六條 大林區署長ハ判任官以下ノ歸省、看聽、墓參、轉地療養願ヲ許可シ及除服出仕ヲ命スルコトヲ得
 第七條 大林區署長ハ判任官及月俸拾圓又ハ日給五拾錢以上ノ備員ノ進退ニ關シテハ山林局長ヲ經由シテ農商務大臣ニ具狀スヘシ
 第八條 大林區署長ハ月俸拾圓又ハ日給五拾錢以下ノ備員ノ採用解雇ハ之ヲ專行スルコトヲ得
 第九條 大林區署長事故アルトキハ部下ノ官吏ニ代理ヲ命シ又ハ主管事務ノ幾分ヲ委任シ自己ノ名義ヲ以テ之ヲ處辨セシムルコトヲ得
 第十條 大林區署長ハ小林區署員ノ在勤ヲ命免シ及必要アル場合ニハ營林主事營林主事補ヲ大林區署ニ臨時勤務セシムルコトヲ得
 但小林區署長ハ此限ニアラス
 第十一條 大林區署長ハ本條各項ヲ除ノ外主管事務ニ付經伺ヲ要セス處分スルコトヲ得
 一 施業案確定ノコト
 二 毎年度事業案確定ノコト
 三 既定事業案増減變更ノコト
 四 官林地賣拂及讓與ノコト
 五 民有地購買ノコト

六 上地官林委託許否及解除ノコト
 七 官林地ト民有地ト交換ノコト
 八 林位變更ノコト
 九 官林地年期貸渡ノコト
 但段別五町歩以下ニシテ五箇年以内ノ年期貸渡及之カ繼年期ハ此限ニアラス
 十 官林主產物年期賣拂ノコト
 十一 官林雜種物五箇年以上年期賣拂ノコト
 十二 金額五拾圓以上主產物及雜種物特賣ノコト
 十三 豫算計劃外ノ主產物處分ノコト
 十四 小林區及保護區廢置變更ノコト
 十五 小林區署及保護區官舎位置變更ノコト
 十六 詞訟提起ノコト
 但公訴附帶ノ私訴又ハ緊急ノ場合ニ於ケル詞訟ハ此限ニアラス
 十七 經伺ノ上締結シタル契約ノ變更及解除ノコト
 但契約ノ目的及金額ニ異動ナキ變更ハ此限ニアラス
 十八 一箇所金額貳百圓以上ノ造林其他ノ事業隨意契約ノコト
 十九 一箇所金額三拾圓以上ヲ要スル土木營繕及修繕ノコト
 二十 一箇代金三拾圓以上ノ諸物品購買ノコト
 二十一 一箇概算金三拾圓以上ノ不用品賣拂ノコト
 二十二 前各項ノ外例規ナキ重大ノ事件
 第十二條 左ニ記載スル木竹根株及枝條ハ前條第十三項ノ例

ニ依ラス

- 一 燒枯損木竹、轉倒危險木竹、障木竹、盜伐木竹、根株枝條及拂受人ノ棄損シタル木竹
- 二 學術研究ノ爲メ又ハ官民有區分ニ關シ徵證ノ爲メ處分ヲ要スル木竹
- 三 官林測量ノ爲メ支障ノ木竹
- 四 地種目組替ニ付其地上ニ存在スル木竹
- 五 林業付帶ノ爲メ必要ナル木竹
- 六 部分木
- 七 水災火災防禦又ハ軍隊徵發ニ應スル爲メ處分ヲ要スル木竹
- 第十三條 大林區署長ハ既定ノ事業案ニヨリ諸產物ノ賣拂ヲナスヘシ其公賣ニ係ルモノハ委員ヲ命ジテ之ヲ執行セシム可シ
- 第十四條 大林區署長ハ官林ニ被害アリタルトキ及執行セシ事務ハ別ニ定ムル處ノ報告例ニ依リ報告ス可シ

○鑛山監督署官制

明治二十四年七月 勅令第九十五號

鑛山監督署官制

- 第一條 鑛山監督署ハ農商務大臣ノ管理ニ屬シ鑛業條例ノ定ムル所ニ依リ鑛山監督ニ關スル事務ヲ掌ル
- 第二條 鑛山監督署ニ職員ヲ置ク左ノ如シ
鑛山監督官
技師

書記

技手

- 第三條 鑛山監督官ハ奏任トシ六人ヲ以テ定員トス鑛山監督署長トナリ農商務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ署中全般ノ事務ヲ掌理ス
- 第四條 技師ハ十人ヲ以テ定員トス各監督署ニ分屬シ署長ノ指揮ヲ承ケ事務ヲ掌ル
- 第五條 書記ハ判任トシ四十八人ヲ以テ定員トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス
- 第六條 技手ハ五十八人ヲ以テ定員トス
- 第七條 農商務大臣ニ於テ必要ト認ムルトキハ鑛山監督支署ヲ置キ鑛山監督署員ヲ分派スルコトヲ得
- 第八條 鑛山監督署及鑛山監督支署ノ名稱位置並管轄區域ハ農商務大臣ノ定ムル所ニ依ル
- 附則
第九條 本令ハ鑛業條例實施ノ日ヨリ施行ス

○貯木所官制

明治十九年四月 勅令第七號

貯木所官制

- 第一條 貯木所ハ農商務省山林局ノ管理ニ屬シ須要ノ地方ニ之ヲ設ケ官材ノ貯蓄販賣ノ事ヲ掌ラシム
- 第二條 貯木所ニ職員ヲ置クコト左ノ如シ
所長

屬

- 第三條 所長ハ判任トス山林局長ノ指揮監督ヲ承ケ所中ノ事務ヲ掌理ス
- 第四條 屬ハ判任トス所長ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

○下總牧場官制

明治十九年四月 勅令第九號

下總牧場官制

- 第一條 下總牧場ハ農商務大臣ノ管理ニ屬シ兼テ嶺岡支牧場ヲ管轄シ牛馬羊ノ改良蕃息ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 下總牧場ニ職員ヲ置クコト左ノ如シ
場長

- 第三條 場長ハ判任トス農務局長ノ指揮監督ヲ承ケ場中ノ事務ヲ掌理ス
- 第四條 屬ハ判任トス場長ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

○遞信省官制

明治二十四年七月 勅令第九十五號

遞信省官制

- 第一條 遞信大臣ハ郵便、電信、鐵道、船舶、海員、航路標識及郵便爲替、郵便貯金ニ關スル事務ヲ管理シ電氣事業ヲ監督ス(二十五七年七月勅令第六十七號ヲ以テ改正ス)
- 第二條 大臣官房ニ於テハ通則ニ據ケルモノ、外遞信監察ニ

關スル事務ヲ掌ル

- 第三條 遞信省ニ左ノ三局ヲ置ク
郵務局
管船局
電務局
- 第四條 郵務局長、管船局長ハ勅任トシ電務局長ハ奏任トス
- 第五條 郵務局ハ郵便及郵便爲替、郵便貯金、小包郵便ニ關スル事務ヲ掌ル(二十五七年七月勅令第六十七號ヲ以テ改正ス)
- 第六條 管船局ハ船舶、海員、航路標識ニ關スル事務ヲ掌ル
- 第七條 電務局ハ電信電話ニ關スル事務及電氣事業監督ノ事ヲ掌ル
- 第八條 遞信省專任參事官ハ二人專任書記官ハ三人ヲ以テ定員トス
- 第九條 遞信省ニ專任遞信監察官二人及遞信監察官補十八人ヲ置ク遞信監察官ハ大臣官房ニ屬シテ遞信監察ノ事務ヲ掌理シ遞信監察官補ハ監察ノ事務ニ從事ス(二十五七年七月勅令第六十七號ヲ以テ改正ス)
- 第十條 遞信省ニ專任遞信事務官五人ヲ置ク奏任トス
遞信事務官ハ大臣官房郵務局管船局及電務局ニ屬シテ各其事務ヲ分掌ス(二十五七年七月勅令第六十七號ヲ以テ改正ス)
- 第十一條 遞信省ニ技師五人技手三十一人ヲ置ク技師及技手ハ大臣官房及各局ニ屬シテ其事務ニ從事ス(二十五七年七月勅令第六十七號ヲ以テ改正ス)
- 第十二條 遞信省試補ハ三人ヲ以テ定員トス
- 第十三條 遞信省ニ技師試補二人ヲ置ク
- 第十四條 遞信省屬ハ二百九十七人ヲ以テ定員トス(同上)
- 附則

第十五條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

分課規程 明治二十四年八月十四日官報

- 遞信省官房各局分課章程
- 第一條 遞信大臣官房ニ左ノ四課ヲ置ク
 - 職員課 文書課
 - 報告課 財務課
- 第二條 職員課ハ官吏ノ進退身分ニ關スル事項ヲ掌理ス
- 第三條 文書課ハ左ノ事項ヲ掌理ス
 - 一 各局課ノ成案ヲ審査シ及公文ヲ起草スル事
 - 二 公文書類及成案文書ヲ接受發送スル事
 - 三 本省及省中各局課一切ノ公文書類ヲ編纂保存スル事
 - 四 各局課ニ屬セサル事務ニ關スル事
- 第四條 報告課ハ左ノ事項ヲ掌理ス
 - 一 統計報告編成ニ關スル事
 - 二 官報掲載ノ事項ニ關スル事
 - 三 外國文書反譯ニ關スル事
 - 四 圖書ノ調査購求保管及出納ニ關スル事
- 第五條 財務課ハ左ノ事項ヲ掌理ス
 - 一 本省所管ノ經費及諸收入ノ豫算決算並會計ニ關スル事
 - 二 本省所有ノ官有財産及物品ニ關スル事
 - 三 會計ノ下檢査ニ關スル事
 - 四 廳舎ノ建築及修繕ニ關スル事
 - 五 省中ノ取締ニ關スル事
- 第六條 電信燈器具製造所ニ關スル事
- 第六條 郵務局ニ左ノ三課ヲ置ク

計理課 內信課

- 第七條 郵務局計理課ハ郵便及郵便爲替貯金事業ノ經理ニ關スル事務ヲ掌理ス
- 第八條 郵務局內信課ハ郵便遞送集配運輸方法ニ關スル事務ヲ掌理ス
- 第九條 郵務局外信課ハ萬國郵便聯合並ニ外國郵便及郵便爲替條約ニ關スル事務ヲ掌理ス
- 第十條 管船局ニ左ノ三課ヲ置ク
 - 船舶課 標識課
 - 監査課
- 第十一條 管船局船舶課ハ船舶、海員、漂流物、難破船、浦役場、造船所、船用製鐵所及港則ニ關スル事務ヲ掌理ス
- 第十二條 管船局標識課ハ航路標識ニ關スル事務ヲ掌理ス
- 第十三條 管船局監査課ハ海運會社、海上保險會社ニ關スル事務ヲ掌理ス
- 第十四條 電務局ニ左ノ二課ヲ置ク
 - 通信課 工務課
- 第十五條 電務局通信課ハ電信電話事業ノ經理及萬國電信聯合並ニ外國電信條約ニ關スル事務ヲ掌理ス
- 第十六條 電務局工務課ハ電信建築保存工事ニ關スル事務ヲ掌理ス
- 第十七條 電氣試驗所電報調查所ヲ置キ電務局ニ屬セシム電氣試驗所ハ電氣試驗ニ關スル事務ヲ掌理シ兼テ電氣事業監督ノ事務ヲ掌リ電報調查所ハ電報送受ノ正否及電報料收納ノ當否調査ニ關スル事務ヲ掌理ス

郵便及電信局官制 明治二十四年七月勅令第四百七十七號

- 朕郵便及電信局官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
- 郵便及電信局官制
- 第一條 郵便電信ノ業務ヲ執行スル爲地方ニ郵便電信局郵便局及電信局ヲ置キ遞信大臣ノ管轄ニ屬セシム
- 第二條 郵便電信局ニ左ノ職員ヲ置ク
 - 局長
 - 書記
 - 技手
 - 書記補
- 東京及大阪一等郵便電信局ニ限リ各事務官一人技師一人ヲ置ク
- 第三條 郵便局ニ左ノ職員ヲ置ク
 - 局長
 - 書記
 - 書記補
- 第四條 電信局ニ左ノ職員ヲ置ク
 - 局長
 - 書記
 - 技手
 - 書記補
- 第五條 郵便電信局郵便局及電信局ノ等級ヲ分テ各一等二等三等トス
- 第六條 一等郵便電信局ノ局長ハ奏任又ハ判任トス其奏任ヲ

以テ局長ニ任スル局ノ位置左ノ如シ

- 東京 大阪 横濱 神戸
- 長崎 京都 函館 新潟
- 名古屋 熊本 仙臺 廣島
- 一等郵便電信局二等三等郵便電信局郵便局電信局ノ局長ハ判任トス
- 郵便電信局長郵便局長電信局長ハ遞信大臣ノ命ヲ承ケ局中全部ノ事務ヲ掌理ス
- 第七條 事務官ハ奏任トス局長ノ指揮ヲ承ケ郵便ノ業務ヲ掌理シ局長事故アルトキ之ヲ代理ス
- 第八條 技師ハ局長ノ指揮ヲ承ケ電信ノ業務ヲ掌理ス
- 第九條 書記ハ判任トス局長ノ指揮ヲ承ケ郵便又ハ電信ノ業務ニ從事シ事務官ヲ置カサル局ニ於テハ局長事故アルトキ之ヲ代理ス
- 第十條 技手ハ局長ノ指揮ヲ承ケ電信ノ業務ニ從事ス
- 第十一條 書記補ハ判任トス書記ノ事務ヲ助ク
- 第十二條 書記書記補ハ三千四百二人ヲ以テ定員トス (明治二十四年七月勅令第五百九十九號ヲ以テ改正ス)
- 第十三條 技手ハ九百四十七人ヲ以テ定員トス
- 第十四條 一等郵便電信局一等郵便局ハ遞信大臣ノ指定スル區域内ノ郵便電信局郵便局及電信局ノ業務ヲ監督ス
- 第十五條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

郵便爲替貯金管理所官制 明治二十四年七月勅令第四百七十八號

朕郵便爲替貯金管理所官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

郵便爲替貯金管理所官制

第一條 郵便爲替貯金郵便貯金ヲ管理シ及郵便爲替貯金ノ検査計算ニ關スル事務ヲ掌理スル所トス(二十五七年七月勅令第五十九號ヲ以テ改正)

第二條 郵便爲替貯金管理所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

事務官

書記

書記補

第三條 郵便爲替貯金管理所長ハ奏任トス逓信大臣ノ命ヲ承テ所中ノ事務ヲ掌理ス

第四條 事務官ハ奏任トシ二人ヲ以テ定員トス所長ノ指揮ヲ承テ所務ヲ分掌ス

第五條 書記ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承テ書記簿記計算ノ事務ニ従事ス

第六條 書記補ハ判任トス書記ノ事務ヲ助ク

第七條 書記簿記補ハ五百四人ヲ以テ定員トス(同上)

第八條 逓信大臣ハ必要ト認ムル地ニ郵便爲替貯金管理支所ヲ置キ其事務ヲ分掌セシメ事務官ヲ以テ所長ニ充ルコトヲ得

附則

第九條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

明治二十三年勅令第三百三十三號郵便爲替貯金局官制ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

○電話交換局官制 明治二十四年七月勅令第三百五十二號

電話交換局官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

電話交換局官制

第一條 電話交換局ハ逓信大臣ノ管轄ニ屬シ電話交換ノ業務ヲ執行スル所トス

第二條 電話交換局ニ左ノ職員ヲ置ク

技師

書記

技師

技師

第三條 技師ハ四人ヲ以テ定員トス電話交換局長トナリ逓信大臣ノ命ヲ承テ所中全部ノ事務ヲ掌理ス(二十五四年四月勅令第三十六號ヲ以テ改正)

第四條 書記ハ判任トス局長ノ指揮ヲ承テ書記簿記計算ノ事務ニ従事ス

第五條 技師ハ局長ノ指揮ヲ承テ電話線ノ建設電話機ノ裝置及其保存ニ關スル工事ヲ分掌ス

第六條 書記技師ハ二十四人ヲ以テ定員トス(同上)

第七條 電話交換局ノ名稱及位置ハ逓信大臣之ヲ定ム

附則

第八條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○航路標識管理所官制 明治二十四年七月勅令第三百四十九號

航路標識管理所官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 航路標識管理所ハ逓信大臣ノ管轄ニ屬シ航路標識ノ工事及其保守ニ關スル事務ヲ掌ル

第二條 航路標識管理所ニ左ノ職員ヲ置ク

現 行 日 本 法 令 大 全

技師
書記
技師
看守
第三條 技師ハ一人ヲ以テ定員トス航路標識管理所長ト爲リ逓信大臣ノ命ヲ承テ所中全部ノ事務ヲ掌理ス

第四條 書記ハ判任トシ二十三人ヲ以テ定員トス所長ノ指揮ヲ承テ庶務ニ従事ス

第五條 技師ハ十六人ヲ以テ定員トス所長ノ指揮ヲ承テ航路標識ノ工事ニ従事ス

第六條 看守ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承テ航路標識ノ看守ニ従事ス其定員ヲ定ムルコト左ノ如シ

一等燈臺 各三人

二等燈臺 各三人

三等燈臺 各二人

四等燈臺 各二人

五等燈臺 各二人

六等燈臺 各二人

霧警號 二人

逓信大臣ニ於テ必要ト認ムルトキハ航路標識看守豫備員十人マテヲ置クコトヲ得

第七條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

附則

○船舶司檢所官制 明治二十四年七月勅令第三百五十二號

船舶司檢所官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 船舶司檢所ハ逓信大臣ノ管轄ニ屬シ海員水先人ノ試験、審問、船舶ノ検査、測度、新造船ノ工事監督ヲ掌ル所トス

第二條 船舶司檢所ハ東京大阪長崎函館其他逓信大臣必要ト認ムル地ニ之ヲ置ク

第三條 船舶司檢所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

司檢官

司檢官補

書記

第四條 所長ハ司檢官ヲ以テ之ニ充ツ逓信大臣ノ命ヲ承テ所中全部ノ事務ヲ掌理ス

第五條 司檢官ハ奏任トシ十人ヲ以テ定員トス各船舶司檢所ニ分屬シ所長ノ指揮ヲ承テ所務ヲ分掌シ若クハ管船局ノ課長ヲ兼テ職務ヲ掌理ス

第六條 司檢官補ハ判任トシ十二人ヲ以テ定員トス上官ノ指揮ヲ承テ事務ニ従事ス

第七條 書記ハ判任トシ十二人ヲ以テ定員トス上官ノ命ヲ承テ庶務會計ニ従事ス

第八條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○船舶司檢所名稱位置及開始 明治二十四年八月十一號

現行日本法令大全

第二類 第一章 第一款 官制

船舶司檢所ノ名稱位置左ノ通相定メ本月十六日ヨリ開始ス
 東京船舶司檢所 武藏國東京市
 大阪船舶司檢所 攝津國大阪市
 長崎船舶司檢所 肥前國長崎市
 函館船舶司檢所 渡島國函館市

○電信建築署官制 明治二十四年七月勅令第五百一十一號

朕電信建築署官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

電信建築署官制

第一條 電信建築署ハ遞信大臣ノ管轄ニ屬シ電線建設電機裝
 置及其保存ニ關スル事務ヲ掌ル所トス其名稱位置及所轄區
 域ヲ定ムル左ノ如シ

名稱	位置	管轄	區域
東京電信建築署	武藏國東京	東京府 神奈川縣 千葉縣 茨城縣 群馬縣 栃木縣 長野縣 山梨縣 靜岡縣 京都府 大阪府 兵庫縣 和歌山縣 德島縣 香川縣 高松縣 廣島縣 岡山縣 山口縣 福山縣 廣島縣 熊本縣 鹿兒島縣 大分縣 宮崎縣 鹿児島縣 鹿兒島縣	神奈川縣 千葉縣 茨城縣 群馬縣 栃木縣 長野縣 山梨縣 京都府 大阪府 兵庫縣 和歌山縣 德島縣 香川縣 高松縣 廣島縣 岡山縣 山口縣 福山縣 廣島縣 熊本縣 鹿兒島縣 大分縣 宮崎縣 鹿児島縣 鹿兒島縣
大阪電信建築署	攝津國大阪	大阪府 兵庫縣 和歌山縣 德島縣 香川縣 高松縣 廣島縣 岡山縣 山口縣 福山縣 廣島縣 熊本縣 鹿兒島縣 大分縣 宮崎縣 鹿児島縣 鹿兒島縣	大阪府 兵庫縣 和歌山縣 德島縣 香川縣 高松縣 廣島縣 岡山縣 山口縣 福山縣 廣島縣 熊本縣 鹿兒島縣 大分縣 宮崎縣 鹿児島縣 鹿兒島縣
札幌電信建築署	石狩國札幌	北海道 青森縣 岩手縣 秋田縣 山形縣 福島縣 茨城縣 群馬縣 栃木縣 長野縣 山梨縣 京都府 大阪府 兵庫縣 和歌山縣 德島縣 香川縣 高松縣 廣島縣 岡山縣 山口縣 福山縣 廣島縣 熊本縣 鹿兒島縣 大分縣 宮崎縣 鹿児島縣 鹿兒島縣	北海道 青森縣 岩手縣 秋田縣 山形縣 福島縣 茨城縣 群馬縣 栃木縣 長野縣 山梨縣 京都府 大阪府 兵庫縣 和歌山縣 德島縣 香川縣 高松縣 廣島縣 岡山縣 山口縣 福山縣 廣島縣 熊本縣 鹿兒島縣 大分縣 宮崎縣 鹿児島縣 鹿兒島縣
仙臺電信建築署	陸前國仙臺	青森縣 岩手縣 秋田縣 山形縣 福島縣 茨城縣 群馬縣 栃木縣 長野縣 山梨縣 京都府 大阪府 兵庫縣 和歌山縣 德島縣 香川縣 高松縣 廣島縣 岡山縣 山口縣 福山縣 廣島縣 熊本縣 鹿兒島縣 大分縣 宮崎縣 鹿児島縣 鹿兒島縣	青森縣 岩手縣 秋田縣 山形縣 福島縣 茨城縣 群馬縣 栃木縣 長野縣 山梨縣 京都府 大阪府 兵庫縣 和歌山縣 德島縣 香川縣 高松縣 廣島縣 岡山縣 山口縣 福山縣 廣島縣 熊本縣 鹿兒島縣 大分縣 宮崎縣 鹿児島縣 鹿兒島縣

名古屋電信建築署	尾張國名古屋	愛知縣 岐阜縣 富山縣 石川縣 福井縣
廣島電信建築署	安藝國廣島	廣島縣 岡山縣 山口縣 福山縣 廣島縣 熊本縣 鹿兒島縣 大分縣 宮崎縣 鹿児島縣 鹿兒島縣
熊本電信建築署	肥後國熊本	熊本縣 鹿兒島縣 大分縣 宮崎縣 鹿児島縣 鹿兒島縣
鹿兒島電信建築署	肥前國鹿兒島	鹿兒島縣 大分縣 宮崎縣 鹿児島縣 鹿兒島縣
宮崎電信建築署	肥前國宮崎	宮崎縣 鹿兒島縣 大分縣 宮崎縣 鹿児島縣 鹿兒島縣
石川縣電信建築署	石川縣	石川縣 福井縣
岐川縣電信建築署	石川縣	石川縣 福井縣

第二條 電信建築署ニ左ノ職員ヲ置ク

技師 書記 技手

第三條 技師ハ七人ヲ以テ定員トス電信建築署長ト爲リ遞信
 大臣ノ命ヲ承ク署中全部ノ事務ヲ掌理ス

第四條 書記ハ判任トス署長ノ指揮ヲ承ク書記簿記計算ノ事
 務ニ從事ス

第五條 技手ハ署長ノ指揮ヲ承ク工事ヲ分掌ス

第六條 書記技手ハ七十六人ヲ以テ定員トス

第七條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○商船學校官制 明治二十四年勅令第四百五十五號

朕商船學校官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

商船學校官制

第一條 商船學校ハ東京ニ置キ遞信大臣ノ管理ニ屬シ航海、運

現行日本法令大全

第二類 第一章 第一款 官制

用、機關ノ學術及技藝ヲ教授スル所トス
 第二條 大阪函館ニ商船學校分校ヲ置キ簡易ノ學術及技藝ヲ
 教授ス

第三條 商船學校ニ左ノ職員ヲ置ク

校長 幹事 教授 分校長 助教 書記

第四條 校長ハ一人委任トス遞信大臣ノ指揮監督ヲ承ク校務
 ヲ掌理ス(二十四年七月二十四日勅令第五百一十一號)

第五條 幹事ハ一人教授之ヲ兼任ス校長ノ指揮ヲ承ク庶務會
 計ヲ掌理シ校長事故アルトキハ其事務ヲ代理ス

第六條 教授ハ五人委任現任校長ノ次等以下トス校長ノ監督
 ヲ承ク生徒ノ教授ヲ掌ル

第七條 分校長ハ各一人助教之ヲ兼任ス校長ノ指揮ヲ承ク分
 校ノ事務ヲ掌理ス

第八條 助教ハ十四人(十人)判任トス校長又ハ分校長ノ監督
 ヲ承ク教授ノ職掌ヲ佐ク(同上ヲ以テ十人)

第九條 書記ハ六人(四人)判任トス上官ノ命ヲ承ク庶務會計
 ニ從事ス(同上ヲ以テ四人)

附則

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス(同上ヲ以テ)

○東京郵便電信學校官制 明治二十四年七月勅令第五百一十四號

朕東京郵便電信學校官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

朕東京郵便電信學校官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

東京郵便電信學校官制

第一條 東京郵便電信學校ハ遞信大臣ノ管轄ニ屬シ郵便電信
 事業上須要ノ學術及技藝ヲ教授スル所トス

第二條 東京郵便電信學校ニ左ノ職員ヲ置ク

校長 幹事 教授 助教 書記

第三條 校長ハ一人遞信省高等官之ヲ兼任ス遞信大臣ノ命ヲ
 承ク校務ヲ掌理ス

第四條 幹事ハ一人教授之ヲ兼任ス校長ノ監督ヲ承ク庶務會
 計ヲ掌理シ校長事故アルトキハ其職務ヲ代理ス

第五條 教授ハ委任トシ五人ヲ以テ定員トス校長ノ監督ヲ承
 ク生徒ノ教授ヲ掌ル

第六條 助教ハ判任トシ八人ヲ以テ定員トス校長ノ監督ヲ承
 ク教授ノ職掌ヲ助ク

第七條 書記ハ判任トシ六人ヲ以テ定員トス上官ノ指揮ヲ承
 ク庶務會計ニ從事ス

附則

第八條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○鐵道廳官制 明治二十三年九月勅令第九十九號

朕鐵道廳官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

鐵道廳官制

第一條 鐵道廳ハ左ノ事務ヲ掌ル
 一 官設鐵道ノ布設工事並其運輸ニ關スル事項
 二 私設鐵道ノ許否並其布設工事運輸及營業ノ監督ニ關スル事項

第二條 鐵道廳ニ左ノ職員ヲ置ク
 長官 一人
 部長 三人
 事務官 十八
 參事官 一人
 技師 三十五人(二十五八年八月勅令第七號ヲ以テ改正ス)
 事務官試補 二人
 技師試補 六人
 屬 三百十人(同)
 手 四百二十人(同上)
 驛長 百二十人

第三條 鐵道廳ニ長官官房ヲ置キ左ノ事務ヲ掌ル
 一 各部成案ノ審査公文ノ起草統計報告ノ調整ニ關スル事項
 二 私設鐵道ノ許否及監督ニ關スル事項

第四條 鐵道廳ニ三部ヲ置キ其事務ヲ分掌セシムルコト左ノ如シ

第一部
 一 官設鐵道ノ新設工事及其修理保管並車輛器械ノ製作修理保管ニ關スル事項

第二部
 一 官設鐵道ノ乘客荷物運輸ニ關スル事項

第三部
 一 官設鐵道ノ歲入歲出豫算決算出納並需用物品購買保管出納ニ關スル事項

第五條 官房及各部中便宜課ヲ分チ各課ニ課長一人ヲ置キ部課長ハ事務官又ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ

第六條 長官ハ勅任トス「內務大臣」ノ指揮監督ヲ承ク鐵道廳ニ屬スル一切ノ事務ヲ統理ス(二十五八年七月勅令第六十八號ヲ以テ內務大臣ヲ逡信大臣ト改ム)

第七條 長官ハ主管ノ事務ニ付告示ヲ發スルコトヲ得

第八條 長官ハ官設鐵道運輸上乘客荷主ニ對スル規約ヲ設定スルコトヲ得

第九條 長官ハ鐵道線路ノ廢置ニ付意見アルトキハ「內務大臣」ニ具申スルコトヲ得(同上ヲ以テ內務大臣ヲ逡信大臣ト改ム)

第十條 長官ハ廳中及其所轄各部課ノ處務細則ヲ定ムルコトヲ得

第十一條 長官ハ所部ノ官吏ヲ統督シ奏任官ノ進退ハ「內務大臣」ニ具狀シ判任官以下ハ之ヲ專行ス(同上ヲ以テ內務大臣ヲ逡信大臣ト改ム)

第十二條 長官ハ須要ニ從ヒ判任官俸給豫算定額内ニ於テ職員ヲ使用スルコトヲ得

第十三條 長官ハ法律命令ノ定ムル所ニ從ヒ所部ノ官吏ヲ懲戒ス其奏任官ニ係ルモノハ之ヲ「內務大臣」ニ具狀シ判任官以下ハ之ヲ專行ス(同上ヲ以テ逡信大臣ト改ム)

第十四條 長官ハ其應豫算定額内ニ於テ奏任官以下特別ノ勤勞アルモノヲ賞與スルコトヲ得其奏任官ニ係ルモノハ之ヲ

「內務大臣」ニ具狀シ判任官以下ハ之ヲ專行ス(同上ヲ以テ逡信大臣ト改ム)

第十五條 長官ハ「內務大臣」ノ認可ヲ受ク須用ノ場所ニ出張所ヲ設ク事務官又ハ技師ヲ以テ其長トナスコトヲ得(同上ヲ逡信大臣ト改ム)

第十六條 部長ハ勅任(二以下奏任二等以上)トス長官ノ命ヲ承ク部中一切ノ事務ヲ掌理ス(二十四年七月二十四日勅令第九號ヲ以テ逡信大臣ノ内務大臣ト改ム)

第十七條 長官故障アルトキハ席次ニ依リ部長ヲ指定シテ長官ノ事務ヲ代理セシム

第十八條 事務官及技師ハ奏任トス長官ノ命ヲ承ク又ハ部長ノ指揮ニ從ヒ其主務ヲ掌理ス

第十九條 參事官ハ奏任トス長官ノ諮詢ニ應ジ意見ヲ具ヘ及審議立案ヲ掌ル

第二十條 事務官試補及技師試補ハ長官ノ指命スル所ニ從ヒ職務ヲ練習シ任官ヲ待ツモノトス

第二十一條 屬技師及驛長ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ク其主務ニ從事ス

附 則(二十四年七月勅令第九號ヲ以テ本項ヲ追加ス)
 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

位ヲ有ス

第二條 會計検査院ハ院長一員部長三員検査官十二員ヲ置キ之ヲ會計検査官トシ別ニ書記官二員検査官補二十四員及屬若干員ヲ置ク

第三條 院長ハ勅任トシ部長ハ勅任又ハ奏任トシ検査官書記官及検査官補ハ奏任トシ屬ハ判任トス

第四條 院長ハ院務ヲ總理シ部長ハ部務ヲ掌理ス
 院長事故アルトキハ上席ノ部長ヲシテ代理セシムルコトヲ得

第五條 會計検査院ニ三部ヲ設ク各部部长一員検査官四員ヲ以テ検査ノ事務ヲ分掌ス

第六條 會計検査官ハ勅令ニ定メタル資格ヲ具フル者ヲ以テ之ニ任ス

會計検査官ハ刑事裁判若ハ懲戒裁判ニ依ルニアラザレバ其ノ意ニ反シテ退官職官又ハ非職ヲ命セラルコトナシ

會計検査官ニ關ル懲戒ノ條規ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第七條 父子兄弟ハ同時ニ會計検査官トナルコトヲ得ス

第八條 會計検査官ハ他ノ官職ヲ兼テ及帝國議會又ハ地方議會ノ議員トナルコトヲ得ス

第九條 會計検査院ノ議事ハ總會議又ハ部會議ヲ以テ決ス總會議ハ院長ヲ以テ議長トシ部會議ハ部長ヲ以テ議長トス議事ハ多數ヲ以テ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第十條 左ノ場合ニ於テハ總會議ヲ以テ議決ス
 一 第十五條ニ依リ上奏ヲ爲シ又ハ天皇ノ下問ニ奉答スルトキ

會計検査院法

第一章 組織
 第一條 會計検査院ハ天皇ニ直隸シ國務大臣ニ對シ特立ノ地

會計検査院法

明治二十二年五月 法律第十五號
 朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ會計検査院法ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

二 第十四條ニ依リ報告書ヲ確定スルトキ
 三 第十七條ニ依リ意見ヲ陳述スルトキ
 四 検査事務ノ規程計算證明ノ様式及提出ノ期限ヲ定メ又ハ之ヲ改正スルトキ
 五 其ノ他院長ニ於テ總會議ニ付スルノ必要アリト認メタルトキ

第二章 職權

第十二條 會計検査院ハ官金ノ收支官有物及國債ニ關ル計算ヲ検査確定シテ會計ヲ監督ス

第十三條 會計検査院ノ検査ヲ要スルモノ左ノ如シ

- 一 總決算
- 二 各官廳及官立諸營造ノ收支及官有物ニ關ル決算
- 三 政府ヨリ補助金又ハ特約保證ヲ與フル團體及公立私立諸營造ノ收支ニ關ル決算
- 四 法律勅令ニ依リ特ニ會計検査院ノ検査ニ屬セラレタル決算

第十四條 會計検査院ハ憲法第七十二條ニ依リ決算ヲ検査確定スルト同時ニ左ノ諸項ニ付報告書ヲ作ルヘシ

- 一 總決算及各官廳報告書ノ金額ト各出納官吏ノ提出シタル計算書ノ金額ト符合スルヤ否ヤ
- 二 歳入ノ賦課徴收歳出ノ使用官有物ノ得有沽賣讓與及利用ハ各其ノ豫算ノ規程又ハ法律勅令ニ違フコトナキヤ否ヤ

三 豫算超過又ハ豫算外ノ支出ニシテ議會ノ承諾ヲ受クサルモノナキヤ否ヤ

第十五條 會計検査院ハ各年度ノ會計検査ノ成績ヲ上奏シ其ノ成績ニ就テ法律又ハ行政上ノ改正ヲ必要トスヘキ事項アリト認ムルトキハ併セテ意見ヲ上奏スルコトヲ得

第十六條 會計検査院ハ各官廳中一部ニ屬スル計算ノ検査及責任解除ヲ其ノ應ニ委託スルコトヲ得但シ其ノ検査ノ成績ハ該廳ヲシテ之ヲ會計検査院ニ報告セシムヘシ

前項ノ委託ニ拘ラス會計検査院ハ時宜ニ依リ其ノ所管ノ官廳ヲシテ計算書ヲ送付セシメ之ヲ検査ヲ行フコトアルヘシ

第十三條第三項團體及公立私立諸營造ノ決算ニ就テモ亦本條ヲ適用スルコトヲ得

第十七條 金庫ノ出納及簿記上ニ關ル各省ノ命令ニ付會計検査院ハ其ノ發布ノ前通知ヲ受ク意見アルトキハ之ヲ陳述スルコトヲ得

會計検査院ハ收入及支出ニ關ル規則ヲ定メ及既定ノ規則ヲ改正スル各省ノ命令ニ付其ノ發布ノ前通知ヲ受ク

第十八條 會計検査院ハ計算書及計算證明ノ様式並ニ其ノ提出及推問ニ對スル答辯ノ期限ヲ定ム

第十九條 會計検査院ハ各官廳ヲシテ検査上必要ナル簿書及報告ヲ提出セシメ及主任官吏ノ辯明書ヲ求ムルコトヲ得

會計検査院長ハ検査上必要ト認ムルトキハ主任官吏ヲ派遣シ實地検査ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ豫メ本廳長官ニ通知シ該長官ハ主任官吏ヲシテ検査ニ立會ヲ爲サシムルコトヲ得

第二十條 會計検査院ハ出納官吏ノ計算書及證憑書類ヲ検査

シ正當ナリト判決シタルトキハ該官ニ對シ認可狀ヲ付シ其ノ責任ヲ解除ス若必要ナル場合ニ於テハ之ヲ推問シ辯明又ハ正課ヲ爲サシメ仍正當ナラスト判決シタルトキハ本廳長官ニ移牒シテ處分ヲ爲サシム

第二十一條 會計検査院ノ判決ニ據リ辨償ノ責ヲ負フ者ハ天皇ノ恩赦ニ由ルノ外本廳長官之ヲ減免スルコトヲ得

第二十二條 出納官吏計算書及證憑書類ヲ提出ヲ怠リ又ハ機式ヲ守ラサルトキハ會計検査院ハ本廳長官ニ移牒シテ懲戒處分ヲ要求スルコトヲ得

第二十三條 政府ノ機密費ニ關ル計算ハ會計検査院ニ於テ検査ヲ行フ限ニ在ラス

第二十四條 會計検査院ハ認可狀ヲ附スルノ後ト雖其ノ附シタル日ヨリ五箇年以内ニ於テハ出納官吏ヨリ之ヲ請求スルカ又ハ計算書ノ誤謬脱漏ニ重記載アルコトヲ發見シタルトキハ再審ヲ爲スコトヲ得但シ詐偽ノ證憑ヲ發見シタルトキハ五箇年後ト雖再審ヲ爲スコトヲ得

出納官吏ハ會計検査院再審ノ判決ニ對シテ再ヒ審判ヲ請求スルコトヲ得

第三章 附則

第二十五條 會計検査院ノ事務章程ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第一章 部課

第一條 會計検査院ニ第一第二第三部ヲ設ク各部ニ第一第二第三第四課ヲ設ク

各課ノ課長ハ検査官ヲ以テ之ニ充テ検査官補及屬若干員ヲ分屬セシム

第二條 會計検査院全般ニ關ル事務又ハ臨時ノ事務ヲ處理スル爲ニ特ニ委員若ハ分科ヲ設クルコトヲ得

第二章 會議

第三條 會計検査院ノ會議ハ會計検査官ヲ以テ組織ス

第四條 總會議ハ院長之ヲ開キ部會議ハ部長之ヲ開ク

第五條 總會議ハ現員會計検査官三分ノ二以上部會議ハ半数以上出席スルニアラサレハ議事ノ効力ヲ有セス

出席會計検査官前項ノ數ニ滿タサルトキハ検査官補ヲ以テ補充スルコトヲ得

検査官補ヲ以テ補充スルハ出席會計検査官ノ數三分ノ一以内ニ限ル

第六條 總會議及部會議ハ課長ノ查閱ヲ經タル検査官補ノ報告書若ハ會計検査官ノ提出シタル文書ヲ以テ議案トス

第三章 職員及權限

第七條 院長ハ所部ノ官吏ヲ統督シ奏任官ノ進退ハ内閣總理大臣ヲ經テ之ヲ上奏シ判任官以下ハ之ヲ專行ス

第八條 院長ハ内閣總理大臣ヲ經テ所部官吏ノ叙位叙勳昇等及恩給ヲ上奏シ又ハ普通ノ成規ニ依リ増俸賞與ヲ行フ

第九條 検査官ハ奏任四等以上トシ検査官補ハ奏任四等以下トス

第十條 會計検査官ノ外各官吏ノ懲戒ハ普通ノ規定ニ依ル

會計検査院事務章程

○會計検査院事務章程 明治二十二年九月 勅令第百六號

朕會計検査院事務章程ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第十一條 左ノ事項ハ院長ノ職權ニ屬ス
 第一 各部及各課管理ノ事務ヲ定ム
 第二 職員ノ配置事務ノ分配及共同擔任ノ事ヲ命ス
 第三 検査官補ニ總會職出席ヲ命ス
 第四 臨時屬官ニ指令シテ検査官補ノ事務ヲ行ハシム但該事ニ出席セシムルコトヲ得ス
 第五 特ニ委員又ハ分科ヲ設ク取調ヲ爲サシム
 第六 委任以下ノ官吏ニ派出検査ヲ命ス
 第七 検査ノ執行認可狀ノ交付ニ關ル細則ヲ定ム
 第八 職事ニ關ル細則ヲ定ム
 第九 會議ニ付スルヲ要セザル事件ヲ處分ス
 第十 庶務及會計ニ關ル規程ヲ定ム
 第十一條 院長ハ部ヨリ提出スル文書ニ付テ主意又ハ事實ノ變更ヲ必要トスルトキハ主管部長及課長ノ同意ヲ得ルヲ要ス若其ノ同意ヲ得サルトキハ之ヲ總會職ニ付スヘシ
 第十二條 院長ハ總會職ノ議決ヲ不當ト認ムルトキハ其ノ實行ヲ停止シ十四日以内ニ之ヲ再議ニ付スルコトヲ得
 第十三條 院長ハ總會職ノ議決ヲ不當ト認ムルトキハ其ノ實行ヲ停止シ十四日以内ニ之ヲ再議ニ付スルコトヲ得
 第十四條 總會職又ハ部會議ノ議決ニ成ル所ノ文書ニシテ其ノ主意又ハ事實ノ變更ニ屬セス其ノ條理ヲ明暢ナラシムル爲ニ文章ヲ修正スルニ止マルモノハ院長專ラ之ヲ改ムルコトヲ得
 第十五條 院長ハ部長ヨリ提出スル文書ニシテ其ノ總會職又ハ部會議ノ議決ニ由ラサル事件ニ付再調査ヲ爲サシムルコトヲ得
 第十六條 院長ハ其ノ職權ニ屬スル事務ニ付總會職ノ意見ヲ

諮問スルコトヲ得
 第十七條 院長ハ検査ノ精數ヲ期スル爲ニ各部ヨリ提出スル計算書及證憑書ニ付其ノ一部ノ稽查ヲ行フヘシ
 第十八條 左ノ事項ハ部長ノ職權ニ屬ス
 第一 所管ノ課長ヨリ提出スル所ノ文書ヲ稽查シ又ハ之ヲ部會議ニ付シテ後院長ニ提出シ其ノ院長ニ提出スルヲ要セザルモノハ自ラ之ヲ處分ス
 第二 検査官補ニ部會議出席ヲ命ス
 第三 部中検査官以下主任ノ事務ヲ一時相互ニ補助セシメ又ハ院長ノ認定ヲ經テ分擔事務終結期限ノ猶豫ヲ認許ス
 第四 部中職員ノ行務ヲ監督シ院長ニ報告ス
 第十九條 部長ハ課長ヨリ提出スル文書ニ付テ主意又ハ事實ノ變更ヲ必要トスルトキハ主任課長ノ同意ヲ得ルヲ要ス若シ其ノ同意ヲ得サルトキハ之ヲ部會議ニ付シ又ハ院長ノ許可ヲ得テ之ヲ總會職ニ提出スヘシ
 第二十條 部長ハ部會議ノ議決ヲ不當ト認ムルトキハ其ノ實行ヲ停止シ院長ノ許可ヲ得テ十四日以内ニ總會職ニ提出スルコトヲ得
 第二十一條 部會議ノ議決ニ成ル所ノ文書ニシテ其ノ主意又ハ事實ノ變更ニ屬セス其ノ條理ヲ明暢ナラシムル爲ニ文章ヲ修正スルニ止マルモノハ部長專ラ之ヲ改ムルコトヲ得
 第二十二條 部長ハ課長ヨリ提出スル文書ニシテ其ノ部會議ノ議決ニ由ラサル事件ニ付再調査ヲ爲サシムルコトヲ得
 第二十三條 部長ハ疾病事故ニ由リ不在ナルトキハ院長ノ命ニ依リ他ノ部長之ヲ代理ス
 第二十四條 課長ハ課務ヲ幹理ス

第二十五條 課長ハ課中検査官補ノ調製スル文書ヲ査閱シ其ノ適當ヲ證シ又ハ意見ヲ付シテ部長ニ提出シ又ハ再調査ヲ爲サシムルコトヲ得
 課長ハ課ヨリ提出スル文書ニ付其ノ本章程ニ於テ特ニ検査官補ノ責任ニ屬スルモノ、外ハ院長及部長ニ對シテ其責任任ス
 第二十六條 課長ハ疾病事故ニ由リ不在ナルトキハ院長ノ命ニ依リ部中他ノ課長之ヲ代理ス
 第二十七條 課長ハ其ノ擔當スル事務ノ範圍内ニ於テ會計検査院法第十四條及第十五條ニ依リ同院ヨリ提出スヘキ検査報告書又ハ行務成績書ニ掲載スヘキ事項ト認ムルモノヲ摘記シ之ヲ部長ニ提出スヘシ
 第二十八條 検査官補ハ計算書證憑書ノ検査報告ヲ爲シ審理書其ノ他文書ノ起草ヲ掌ル
 検査官補ハ各計算書ヲ對照シ及證憑書類ヲ検査シ其ノ不當ノ件ハ遺漏ナク之ヲ摘出シタルコトヲ證明スヘシ
 第二十九條 検査官補ハ總會職又ハ部會議ニ於テ其ノ報告ノ事件ニ就キ辯明ヲ爲ス
 第三十條 検査官補ハ院長若ハ部長ノ命ニ依リ検査官ノ闕席ヲ補充スル爲ニ總會職又ハ部會議ニ出席シ決議ノ數ニ加ハルコトヲ得
 第三十一條 書記官ハ院長官房ノ事務其ノ他院中ノ庶務會計ヲ幹理ス
 第三十二條 屬ハ各部課ニ屬シ調査ニ從事シ又ハ書記官ニ屬シ庶務會計ニ從事ス
 第四章 行務

第三十三條 會計検査院ハ行務年度ヲ定メ院長定ムル所ノ行務監督規程ニ據リ其ノ年度中ニ於テ執行スヘキ事務ノ程度及各員擔任ノ事項ヲ定ム
 第三十四條 會計ノ検査ハ左ノ區別ニ從ヒ之ヲ執行ス
 第一 命令官決算ノ檢定
 第二 由納官吏計算ノ検査判決
 命令官決算ノ檢定ハ總決算各省決算報告書及其ノ證憑書ニ據リ之ヲ執行ス
 出納官吏計算ノ検査判決ハ各官吏ノ提出シタル計算書及證憑書ニ據リ之ヲ執行ス
 右ノ外會計検査院法第十三條第三第四ニ關ル決算ノ検査判決ハ其ノ主管者ヨリ提出シタル計算書及證憑書ニ據リ之ヲ執行ス
 第三十五條 會計検査官ハ父子兄弟ノ提出シタル計算書ヲ検査シ及其ノ判決ニ與ルコトヲ得ス
 第三十六條 會計検査院ハ検査ノ成績ニ依リ摘發シタル事項ニ付當該官吏ニ審理書ヲ發付シ答辯又ハ正誤セシム
 第三十七條 會計検査院ハ國務大臣ニ對シ文書ヲ以テ質問ヲ爲シ又ハ注意ヲ要求スルコトヲ得ルモ審理書ヲ發スルコトヲ得ス
 第三十八條 審理書ニハ左ノ事項ヲ掲ク
 第一 不規則ノ件ニ對スル批難
 第二 將來ノ措置ニ對スル注意
 第三 不明瞭ノ件ニ對スル推問
 第三十九條 會計検査院ハ第一回ノ審理書ニ對スル答辯又ハ正誤ヲ以テ仍不充分ナリト認定シタルトキハ再三審理書ヲ

發ス
 検査ノ後計算ヲ正當ナラスト認定シタルトキ命令官ニ對シ
 テハ之ヲ本屬長官ニ通牒シ出納官吏ニ對シテハ判決書ヲ發
 ス
 第四十條 出納官吏ニ認可狀又ハ判決書ヲ交付シタルトキ
 ハ會計検査院ハ其ノ謬本ヲ以テ大藏大臣ニ通知スヘシ
 第四十一條 判決書ヲ發シタルトキハ會計検査院ハ速ニ本屬
 長官ニ移牒シテ其ノ處分ヲ要求スヘシ
 第四十二條 會計検査院前項ノ要求ニ對スル本屬長官ノ處分
 ヲ以テ適當ナラスト認ムルトキハ其ノ由ヲ行務成績書ニ載
 セ上奏スヘシ
 第四十三條 會計検査院法第二十四條ニ依リ再審ニ關ル出納
 官吏ノ請求ヲ受理スルハ左ノ場合ニ限ル
 第一 計算又ハ事實ニ錯誤アリトスルトキ
 第二 脱漏又ハ二重記載アリトスルトキ
 第三 新ニ證據書ヲ發見シタルトキ
 第四 正當ナラサル證據書ニ據リ判決シタルトスルトキ
 第五 判決ヲ以テ法律命令ニ違反セリトスルトキ
 第四十四條 再審ノ場合ニ於テハ前ニ該件ノ検査ヲ擔當セザ
 リシ他ノ部ニ移シテ審査セシムヘシ
 第四十五條 會計検査院ハ検査上參考ノ爲ニ各地方官廳ヲシ
 テ其ノ地ノ物價ヲ定期若ハ臨時ニ報告セシムルコトヲ得
 ○會計検査院ニ試補ヲ置 明治二十三年十月
 勅令第三百二十四號
 朕會計検査院ニ試補ヲ置クノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

會計検査院ニ試補六名ヲ置ク
 但検査官補ニ缺員アルトキハ定員外試補ヲ置クコトヲ得其
 數ハ検査官補缺員ノ數ヲ超過スルコトヲ得ス
 ○警視廳官制 明治二十四年四月
 勅令第三百四號
 朕警視廳官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 警視廳官制
 第一條 警視廳ニ職員ヲ置ク左ノ如シ
 警視總監
 警視
 技師
 消防司令長
 警察醫長
 典獄
 警部
 警視屬
 技手
 消防士
 警察醫
 監獄書記
 看守長
 消防機關士
 第二條 總監ハ一人勅任トス
 第三條 警視ハ三十六人奏任トス
 第四條 消防司令長ハ一人奏任二等以下トス

第五條 警察醫長ハ一人奏任三等以下トス
 第六條 典獄ハ一人奏任四等以下トス
 第七條 警部警視屬消防士警察醫監獄書記ハ判任トシ看守長
 消防機關士ハ判任三等以下トス
 警部警視屬消防士警察醫監獄書記看守長消防機關士ノ定員
 ハ四百十六人トシ其各官ノ定員ハ警視總監內務大臣ノ認可
 ヲ經テ之ヲ定ム
 第八條 技師技手ハ警視廳ノ須要ニ依リ判任官俸給豫算定額
 內ニ於テ技術官(官等)俸給令ニ依リ之ヲ置クコトヲ得(二十
 七月二十四日勅令第四百十號ヲ
 以テ官等)ノ二字ヲ削除ス)
 第九條 警視總監ハ內務大臣ノ指揮監督ニ屬シ東京府下ノ警
 察消防及監獄ノ事務ヲ總理ス
 第十條 警視總監ハ各省ノ主務ニ關スル警察事務ニ就テハ各
 省大臣ノ指揮監督ヲ承ク高等警察事務ニ就テハ內閣總理大
 臣及內務大臣ノ指揮ヲ承ク
 第十一條 警視總監ハ東京府下ノ警察事務ニ付其職權若クハ
 特別ノ委任ニ依リ法律命令ノ範圍內ニ於テ管内一般又ハ其
 一部ニ警察令ヲ發スルコトヲ得
 警察令ハ特ニ施行ノ日ヲ掲ケルモノヲ除クノ外官報ニ依リ
 部內ニ公布シタル後七日ヲ以テ施行ノ期限トス但伊豆七島
 ハ其島役場ニ到達シタル翌日ヨリ起算ス
 第十二條 警察令ハ內務大臣其他主務ノ大臣ニ於テ公益ヲ害
 シ成規ニ違ヒ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ之ヲ
 取消又ハ中止セラル、コトアルヘシ
 第十三條 警視總監ハ其主務ニ付テハ東京府下ノ郡長及町村
 長ヲ指揮ス

第十四條 警視總監ハ所部ノ官吏ヲ統督シ奏任官ノ進退ハ內
 務大臣ニ具狀シ判任官以下ハ之ヲ專行ス
 第十五條 警視總監ハ法律命令ノ定ムル所ニ從ヒ所部ノ官吏
 ヲ懲戒ス其奏任官ニ係ルモノハ內務大臣ニ具狀シ判任官以
 下ハ之ヲ專行ス
 第十六條 警視總監ハ其廳ノ豫算定額內ニ於テ奏任官以下特
 別ノ勤勞アル者ヲ賞與スルコトヲ得其奏任官ニ係ルモノハ
 內務大臣ニ具狀シ判任官以下ハ之ヲ專行ス
 第十七條 警視總監ハ須要ニ依リ判任官俸給豫算定額內ニ於
 テ雇員ヲ使用スルコトヲ得
 第十八條 警視總監ハ內務大臣ノ認可ヲ經テ警察署ヲ廢置ス
 ルコトヲ得
 第十九條 警視總監ハ廳中處務ノ細則ヲ設クルコトヲ得
 第二十條 警視總監事故アルトキハ巡查本部長其職務ヲ代理
 ス
 第二十一條 警視ハ總監ノ命ヲ承ケテ警察ニ關スル事務ヲ掌
 理シ部下ノ官吏ヲ統督ス
 第二十二條 消防司令長ハ總監ノ命ヲ承ケ水火消防ニ關スル
 事務ヲ掌理シ消防士以下ヲ統督ス
 第二十三條 警察醫長ハ總監ノ命ヲ承ケ警察監獄ニ關スル醫
 務ヲ掌理シ警察醫及監獄醫ヲ統督ス
 第二十四條 典獄ハ總監ノ命ヲ承ケ監獄ニ關スル事務ヲ掌理
 シ監獄書記以下ヲ統督ス
 第二十五條 警部ハ上官ノ指揮ヲ承ケ警察ニ關スル事務ヲ分
 掌シ巡查ヲ指揮監督ス
 第二十六條 警視屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ總監官房及各局ニ分

現行日本法令大全

風シ庶務ニ従事ス
 第二十七條 消防士ハ消防司令長ノ命ヲ承ケ消防組ヲ指揮監督ス
 第二十八條 警察醫ハ警察醫長ノ命ヲ承ケ警察ニ關スル醫務ヲ掌ル
 第二十九條 監獄書記ハ典獄ノ命ヲ承ケ監獄ニ關スル庶務ニ従事ス
 典獄事故アルトキハ總監ノ命ヲ承ケ上席書記其職務ヲ代理ス
 第三十條 看守長ハ典獄ノ命ヲ承ケ監獄ノ戒護ヲ掌リ看守ヲ指揮監督ス
 第三十一條 消防機關士ハ上官ノ指揮ヲ承ケ蒸汽唧筒ノ運用ヲ掌ル
 第三十二條 巡查及看守ニ關スル規定ハ別ニ定ムル所ニ依ル
 第三十三條 警視總監官房ニ左ノ三部ヲ置ク(二十四年七月勅令第百十號ヲ以テ)
 第一部
 第二部
 第三部
 第三十四條 第一部ニ左ノ二課ヲ置ク其分掌左ノ如シ
 第一課
 一 新聞紙雜誌及政治風俗ニ關スル出版物並政社集會ニ關スル事項
 第二課
 一 外國人ニ關スル事項
 第三十五條 第二部ニ左ノ三課ヲ置ク其分掌左ノ如シ

第一課
 一 機密文書並官吏ノ進退賞罰其他身分ニ關スル事項
 第二課
 一 公文ノ接受發送並官印應印ノ管守ニ關スル事項
 第三課
 一 公文ノ編纂保存統計並書籍ノ管理ニ關スル事項
 第三十六條 第三部ニ左ノ三課ヲ置ク其分掌左ノ如シ(二十四年七月勅令第百十號ヲ以テ本條ヲ追加ス)
 第一課
 一 經費豫算決算及金錢出納ニ關スル事項
 第二課
 一 金錢物品出納ノ検査ニ關スル事項
 第三課
 一 需用物品ノ調度及地所建物ニ關スル事項
 一 官沒並保管ノ金錢物品及不用物品ニ關スル事項
 第三十七條 警視廳ノ事務ヲ分掌セシムル爲メニ左ノ局部署ヲ置ク(本條ハ元三十八條ノ場同上ヲ以テ三十一年七月勅令第百十號ヲ以テ改メ且會計局ノ三字ヲ削除ス)
 警務局
 醫務局
 會計局(同上ヲ以テ削除ス)
 巡查本部
 消防署
 監獄署
 第三十八條 警務局ニ左ノ三課ヲ置ク其分掌左ノ如シ(本條ハ元三十七條ノ場同上ヲ以テ第三十八條ニ改メ元三十八條ハ削除ス)
 第一課

現行日本法令大全

一 營業及風俗警察並銃砲火藥刀劍等ニ關スル事項
 第二課
 一 交通警察並田野森林河海堤防取締及水火災遺流失物埋藏物等ニ關スル事項
 第三課
 一 衛生警察ニ關スル事項
 第三十九條 醫務局ニ於テハ警察監獄ニ關スル醫務及分析等ニ關スル事務ヲ掌ル
 第四十條 巡查本部ニ左ノ三課ヲ置ク其分掌左ノ如シ
 第一課
 一 警察署警察分署派出所等ノ廢置及警察區畫ニ關スル事項
 一 警察署以下處務規程及其職員ノ配置並禮式服裝ニ關スル事項
 一 巡查召集及教習ニ關スル事項
 第二課
 一 刑事警察ニ關スル事項
 第三課
 一 警衛ニ關スル事項
 第四十一條 巡查本部ニ部長及副部長各一人其他ノ各局部ニ部長一人各課ニ課長一人課係若干人ヲ置ク
 第四十二條 巡查本部長ハ委任一等以下其他ノ局部長ハ委任二等以下ノ警視ヲ以テ之ニ補シ巡查本部副長ハ委任三等以下ノ警視ヲ以テ之ニ補ス
 課長課係ハ警部又ハ屬ヲ以テ之ニ充ツ
 醫務局長ハ警察醫長ヲ以テ之ニ補シ警察醫ヲ以テ課係トス

第四十三條 巡查本部長ハ警察事務ニ就キ警察署長以下ヲ指揮スルコトヲ得
 第四十四條 第四十一條ノ外總監官房ニ參事(官)及巡視(官)各二人ヲ置ク(二十四年七月二十四日勅令第百十號ヲ以テ參事(官)ハ總監ノ諮詢ニ應ジ意見ヲ具ヘ及審議立案ヲ掌ル(二十四年七月二十四日勅令第百十號)ニ以テ參事(官)ヲ廢止ス)
 巡視(官)ハ總監ノ命ヲ承ケ常ニ警察全般ヲ巡視シ其警察署ニ關スル事項ハ巡查本部長ニ報告シ其他ハ總監ニ具狀スヘシ(同上ヲ以テ巡視(官)ヲ廢止ス)
 參事ハ總監ノ命ヲ承ケ局部ノ事務ヲ補助スルコトアルヘシ(同上ヲ以テ本(項)ヲ追加ス)
 第四十五條 參事(官)巡視(官)ハ委任二等以下ノ警視ヲ以テ之ニ補ス(同上ヲ以テ改正ス)
 第四十六條 消防署ハ水火消防ニ關スル事務ヲ掌ル
 第四十七條 消防署ニ署長一人課係若干人ヲ置ク
 署長ハ消防司令長ヲ以テ之ニ補シ課係ハ消防士消防機關士ヲ以テ之ニ充ツ
 第四十八條 東京市内ニ消防分署若干ヲ置キ分署長一人課係若干人ヲ置ク
 消防分署長ハ消防士ヲ以テ之ニ補シ課係ハ消防士消防機關士ヲ以テ之ニ充ツ
 第四十九條 監獄署ニ左ノ二課ヲ置ク其分掌左ノ如シ
 第一課
 一 文書ノ接受發送保存統計ニ關スル事項
 一 囚人ノ出入名籍願訴特赦假出獄給與品差入品所有貨物ニ關スル事項

一 作業工器具材料製品ニ關スル事項

一 第二課ノ主掌ニ屬セサル事項

第二課

一 囚人ノ戒護書信接見ニ關スル事項

一 囚人ノ行狀賞罰ニ關スル事項

第五十條 監獄署ニ署長一人各課ニ課長一人課僚若干人ヲ置ク

署長ハ典獄ヲ以テ之ニ補シ第一課長及其課僚ハ監獄書記、第二課長及其課僚ハ看守長ヲ以テ之ニ充ツ

第五十一條 東京府下ニ監獄支署若干ヲ置キ支署長一人課僚若干人ヲ置ク

支署長ハ監獄書記ヲ以テ之ニ補シ課僚ハ監獄書記看守長ヲ以テ之ニ充ツ

第五十二條 東京府下ニ警察署若干ヲ置キ其部内ニ便宜分署ヲ置ク

第五十三條 警察署ニ署長一人課僚若干人ヲ置ク

署長ハ奏任三等以下ノ警視ヲ以テ之ニ補シ課僚ハ警部ヲ以テ之ニ充ツ

第五十四條 警察分署ニ分署長一人ヲ置キ警部ヲ以テ之ニ補シ警部若干人ヲ以テ課僚ニ充ツルコトヲ得

第五十五條 警視廳職員ノ外監獄醫救護師ヲ置キ判任ノ待遇トス其定員ハ總監之ヲ定メ内務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

附則(二十四年七月二十四日勅令第百十號ヲ以テ本項ヲ追加ス)

○北海道廳官制

明治二十四年七月勅令第百十一號

朕北海道廳官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

北海道廳官制

第一條 北海道廳ニ左ノ職員ヲ置ク

長官

書記官

警部長

財務長

參事官

技師

典獄

屬

技手

警部

監獄書記

看守長

監獄醫

第二條 長官一人勅任トス

第三條 書記官二人警部長一人財務長一人參事官一人典獄一人奏任トス

第四條 屬警部監獄書記看守長監獄醫ハ判任トス郡區書記ヲ通シテ四百十五人ヲ以テ定員トス

前項各官ノ定員ハ内務大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ定ム

第五條 技師技手ハ道廳ノ須要ニ依リ判任官豫算定額内ニ於テ本年勅令第八十四號技術官俸給令ニ依リ之ヲ置クコトヲ得

第六條 長官ハ内務大臣ノ指揮監督ニ屬シ各省ノ主務ニ就テハ各省大臣ノ指揮監督ヲ承ク法律命令ヲ執行シ北海道ノ拓殖民部内ノ行政事務ヲ總理ス

第七條 長官ハ屯田兵ノ開墾授産ノ事ヲ監督シ並北海道集治監ヲ管理ス

第八條 長官ハ北海道ノ事務ニ付其職權若クハ特別ノ委任ニ依リ法律命令ノ範圍内ニ於テ管内一般又ハ其一部ニ應令ヲ發スルコトヲ得

第九條 應令ハ内務大臣其他主務ノ大臣ニ於テ公益ヲ害シ成規ニ違ヒ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ之ヲ取消シ又ハ中止スルコトアルヘシ

第十條 長官ハ非常急變ノ場合ニ臨ミ兵力ヲ要シ又ハ警護ノ爲メ兵備ヲ要スルトキハ師團長旅團長及屯田兵司令官ニ移駐シ出兵ヲ請フコトヲ得

第十一條 長官ハ所部ノ官吏ヲ統督シ奏任官ノ進退ハ内務大臣ニ具狀シ判任官以下ハ之ヲ專行ス

第十二條 長官ハ法律命令ノ定ムル所ニ從ヒ所部ノ官吏ヲ懲戒ス其奏任官ニ係ルモノハ之ヲ内務大臣ニ具狀シ判任官以下ハ之ヲ專行ス

第十三條 長官ハ豫算定額内ニ於テ奏任官以下特別ノ勤勞アルモノヲ賞與スルコトヲ得其奏任官ニ係ルモノハ之ヲ内務大臣ニ具狀シ判任官以下ハ之ヲ專行ス

第十四條 長官ハ須要ニ從ヒ判任官俸給豫算定額内ニ於テ雇員ヲ使用スルコトヲ得

第十五條 長官ハ廳中及其所轄官廳ノ處務細則ヲ定ムルコトヲ得

第十六條 北海道廳ニ長官官房ヲ置ク

第十七條 長官官房ニ書記若干名ヲ置ク屬ヲ以テ之ニ充ツ

一 官吏ノ進退身分ニ關スル事項

二 文書ノ往復

三 官印廳印ノ管守

四 記録編輯統計報告ニ關スル事項

第十八條 長官事故アルトキハ上席書記官其職務ヲ代理ス

第十九條 道廳ノ事務ヲ分掌セシムル爲メニ左ノ三部一署ヲ置ク

內務部

一 學務衛生社寺ニ關スル事項

二 兵事戶籍養贖及區町村費ニ關スル事項

三 農工商務ニ關スル事項

四 地理山林ニ關スル事項

五 水陸運輸ニ關スル事項

六 漁獵ニ關スル事項

七 河港堤防道路鐵道橋梁排水溝渠ニ關スル事項

八 官衙ノ建築修繕ニ關スル事項

九 他部ノ主掌ニ屬セサル事項

警察部

一 高等警察及行政警察ニ關スル事項

財務部

一 金錢物品ノ管理出納ニ關スル事項

二 豫算決算ニ關スル事項

現行日本法令大全

三 租税ノ賦課徴収ニ關スル事項

監獄署

一 道廳監獄ニ關スル事項

第二十條 書記官ハ内務部長、警部長ハ警察部長、財務長ハ財務部長、典獄ハ監獄署長ト爲リ各長官ノ指揮ヲ承ク部下ノ官吏ヲ監督シ所部ノ事務ヲ掌理ス

第二十一條 參事官ハ長官ノ詢諮ニ應ジ意見ヲ具ヘ及審議立案ヲ掌ル

參事官ハ長官ノ命ヲ承ク内務部各課長トナリ又ハ臨時各部課ノ事務ヲ助クルコトアルヘシ

第二十二條 技師ハ長官又ハ部長ノ指揮ヲ承ク技術ニ從事ス

第二十三條 各部署中便宜課ヲ設ク各課ニ課長一人ヲ置キ部署長ノ指揮ヲ承ク課務ヲ掌理ス

課長ハ屬ヲ以テ之ニ充ツ但技師ヲ以テ之ニ充ツルコトアルヘシ

第二十四條 屬ハ上官ノ指揮ヲ承ク庶務ニ從事ス

第二十五條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ク技術ニ從事ス

第二十六條 警部ハ上官ノ指揮ヲ承ク警察事務ヲ分掌シ部下ノ巡查ヲ指揮監督ス

第二十七條 監獄書記ハ典獄ノ指揮ヲ承ク庶務ニ從事ス

典獄事故アルトキハ上席書記長官ノ命ヲ承ク其職務ヲ代理ス

第二十八條 看守長ハ典獄ノ指揮ヲ承ク監獄ノ戒護ヲ掌リ看守ヲ指揮監督ス

第二十九條 監獄醫ハ典獄ノ指揮ヲ承ク監獄ニ係ル醫務ニ從事ス

第三十條 道廳職員ノ外教師ヲ置ク判任ノ待遇トス其定員ハ長官之ヲ定メ内務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第三十一條 巡查及看守ニ關スル規定ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第三十二條 每郡若クハ數郡及毎區ニ警察署ヲ置キ各警察署ノ部内ニ警察分署ヲ配置ス

警察署長ハ郡區長ヲ以テ之ニ充テ警察分署長ハ部長ヲ以テ之ニ充ツ但土地ノ情況ニ依リ特ニ警察署又ハ分署ヲ設置シ警部ヲ以テ其署長ニ充ツルコトヲ得

第三十三條 監獄支署若干ヲ置キ書記ヲ以テ其長ニ充ツ

第三十四條 各郡區職員ヲ置ク左ノ如シ

區長

區書記

區書記

第三十五條 郡長ハ每郡若クハ數郡ニ一人、區長ハ每區ニ一人ヲ置ク但函館區長ハ書記官ノ内一人之ヲ兼任ス

第三十六條 郡長區長ハ奏任トス長官ノ指揮監督ヲ承ク法律命令ヲ部内ニ執行シ部内ノ行政事務ヲ掌理ス

第三十七條 郡區書記ハ判任トス郡區長ノ指揮ヲ承ク庶務ニ從事ス

第三十八條 地方官官制中警察官及郡長郡書記ニ係ル條項ニシテ本令ニ抵觸セサルモノハ北海道廳警察官及郡區長並郡區書記ニモ之ヲ適用ス

附則

第三十九條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

現行日本法令大全

○札幌農學校官制 明治二十四年七月 勅令第百四十二號

朕札幌農學校官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

札幌農學校官制

第一條 札幌農學校ハ北海道廳長官ノ管理ニ屬シ農業ニ關スル學術技藝ヲ教授スル所トス

本校ハ當分生徒中ヨリ屯田兵士官出身志願者ヲ選ビ屯田兵士官ニ要スル軍事上ノ學術技藝ヲ教授シ又屯田兵豫備下士ニ屯田兵豫備將校ニ要スル軍事上ノ學術技藝ヲ教授ス

第二條 札幌農學校ニ左ノ職員ヲ置ク

學校長	一人	奏任
教授	八人	奏任
助教授	十人	判任
舍監	專任一人	奏任
書記	六人	判任
技手	六人	判任

第三條 學校長ハ北海道廳長官ノ命ヲ承ク校務ヲ掌理シ所屬職員ヲ統督ス

第四條 教授ハ生徒ノ教授ヲ掌ル

助教授ハ教授ノ職務ヲ助ク

第五條 舍監ハ學校長ノ指揮ヲ承ク生徒ノ取締ニ關スル事務ヲ掌ル

第六條 書記ハ上官ノ命ヲ承ク庶務會計ニ從事ス

第七條 技手ハ上官ノ命ヲ承ク學科ニ關スル技術ニ從事ス又特ニ授業ヲ助ケシムルコトアルヘシ

第八條 北海道廳長官ハ校務上ノ須要ニ依リ文部大臣ノ許可

ヲ得テ教官ノ外外國教師ヲ雇入ル、コトヲ得又學校長ハ北海道廳長官ノ許可ヲ得テ俸給豫算定額内ニ於テ講師ヲ囑託シ又ハ雇員ヲ使用スルコトヲ得

第九條 北海道廳長官ハ校務上ノ須要ニ依リ商議委員會ヲ設クルコトアルヘシ其委員ハ北海道廳長官之ヲ命ス

附則

第十條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○北海道集治監官制 明治二十四年七月 勅令第百八號

朕北海道集治監官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

北海道集治監官制

第一條 北海道集治監ニ左ノ職員ヲ置ク

典獄	
分監長	
書記	
看守長	
監獄醫	

第二條 典獄一人奏任トス北海道廳長官ノ指揮監督ヲ承ク監獄ノ事務ヲ掌理ス

第三條 典獄ハ所屬ノ官吏ヲ監督シ判任官以上ノ進退ハ北海道廳長官ニ具狀シ看守以下ハ之ヲ專行ス

第四條 典獄ハ臨時ノ須要ニ依リ判任官以下俸給豫算定額内ニ於テ雇員ヲ使用スルコトヲ得

第五條 典獄ハ北海道集治監豫算定額内ニ於テ判任官以下特別ノ勤勞アルモノヲ賞與スルコトヲ得其判任官ニ係ルモノ

ハ北海道廳長官ニ具狀シ看守以下ニ係ルモノハ之ヲ專行ス
 第六條 典獄ハ法律命令ノ定ムル所ニ從ヒ所屬官吏ヲ懲戒ス
 其判任官以上ニ係ルモノハ北海道廳長官ニ具狀シ看守以下
 ハ之ヲ專行ス
 第七條 分監長三人奏任トス各分監ノ長トナリ典獄ノ指揮監
 督ヲ承ク分監ノ事務ヲ掌理ス
 本監及分監ノ廢設並其位置ハ內務大臣之ヲ定ム
 第八條 典獄事故アルトキハ上席分監長北海道廳長官ノ命ヲ
 承ク其事務ヲ代理ス
 第九條 書記ハ判任トス本監及分監ニ分屬シ典獄又ハ分監長
 ノ命ヲ承ク庶務ニ從事ス
 第十條 看守長ハ判任トス本監及分監ニ分屬シ典獄又ハ分監
 長ノ命ヲ承ク監獄ノ戒護ヲ掌リ看守ヲ指揮監督ス
 第十一條 監獄醫ハ判任トス本監及分監ニ分屬シ典獄又ハ分
 監長ノ命ヲ承ク監獄ニ係ル醫務ニ從事ス
 第十二條 書記ハ三十一人看守長ハ六十一人監獄醫ハ八人ヲ
 以テ定員トス
 第十三條 看守ニ係ル規程ハ別ニ定ムル所ニ依ル
 第十四條 事務ノ分課並處務ノ規程ハ北海道廳長官之ヲ定ム
 第十五條 監獄職員ノ外救護師六人以下ヲ置ク判任ノ待遇ト
 ス
 附則
 第十六條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス
 ○北海道集治監位置 明治二十四年七月
 內務省告示第三十五號
 北海道集治監官制第七條第二項ニ據リ本監ヲ樺戸ニ置キ分監

ヲ空知、釧路、網走ニ設置ス
 ○地方官官制 明治二十三年十月
 勅令第二百二十五號
 朕地方官官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 地方官官制
 第一條 各府縣ニ職員ヲ置ク左ノ如シ
 知事
 書記官
 警部長
 收稅長
 參事官
 技師
 典獄
 屬
 技手
 警部
 收稅屬
 監獄書記
 看守長
 第二條 知事一人勅任トス
 第三條 書記官一人奏任トス
 第四條 警部長收稅長各一人奏任二等以下トス
 第五條 參事官一人奏任三等以下トス
 第六條 典獄一人奏任四等以下トス
 第七條 屬警部收稅屬監獄書記ハ判任トシ看守長ハ判任三等

以下トス
 判任官ハ各府縣ヲ通シテ左ノ人員ヲ以テ定員トス
 屬警部監獄書記看守長 五千五百二十五人 (六千二
 百九十六人) (二十四年七月二十四日勅令第二百二十五號ヲ以テ六
 百九十六人) (二十四年七月二十四日勅令第二百二十五號ニ改ム) (七
 月二十四日勅令第二百二十五號)
 收稅屬 四千九百三十八人 (五千六
 百六十八人) (同上ヲ以テ五千六百六十八人)
 屬警部監獄書記看守長ノ每府縣ノ定員ハ內務大臣之ヲ定ム
 其各官ノ定員ハ府縣知事內務大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ定ム
 收稅屬ノ每府縣ノ定員ハ大藏大臣之ヲ定ム
 第八條 技師技手ハ府縣ノ須要ニ依リ判任官俸給豫算定額内
 ニ於テ技術官(官等)俸給令ニ依リ之ヲ置クコトヲ得 (二十四
 年七月二十四日勅令第二百二十五號)
 第九條 知事ハ內務大臣ノ指揮監督ニ屬シ各省ノ主務ニ就テ
 ハ各省大臣ノ指揮監督ヲ承ク法律命令ヲ執行シ部内ノ行政
 事務ヲ總理ス
 第十條 知事ハ部内ノ行政事務ニ付其職權若クハ特別ノ委任
 ニ依リ法律命令ノ範圍内ニ於テ管内一般又ハ其一部ニ府縣
 令ヲ發スルコトヲ得
 府縣令ハ特ニ施行ノ日ヲ掲ケルモノヲ除クノ外官報其他特
 ニ定ムル方法ニ依リ部内ニ公布シタル後七日ヲ以テ施行ノ
 期限トス但島地ハ其所轄島嶼若クハ郡役所ニ到達シタル翌
 日ヨリ起算ス
 第十一條 府縣令ハ內務大臣其他主務ノ大臣ニ於テ公益ヲ害
 シ成規ニ違ヒ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ之ヲ
 取消シ又ハ中止セラル、コトアルヘシ
 第十二條 知事ハ非常急變ノ場合ニ臨ミ兵力ヲ要シ又ハ警備

ノ爲メ兵備ヲ要スルトキハ師團長若クハ旅團長ニ移牒シテ
 出兵ヲ請フコトヲ得
 第十三條 知事ハ所部ノ官吏ヲ統督シ奏任官ノ功過ハ內務大
 臣及主務大臣ニ具狀シ判任官以下ノ進退ハ之ヲ專行ス
 第十四條 知事ハ法律命令ノ定ムル所ニ從ヒ所部ノ官吏ヲ懲
 戒ス其奏任官ニ係ルモノハ之ヲ內務大臣若クハ主務大臣ニ
 具狀シ判任官以下ハ之ヲ專行ス
 第十五條 知事ハ其應ノ豫算定額内ニ於テ奏任官以下特別ノ
 勤勞アル者ヲ賞與スルコトヲ得其奏任官ニ係ルモノハ之ヲ
 內務大臣若クハ主務大臣ニ具狀シ判任官以下ハ之ヲ專行ス
 第十六條 知事ハ須要ニ依リ判任官俸給豫算定額内ニ於テ雇
 員ヲ使用スルコトヲ得
 第十七條 知事ハ廳中處務ノ細則ヲ設クルコトヲ得
 第十八條 知事事故アルトキハ書記官其職務ヲ代理ス
 第十九條 知事官房ヲ置ク
 知事官房ニ書記若干名ヲ置ク屬ヲ以テ之ニ充ツ
 第二十條 知事官房ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル
 一 官吏ノ進退身分ニ關スル事項
 一 文書ノ受付
 一 官印府縣印ノ管守
 一 外國人ニ關スル事務
 第二十一條 府縣ノ事務ヲ分掌セシムル爲メニ左ノ二部三署
 ヲ置ク
 內務部
 警察部
 直稅署

間税署
監獄署

第二十二條 書記官ハ内務部長、警部長ハ警察部長、收税長ハ直税署長及間税署長、典獄ハ監獄署長トナリ各知事ノ命ヲ承クテ部下ノ官吏ヲ統督シ所部ノ事務ヲ掌理ス

第二十三條 内務部ニ左ノ四課ヲ置ク其分掌左ノ如シ

第一課
一 議員選舉及府縣會、郡會、市町村會、公共組合會等ノ會議ニ關スル事項
一 府縣稅、備荒儲蓄並郡市町村ノ經濟ニ關スル事項
一 右ノ外他課ノ主管ニ屬セザル事項

第二課
一 農工商務及土木ニ關スル事項
一 官有地及土地收用ニ關スル事項

第三課
一 學務、衛生、兵事、社寺及戶籍ニ關スル事項

第四課
一 府縣費ノ會計ニ關スル事項
一 府縣稅及備荒儲蓄ノ收支出納ニ關スル事項

第二十四條 警察部ハ高等警察及行政警察ノ事務ヲ掌ル

第二十五條 直税署ハ直稅ノ賦課租稅ノ徵收及徵稅費ニ關スル事務ヲ掌ル

間税署ハ間稅ノ賦課及間稅犯則者處分ニ關スル事務ヲ掌ル

第二十六條 監獄署ハ監獄ニ關スル事務ヲ掌ル

第二十七條 參事官ハ知事ノ諮詢ニ應ジ意見ヲ具ヘ及審議立案ヲ掌ル

參事官ハ知事ノ命ヲ承クテ内務部各課長トナリ又ハ臨時各部課ノ事務ヲ助クルコトアルヘシ

第二十八條 内務部各課長ハ屬ヲ以テ之ニ充ツ但參事官兼掌スル場合ハ此限ニ在ラス

第二十九條 警察部直税署間税署監獄署ノ事務ノ分課ハ知事ノ命ヲ主務大臣ニ報告ス可シ

第三十條 前諸條ニ定ムルノ外臨時ノ事件アルトキハ知事ニ於テ便宜其主管ノ部課ヲ指定ス可シ

第三十一條 屬ハ上官ノ指揮ヲ承ク内務部各課及知事官房ニ分屬シ庶務ニ從事ス

第三十二條 警部ハ上官ノ指揮ヲ承ク警察事務ヲ分掌シ部下ノ巡查ヲ指揮監督ス

第三十三條 收稅屬ハ上官ノ指揮ヲ承ク直稅署間稅署各課ニ分屬シ庶務ニ從事ス

第三十四條 監獄書記ハ典獄ノ命ヲ承ク庶務ニ從事ス

第三十五條 典獄事故アルトキハ上席書記知事ノ命ヲ承クテ其職務ヲ代理ス

第三十六條 看守長ハ典獄ノ命ヲ承ク監獄ノ戒護ヲ掌リ看守ヲ指揮監督ス

第三十七條 各都市ニ警察署ヲ置キ警察署ノ下其部内ニ於テ警察分署ヲ配置ス

京都市大阪市ハ内務大臣ノ認可ヲ經テ二箇以上ノ警察署ヲ設クルコトヲ得

警察署長及警察分署長ハ警部ヲ以テ之ニ充ツ

第三十七條 巡查及看守ニ關スル規程ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第三十八條 府縣内須要ノ地ニ直稅分署及間稅分署ヲ配置ス

其配置及管轄區域ハ大藏大臣之ヲ定ム

第三十九條 直稅分署長及間稅分署長ハ收稅屬ヲ以テ之ニ充ツ

第四十條 府縣職員ノ外監獄醫及教誨師ヲ置キ判任ノ待遇トス其定員ハ知事之ヲ定メ内務大臣ノ認可ヲ受ク可シ

第四十一條 東京府ノ警察及監獄ニ關スル事項ハ警視廳官制ニ依ル

第四十二條 各郡職員ヲ置ク左ノ如シ

郡長

郡書記

第四十三條 郡長一人奏任三等以下トス

第四十四條 郡書記ハ判任トス其定員ハ知事之ヲ定メ内務大臣ノ認可ヲ受ク可シ

第四十五條 郡長ハ知事ノ指揮監督ヲ承ク法律命令ヲ部内ニ執行シ部内ノ行政事務ヲ掌理ス

第四十六條 郡長ハ法律命令ヲ以テ委任シ及知事ヨリ特ニ分任スル條件ハ便宜施行スルコトヲ得

第四十七條 郡長ハ行政事務ニ就テ其部内町村ノ町村長ヲ指揮シ其公同事務ニ就テハ之ヲ監督ス

第四十八條 郡長ハ郡書記ノ任免ヲ知事ニ具申ス

第四十九條 郡長ハ法律命令若クハ知事ヨリ委任セラレタル事件ニ付警察規則ヲ發スルコトヲ得

但特ニ施行ノ日ヲ掲クルモノヲ除クノ外地方ノ慣行若クハ特ニ定ムル方法ニ依リ部内ニ公布シタル後七日ヲ以テ施行ノ期限トス

第五十條 郡ノ警察規則ハ知事及内務大臣主務大臣ニ於テ

公益ヲ害シ成規ニ違ヒ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ之ヲ取消シ又ハ中止セラル、コトアルヘシ

第五十一條 郡書記ハ郡長ノ命ヲ承クテ庶務ヲ分掌ス

郡長事故アルトキハ上席郡書記知事ノ命ヲ承クテ其職務ヲ代理ス

第五十二條 勅令ヲ以テ指定スル所ノ島地ニ特ニ島廳ヲ置ク

第五十三條 島廳職員左ノ如シ

島司

島廳書記

第五十四條 島司一人奏任二等以下トス

第五十五條 島廳書記ハ判任トス其定員ハ其府縣判任官ノ定員内ヲ以テ知事之ヲ定ム

第五十六條 島司ハ知事ノ指揮監督ヲ承ク部内ノ行政事務ヲ掌理シ知事ヨリ委任スル事項ハ便宜施行スルコトヲ得

第五十七條 島司ハ第四十九條ニ依リ警察規則ヲ發スルコトヲ得

前項ノ警察規則ニ付テハ第五十條ヲ適用ス

第五十八條 島司ハ島廳書記ノ任免ヲ知事ニ具申ス

第五十九條 島司ハ行政事務ニ就テハ其部内町村ノ吏員ヲ指揮監督ス

第六十條 島廳書記ハ島司ノ命ヲ承クテ庶務ヲ分掌ス

島司事故アルトキハ上席島廳書記知事ノ命ヲ承クテ其職務ヲ代理ス

附 則(二十四年七月二十四日勅令第百二十二號ヲ以テ本項ヲ追加ス)

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○地方官御料地ヲ管理ス 明治二十三年六月 勅令第八十八號
朕地方官ヲシテ御料地ヲ管理セシムルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

地方長官ハ宮内大臣ノ委任ニ由リ御料地ヲ管理スヘシ其管理ニ係ル費用ハ皇室ノ支辨トス

○稟請ヲ要セス處分後報告スヘキ 條件 明治十九年三月十二日 內務省令第一號

自今左ニ掲ル條件ハ稟請ヲ要セス處分シテ後報告スヘシ但報告期限ハ別ニ之ヲ定ム(左ニ掲ル項目二十二年ノ處分ニ於テは二十四年七月廿四日內務省令第八號ヲ以テ第五項ヨリ第十四項迄並ニ二十二年ノ處分ニ於テは) 第一項ヨリ第十項迄並ニ二十二年ノ處分ニ於テは) 第一項ヨリ第十項迄並ニ二十二年ノ處分ニ於テは)

- 一 恤救規則心得第八條一家數人救助ノ事
- 一 國縣道道幅取撤ノ事
- 一 社寺由緒アル地所建物處分ノ事
- 一 社寺創立再興等建設延期ノ事
- 一 阿片賣買特許鑿鋪鑑札下付ノ事
- 一 阿片製造鑑札下付ノ事
- 一 劇團配伍ノ賣藥許否ノ事
- 一 遊病院開設ノ事
- 一 檢疫委員設置ノ事
- 一 府縣官舎ノ内官宅警察署郡區役所等建築ノ事

○稟請ヲ要セス處分後報告スヘキ 條件 明治二十四年三月 農商務省令第十號

一 官有山林原野ノ枯木倒木危險木險害木處分ノ件

二 官有山林原野中測量ニ支障ノ立竹木伐採ノ件

三 官有山林原野ニ於テ季節アル產物賣却ノ件 但五箇年以上ノ年期賣渡ハ此限リニアラス(二十四年農商務省令第二十五號ヲ以テ但書追加)

四 官有山林原野ヲ官林へ編入ノ件

五 官有山林原野地種目組替ニ付地上立竹木賣却ノ件

六 官有山林原野へ公益ノ爲メ竹木獻植ノ件

七 非常ノ際治水ノ爲メ官有山林原野ノ竹木處分ノ件

八 官有山林原野ニ於テ鑛業上必要ナル地所賣渡ノ件 但五箇年以上ノ年期賣渡ハ此限リニアラス(二十四年農商務省令第二十五號ヲ以テ但書追加)

九 官有山林原野一區域段別五町歩以下ニシテ一箇年借受料金五十圓以下ノ土地賣渡ノ件 但數區域ニシテ五町歩ヲ超過スルトキ又ハ五箇年以上ノ年期賣渡ハ此限リニアラス(二十四年農商務省令第二十五號ヲ以テ但書追加)

十 從來ノ慣行ニ由リ官有山林原野(國土保安ニ關シ於テ代金五十圓以下ノ土石賣却ノ件) 官有山林原野ニ於テ墓地火葬場汚穢物埋却場及駝牛馬捨場新設又ハ取廢ノ爲メ段別一町歩以下賣却ノ件 但五箇年以上ノ年期賣渡ハ此限リニアラス(二十四年農商務省令第二十五號ヲ以テ但書追加)

十一 官有山林原野一段歩以內ニシテ賣渡代金十圓以下ノ箇所民有地又ハ河川道路等ニ介在セルモノノ接續地主へ賣却ノ件 但其地上立竹木賣渡代金五拾圓以上ナルトキハ此限リニアラス(二十四年農商務省令第二十五號ヲ以テ但書追加)

以上十二項ハ北海道廳沖繩縣ヲ除ク

十三 試掘並ニ借區廢業期屆ノ件

十四 鑛山借區稅意納者鑛業禁止ノ件

十五 試掘期限經過ノ者指令書並ニ借區期限經過ノ者坑區券引揚ノ件 但以上十三項乃至十五項ノ場合ニ於テハ報告ノ際該證券若クハ指令書ヲ添附スヘシ

十六 試掘借區廢業期限經過若クハ禁止後鑛業跡取締ノ件

十七 砂鐵ノ爐稼願許可ノ件

十八 砂金砂錫砂鐵採取人及爐稼人相續加除名並讓渡願許可ノ件

○貴族院事務局官制 明治二十三年七月 勅令第百二十一號

朕貴族院事務局官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

貴族院事務局官制

第一條 貴族院事務局ノ職員ハ左ノ如シ(二十四年七月二十四日勅令第九十九號ヲ以テ本條各項ヲ改正ス)

書記官長 一人

書記官 八人

屬 十五人

守衛長 一人(二十四年十一月勅令第一二六號ヲ以テ追加ス)

守衛番長 三人(同上)

第二條 書記官長ハ議長ノ指揮ニ依リ局中一切ノ事務ヲ監督ス 局中ノ分課及職員ノ配置ハ書記官長之ヲ定ム

第三條 書記官ハ書記官長ノ指揮監督ヲ承ク職事記錄筆記印刷庶務會計等ニ關スル事務ヲ分掌ス

第四條 書記官長故障アルトキハ上席書記官其ノ職務ヲ代理ス

第五條 屬ハ判任トス書記官長ノ定ムル所ニ依リ各其ノ事務ニ從フ

第六條 守衛長ハ判任トス守衛番長以下ヲ部署シ院中ノ取締ニ任ス

第七條 守衛番長ハ判任トス守衛長ヲ助ク守衛ヲ指揮シ守衛長事故アルトキハ其職務ヲ代理ス(以上二條ハ同上勅令第九十九號ヲ以テ本項ヲ追加ス)

附 則(二十四年七月二十四日勅令第一二六號ヲ以テ本項ヲ追加ス)

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○帝國議會ノ用ニ供スル官有財產ニ關スル行政事務ノ指揮監督 關スル行政事務ノ指揮監督 明治二十四年二月 勅令第十五號

朕帝國議會ノ用ニ供スル官有財產ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 帝國議會ノ用ニ供スル官有財產ニ關スル行政事務ハ各院書記官長之ヲ掌ル

第二條 前條ノ指揮監督ハ內務大臣之ヲ行フ

○衆議院事務局官制 明治二十三年七月 勅令第百二十三號

朕衆議院事務局官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

衆議院事務局官制

第一條 衆議院事務局ノ職員ハ左ノ如シ(二十四年七月二十四日勅令第百號ヲ以テ本條各項ヲ改正ス)

書記官長 一人

書記官 八人

屬 十五人

守衛長 一人(二十四年十一月勅令第百七號ヲ以テ追加ス)

守衛番長 三人(同上)

第二條 書記官長ハ職長ノ指揮ニ依リ局中一切ノ事務ヲ監督ス

局中ノ分課及職員ノ配置ハ書記官長之ヲ定ム

第三條 書記官ハ書記官長ノ指揮監督ヲ承ク職事記録筆記印刷庶務會計等ニ關スル事務ヲ分掌ス

第四條 書記官長故障アルトキハ上席書記官其ノ職務ヲ代理ス

第五條 屬ハ判任トス書記官長ノ定ムル所ニ依リ各其ノ事務ニ從フ

第六條 守衛長ハ判任トス守衛番長以下ヲ部署シ院中ノ取締ニ任ス

第七條 守衛番長ハ判任トス守衛長ヲ助ク守衛ヲ指揮シ守衛長事故アルトキハ其職務ヲ代理ス(以上二條ハ同上勅令第百號ヲ以テ追加ス)

附 則(二十四年七月二十四日勅令第百號ヲ以テ追加ス)

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

帝國議會ノ用ニ供スル官有財産ニ關スル行政事務ノ指揮監督(貴族院部ニテアリ)

○貴族院及衆議院守衛待遇ノ件

明治二十四年十一月勅令第百八號

朕貴族院及衆議院守衛待遇ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

貴族院及衆議院ノ守衛ハ判任官ヲ以テ待遇ス

○貴族院並衆議院守衛懲罰令ニ依ル

明治二十四年十二月勅令第百三十九號

朕貴族院並衆議院守衛懲罰ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

貴族院並衆議院守衛ノ懲罰ハ巡查懲罰令ニ依ル

第二款 官職 俸給 旅費

○高等官任命及俸給令

明治二十四年七月勅令第百八十二號

朕茲ニ高等官任命及俸給令ヲ裁可ス

高等官任命及俸給令

第一條 高等官ヲ分テ勅任官奏任官トス

第二條 勅任官中親任式ヲ以テ任スル官ノ辭令書ハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ内閣總理大臣又ハ首座ノ大臣之ニ副署ス

第三條 親任式ヲ以テ任スル官ヲ除クノ外勅任官ノ辭令書ハ御璽ヲ鈐シ内閣總理大臣之ヲ奉行ス

第四條 奏任官ノ辭令書ハ其内閣ニ屬スルモノハ内閣ノ印ヲ鈐シ内閣總理大臣之ヲ宣行シ其各省ニ屬スルモノハ省印ヲ

鈐シ主任大臣之ヲ宣行ス

第五條 勅任奏任文官ノ年俸ハ別ニ定ムルモノ、外左ノ如シ

内閣ノ部 九千六百圓

内閣總理大臣 三千五百圓

書記官長 一號表ニ依ル

局長 二號表ニ依ル

書記官 一級俸千四百圓

内閣總理大臣秘書官 二級俸千二百圓

恩給局審査官 一級俸二級俸各一人トス

賞勳局 四千圓

總裁 三千圓

副總裁 一級俸二千四百圓

書記官 二級俸二千圓

法制局 一級俸二級俸各一人トス

長官 四千圓

部長 三千圓

參事官 二號表ニ依ル

各省ノ部 六千圓

大臣 四千圓

次官 一號表ニ依ル

局長 二號表ニ依ル

參事官 二號表ニ依ル

秘書官 二號表ニ依ル

書記官

外務省翻譯官 三號表ニ依ル

內務省警保局主事 千八百圓

大藏省主計官 二號表ニ依ル

大藏省主稅官 三號表ニ依ル

文部省視學官 千二百圓

農商務省特許局審判官 技術官俸給令ニ依ル

農商務省特許局審査官 千圓

遞信監察官 三號表ニ依ル

遞信事務官 三號表ニ依ル

第六條 年俸ニ等級アル者ハ主任大臣別表ニ依リ之ヲ給ス

第七條 陸海軍武官ノ年俸ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第八條 局長ハ奏任官ニ在ルコト五年以上ニアラザンハ之ニ任スルコトヲ得ス

第九條 高等文官滿七年以上同一ノ職ヲ奉シ功績顯著ナル者ハ内閣總理大臣ノ上奏ニ依リ特ニ現俸八分ノ一以內ヲ増給スルコトヲ得同職中俸給ニ等級アルモノハ其最上級ニ達シタル日ヨリ起算ス

府縣知事ハ等級ニ拘ラス其知事令在職ノ年月ヲ通算ス

判事ハ大審院長檢事ハ檢事總長ニ補セラレタル日ヲ以テ最上級ニ達シタルモノトス

第十條 奏任官他ノ官廳ニ涉ルノ兼官ハ兼スル所ノ俸給三分ノ一以內ヲ給スルコトヲ得

同官廳ニ於ケル兼官ハ俸給ノ多額ニ就キ之ヲ給ス

第十一條 官ニ在リテ死亡シタル者ハ年俸三分ノ一ヲ其遺族ニ給ス非職者ニ於テモ亦同シ

第十二條 高等文官ノ年俸ハ之ヲ四分シ二月五月八月十一月ノ四期ニ於テ之ヲ給ス

第十三條 俸給ハ新任増俸減俸トモ總テ發令ノ翌日ヨリ計算ス

第十四條 非職廢官退官及死亡ノトキハ年俸ヲ月割計算トシテ當月分ノ全額ヲ給ス

第十五條 非職廢官退官者事務引繼發務調理ノ爲メ特ニ命テ承テ公務ニ從事スルトキハ其間尙從前ノ年俸ヲ給ス

第十六條 病氣ノ爲執務セサルコト九十日ヲ踰ルモノハ俸給ノ半額ヲ減ス但公務ノ爲傷病ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹ルモノ及優恩ニ由リ賜暇休養スルモノハ此限ニアラス

第十七條 前條ノ外私事ノ故障ニ由リ執務セサルコト三十日ヲ踰ルモノハ俸給ノ半額ヲ減ス

第十八條 他ノ高等官俸給令ニ於テ別ニ規定ナキモノハ總テ本令ノ規定ニ依ル

第十九條 俸給支給ニ關スル細則ハ大藏大臣省令ヲ以テ之ヲ定ム

附則
第二十條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス
明治十九年勅令第六號高等官官等俸給令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

官名	年俸	官名	年俸	等級
同 統計局長	二千五百圓	同 監查局長	二千五百圓	同
同 官報局長	二千五百圓	同 預金局長	二千五百圓	同
外務省政務局長	三千圓	同 司法省總務局長	三千圓	同
同 通商局長	二千五百圓	同 學務局長	三千圓	同
同 取調局長	二千五百圓	同 普通學務局長	三千圓	同
同 翻譯局長	二千五百圓	同 農商務省農務局長	三千圓	同
同 內務省縣治局長	三千圓	同 商工局長	三千圓	同
同 警保局長	三千圓	同 山林局長	三千圓	同
同 土木局長	三千圓	同 鑛山局長	二千五百圓	同
同 衛生局長	二千五百圓	同 特許局長	二千五百圓	同
同 社寺局長	二千五百圓	同 遞信省郵務局長	三千圓	同
同 庶務局長	二千五百圓	同 管船局長	三千圓	同
大藏省主計局長	三千圓	同 電務局長	二千五百圓	同

一號表
內閣總理大臣秘書官 一級 二千五百圓 六級 千四百圓
內閣總務長官 二級 二千二百圓 七級 千二百圓
各省大臣秘書官 三級 二千圓 八級 千圓
各省大書記官 四級 千八百圓 九級 九百圓
各省主計官 五級 千六百圓 十級 八百圓

文官俸給支給細則 明治二十三年四月 大藏省令第十號

文官俸給支給細則左ノ通相定メ明治二十三年四月一日ヨリ施行ス

但明治十九年當省令第十二號第十號及ヒ第二十號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

文官俸給支給細則

第一條 高等官ノ俸給ハ各應左ノ日制定日ニ於テ支給スルモノトス但休日ニ當ルトキハ順延トス

支給期月ノ四日

- 內閣總理大臣 樞密院
- 外務省 內務省 警視廳 府
- 大藏省 元老院
- 貴族院 衆議院
- 會計検査院

支給期月ノ五日

- 陸軍省 海軍省
- 司法省 文部省

支給期月ノ六日 農商務省 遞信省

三號表

官名	年俸	等級
外務省翻譯官 一級	千八百圓	五級
文部省視學官 三級	千六百圓	六級
文部省視學官 四級	千四百圓	七級
文部省視學官 五級	千二百圓	八級
遞信事務官 一級	千二百圓	四級
遞信事務官 二級	千圓	五級
遞信事務官 三級	九百圓	七級
遞信事務官 四級	八百圓	八級
遞信事務官 五級	七百圓	九級

第二條 判任官ノ俸給ハ毎月「末日」ニ支給スルモノトス但休日ニ當ルトキハ繰上ケトス

第三條 廢官退官ノモノハ高等官官等俸給令第二十五條ニ依テ殘務ヲ調理シ其月内ニ調理ヲ了リタルトキハ高等官官等俸給令第二十四條ニヨリ全額ヲ支給シ翌月以降ニ涉ルトキハ日割ヲ以テ調理了了ノ日マテ從前ノ俸給ヲ支給スルモノトス(二十四年勅令第八十二號以テ高等官官等俸給令第二十五條及第二十四條ニ關シテ新令第二十五條ハ新令第二十四條ニ關シテ廢止ス)

第四條 兼任ノ増俸ハ其兼任應ヨリ支給スルモノトス

第五條 他應ヘ轉任シタルモノハ第一條第二條ノ支給日ニ拘ラス日割計算ヲ以テ發令ノ當日マテ係ル俸給ヲ支給ス

廢官退官ノモノハ高等官官等俸給令第二十五條ニ依リ殘務ヲ調理シタルトキハ調理了了ノ日ヲ待テ支給スルモノトス其調理了了迄ニ數箇月ヲ要スルモノハ第一條第二條ノ支給日ニヨル

第六條 高等官他應ヘ轉任若シハ非職廢官退官ノトキ俸給ノ過渡アルトキハ前任應ニ於テ其際之ヲ追徵スヘシ

俸給支給定日後他應ヨリ轉任シタルトキハ後任應ニ於テ其期內殘日數ニ對スル俸給ヲ其際支給スルモノトス

第七條 高等官官等俸給令第二十六條ノ場合ト「同第二十七條」ノ場合ト相續テ起ルトキハ其日數ハ總テ前後ヲ通算ス但「第二十七條」ノ期限ヲ過キ已ニ減俸ノモノ「第二十六條」ニ移ルモノ本俸ニ復セス(新令第十六條ニ關シテ)

第八條 賜暇恩引ノ場合ト高等官官等俸給令第二十六條「若シハ」第二十七條「ノ場合ト」連續スルトキハ其賜暇恩引ノ日數ヲ扣除ス

高等官官等俸給令第二十六條「若クハ」同第二十七條ノ期限ヲ過キ已ニ減俸ノモノ賜暇息引ニ連續シ其賜暇息明後直ニ上應スルモノハ該賜暇息引ノ日ヨリ本俸ヲ支給スルモノトス但賜暇息明ヲ過キ尙上應セサルトキハ總テ減俸ノ額ヲ支給ス

第九條 日割計算ノ法ハ其月ノ現日數ニ依ル但年俸ハ之ヲ十分ニ分シ其月額ヲ算出シテ計算ス
俸給ヲ支給スルニ當リ計算上厘位未滿ノ端數ヲ生スルトキハ之ヲ切捨トス

○年額及月額ノ手當金支給方

明治二十二年一月
大藏省令第一號
年額又ハ月額ノ手當金ハ毎月ノ年額ノ百分ノ末日 休日ニ當ル時ハ繰上ケ之ヲ支給シ任職免等ノ場合ハ其月ノ現日數ニ由リ日割ヲ以テ計算ス但明治十六年當省達第五十七號ハ廢止ス

○判任官俸給令

明治二十四年七月
勅令第八十三號
朕茲ニ判任官俸給令ヲ裁可ス

判任官俸給令

第一條 判任文官ノ月俸ヲ別テ十級トシ別表ニ依リ毎月下旬ニ於テ之ヲ支給ス
第二條 陸海軍准士官下士ノ月俸ハ別ニ定ムル所ニ依ル其他特ニ定ムルモノハ前條ノ限ニアラス
第三條 判任官ハ每級在職一年以上ニ至ラザンハ増給スルコトヲ得ス

第四條 判任官最上級俸ヲ受ク五年ヲ踰ヘ事務練熟優等ナル者ハ特別ヲ以テ別表ノ範圍ニ拘ラス漸次七十五圓マテ増俸スルコトアルヘシ

第五條 官ニ在リテ死亡シタル者ハ月俸三箇月分ヲ其遺族ニ給ス非職者ニ於テモ亦同シ

第六條 前條ノ外俸給支給ニ關シテハ高等官任命及俸給令第十三條第十四條第十五條第十六條第十七條ノ例ニ依ル
第七條 俸給支給ニ關スル細則ハ大藏大臣省令ヲ以テ之ヲ定ム

附則

第八條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス
明治十九年勅令第三十六號判任官官等俸給令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

一級六十圓	三級四十圓	五級三十五圓	七級二十五圓	九級十五圓
二級五十圓	四級四十圓	六級三十圓	八級二十圓	十級十二圓

○技術官俸給令

明治二十四年七月
勅令第八十四號
朕茲ニ技術官俸給令ヲ裁可ス

技術官俸給令

第一條 各應ニ於テ工藝技術ヲ要スルモノハ職員ノ外特ニ技術官ヲ置ク
第二條 技術官ヲ分テ技監技師技手トス
第三條 技監ハ勅任トシ技師ハ奏任トシ技手ハ判任トス

第四條 技監ノ年俸ハ三千圓トシ技師ノ年俸ハ特ニ定ムルモノ、外本年勅令第八十二號高等官任命及俸給令第二號表ニ依ル

第五條 技術官ハ各廳事務ノ繁簡ニ依リ俸給最低額以下ヲ給スルコトアルヘシ

第六條 本令ニ規定スルモノヲ除クノ外技監技師ニ關シテハ本年勅令第八十二號高等官任命及俸給令ヲ適用シ技手ニ關シテハ本年勅令第八十三號判任官俸給令ヲ適用ス

附則

第七條 技術官ニシテ現ニ休職中ノ者ハ其休職滿期迄仍ホ現俸三分ノ一ヲ支給ス

第八條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス
明治十九年勅令第三十八號技術官官等俸給令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

○判任官ニシテ特ニ官等俸給アル者

從前ノ規定ニ依ル
明治二十三年三月
勅令第三十八號

朕茲ニ判任官ニシテ特ニ官等俸給ノ規定アル者ニ關スルノ件ヲ裁可ス

判任官ニシテ特ニ官等俸給ノ規定アルモノハ當分ノ内改正判任官官等俸給令ニ依ラズシテ仍從前ノ規定ニ依ル

○文官技術官等ノ試補及見習俸給支給方

明治二十一年三月
勅令第二號

明治二十年七月勅令第三十七號文官試補及見習規則ニ據リ試補

ヲ命セラレタル者ニハ年俸六百圓以下見習ヲ命シタル者ニ月給貳拾五圓以下其官廳ノ定額内ニ於テ所屬長官便宜之ヲ給スルコトヲ得

明治二十二年十二月勅令第八號ニ掲クル試補ノ俸給ハ年俸九百圓以下判任官見習ノ俸給ハ月給四拾圓以下其官廳ノ定額内ニ於テ所屬長官便宜之ヲ給スルコトヲ得

○樞密院議長副議長顧問官並書記官

長書記官年俸
明治二十四年七月
勅令第九十六號

朕茲ニ樞密院議長副議長顧問官並書記官長書記官年俸改正ノ件ヲ裁可ス

樞密院議長副議長顧問官並書記官長書記官ノ年俸左ノ通改ム

議長	五千圓
副議長	四千五百圓
顧問官	四千圓
書記官長	三千五百圓
書記官	高等官任命及俸給令 中第二號表ニ依ル

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○內大臣以下俸給

明治二十二年七月
宮内省達第十二號

內大臣以下ノ俸給ヲ改定シ內大臣ハ宮内省官制第五十條ノ高等官俸給第一級俸ヲ賜ヒ宮中顧問官ハ其等位ニ依リ同第三級俸第四級俸第五級俸第六級俸ノ内ヲ賜ヒ內大臣祕書官ハ其等位ニ依リ同第一級俸第二級俸第三級俸第四級俸ノ内ヲ賜フ

○帝國博物館帝國京都及奈良博物館書記官等俸給

帝國博物館帝國京都博物館帝國奈良博物館書記官等俸給ハ自今宮内省官制第五十條屬官官等俸給ニ依ル

○帝國各博物館技手官等俸給

帝國博物館帝國京都博物館帝國奈良博物館技手官等俸給ハ自今宮内省官制第五十條技手官等俸給ニ依ル

○侍從職幹事俸給

侍從職幹事俸給ハ其等級ニ依リ宮内省官制第五十條高等官俸給第三級俸第四級俸第五級俸第六級俸ノ内ヲ賜フ

○皇族職員官等俸給改正

皇族職員官等ヲ左ノ如ク改定シ其高等官俸給ハ宮内省官制第五十條ノ高等官俸給表ニ依リ別當ハ第四級俸第五級俸第六級俸第七級俸ノ内ヲ賜ヒ家令ハ其等級ニ依リ第一級俸第二級俸第三級俸第四級俸ノ内ヲ賜フ

- 親王家 有禮川宮 山階宮 小松宮 伏見宮 久邇宮 北白川宮 閑院宮
- 別當 各一人 勅任二等
- 家令 各一人 奏任二等以下
- 家扶 (四號ヲ以テ家扶家從ノ定員ヲ刪除ス) 判任一等以下
- 下四等以上 (二十三年六月十二日宮内省官制第七號ヲ以テ家扶家從ノ官等各項ヲ改ム) 判任四等五等六等
- 家從

諸王家 華頂宮 梨木宮

家令 各一人

奏任二等以下

家扶

判任一等以下四等以上

家從

判任四等五等六等

○公使館領事館費用條例

朕茲ニ公使館領事館費用條例ヲ裁可ス

公使館領事館費用條例

第一章 俸給

- 第一條 外交官、領事官、公使館、書記生及領事館書記生ノ俸給ハ分テ本條在勤俸及加俸ノ三種トス
- 第二條 外交官及領事官ノ本俸ハ別表ニ依ル但左ノ場合ニ於テハ其半額ヲ給ス (二十四年七月二十四日勅令第百三號ヲ以テ本條並各項改正ス)
 - 一 賜暇歸朝ヲ許サレタル者ニシテ歸朝後六箇月ヲ過キタルトキ
 - 二 養病ノ爲メ歸朝ヲ許サレタル者ニシテ歸朝後三箇月ヲ過キタルトキ
- 第三條 公使館書記生及領事館書記生ノ本俸ハ明治十九年勅令第三十六號及明治二十三年勅令第三十七號判任官官等俸給例ニ依ル
- 第四條 在勤俸ハ海外在勤ノ場合ニ於テ本俸ノ外任所到着ノ翌日ヨリ任所出發ノ前日マテ給スルモノトス

外交官及公使館書記生ノ在勤俸ハ別表第一號ニ依ル

領事官及領事館書記生ノ在勤俸ハ別表第二號第三號ニ依ル在勤俸ハ年額ヲ十二分シ其一分ヲ以テ一箇月分ト爲シ毎月末之ヲ給ス但端日數ニ係ルモノハ日割計算ス

第五條 新ニ在勤ヲ命ゼラレタル者ニハ左ノ割合ニ依リ加俸ヲ給ス

- 一 公使、總領事、領事赴任スルトキハ在勤俸年額十分ノ三ヲ給ス但其妻ヲ同伴スルトキハ更ニ在勤俸年額十分ノ一ヲ給ス赴任後其妻ヲ任地ヘ呼寄スルトキモ亦同シ
- 二 公使館參事官、公使館書記官、交際官試補、副領事赴任スルトキハ在勤俸年額十分ノ二ヲ給ス但其妻ヲ同伴スルトキハ更ニ在勤俸年額十分ノ一ヲ給ス赴任後其妻ヲ任地ヘ呼寄スルトキモ亦同シ
- 三 公使館書記生、領事館書記生赴任スルトキハ在勤俸年額十分ノ二ヲ給ス
- 四 備員ニハ百圓ヲ給ス但清國及朝鮮國ヘ在勤ヲ命ゼラレタル者ニハ其半額ヲ給ス
- 第六條 任所替若クハ官用歸朝ヲ命ゼラレタル者又ハ賜暇歸朝ヲ許サレタル者ニハ出發前加俸トシテ其在勤俸年額十分ノ一ヲ給ス但外交官及領事官ニシテ其妻ヲ同伴シタル者ニハ十分ノ二ヲ給ス (二十四年六月二日勅令第五號ヲ以テ本條中追加ス)
- 第七條 官用歸朝ヲ命ゼラレタル者歸任スルトキハ前條ニ依リ出發前加俸ヲ給ス
- 第八條 外國在勤ヲ命ゼラレタル者ニシテ本邦出發前在勤ヲ死セラレタルトキハ出發前加俸ノ半額ヲ給ス
- 本邦出發前死去シタル者ニハ全額ヲ給ス

自己ノ情願ニ依リ在勤ヲ免セラレタル者ニハ之ヲ支給セス

第九條 外國ニ於テ任官、轉官若クハ官等ヲ陞降セラレタル者ノ俸給ハ辭令ニ對スル受書ニ載セタル月日ノ當日ヨリ起算ス

外國ニ於テ非職ヲ命ゼラレタル者及退官シタル者ニハ其辭令ニ對スル受書ニ載セタル月日ノ當日マテ在勤年俸ヲ給ス

第十條 歐米各國濠洲及布哇國ニ在勤スル者ノ俸給ハ金貨ヲ以テ支給ス但本邦滞在中又ハ旅中ノ本俸ハ銀貨ヲ以テ支給ス

第十一條 任所替若クハ歸朝ヲ命ゼラレタル者其辭令到達ノ日ヨリ四週間ヲ過キ尙出發セザルトキハ在勤俸ヲ給セス但病ニ罹リ外務大臣ノ許可ヲ得テ滞留スル者ニハ更ニ四週間ヲ限リ在勤俸十分ノ四ヲ給ス

第十二條 公使、總領事、領事其任所ニ於テ交代ノ場合ニ於テハ前任者ノ在勤俸ハ後任者著任ノ翌日ヨリ其十分ノ三ヲ減ス

第十三條 公使、總領事、領事、領事ヲ代理スル副領事、公使館參事官及公使館書記官ニシテ其妻ヲ任所ニ同伴シ若シクハ呼寄セタル者ニハ其妻任所ニ到着ノ翌日ヨリ出發ノ前日マテ其在勤俸十分ノ三ヲ増給ス

第十四條 公使館參事官又ハ公使館書記官ニシテ公使ノ代理ヲ命ゼラレタル者ニハ在勤俸十分ノ四ヲ加給ス

第二章 補助員俸給

第十五條 公使館又ハ領事館ニ置ク補助員ノ俸給ハ歐米各國濠洲及布哇ニ於テハ一箇月金貨四百圓東洋諸國及其他ニ於テハ銀貨貳百圓ヲ超過スルコトヲ得ス

第三章 退官賜金、非職給及死亡賜金

第十六條 外交官、領事官、公使館書記生及領事館書記生ノ退官賜金及非職給ハ其本俸ニ依リ之ヲ算出ス

第一節 總則

第十八條 旅費トハ船車料日當ノ二種ヲ合稱ス

第二十二條 公使館又ハ領事館ニ置ク補助員ニハ任所替若クハ官務旅行ヲ命シタルトキニ限リ旅費ヲ給ス但其備給額一箇月銀貨貳百五十拾圓以上ナルトキハ委任官本俸年俸千二百圓相當ヲ給ス其他ニハ判任官相當ノ旅費ヲ給ス

第二十三條 公使館又ハ領事館ニ出張スル場合ニ於テハ到著ノ翌日ヨリ起算シ其滞在日數滿四週間マテハ第二十八條ノ日當ノ外更ニ其十分ノ五ヲ給ス

第二百三十五

公使以外ノ外交官及領事官ニシテ赴任、官用歸朝、賜暇歸朝又ハ任所替ノ際現ニ妻ヲ同伴シ從者ヲ隨伴セシムルトキハ一人分ノ二等船車料ヲ給ス但從者ヲ隨伴スルモ妻ヲ同伴セサルモノハ支給ノ限リニアラス

第三節 日當

第二十八條 陸行中及出張滞在中ハ左ノ割合ニ依リ日當ヲ給ス但往返一日ヲ出テサルトキハ之ヲ給セス又出張地到着ノ翌日ヨリ起算シ滿三週間ヲ過クルトキハ其滞在中日當ヲ半額ニ減ス

Table with columns for rank (官等), location (任所), and daily allowance (日當). Rows include categories like 官等, 任所, and specific locations like 歐米濠洲布哇, 東洋及其他, 國朝, 鮮.

第二十九條 航行中ハ前條日當ノ半額ヲ給ス但船料ヲ給セザル場合ニ於テハ日當十分ノ七ヲ給ス

第二節 船車料

第二十三條 外交官、領事官、公使館書記生、領事館書記生及補助員ニハ一等船車料ヲ備員及從者ニハ二等船車料ヲ別表第四號ニ依リ給ス但表中規定セサルモノハ實費ヲ給ス

第二十四條 左ノ場合ニ於テハ外交官、領事官、公使館書記生及領事館書記生ノ妻ニハ別表第四號ニ依リ一等船車料ヲ給ス

第二十五條 公使赴任、官用歸朝、賜暇歸朝、任所替又ハ官務ヲ帶ヒテ兼任國へ旅行スル場合ニ於テ現ニ其妻ヲ同伴シ從者二人ヲ隨伴セシムルトキハ從者二人分若シ現ニ從者一人ナルトキハ一人分ノ二等船車料ヲ給ス

第三十條 公使兼任國ニ出張スル場合ニ於テハ到著ノ翌日ヨリ起算シ其滞在日數滿四週間マテハ第二十八條ノ日當ノ外更ニ其十分ノ五ヲ給ス

第三十一條 公使館領事館經費ハ實費精算ヲ要スルモノト精算ヲ簡ハス渡切ルモノトノ二種ニ區分シ其區分ニ屬スル費目ハ外務大臣大藏大臣ニ協議シテ之ヲ定ム

第三十三條 本條例ニ掲クル領事官ニ關スル條項ハ貿易事務官ニモ適用ス

第三十四條 本條例ハ明治二十四年四月一日ヨリ施行ス

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

Table for special allowances (特命全權公使) with columns for rank (官名) and amount (俸). Rows include ranks like 一級, 二級, 三級, 四級, 五千, 四百.

現行日本法令大全

第二類 第一章 第二款 官職 俸給 旅費

二百三十六

辦理公使	三	千	圓
總理公使	二	千	圓
領事	八	百	圓
領事事務官	千	圓	圓
公使館參事官	一級	千	圓
公使館書記官	二級	千	圓
公使館書記官	三級	千	圓
公使館書記官	四級	千	圓
公使館書記官	五級	千	圓
交際官試補	二級	千	圓
副領事	三級	千	圓

外交官及公使館書記生在勤俸

官任所	英露米	佛獨澳	伊	蘭	清	朝
特命全權公使	五千圓	四千七圓	四千三圓	四千圓	四千圓	四千圓
辦理公使	四千五圓	四千圓	三千八圓	三千五圓	三千八圓	三千五圓
代理公使	三千七圓	三千四圓	三千圓	二千七圓	三千圓	二千七圓
公使館參事官	貳千圓	千八百圓	千六百圓	千五百圓	千六百圓	千五百圓
公使館書記官	貳千圓	千八百圓	千六百圓	千五百圓	千六百圓	千五百圓
交際官試補	千四百圓	千貳百圓	千圓	千圓	千圓	千圓
公使館書記生	千三百圓以下	千四百圓以下	千四百圓以下	千四百圓以下	千四百圓以下	千四百圓以下

第三號

領事官及領事館書記生在勤俸

官任所	上海	香港	天津	汕頭	北京	漢口	廣州	福州	廈門	新嘉坡	馬尼拉
總領事	三千圓	貳千八圓	貳千七圓	貳千五圓	貳千四圓	貳千四圓	貳千四圓	貳千四圓	貳千四圓	貳千四圓	貳千四圓
總領事代理	貳千四圓	貳千三圓	貳千三圓	貳千三圓	貳千三圓	貳千三圓	貳千三圓	貳千三圓	貳千三圓	貳千三圓	貳千三圓
領事	貳千貳百圓	貳千貳百圓	貳千貳百圓	貳千貳百圓	貳千貳百圓	貳千貳百圓	貳千貳百圓	貳千貳百圓	貳千貳百圓	貳千貳百圓	貳千貳百圓
領事代理	千九百圓	千八百圓	千七百圓	千六百圓	千六百圓	千六百圓	千六百圓	千六百圓	千六百圓	千六百圓	千六百圓
領事館書記生	千三百圓以下	千三百圓以下	千三百圓以下	千三百圓以下	千三百圓以下	千三百圓以下	千三百圓以下	千三百圓以下	千三百圓以下	千三百圓以下	千三百圓以下

現行日本法令大全

第二類 第一章 第二款 官職 俸給 旅費

二百三十七

第四號

任所片道船車料

東京馬耳塞間	一等	貳百八拾九圓
同 羅馬間	一等	貳百九拾七圓
同 維也納間	一等	三百貳拾三圓
同 伯林間	一等	三百貳拾三圓
同 里昂間	一等	四百九拾壹圓
同 巴黎間	一等	五百五圓
同 海牙間	一等	五百拾八圓
同 聖彼得堡間	一等	五百八拾圓
同 倫敦間	一等	五百貳拾貳圓
同 リバプール間	一等	五百三拾四圓
同 桑港間	一等	貳百三拾三圓
同 ヴァンクーバー間	一等	貳百三拾三圓
同 紐育間	一等	四百拾五圓

同 華盛頓間	四百拾五圓	貳百貳拾圓
同 布哇間	貳百三拾三圓	九拾九圓
同 メルボルン間	四百拾七圓	貳百五拾四圓
同 釜山間	四拾五圓	貳拾五圓
同 元山間	五拾六圓	三拾貳圓
同 仁川間	五拾六圓	三拾貳圓
同 京城間	六拾三圓	三拾七圓
同 滿洲間	七拾壹圓	四拾壹圓
同 哥爾薩間	百拾貳圓	五拾三圓
同 上海間	五拾三圓	三拾三圓
同 北京間	百貳拾四圓	七拾四圓
同 漢口間	百四圓	五拾壹圓
同 天津間	七拾八圓	四拾五圓
同 芝罘間	六拾八圓	三拾九圓
同 福州間	八拾四圓	四拾五圓
同 廣東間	八拾貳圓	五拾八圓
同 香港間	七拾貳圓	五拾三圓
同 新嘉坡間	百三拾四圓	八拾貳圓
同 マニラ間	貳百五圓	百五拾九圓

第二類 第一章 第二款 官職 俸給 旅費

二百三十八

以上銀貨ヲ以テ支給ス

○公使館領事館費用條例細則

明治二十四年四月

外務省令第一號

明治二十四年勅令第三十三號公使館領事館費用條例細則左ノ
通定メ該條例施行ノ日ヨリ施行ス

公使館領事館費用條例細則

- 第一條 費用條例第十四條ノ代理者加給及ヒ領事代理俸ハ事務引繼ヲ了リタル翌日ヨリ之ヲ給シ本任官歸任若クハ新任本官到著ノ日ニ到リテ止ム
- 第二條 補助員及備員ノ月俸ハ毎月末之ヲ給ス但端日數ニ係ルモノハ日割計算ス
- 第三條 東京任所間往返ノ途次自己ノ都合ニ因リ滞在若クハ迂路ヲ同行シタルトキハ其日子ニ對スル日當及實費船車料ヲ給セス但船待セシ者又ハ病ニ罹リ醫師ノ診斷書ヲ添證明シタル者ハ此限ニ在ラス
- 第四條 公使館領事館ノ經費ハ左ノ如ク區分ス
 - 實費精算ヲ要スル費目
 - 修繕費 寢室補修器具等ノ修繕費對客問事務所敷物費
 - 裁判及囚徒費
 - 朝鮮國居留地取締費
 - 地所家屋借料
 - 應費
 - 備品費ノ内

- 器具
 - 國旗並綫
 - 官印
 - 公務所椅子並机
 - 書棚鐵函
 - 窓飾戶帳 對客問會堂ニ限ル
 - 椅子
 - 食堂用テーブル
 - 食堂用戸棚
 - 圖書費ノ内
 - 書籍地圖類
 - 通信運搬費ノ内
 - 電信料
 - 運搬費 保險料及公館移轉ノ備什器運搬ノ費用
 - 見本品購入代
 - 雜費
 - 諸謝金 公館ヨリ派駐若クハ要求ヲ爲サハルヘカワサル場合ニ於テ代理人ニ依頼等ノ支拂爲換料
 - 火災保險料
 - 道路疏水等ノ手當 上水賦金其他ノ諸稅等
 - 在外國難民貸與金
 - 受繼電信料
 - 墓地管理費
 - 精算ヲ問ハサル渡切費目
 - 應費
 - 備品費ノ内

第二類 第一章 第二款 官職 俸給 旅費

二百三十九

點火器

- 圖書費ノ内
 - 新聞雜誌類 内外各種ノ新聞雜誌
 - 製本費
 - 筆紙墨文具
 - 用紙封筒ノ類
 - 諸帳簿 會計諸帳簿
 - 消耗品
 - 薪炭油 朝鮮國國庫所及警察署ニ限ル
 - 通信運搬費ノ内
 - 郵便稅 郵便發送ノ爲メニ要スル諸費共
 - 備入被服費 公使館ニ限ル
 - 雜費
 - 諸手數料
 - 廣告料
 - 印紙料
 - 器具器械其他借料
 - 雜給
 - 雇人料 俄長芝爾帝公務所小使但公使館ニ限ル
 - 宴會費 領事館ハ天長節ニ限ル
- 第五條 前條科目外ノ費用ハ公使領事若クハ其代理者ノ負擔トス
- 第六條 渡切費用ハ各科目定額ヲ十二分シ其一分ヲ以テ一箇月分トシ毎月末之ヲ各館長官ニ交付シ當該長官ノ領收證書ヲ以テ支拂テ證明スヘシ

○外交官及領事官俸給旅費給額

明治二十三年十二月

勅令第二百八十一號

朕外交官及領事官ノ俸給旅費等ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

○外交官領事官貿易事務官公使館領事館書記生本給支給方

明治二十五年一月

勅令第四號

朕茲ニ外交官領事官貿易事務官公使館領事館書記生本俸支給ニ關スル件ヲ裁可ス

○土木監督署、衛生試驗所、中央氣象臺高等官俸給

明治二十四年七月

勅令第四百十四號

朕茲ニ土木監督署、衛生試驗所、中央氣象臺高等官俸給ノ件ヲ裁可ス

土木監督署長、衛生試驗所長、中央氣象臺長ノ年俸左ノ如シ

- 第一區土木監督署長 二千圓
- 第二區土木監督署長 千五百圓
- 第三區土木監督署長 千五百圓
- 第四區土木監督署長 二千圓
- 第五區土木監督署長 千五百圓
- 第六區土木監督署長 千五百圓
- 東京衛生試驗所長 千四百圓
- 大阪衛生試驗所長 千二百圓
- 橫濱衛生試驗所長 千七百圓
- 中央氣象臺長 千四百圓

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○集治監假留監高等官俸給

明治二十四年七月 勅令第三百十五號

朕茲ニ集治監假留監高等官俸給ノ件ヲ裁可ス

- 集治監假留監高等官ノ年俸左ノ通定ム
- 東京集治監典獄 千四百圓
- 三池集治監典獄 千四百圓
- 宮城集治監典獄 千圓
- 兵庫假留監典獄 千圓
- 北海道集治監典獄 千八百圓
- 北海道集治監分監長 八百圓

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○集治監假留監看守人員俸給

明治二十三年十月 勅令第三百二十八號

朕集治監假留監看守人員及俸給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

- 集治監假留監看守ノ人員及俸給ヲ定ムルコト左ノ如シ
- 一 看守ノ人員ハ在監人五百名ニ付七十五名トス
 - 但三池集治監及北海道ニアル各集治監ニハ此定員ノ外五十名以下ノ看守ヲ増置スルコトヲ得
- 二 在監人五百名ヲ超ユルトキハ百名ヲ増ス毎ニ看守十名ヲ加ヘ五百名ニ滿テサルトキハ百名ヲ減スル毎ニ看守十名ヲ減ス
- 三 看守人員ノ増減ヲ行フハ在監人ノ員數ニ百名ノ差ヲ生シタルトキニ於テスヘシ
- 四 看守俸給ハ月俸拾圓以下六圓以上トス但勤績滿九年以上ノ者ハ拾貳圓滿十二年以上ノ者ハ拾五圓ヲ給スルコトヲ得
- 五 北海道集治監ニ限リ勤績滿五年以上ニシテ勤勞拔群ナルモノニハ現俸四分ノ一以内ノ加俸ヲ給スルコトヲ得(二十四年七月二十四日勅令第三百十六號ヲ以テ本項ヲ追加ス)
- 在監人ノ減少ニ由リ過員トナリタル看守ハ休職ヲ命ジ現俸ノ三分一ヲ給スルコトヲ得但休職ハ一年ヲ期トス期滿ツレハ其職ヲ免ス

○造幣局印刷局稅關職員俸給

明治二十四年七月 勅令第三百二十四號

朕茲ニ造幣局印刷局稅關職員俸給ノ件ヲ裁可ス

- 第一條 造幣局印刷局稅關高等官ノ年俸左ノ如シ
- 造幣局
- 局長 三千圓
- 理事官 千八百圓
- 印刷局
- 局長 二千五百圓
- 理事官 千八百圓
- 稅關
- 橫濱稅關長 三千圓
- 神戶稅關長 二千五百圓
- 長崎稅關長 千五百圓
- 函館稅關長 千二百圓
- 橫濱稅關副長 千五百圓
- 神戶稅關副長 千二百圓

第二條 稅關鑑定官鑑定吏ニ關シテハ本年勅令第八十四號技術官俸給令ヲ適用ス

第三條 鑑定官試補ハ技師試補ノ例ニ依ル

第四條 監吏補ノ月俸ハ十五圓以下五圓以上トス

○陸軍海軍武官官等

明治十九年四月 勅令第三百七號

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

朕茲ニ陸軍海軍武官ノ官等ヲ裁可ス

陸軍海軍武官官等

- 第一條 陸軍海軍大將ハ親任式ヲ以テ叙任スルノ官トシ中將ハ勅任「一等」少將及相當官ハ勅任「二等」トス
- 第二條 陸軍海軍大佐ハ奏任「一等」中佐ハ奏任「二等」少佐ハ奏任「三等」大尉ハ奏任「四等」中尉ハ奏任「五等」少尉ハ奏任「六等」トス(十九年勅令第五十二號ヲ以テ海軍中佐中尉ノ官廢減ニ關ス)
- 第三條 陸軍准士官下士ノ官等ハ判任「一等」ヨリ「四等」ニ至リ海軍准士官下士ノ官等ハ判任「一等」ヨリ「五等」ニ至ル

○豫備後備ノ軍籍ニアル文官召集

明治二十四年七月 勅令第三百六十二號

朕豫備後備ノ軍籍ニアル文官陸軍召集條例ニ依リ召集中俸給支給方ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

文官ニシテ豫備後備ノ軍籍ニアル者陸軍給與令第十八條ニ依リ俸給ヲ受クル間ハ文官俸給ノ支給ヲ停止ス但其額文官俸給額ヨリ寡少ナルトキハ其不足額ハ奉職官應ニ於テ文官俸給ヨリ之ヲ補給ス

○陸軍備員以下給料支給規則

明治二十三年十一月 陸令第三百十九號

備員以下給料支給規則左ノ通相定メ本年十二月一日ヨリ施行ス

但明治十九年十月省令乙第四百二十二號備員俸給支給規則及

明治二十一年七月陸達第百六十一號ハ本文施行ノ日ヨリ廢止ス

備員備以下給料支給規則

第一條 備員ノ給料ハ月給又ハ日給トス(二十四年陸達第百二) 備員ノ者給料ハ別表ニ依ル

第二條 備員及備役ニシテ月給ノ者ハ毎月末日(休日ニ當ルトキハ順次繰上ケトス)ニ支給シ日給備員ノ者ハ出務現日數ニ依リ給料ヲ計算シテ毎月下旬適宜ニ之ヲ支給ス但解備死亡其他事故アルトキハ其際ニ給ス

第三條 新ニ備入ノ者及其他給額ヲ増減スルトキハ總テ其命ヲ受ケタル當日ヨリ給シ罷免ノトキハ其前日死亡ノトキハ其當日マテ給ス

第四條 備員及備役ニシテ月給ノ者傷痕疾病(公務ニ起因シ其他タル者ハ除ク)其他

事故(引又ハハ)ニ因リ出務セサルコト引續キ三十日ヲ除ヘ若クハ收禁留置中ハ日割ヲ以テ半額ヲ減シ拘留以上ノ處刑中ハ總テ支給セス但收禁留置ノ者無罪若クハ免訴ニ歸スルトキハ其減給額ヲ追給ス

第五條 備員及備役ニシテ日給ノ者ハ祭日祝日及日曜日其他命令上ノ休暇日又ハ公務ニ起因シタル傷痕疾病其他ノ爲メ不參ノ日ハ全額ヲ給ス

第六條 月給日割計算ノ法ハ其支給スヘキ日數ヲ月額ニ乘シ其月ノ現日數ヲ以テ除シ四捨五入厘位ニ止メ之ヲ支給ス但第四條ノ場合ニ在テハ月額ヲ二分シ之レニ支給スヘキ日數ヲ乘シ其月ノ現日數ヲ以テ除シ毛以下ノ之ヲ月額ノ内ヨリ扣除シ支給額ヲ得

別表(二十四年陸達第百十) 號ヲ以テ本表改正)

名	稱	備給表						名	稱	等級	日給
		一等	二等	三等	四等	五等	給				
看病人	人	一	二	三	四	五	名	支關番	一	參拾錢	
磨工	工	一	二	三	四	五	名	巡視	一	參拾五錢	
		二	三	四	五	給	名	邸内取締	二	參拾錢	
		三	四	五	給	名	小使	一	貳拾七錢		
		四	給	給	給	名	押丁	二	貳拾貳錢		
		五	給	給	給	名	給仕	三	拾貳錢五厘		

第一條 理事ハ勅任又ハ奏任トス其年俸ハ別表ニ依ル但奏任理事ニハ別表定ムル所ノ年俸最低額以下ヲ給スルコトヲ得

第二條 錄事ハ判任トス其俸給ハ本年勅令第八十三號判任官俸給令ニ依ル

附則

第三條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○理事錄事俸給 明治二十四年七月勅令第二十六號

勅任	奏任	任
一級 二千四百圓	五級 千六百圓	九級 九百圓
二級 二千二百圓	六級 千四百圓	十級 八百圓
三級 二千圓	七級 千二百圓	十一級 七百圓
四級 千八百圓	八級 千圓	十二級 六百圓

○千住製絨所高等官俸給 明治二十四年七月勅令第百二十七號

朕茲ニ千住製絨所高等官俸給ノ件ヲ裁可ス

陸軍省 監軍本部 立關番	法廷取締	手手手			厨	收	馬
		一等	二等	三等			
一 等 拾貳圓	一 等 拾圓	一 等 拾圓	二 等 拾圓	一 等 貳拾參錢	手	丁	
二 等 拾圓	二 等 拾圓	二 等 拾圓	三 等 拾圓	二 等 貳拾錢	手	丁	
三 等 拾圓	三 等 拾圓	三 等 拾圓	四 等 拾圓	三 等 貳拾錢	手	丁	
四 等 拾圓	四 等 拾圓	四 等 拾圓	五 等 拾圓	四 等 貳拾錢	手	丁	
五 等 拾圓	五 等 拾圓	五 等 拾圓	六 等 拾圓	五 等 貳拾錢	手	丁	

一 此給料ハ總テ最上限トス

二 新ニ備入シタル者ハ勤績一箇年ニ滿タサレハ昇級スルヲ得ス但馬丁ハ此限ニアラス

三 表中給料ニ數等アルモノハ一官廨毎ニ全員ヲ平分ス若シ發員アルトキハ最下級ヨリ順次上級ニ平分スヘシ但一官廨ノ定員給料等數ニ滿タサルトキハ勤績滿一箇年以上ノ者ハ適宜昇級セシムルコトヲ得

四 取締ノ職ヲ兼掌スルモノハ其給料ノ外金參錢ヲ增加ス但立關番ハ給料ヲ增加セス

○理事錄事俸給 明治二十四年七月勅令第二十六號

朕茲ニ理事錄事俸給ノ件ヲ裁可ス

現行日本法令大全

第二類 第一章 第二款 官職 俸給 旅費

二百四十四

千住製絨所高等官年俸左ノ如シ
 所長 二千圓
 事務官 千圓
 附則

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○陸軍海軍諸學校文官教授俸給

明治二十四年七月
 勅令第三百二十八號

朕茲ニ陸軍海軍諸學校文官教授俸給ノ件ヲ裁可ス

陸軍海軍諸學校文官教授年俸左ノ如シ

- 一級 千八百圓
- 二級 千六百圓
- 三級 千四百圓
- 四級 千二百圓
- 五級 千圓
- 六級 九百圓
- 七級 八百圓
- 八級 七百圓
- 九級 六百圓
- 十級 五百圓

附則
 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○陸軍編修俸給

明治二十四年七月
 勅令第三百二十九號

朕茲ニ陸軍編修俸給ノ件ヲ裁可ス

- 陸軍編修ノ年俸左ノ如シ
- 一級 千八百圓
- 二級 千六百圓
- 三級 千四百圓
- 四級 千二百圓
- 五級 千圓
- 六級 九百圓
- 七級 八百圓
- 八級 七百圓
- 九級 六百圓
- 十級 五百圓

附則
 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○陸地測量官俸給

明治二十四年七月
 勅令第三百三十號

朕茲ニ陸地測量官俸給ノ件ヲ裁可ス

陸地測量官ノ俸給ハ本年勅令第八十四條技術官俸給令ニ依ル

○海軍武官々階

明治二十四年七月
 勅令第三百五十七號

朕茲ニ海軍武官階ヲ定ムルノ件ヲ裁可ス

第一條 海軍武官階ヲ定ムルコト左表ノ如シ

現行日本法令大全

第二類 第一章 第二款 官職 俸給 旅費

二百四十五

海軍武官官階表

將	官		又佐官		士官		又尉官		准士官		下士		
	大將	中將	少將	大佐	少佐	大尉	少尉	上尉	中尉	少尉	一等	二等	三等
	機技總監	機關大監	機關少監	機技大監	機技少監	機技大士	機技少士	機技大士	機技少士	機技大士	機技少士	機技大士	機技少士
	軍醫總監	軍醫大監	軍醫少監	軍醫大士	軍醫少士	軍醫大士	軍醫少士	軍醫大士	軍醫少士	軍醫大士	軍醫少士	軍醫大士	軍醫少士
	主計總監	主計大監	主計少監	主計大士	主計少士	主計大士	主計少士	主計大士	主計少士	主計大士	主計少士	主計大士	主計少士

第二條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

第三條 海軍武官々等表ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

○海軍々人俸給令
 明治二十四年七月
 勅令第三百三十一號

海軍々人俸給令
 第一條 海軍高等武官ノ俸給ハ第一表准士官ノ俸給ハ第二表
 下士卒ノ俸給ハ第三表ニ依ル
 第二條 准士官以上ニ修學ヲ命シタルトキ及待命者ニハ俸給
 十分ノ八ヲ給シ休職者ニハ俸給十分ノ六ヲ給ス
 第三條 大佐及同等官ノ一級俸ヲ給スル人員ハ現役員
 休職者除

第二類 第一章 第二款 官職 俸給 旅費

二百四十六

以下ノ半數ヲ過クルコトヲ得ス
 大尉及同等官ノ一級俸二級俸及三級俸ヲ給スル人員ハ現役員ノ四分ノ一ヲ過クルコトヲ得ス
 少尉及同等官ノ一級俸ヲ給スル人員ハ現役員ノ半數ヲ過クルコトヲ得ス

第四條 候補生ニハ日給八十錢ヲ給ス又修學ニシテ飛艇ヲ命シタルトキハ日給六十錢ヲ給ス

第五條 下士卒ノ定員俸ハ定員及定員ニ準スヘキ服役者ニ給シ員外俸ハ定員外ニ在ル者ニ給ス

第六條 士官以上ニ上官ノ職務心得ヲ命シタルトキハ上官ノ最下級俸ヲ給ス

第七條 下士卒ニ准士官ノ職務心得ヲ命シタルトキハ准士官ノ最下級俸ヲ給ス

第八條 善行章ヲ有スル者ニハ一線毎ニ一日一錢ノ加俸ヲ給ス

第九條 砲術教授適任證書及水雷術教授適任證書ヲ有スル者ニハ一日三錢ニ等當砲證書狀及一等水雷證書狀ヲ有スル者ニハ一日二錢ノ加俸ヲ給ス但同種類ノ證書證書狀ヲ併有スル者ニハ其證書ニ就キ之ヲ給ス

第十條 准士官以上及候補生左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ俸給十分ノ三ヲ給ス

一 停職ヲ命シタルトキ

二 處罰中

三 被告入ト爲リ遞傳護送留置收禁拘留中但審問ノ後無罪ト爲リタルトキハ此限ニアラス

四 禁錮ニ處セザル其官ヲ失ハサルトキ

第十一條 下士卒左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其間俸給及加俸ヲ給セス

一 海軍部外ノ各廳ヘ貸與シタルトキ但奏樂ノ爲メ一時貸與スル軍樂員ハ此限ニアラス

二 願ニ依リ歸郷シタルトキ

三 被告入ト爲リ遞傳護送留置收禁拘留處刑中但審問ノ後無罪ト爲リタルトキハ此限ニアラス

四 擅ニ艦船團隊若クハ職役ヲ離レタルトキ

第十二條 下士卒處罰中ハ俸給十分ノ二ヲ給シ加俸ヲ給セス

第十三條 下士卒左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ俸給十分ノ四ヲ給ス但公務ニ原因シタルトキ又ハ外國出張中若クハ航海中ニ在ルトキハ其全額ヲ給ス

一 傷痕疾病ニ依リ入院若クハ陸地療養ノトキ

二 陸上勤務外宿中傷痕疾病ニ依リ缺勤一週日以上ニ及ブトキ

三 公務出張中傷痕疾病ニ依リ缺勤一週日以上ニ及ブトキ

第十四條 死亡者若クハ逃亡者ニ給スヘキ金額アルトキハ其家族ノ請求ニ依リ之ヲ下付ス

第十五條 艦船ノ乘員航海中ハ俸給ノ半額ヲ其家族ニ下渡スコトヲ得

第十六條 准士官以上ノ俸給ハ三百六十五分シ其月ノ日數ニ應シ給スルモノトス但太平洋渡航ニ當リ日數ニ一日ノ増減アルトキハ曆ノ日數ニ依ル又二月ハ閏年ト確モ二十八日分ヲ給ス

第十七條 俸給及加俸ハ毎月下旬ニ於テ之ヲ給ス

第十八條 豫備後備ノ准士官以上ヲ召集シタルトキハ現役者

ニ準シ相當ノ俸給ヲ給ス

第十九條 豫備兵後備兵及歸休兵ヲ召集シタルトキハ現役者ニ準シ相當ノ俸給ヲ給ス

第二十條 豫備後備ノ准士官以上豫備兵後備兵及歸休兵ノ召集服役中給與ノ制ハ總テ本令ニ依ルモノトス

第二十一條 第十條第二第三第四第十一條第三第四及第十二條

條ハ海軍軍屬ニ適用ス

第二十二條 本令ニ關スル細則ハ海軍大臣大藏大臣ト商議シ之ヲ定ム

附則

第二十三條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

第一表 海軍高等武官俸給表

大將	中將	少將及同等官	大佐及同等官	少佐及同等官	大尉及同等官	少尉及同等官
六千圓	四千圓	三千三百圓	二千四百九十六圓六十錢	千二百七十圓	八百七十六圓一錢	四百五十六圓二十五錢
二級	二級	二級	二級	二級	二級	二級
千八百九十八圓	千二百七十圓	八百七十六圓一錢	四百五十六圓二十五錢	六百七十八圓九十錢	六百二十四圓五十錢	四百一圓五十錢

第二表 海軍准士官俸給表

一級	二級	三級	四級	五級
五百四十圓二十錢	四百七十四圓五十錢	四百十六圓四十錢	三百五十七圓七十錢	二百九十九圓三十錢

第三表 海軍下士卒俸給表

一等給	一等給	二等給	三等給	四等給	一等給	二等給	三等給	四等給	五等給
	七十一錢	五十九錢	四十八錢	三十七錢	三十三錢	三十一錢	二十七錢	二十五錢	二十一錢
日當	四十八錢	四十一錢	三十四錢	二十六錢	二十三錢	二十二錢	十九錢	十八錢	十五錢
日當	四十八錢	四十一錢	三十四錢	二十六錢	二十三錢	二十二錢	十九錢	十八錢	十五錢
日當	四十八錢	四十一錢	三十四錢	二十六錢	二十三錢	二十二錢	十九錢	十八錢	十五錢

海軍軍人俸給及手當金支給細則

明治二十四年八月
海軍省達第六十三號

海軍軍人俸給及手當金支給細則左ノ通改正ス但本月十六日ヨリ施行ス

第一章 海軍高等武官及准士官俸給

第一條 新任進級轉官及増俸者ニハ辭令書日附ノ當日ヨリ其俸ヲ支給ス

第二條 待命休職又ハ停職トナリ事務引繼ヲ要シ若クハ殘職取扱ヲ命セラレタルトキハ其事務ヲ終リタル翌日ヨリ其俸ヲ支給シ事務引繼ヲ要セザルトキハ辭令書到達ノ翌日ヨリ其俸ヲ支給ス

待命者休職者又ハ停職者就職ノトキハ辭令書到達ノ日ヨリ其俸ヲ支給ス

第三條 修學ヲ命セラレタル者在職者ナルトキハ其應得俸額ニシテ退ク翌日ヨリ其俸ヲ支給シ待命者休職者或ハ停職者ナルトキハ辭令書到達ノ日ヨリ其俸ヲ支給ス

修學者就職ノトキハ其應得俸額ヨリ其俸ヲ支給ス

第四條 士官以上ニシテ上官ノ職務心得ヲ命セラレタルトキハ就職ノ日ヨリ其俸ヲ支給シ職務心得ヲ免セラレタルトキハ要スルトキハ其事務ヲ終リタル日マテ其俸ヲ支給シ事務引繼ヲ要セザルトキハ辭令書到達ノ日マテ其俸ヲ支給ス

第五條 懲罰ニ處セラレタル者ノ俸給ハ其日ヨリ罰期滿限ノ日マテ俸給十分ノ三ヲ支給ス

給半額ヲ支給シタル後過渡トナルトキハ之ヲ追徴ス若シ准士官ニシテ其過渡トナリタル金額ヲ返納シ能ハザルトキハ保證人ヲシテ之ヲ辨償セシム

第十三條 准士官以上所轄ヲ轉シタル後追徴若クハ追徴スヘキモノアルトキハ本人所在ノ應ニ於テ該金額ヲ追徴シ若クハ追徴ス

第十四條 准士官以上ノ俸給ハ毎月末日十二月二十五日又當日休所轄應ニ於テ之ヲ支給シ兼務者ノ俸給ハ本務ノ應ニ於テ之ヲ支給ス但上官ノ職務心得ヲ兼務スル者アルトキハ兼務ノ應ニ於テ之ヲ支給ス

第十五條 本則第十一條ニ依リ家族ニ下付スヘキ俸給半額ハ東京ニ於テハ第三屆橫須賀吳佐世保ニ於テハ海兵團ニ於テ之ヲ支給ス

第十六條 准士官以上甲應ヨリ乙應ニ轉スルトキハ第十四條ノ支給定日ニ拘ハラヌ甲應ニ於テ退應當日マテノ俸給ヲ支給シ第二條第三條第四條第六條第七條第八條第九條第十條ノ場合ニ於テハ第十四條ノ支給定日ニ拘ハラヌ其際所轄應ニ於テ各本條ニ依リ其俸給ヲ支給ス

第二章 候補生俸給

第十七條 候補生ノ俸給ハ毎月末日十二月二十五日又當日休ノ日數ニ應シ之ヲ支給ス

第十八條 前條ノ外支給ノ方法ハ第一章高等武官及准士官俸給ノ例ニ依ル

第三章 下士卒俸給及加俸

第十九條 新兵ニハ入營ノ當日入營セザル者ハ辭令書到達ノ日ヨリ其俸ヲ支給シ新任進級轉官轉職増俸ノトキハ辭令書到達ノ日ヨリ其俸

士官以上ニシテ上官ノ職務心得中懲罰ニ處セラレ其職ヲ失ハザルトキハ其受クル所ノ俸給ニ就キ十分ノ三ヲ支給ス

第六條 豫備後備ノ准士官以上ヲ召集シタルトキハ指定ノ地ヘ到着ノ日ヨリ役務ヲ終リタル日マテ俸給令第十八條ニ依リ其俸ヲ支給ス

第七條 在職者ニシテ豫備後備退役者クハ免官廢官トナリタルトキハ事務引繼其他公務ヲ終リタル日マテ其俸ヲ支給シ待命者休職者若クハ停職者ニシテ豫備後備退役者クハ免官廢官トナリタルトキハ其日マテ其俸ヲ支給ス

第八條 士官以上ニシテ現役ヲ退クノ際特ニ進級セシメラレタル者事務引繼ヲ要スルトキハ其事務引繼ヲ終リタル日マテ前官ノ俸ヲ支給ス

第九條 准士官以上ニシテ死亡シタルトキハ死亡ノ日マテ其俸ヲ支給ス

第十條 准士官ニシテ艦船ニ乗組出航ノ際二十三年勅令第五百五十條ニ依リ俸給ノ前渡ヲ爲スニハ保證人二名ヲ立テシムルヲ要ス

第十一條 准士官以上艦船ニ乗組出航中俸給ノ半額ヲ其家族ニ交付スルニハ請求書ヲ出サシメ該半額下渡ノ應ニ移牒シ該應ニ於テハ其移牒ニ依リ該半額ヲ支給シ本艦船ニ於テハ其殘額ヲ支給ス但准士官ノ俸給半額ヲ其家族ニ交付スルニハ保證人二名ヲ立テシメ請求書ニ連署セシムルヲ要ス

前項ノ場合ニ於テ俸給ニ増減ヲ生シタルトキハ艦船ニ於テ支給スル俸給額ヲ以テ増減シ若シ不足ヲ生シタルトキハ其金額及事由ヲ俸給半額下渡ノ應ニ通知スヘシ

第十二條 准士官以上ニ俸給ノ前渡ヲ爲シ若クハ其家族ニ俸

ヲ支給ス

第二十條 下士卒ニシテ練習ヲ命セラレタルトキハ五等卒辭令書到達ノ日ヨリ定員俸ヲ支給ス但甲應ヨリ乙應ヘ轉スルトキハ甲應ヲ退キタル日ヨリ定員俸ヲ支給ス

第二十一條 海兵團屯在ノ補充員ニシテ艦船隊若クハ鎮守府各部ノ事業ニ従事スルトキハ其日數ニ應シ定員俸ヲ支給ス

第二十二條 一等下士卒ニシテ准士官ノ職務心得ヲ命セラレタルトキハ俸給ノ支給ハ第四條ノ例ニ依リ其俸ヲ支給ス

第二十三條 下士卒傷疾疾病ニ罹リ入院スルトキハ退應ノ翌日ヨリ退院ノ前日マテ其受クル所ノ俸給十分ノ四ヲ支給シ陸地療養スルトキハ退應ノ翌日ヨリ歸應ノ前日マテ其受クル所ノ俸給十分ノ四ヲ支給ス

第二十四條 下士卒陸上勤務外宿中若クハ公務出張中傷疾疾病ニ依リ一週以上缺勤スルトキハ其八日目ノ當日ヨリ出勤ノ前日マテ其受クル所ノ俸給十分ノ四ヲ支給ス

第二十五條 下士卒ヲ海軍部外ニ貸與シ若クハ下士卒願ニ依リ歸郷シタルトキハ退應ノ翌日ヨリ歸應ノ前日マテ其俸給及加俸ヲ支給セス

第二十六條 下士卒ニシテ懲罰ニ處セラレタル者ニハ懲罰宣告ノ日ヨリ罰期滿限ノ日マテ俸給十分ノ二ヲ支給ス

一等下士卒ニシテ上官ノ職務心得中懲罰ニ處セラレ其職ヲ失ハザルトキハ其受クル所ノ俸給十分ノ二ヲ支給ス

第二十七條 豫備兵後備兵及歸休兵ヲ召集シタルトキハ入營ノ日ヨリ退應ノ日マテ俸給令第十九條ニ依リ其俸ヲ支給ス

第二十八條 豫備役編入ノ者又ハ現役滿期ニ依リ免役免官ノ者若クハ廢官廢職トナリタル者ニハ退應ノ日マテ其俸ヲ支

給ス
 第二十九條 下士卒死亡シタルトキハ死亡ノ日マテ其俸ヲ支給ス
 第三十條 善行章砲術教授適任證書水雷術教授適任證書等砲術狀及掌水雷證書ノ加俸ハ停止ノ正條アルトキハ除クノ外該章若クハ證書證書ヲ授與シタル日ヨリ之ヲ有スル間支給シ之ヲ剝奪シタルトキハ其日ヨリ支給セズ
 砲術教授適任證書及水雷術教授適任證書ヲ併有スル者若クハ砲術教授適任證書及掌水雷證書ヲ併有スル者若クハ水雷術教授適任證書及掌水雷證書ヲ併有スル者若クハ掌砲證書及掌水雷證書ヲ併有スル者ニハ證書及證書ニ對スル加俸ヲ支給ス
 砲術教授適任證書及掌砲證書ヲ併有スル者若クハ水雷術教授適任證書及掌水雷證書ヲ併有スル者ニハ其證書ノ一ニ就テ加俸ヲ支給ス
 第三十一條 下士卒ノ俸給及加俸ハ毎月末日十二月二十五日又翌日休暇ニ當ルトキハ順上テ其月ノ日數ニ應シ所轉應ニ於テ之ヲ給ス
 第三十二條 下士卒甲應ヨリ乙應ニ轉スルトキハ前條ノ支給定日ニ拘ハラス甲應ニ於テ退願當日マテノ俸給及加俸ヲ支給シ第二十三條第二十五條第二十七條第二十八條及第二十九條ノ場合ニ於テハ前條ノ支給定日ニ拘ハラス其際所轉應ニ於テ各本條ニ依リ其俸給及加俸ヲ給ス
 第三十三條 第十條第十一條第十二條第十三條第十四條及第十五條ハ下士卒ニ適用ス
 第四章 被告人俸給及加俸
 第三十四條 准士官以上及候補生被告人ト爲リ遞傳護送留置

收禁若クハ拘留セラレタルトキハ其日ヨリ左ニ掲クル日マテ俸給十分ノ三ヲ支給ス
 一 禁錮ニ處セラレ其官ヲ失ハサルトキハ刑期滿限ノ日
 二 刑官ニ處セラレタルトキハ其宣告ノ日
 第三十五條 下士卒被告人ト爲リ遞傳護送留置收禁若クハ拘留セラレタルトキハ其日ヨリ刑期滿限ノ日マテ罰金ニ當ル者ハ裁判申渡ノ日マテ俸給及加俸ヲ支給セズ
 第三十六條 下士卒並ニ艦船團隊若クハ職役ヲ離レタルトキハ其日ヨリ歸應若クハ遞傳護送留置收禁若クハ拘留セラレタル日マテ俸給及加俸ヲ支給セズ
 第三十七條 准士官以上候補生及下士卒遞傳護送留置收禁若クハ拘留セラレ後無罪又ハ免訴若クハ無罪トナリタルトキハ其減俸ヲ追給ス
 第三十八條 職罪服務中ハ俸給加俸トモ之ヲ支給ス
 第三十九條 前諸條ノ場合ニ於テ文官ノ俸給ハ准士官以上ニ準シ傭人ノ日給ハ下士卒ニ準シ之ヲ支給ス
 第五章 手當金
 第四十條 進級轉官轉職等ニ依テ手當金ニ増減アルトキハ辭令書到達ノ日ヨリ其額ヲ支給ス
 第四十一條 士官以上ニ上官ノ職務心得ヲ命シ又ハ一等下士ニ准士官ノ職務心得ヲ命シタルトキハ乘艦若クハ就職ノ日ヨリ其官職相當ノ手當金ヲ給ス
 第四十二條 進級ニ依リ轉勤スル場合ニ於テ事務引繼其他事故アリ尙在艦スルトキハ其官職相當ノ航海手當金ヲ支給ス
 第四十三條 航海手當金ノ支給區分ハ左ノ如シ
 一 艦船軍港振備出航ノトキハ其日ヨリ之ヲ支給シ軍港ニ

投錨ノトキハ其日ヨリ計算シ七日目マテ之ヲ支給シ水雷船ハ入港ノ當日マテ之ヲ支給ス
 二 水雷船ニ乘組軍港外若クハ砲船港外ニ於テ十二時間以上航行スルトキハ振備發航ノ日ヨリ軍港若クハ砲船港ニ投錨ノ日若クハ本艦船ニ歸到ノ日マテ支給ス
 三 外國航海ニ於テ給額ニ異動ヲ生スルトキハ最終ノ内國港灣振備發航ノ日ヨリ初メテ内國港灣ニ投錨ノ日マテ目的地ノ緯度ニ應シ相當ノ額ヲ支給ス但中途ニ於テ目的地ヲ變更シタルトキハ其命令到達ノ日ヨリ相當ノ額ヲ支給ス
 四 甲國ニ派遣中命ヲ受ケ乙國ニ出航シ給額ニ異動ヲ生スルトキハ出航ノ日ヨリ甲國ニ歸港投錨ノ日マテ目的地ノ緯度ニ應シ相當ノ額ヲ給ス但甲國ニ歸到セザルトキハ指定ノ港灣又ハ内國港灣ニ投錨ノ日マテ之ヲ支給ス
 五 軍港外ニ在ル艦船ニ乘組ヲ命シタルトキハ乘艦ノ日ヨリ支給シ退艦若クハ死亡シタルトキハ其日マテ支給ス但軍港内ニ在ル艦船ト雖モ投錨後未ダ七日ヲ經過セザルモノモ亦同シ
 六 艦船ノ乘員陸地ニ於テ療養シ若クハ公務ニ因ラスシテ在艦セザルトキハ退艦ノ日ヨリ歸艦ノ前日マテ支給セズ
 七 艦船乗組ノ辭令書ヲ與ヘ出張セシムルコトアルトキハ乘艦ノ日ヨリ退艦ノ日マテ支給ス
 八 官有船舶若クハ官ニテ傭入レ又ハ傭入レタル船舶ニ乘組ノ辭令書ヲ與ヘ出張セシムル等ニ當リ糧食ヲ給スル

トキハ乘船ノ日ヨリ退船ノ日マテ支給ス
 第四十四條 外宿手當金ノ支給區分ハ左ノ如シ
 一 勤務ノ地ニ到著シタルトキハ其翌日ヨリ支給シ退艦若シクハ死亡シタルトキハ其日マテ支給ス
 二 傷疾疾病ニ依リ入院スルトキハ其翌日ヨリ退院ノ前日マテ支給セズ其他公私旅行ノトキハ出發ノ翌日ヨリ歸著ノ前日マテ支給セズ
 第四十五條 教授手當金ハ規則ニ依リ許可シタル休暇日數ヲ服務日數ニ算入シ之ヲ支給ス
 第四十六條 勞働手當金支給ノ區分ハ左ノ如シ
 一 水底若クハ重艦底及ヒ之ニ均シキ事業ニシテ汽罐ノ内都機關室ノ底部及ヒ水罐ノ底部掃除ノ事業ニ從事セシムルトキハ一日貳拾錢以内ヲ支給ス
 二 難破船漂流人救援其他非常ノ場合ニ於テ勞働セシムルトキハ一日貳拾錢以内ヲ支給ス
 三 知港事應ニ於テ夜間艦船ヲ繫留シ若クハ入渠セシムルヲ必要トスルニ當リ非常ニ勞働セシムルトキハ一夜ニ四錢以内ヲ支給ス但前項ニ依リ手當金ヲ給スルトキハ本項ノ手當金ヲ給セズ
 第四十七條 手當金規則第九條ノ手當金ハ北緯ニ於テハ六月十五日ヨリ九月十二日マテ南緯ニ於テハ十二月十五日ヨリ三月十四日四月ノアルトキハ三月十三日マテ之ヲ支給シ又熱帶地方ニ於テ艦船ハ除ク汽罐ニ點火スルトキ機關部ノ事業ニ從事スル乘組機關手火夫其他ノ下士卒ニ之ヲ支給ス
 第四十八條 轉勤ノ際手當金ノ支給甲乙兩應ニ跨ルトキハ其當日マテ甲應ニ於テ支給シ其翌日ヨリ乙應ニ於テ支給ス

現行日本法令大全

第四十九條 兼務ニ依リ手當金ヲ給スル場合ニ於テハ兼務ノ應ニ於テ之ヲ支給ス
 第五十條 遞傳護送留置收禁拘留若クハ處刑中ノ者又ハ艦船團隊若クハ職役ヲ離シタル者ハ其日ヨリ所轉應ニ歸到ノ日マテ手當金ヲ支給セシム
 艦船團隊及各艦ニ於テ刑罰ニ處セラザル者ニハ其當日ヨリ計算シ刑罰期間滿限ノ日マテ手當金ヲ支給セシム
 第五十一條 裁罪服務中ハ手當金ヲ支給ス

○艦長内地ニ於テ外國人接待ノ處辨

金額 明治二十二年六月
海軍省達第百二十六號

軍艦長内地ニ於テ外國人ヲ接待若クハ接待セントスルトキハ左ノ金額以内ヲ以テ處辨ス可シ但當該年度中前月ノ豫定額内

刻手	海圖彫刷工	作事方	工	器械手	銃內割	兵器保護手	寫字機	監督	司令官官	司令官官	從僕	定夫	洗濯夫	馬丁給仕	射的場番	用水場番	埋葬地番
三四十錢	二錢	一圓	五八錢	八十錢	七十錢	六十錢	五十三錢	七錢	三十五錢	三十三錢	二十二錢	二十錢	七錢	二十錢	二十錢	二十錢	二十錢

第二條 公務ニ原因シ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ爲メニ服藥セザル者ニハ其日ヨリ百日マテ日給五分ノ一ヲ給ス
 傳染病ニ依リ隔離法施行ノ爲メ服藥ヲ禁シタル者ニハ其日數中日給ノ半額ヲ給ス

第一類 第一章 第二款 官職 俸給 旅費

ニ仕掛殘餘アルトキハ漸次後月ニ繰越シ使用スルコトヲ得
三年海軍省達第百二十九號ヲ以テ軍艦長ノ上級職司
 令官若クハ艦長ノ二項ノ職階司令官ノ部ヲ删除ス
 艦長 大佐 一箇月 金拾圓
 艦長 少佐 一箇月 金拾圓
 艦長 大尉 一箇月 金五圓

○傭人職工人夫給與規則

明治二十三年四月
海軍省達第百四十六號

雇員傭人職工人夫給與規則ヲ廢シ傭人職工人夫給與規則左ノ通定ム

傭人職工人夫給與規則

第一條 傭人ノ給料ハ左ノ金額ヲ最上限トシ適宜日給額ヲ定メ服業ノ日數ニ應ジ之ヲ給ス
(二十三年海軍省達第百五十一號ヲ以テ最上限トシテ下ノ各所管長官ニ於テ之ヲ删除ス)

現行日本法令大全

トキハ解僱ノ前日マテ日給ヲ給ス
 第五條 日給支給日ハ毎月判任官同日トシ前月二十一日ヨリ其月二十日マテ日給ヲ給ス但便宜ニ依リ其月分ノ給額ヲ毎月末日ニ給スルコトヲ得
 解僱者轉備者若クハ死亡者ノ日給ハ前項ノ支給日ニ拘ハラス其際之ヲ給ス
 第六條 器械手兵器保護手取替者砲丁馬丁及官役職工人夫公務ニ原因シ死傷シタル者ニハ明治八年四月第五十四號公布ニ依リ扶助料及埋葬料ヲ給ス
 第七條 官役職工人夫官役中負傷シ治療セシムルトキハ其日數百日マテハ賃金ノ五分ノ一ヲ給ス

勅任	奏任
三級 二千四百圓	一級 二千四百圓
二級 二千二百圓	二級 二千四百圓
一級 二千圓	三級 二千四百圓
附則	六級 千八百圓
	七級 千六百圓
	八級 千四百圓
	九級 千二百圓
	十級 九百圓
	十一級 七百圓
	十二級 六百圓

○海軍編修俸給

明治二十四年七月
勅令第百三十三號
 朕茲ニ海軍編修俸給ノ件ヲ裁可ス

海軍編修ノ年俸左ノ如シ
 一級 千二百圓
 二級 千圓
 三級 八百圓
 四級 六百圓

○主理錄事俸給

明治二十四年七月
勅令第百三十二號

朕茲ニ主理錄事俸給ノ件ヲ裁可ス

第一條 主理ハ勅任又ハ奏任トス其年俸ハ別表ニ依ル但奏任主理ニハ別表定ムル所ノ年俸最低額以下ヲ給スルコトヲ得
 第二條 錄事ハ判任トス其俸給ハ本年勅令第八十三號判任官俸給令ニ依ル
 附則

第三條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス
 明治二十年勅令第五十五號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

○判事檢事俸給令

明治二十四年七月
勅令第百三十四號
 朕茲ニ判事檢事俸給令ヲ裁可ス

判事檢事俸給令
 第一條 判事檢事ノ年俸ハ別表定ムル所ニ依ル
 第二條 判事檢事ノ各職ニ付其人員及年俸ヲ限定スルコト左ノ如シ
 大審院

第二類 第一章 第二款 官職 俸給 旅費

長 勅任	一人 五千圓	奏任	東京二千五百圓 大阪二千二百圓 其他二千二百圓乃至千四百圓
部長 勅任	三人 三千五百圓	部長 奏任	九十人 千二百圓乃至九百圓
判事 勅任及奏任	二十七人 三千圓乃至千六百圓	判事 奏任	四百十五人 八百圓乃至六百圓
大審院檢事局 檢事總長 勅任	一人 四千圓	地方裁判所檢事局 檢事正 奏任	四十九人(同) 東京二千二百圓 大阪二千二百圓 其他二千圓乃至千二百圓
控訴院 勅任及奏任	五人 三千圓乃至千六百圓	區裁判所 奏任	八百四十五人 八百圓乃至六百圓
長	七人	區裁判所 判事 奏任	八百四十人 八百圓乃至六百圓
部長 奏任	十五人 二千二百圓乃至千四百圓	區裁判所 檢事 奏任	二百七十五人 八百圓乃至六百圓
判事 奏任	八十五人 千二百圓乃至九百圓	第三條 豫備判事ハ其人員ヲ三十五人トシ豫備檢事ハ其人員 ヲ十五人トス	八百圓乃至六百圓
控訴院檢事局 檢事長 勅任	七人 東京三千五百圓 大阪三千五百圓 其他三千圓	豫備判事豫備檢事ハ奏任トシ年俸四百圓ヲ給ス	八百圓乃至六百圓
檢事 奏任	二十八人 二千圓乃至九百圓	司法官試補ハ其人員ヲ百十八トス	八百圓乃至六百圓
地方裁判所 長	四十九人(明治二十五年三月勅令 第二十五號ヲ以テ改正)	司法官試補ハ其待遇ヲ奏任トシ年俸三百圓以下ヲ給ス	八百圓乃至六百圓
		第四條 第二條ノ各職中年俸ニ等差アルモノハ每俸平等ニ其 人員ヲ定ム但端數ノ人員ヲ生スルトキハ最下級ヨリ漸次上 級ノ人員ニ併合ス	

別表

判事檢事年俸表

第五條 裁判所構成法第六十二條ニ依リ新任スル判事又ハ檢事ニシテ直チニ補職スル者ハ奏任トシ最下級ノ年俸ヲ給ス豫備判事又ハ豫備檢事ニシテ補職スル者モ亦同シ

裁判所構成法第六十五條第一項ニ依リ新任スル判事又ハ檢事ハ其補スヘキ職ノ最下ノ年俸ヲ給ス

判事又ハ檢事ニシテ他ニ轉官シ若ハ退官シタル者ヲ更ニ判事又ハ檢事ニ任スルトキハ前官ト同年俸若ハ其以下ノ年俸ヲ給ス

第六條 判事又ハ檢事ノ進級ハ關員アルトキニ限リ之ヲ行フ

第七條 判事又ハ檢事ノ進級ハ第二條ニ掲ケタル各職毎ニ先任ノ順序ニ依リ之ヲ行フ但區裁判所判事ハ地方裁判所判事ト併合シ區裁判所檢事局檢事ハ地方裁判所檢事局檢事ト併合シテ先任順序ヲ定メ進級セシム

大審院ノ部長判事大審院檢事局ノ檢事總長檢事控訴院ノ部長判事控訴院檢事局ノ檢事長檢事地方裁判所ノ部長判事及地方裁判所檢事局ノ檢事正ノ補職ハ撥擢ヲ以テ之ヲ行フコトヲ得但其補スヘキ職ノ最下ノ年俸ニ非ザラハ給スルコトヲ得ス

東京大阪控訴院ノ長同院檢事局ノ檢事長及東京大阪地方裁判所ノ長同地方裁判所檢事局ノ檢事正ノ補職モ亦撥擢ヲ以テ之ヲ行フコトヲ得

東京京都大阪横濱神戸長崎名古屋廣島仙臺熊本各地方裁判所檢事局檢事ノ補職ハ二十人ヲ限リ撥擢ヲ以テ之ヲ行ヒ

八級九級ノ年俸ヲ給スルコトヲ得

第八條 地方裁判所判事ニシテ豫審ヲ爲スコトヲ命セラレタル者ハ其事務取扱中一箇年百圓以内ノ加俸ヲ之ニ給スルコトヲ得(同)

第九條 判事檢事ノ各職ニ於ケル先任順序ハ年俸ノ多寡ニ依リ年俸相同シキモノハ年俸下賜辭令ノ日付ニ依リ

第十條 判事又ハ檢事轉職又ハ轉任スルトキハ前職ト同年俸若ハ其以下ノ年俸ニ非ザラハ給スルコトヲ得此場合ニ於テハ前職ノ年俸下賜辭令ノ日付ニ依リ後職ノ先任順序ヲ定ム

待命ノ判事又ハ檢事補職セラレ又ハ轉任シテ補職セラレトキ及司法行政官吏ニシテ判事檢事ノ資格ヲ有スル者判事又ハ檢事ニ轉任シ補職セラレトキモ亦同シ

退職ノ判事又ハ檢事補職セラレ又ハ轉任シテ補職セラレトキモ亦同シ但後職ノ年俸下賜辭令ノ日付ニ依リ先任順序ヲ定ム

附則

第十一條 本令施行ノ際年俸二千四百圓以下ノ奏任官ニシテ俸給減額四百圓ニ相當スル者ハ之ヲ二百圓ノ減額ニ止ムルコトヲ得

第十二條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

明治二十三年勅令第五百十八號判事檢事官等俸給令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

第二類 第一章 第二款 官職 俸給 旅費

二百五十六

勅任		表													
一級	二級	三級	四級	一級	二級	三級	四級	五級	六級	七級	八級	九級	十級	十一級	十二級
五千四百	四千四百	三千五百	三千四百	二千五百	二千二百	二千	千八百	千六百	千四百	千二百	千	四百	九百	八百	七百
四百	三百	二百	二百	二百	二百	二百	二百	二百	二百	二百	二百	二百	二百	二百	二百

○裁判所書記長書記俸給 明治二十四年七月 勅令第三百三十五號

除茲ニ裁判所書記長書記俸給ノ件ヲ裁可ス

裁判所書記長書記俸給

第一條 裁判所書記長ハ委任トス

裁判所書記ハ判任トス

裁判所書記見習ハ其待遇ヲ判任トシ月俸七圓以下ヲ給ス但特ニ拾圓マテヲ給スルコトアルヘシ

第二條 裁判所書記ノ各職ニ付其人員ヲ限定スルコト左ノ如シ

- 大審院 書記長 一人 年俸千二百圓
- 裁判所書記 二十人
- 大審院檢事局 裁判所書記 五人
- 控訴院 書記長 七人 五人年俸千圓 二人年俸九百圓
- 裁判所書記 百四十五人
- 控訴院檢事局 裁判所書記 二十五人
- 地方裁判所

裁判所書記 七百七十五人

地方裁判所檢事局

裁判所書記 百五十人

區裁判所

裁判所書記 四千六百人

區裁判所檢事局

裁判所書記 四百八十五人

附則

第三條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

明治二十三年勅令第五十九號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

○帝國大學文部省直轄諸學校及圖書館

館高等官俸給令 明治二十四年七月 勅令第三百三十九號

朕茲ニ帝國大學文部省直轄諸學校及圖書館高等官俸給令ヲ裁可ス

帝國大學文部省直轄諸學校及圖書館高等官俸給令

第一條 帝國大學文部省直轄諸學校及圖書館高等官ノ年俸左ノ如シ

- 帝國大學高等官 總長 四千圓

現行日本法令大全

- 教授 一號表ニ依ル
- 但勅任教授ニアラザレハ二級以上ノ年俸ヲ給スルコトヲ得ス
- 書記官 一級千二百圓 二級九百圓
- 助教授 一號表ニ依ル 二級九百圓 三級八百圓
- 舍監 高等師範學校高等官 二千五百圓
- 學校長 二號表ニ依ル
- 教授 二號表ニ依ル
- 舍監 二號表ニ依ル 三級二百五十圓 二級二百圓
- 高等商業學校高等官 二千圓
- 學校長 二號表ニ依ル
- 教授 二號表ニ依ル
- 舍監 二號表ニ依ル 三級四百圓 二級四百圓
- 各高等中學校高等官 二千圓
- 學校長 二號表ニ依ル
- 舍監 二號表ニ依ル 三級四百圓 二級四百圓
- 別表 一號表

第二類 第一章 第二款 官職 俸給 旅費

二百五十七

- 東京工業學校高等官 學校長 二千圓 教授 二號表ニ依ル
- 東京美術學校高等官 學校長 二千圓 教授 二號表ニ依ル
- 東京音樂學校高等官 學校長 二千圓 教授 二號表ニ依ル
- 東京盲啞學校高等官 學校長 八百圓 教授 二號表ニ依ル
- 東京圖書館高等官 館長 千二百圓
- 第二條 帝國大學書記官舍監及直轄諸學校舍監ハ一級俸二級俸各一人トス
- 第三條 教官ニシテ教官ニアラサル官吏ニ兼任シ又教官ニアラサル官吏ニシテ教官ニ兼任スル者ハ同廳内ト雖モ兼官相當ノ年俸三分ノ一以內ヲ増給スルコトヲ得
- 第四條 教官ハ其授業ノ時間及學科ノ輕重難易等ニ依リ別表ニ掲クル年俸最低額以下ヲ給スルコトアルヘシ
- 附則 第五條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

官名	年俸	等級
帝國大學分科教授	一級三千四百圓 二級二千八百圓	三級二千五百圓 四級二千二百圓 五級二千圓 六級千八百圓
帝國大學分科助教授	一級二千二百圓 二級千二百圓	三級九百圓 四級八百圓 五級七百圓 六級六百圓

官名	年俸	等級
文部省直轄諸學校教授	一級二千四百圓 二級千八百圓	三級千六百圓 四級千四百圓 五級千二百圓 六級千圓
文部省直轄諸學校助教授	一級千二百圓 二級千圓	三級九百圓 四級八百圓 五級七百圓 六級六百圓

府縣立師範學校長任命及俸給令

明治二十四年八月 勅令第七十二號

朕茲ニ府縣立師範學校長任命及俸給令ヲ裁可ス

府縣立師範學校長任命及俸給令

第一條 府縣立師範學校長ハ委任トス
 第二條 府縣立師範學校長ノ年俸ハ別表ニ依リ之ヲ支給ス
 第三條 本令ニ規定スルモノ、外總テ本年勅令第八十二號高等官任命及俸給令ニ依ル

附則
 第四條 本令ハ明治二十五年四月一日ヨリ施行ス

一級	二千四百圓
二級	千二百圓
三級	九百圓
四級	八百圓
五級	七百圓
六級	六百圓

尋常師範學校教諭助教諭訓導及書記俸額

明治二十四年十一月 勅令第二百七十七號

尋常師範學校教諭助教諭訓導及書記ノ俸額ヲ定ムルコト左ノ如シ但明治二十五年度ノ經費豫算内ニ於テ支辨スヘカヲサレモノアルトキハ同年度中便宜俸給等級相當ノ額ヲ減給スヘシ

尋常師範學校教諭助教諭訓導及書記ノ俸額

第一條 尋常師範學校教諭ノ俸給ハ其月俸ヲ別テ五級トシ一號表ニ依リ支給スヘシ但委任文官ト同一ノ待遇ヲ受クル者ハ該表ノ範圍ニ拘ラス特ニ二百圓マテ増俸スルコトヲ得
 第二條 尋常師範學校助教諭訓導及書記ノ俸給ハ其月俸ヲ別テ五級トシ二號表ニ依リ支給スヘシ
 第三條 尋常師範學校教諭助教諭及訓導ノ俸給ハ其授業ノ時間及學科ノ輕重難易等ニ依リ一號表及二號表ニ掲クル俸給等級相當ノ額ヲ減給スルコトヲ得

職名	月俸等				
	一級	二級	三級	四級	五級
教諭	上七十五圓	六十五圓	五十五圓	四十五圓	三十五圓
	下七十四圓	六十四圓	五十四圓	四十四圓	三十四圓

職名	月俸等級				
	一級	二級	三級	四級	五級
助教諭	三十四圓	三十三圓	二十二圓	十五圓	十二圓
書記	二十五圓	二十四圓	十五圓	十二圓	十圓

○郵便及電信局郵便爲替貯金管理所 船舶司檢所航路標識管理所職員俸給
 明治二十四年七月 勅令第五十五號
 朕茲ニ郵便及電信局郵便爲替貯金管理所船舶司檢所航路標識管理所職員俸給ノ件ヲ裁可ス

第一條 委任ヲ以テ任スル一等郵便電信局長及司檢官ノ年俸ハ別表ニ依ル
 第二條 郵便爲替貯金管理所長ノ年俸ハ二千圓トシ事務官ノ年俸ハ千圓八百圓各一八トス
 第三條 東京一等郵便電信局事務官ノ年俸ハ千圓大阪一等郵便電信局事務官ノ年俸ハ八百圓トス
 第四條 書記補ハ月俸十五圓以下五圓以上トス
 第五條 三等郵便局長ハ俸給ヲ給セス一箇年四百圓以下ノ手當ヲ給ス其細則ハ逓信大臣之ヲ定ム
 第六條 航路標識管理所看守ノ俸給ハ別表ニ依ル但一級俸ヲ受ク三年ヲ除エタルモノニシテ殊ニ勞績アルモノハ三十四圓マテ増俸スルコトヲ得

官名	年俸	等級
一等郵便	二千圓	三級千六百圓
二等郵便	千八百圓	四級千四百圓
電信局長	二級千八百圓	三級千四百圓
司檢官	一級千八百圓	二級千六百圓
看守	一級二十五圓	二級二十圓

官名	月俸	等級
一等郵便	二千圓	三級千六百圓
二等郵便	千八百圓	四級千四百圓
電信局長	二級千八百圓	三級千四百圓
司檢官	一級千八百圓	二級千六百圓
看守	一級二十五圓	二級二十圓

○遞信省所管學校職員俸給 明治二十四年七月勅令第九十五號

第一條 商船學校長ノ年俸ハ千八百圓トス
第二條 商船學校教授東京郵便電信學校教授ノ年俸ハ別表ニ依ル
教授ニシテ幹事ヲ兼ルモノハ教授年俸ノ外年俸二百圓以内ヲ給ス

第三條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

別表
一級 千四百圓 三級 千圓 五級 八百圓 七級 六百圓
二級 千二百圓 四級 九百圓 六級 七百圓 八級 五百圓

○鐵道廳高等官俸給 明治二十四年七月勅令第九十七號

第一條 鐵道廳高等官ノ年俸左ノ通定ス
部長 四千圓
局長 三千圓
第二條 事務官及參事官ノ年俸ハ本年勅令第八十二號高等官任命及俸給令第二號表ニ依ル

第三條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○富岡製絲所大小林區署鑛山監督署職員俸給 明治二十四年七月勅令第九十六號

第一條 富岡製絲所大小林區署鑛山監督署高等官ノ年俸左ノ如シ
富岡製絲所長 千八百圓
林務官 別表ニ依ル
鑛山監督官 別表ニ依ル
大林區署技師 別表ニ依ル
鑛山監督署技師 別表ニ依ル

第二條 大小林區署鑛山監督署判任官ノ月俸左ノ如シ
林務官補 判任官俸給八級以上
大林區署書記 判任官俸給三級以下
營林主事 判任官俸給三級以下
營林主事補 二十五圓以下八圓以上
森林監守 十二圓以下五圓以上

第三條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

明治二十三年勅令第二百二十八號又ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

Table with 3 columns: 官名 (Official Name), 年俸 (Annual Salary), 等級 (Grade).
林務官 一級 千五百圓 二級 千二百圓 三級 千圓 四級 八百圓

○官林巡邏支給規則 明治二十三年九月農商務省訓令第四十九號

官林巡邏給料支給規則左ノ通り改定ス

第一條 官林巡邏ノ給料ハ年給トシ左表定ムル所ニ依ル
第二條 年給ハ毎年三月末日ニ十二箇月分ヲ取纏メ之ヲ支給ス

第三條 新ニ採用シタルトキ當月分ノ給料ハ發令ノ翌日ヨリ解免シタルトキ當月分ノ給料ハ發令ノ日マテ日割ヲ以テ計算シ死亡ノトキハ月割ヲ以テ計算ス

第四條 増俸減俸ノ場合ニハ發令ノ翌日ヨリ其月分ヲ日割計算ニテ支給ス

第五條 日割計算ノ法ハ其月ノ現日數ニ依ル(二十三年農商務省訓令第六十六號ヲ以テ追加)

Table with 2 columns: 年 (Year), 給料 (Salary).
一 等 二 等 三 等 四 等 五 等 六 等 七 等 八 等 九 等 十 等 十一 等 十二 等 十三 等 十四 等 十五 等 十六 等 十七 等 十八 等 十九 等 二十 等 二十一 等 二十二 等 二十三 等 二十四 等 二十五 等 二十六 等 二十七 等 二十八 等 二十九 等 三十 等 三十一 等 三十二 等 三十三 等 三十四 等 三十五 等 三十六 等 三十七 等 三十八 等 三十九 等 四十 等 四十一 等 四十二 等 四十三 等 四十四 等 四十五 等 四十六 等 四十七 等 四十八 等 四十九 等 五十 等

○會計検査院高等官年俸 明治二十四年七月勅令第九十七號

朕茲ニ會計検査院高等官年俸ノ件ヲ裁可ス

會計検査院高等官年俸左ノ通定ス

院長 四千圓
部長 三千圓

検査官 一級 二千五百圓 二級 二千二百圓 三級 二千圓 四級 一千八百圓 五級 一千六百圓 六級 一千四百圓 七級 一千二百圓 八級 一千圓

書記官 一級 二千圓 二級 一千五百圓
書記官ハ一級二級俸各一人トス

検査官補 一級 九百圓 二級 八百圓 三級 七百圓 四級 六百圓

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○行政裁判所長官並評定官年俸

朕茲ニ行政裁判所長官並評定官年俸改正ノ件ヲ裁可ス

行政裁判所長官評定官年俸左ノ通定ス
長官 四千圓
評定官 四千人

助任 三千圓

一級	二千五百圓
二級	二千二百圓
三級	二千圓
四級	千八百圓
五級	千六百圓
六級	千四百圓
七級	千二百圓

附則
本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○貴族院衆議院書記官長並書記官年俸

勅令第百一號
明治二十四年七月

朕茲ニ貴族院衆議院書記官長並書記官年俸ノ件ヲ裁可ス

貴族院書記官長 三千圓

衆議院書記官長 三千圓

附則

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○警視廳高等官俸給令

明治二十四年七月
勅令第百十八號

朕茲ニ警視廳高等官俸給令ノ改正ヲ裁可ス

警視廳高等官俸給令
第一條 警視廳高等官ノ年俸左ノ如シ

警視總監 四千圓

巡査本部長ニ補スルモノ 二千二百圓

警視 巡査本部長ニ補スルモノノ千二百圓

警視 警務局長ニ補スルモノノ千五百圓

警視 官房第一部長ニ補スルモノノ千八百圓

警視 同 第二部長ニ補スルモノノ千二百圓

警視 同 第三部長ニ補スルモノノ千二百圓

警視 參事ニ補スルモノノ千圓

警視 巡視ニ補スルモノノ千二百圓

警視 警察署長ニ補スルモノノ九百圓八百圓七百圓

警視 消防司令長 千五百圓

典獄 千圓

警察醫長 千圓

第二條 警察署長ニ補スル警視ノ俸給區別ハ內務大臣其警察署ニ就テ之ヲ指定スヘシ

附則
第三條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○警視廳高等官俸給令ニ依リ警察署長俸給指定

明治二十四年四月
內務省告示第九號

依リ警察署長俸給ノ區別ニ關シ警察署ヲ指定スルコト左ノ如シ

京橋警察署 久松町警察署

別表

巡査本部警察署警察分署警部月俸表

官名	官階	官名	官階
警部	四拾五	警部	四拾五
警部	四拾四	警部	四拾四
警部	四拾三	警部	四拾三
警部	四拾二	警部	四拾二
警部	四拾一	警部	四拾一
警部	四拾	警部	四拾
警部	三拾九	警部	三拾九
警部	三拾八	警部	三拾八
警部	三拾七	警部	三拾七
警部	三拾六	警部	三拾六
警部	三拾五	警部	三拾五
警部	三拾四	警部	三拾四
警部	三拾三	警部	三拾三
警部	三拾二	警部	三拾二
警部	三拾一	警部	三拾一
警部	三拾	警部	三拾
警部	二拾九	警部	二拾九
警部	二拾八	警部	二拾八
警部	二拾七	警部	二拾七
警部	二拾六	警部	二拾六
警部	二拾五	警部	二拾五
警部	二拾四	警部	二拾四
警部	二拾三	警部	二拾三
警部	二拾二	警部	二拾二
警部	二拾一	警部	二拾一
警部	二拾	警部	二拾
警部	一拾九	警部	一拾九
警部	一拾八	警部	一拾八
警部	一拾七	警部	一拾七
警部	一拾六	警部	一拾六
警部	一拾五	警部	一拾五
警部	一拾四	警部	一拾四
警部	一拾三	警部	一拾三
警部	一拾二	警部	一拾二
警部	一拾一	警部	一拾一
警部	一拾	警部	一拾
警部	九	警部	九
警部	八	警部	八
警部	七	警部	七
警部	六	警部	六
警部	五	警部	五
警部	四	警部	四
警部	三	警部	三
警部	二	警部	二
警部	一	警部	一

芝愛宕町警察署 麴町警察署
 小川町警察署 淺草猿屋町警察署
 淺草象潟町警察署 本所相生町警察署
 右警察署長年俸九百圓
 阪本町警察署 和泉橋警察署
 麻布警察署 品川警察署
 牛込警察署 本郷警察署
 富岡門前警察署 榮平橋警察署
 右警察署長年俸八百圓
 高輪警察署 赤阪警察署
 四谷警察署 新宿警察署
 小石川警察署 板橋警察署
 千住警察署 小松川警察署
 水上警察署

右警察署長年俸七百圓

○巡査本部警察署警察分署詰警部及消防士消防機關士監獄書記看守長

明治二十四年四月
勅令第百三十六號

朕茲ニ巡査本部警察署警察分署詰警部及消防士消防機關士監獄書記看守長俸給令ヲ裁可ス

巡査本部警察署警察分署詰警部及消防士消防機關士監獄書記看守長俸給令

第一條 巡査本部警察署警察分署詰警部及消防士消防機關士監獄書記看守長ノ俸給ハ別表ニ依ル

第二條 前條規定ノ外ハ總テ明治十九年勅令第三十六號判任官官等俸給令ニ依ル

警部	警部外	警部外	警部外	警部外	警部外	警部外	警部外	警部外	警部外	警部外	警部外	警部外	警部外	警部外	警部外	警部外	警部外	警部外	警部外	警部外	警部外
三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓
五拾圓	五拾圓	五拾圓	五拾圓	五拾圓	五拾圓	五拾圓	五拾圓	五拾圓	五拾圓	五拾圓	五拾圓	五拾圓	五拾圓	五拾圓	五拾圓	五拾圓	五拾圓	五拾圓	五拾圓	五拾圓	五拾圓
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上

備考
 巡査本部ノ欄
 部長トハ守衛掛長、本部豫備掛帝國議會諸兼務
 内勤トハ刑事掛、教習所詰、事務員
 外勤トハ警衛

消防士消防機關士月報表

官名	署名	消防署	第一分署	第二分署	第三分署	第四分署	第五分署	第六分署
消防士		四拾五圓	四拾五圓	四拾五圓	四拾五圓	四拾五圓	四拾五圓	四拾五圓
消防士		三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓
消防機關士		三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓
監獄署	監獄書記	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓
	監獄書記	四拾五圓	四拾五圓	四拾五圓	四拾五圓	四拾五圓	四拾五圓	四拾五圓
	看守長	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓
	看守長	四拾五圓	四拾五圓	四拾五圓	四拾五圓	四拾五圓	四拾五圓	四拾五圓
	看守長	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓	三拾五圓
	看守長	四拾五圓	四拾五圓	四拾五圓	四拾五圓	四拾五圓	四拾五圓	四拾五圓

石川島支署	五拾圓	三拾貳圓	三拾貳圓	三拾貳圓	三拾貳圓	三拾貳圓	三拾貳圓
市ヶ谷支署	五拾圓	三拾貳圓	三拾貳圓	三拾貳圓	三拾貳圓	三拾貳圓	三拾貳圓

○巡査俸給 明治二十四年八月勅令第百六十九號
 朕茲ニ巡査俸給ノ件ヲ裁可ス

第一條 巡査ノ月俸ハ左ノ如シ
 一級 十圓
 二級 九圓
 三級 八圓

第二條 巡査勤績滿九年以上ノ者ハ月俸十二圓滿十二年以上ノ者ハ月俸十五圓ヲ給スルコトヲ得

第三條 巡査教習所ニ於テ職務教習中ノ者ニ限リ月俸六圓ヲ給ス但地方ノ便宜ニ依リ其半額迄ハ之ヲ減スルコトヲ得

第四條 本令ハ明治二十五年四月一日ヨリ施行ス

○巡査看守俸給支給規則 明治二十四年七月勅令第百十九號
 朕茲ニ北海道廳高等官俸給ノ件ヲ裁可ス

第一條 巡査看守ノ月俸ハ毎月末日ヲ以テ支給ノ定日トス但休日ニ當ルトキハ繰上トス(第二號ヲ以テ改正)

第二條 巡査教習中ハ認可ヲ經テ定額ノ俸給ヲ減少支給スルコトヲ得

第三條 免職ノトキハ當月分ノ俸給日割ヲ以テ支給スヘシ

第四條 願濟休暇旅行ノ者及ヒ私事ノ故障(自己ノ病氣ヲ除ク)ニ由リ出署セサルモノ日數二十日後ハ日割ヲ以テ俸給ノ半額ヲ減スルモノトス

第五條 豫備及後備軍籍ニアル者召集ノ節其出發ノ日ヨリ歸署ノ前日迄ハ俸給ヲ支給セス

第六條 右ニ掲クルモノ、外ハ「判任官俸給支給細則」ニ依ル(判任官俸給支給細則ハ二十三年大藏省令第十號文官俸給支給細則ヲ以テ廢ス)

○巡査看守俸給支給規則 明治十九年十月内務省令第百二十三號
 巡査看守俸給支給規則左ノ通相定ム

但來十一月一日ヨリ施行スヘシ

○北海道廳高等官俸給 明治二十四年七月勅令第百十九號
 朕茲ニ北海道廳高等官俸給ノ件ヲ裁可ス

第一條 北海道廳高等官ノ年俸左ノ如シ
 長官 四千圓

書記官 上級二千二百圓
 警部長 下級二千圓
 財務長 千八百圓
 參事官 千圓
 典獄 八百圓
 郡區長 六百圓

第二條 內務大臣ニ於テ特ニ指定スル各郡區ノ郡區長ハ年俸八百圓ヲ給ス但其人員ハ七人以内トス

第三條 書記官ハ上級俸下級俸各一八トス

第四條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○北海道中特別俸ヲ給スル郡ノ指定

明治二十四年七月 勅令第百十九號第二條ニ依リ北海道中左ノ郡ヲ指定ス

檜山郡久遠郡奥尻郡大橋郡瀬棚郡爾志郡
 小樽郡高島郡忍路郡余市郡古平郡美瑛郡積丹郡
 根室郡花咲郡野付郡標津郡日置郡國後郡色丹郡得撫郡新知郡古守郡
 札幌郡空知郡夕張郡樺戸郡雨龍郡上川郡石狩郡厚田郡濱益郡千歳郡
 増毛郡留萌郡苫前郡天鹽郡中川郡上川郡
 釧路郡厚岸郡川上郡廣尾郡常呂郡十勝郡中川郡河西郡河東郡上川郡白糠郡阿寒郡足寄郡
 紗那郡振別郡樺捉郡藥取郡

○札幌農學校高等官俸給

明治二十四年七月 勅令第百四十三號
 朕茲ニ札幌農學校高等官俸給ノ件ヲ裁可ス

第一條 學校長合監ノ年俸左ノ如シ
 學校長 二千圓
 舍監 五百圓

第二條 教授ノ年俸ニ關シテハ本年勅令第百三十九號帝國大學文部省直轄諸學校及圖書館高等官俸給令第二號表中文部省直轄諸學校教授年俸表並第三條第四條ヲ適用ス

第三條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○札幌農學校教官俸給減額方

明治二十五年三月 勅令第百二十號
 朕茲ニ札幌農學校教官俸給ノ件ヲ裁可ス

札幌農學校教官ノ俸給ハ其授業ノ時間及學科ノ輕重難易等ニ依リ年俸等級相當ノ額ヲ減給スルコトヲ得

○地方高等官俸給令 明治二十四年七月 勅令第百二十號
 朕茲ニ地方高等官俸給令ヲ裁可ス

地方高等官俸給令

第一條 府縣知事書記官警部長收稅長及典獄ノ年俸左ノ如シ
 東京府知事四千圓

京都府知事、大阪府知事、神奈川縣知事、兵庫縣知事、長崎縣知事、新潟縣知事、愛知縣知事、宮城縣知事、廣島縣知事、熊本縣知事三千五百圓
 其他ノ縣知事三千圓

書記官	二千圓	其他ノ諸縣
警部長	千四百圓	
收稅長	千四百圓	
典獄	八百圓	

○郡長ニ特別俸ヲ給スル郡ヲ指定ス

明治二十三年十月 勅令第百二十六號地方官官等俸給令第四條第八條ニ依リ左ノ郡ヲ指定ス

東京府 荏原郡 北豐島郡 東多摩郡南豐島郡
 京都府 與謝郡 天田郡 紀伊郡 加佐郡
 大阪府 西成郡 南郡日根郡 石川郡八上郡古市郡安宿郡錦部郡志紀郡丹南郡
 神奈川縣 南多摩郡 三浦郡 足柄下郡
 兵庫縣 明石郡 津名郡 城崎郡美含郡
 長崎縣 西彼杵郡 南高來郡 北松浦郡
 新潟縣 中頸城郡 北蒲原郡 古志郡 雜太郡加茂郡羽茂郡
 埼玉縣 北足立郡新座郡 入間郡高麗郡 秩父郡
 群馬縣 東群馬郡南勢多郡 西群馬郡片岡郡
 千葉縣 千葉郡市原郡 印旛郡下埴生郡南相馬郡 安房郡平郡朝夷郡長狹郡海上郡匝瑳郡

○郡長ニ特別俸ヲ給スル郡ヲ指定ス

明治二十三年勅令第百二十六號地方官官等俸給令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

第二類 第一章 第二款 官職 俸給 旅費

二百六十四

Table with multiple columns and rows listing salaries and allowances for various positions, including '警部外' and '警部' categories.

備考 巡査本部ノ欄 部長トハ守衛掛長、本部豫備掛帝國議會請兼務 内勤トハ刑事掛、教習所詰、事務員 外勤トハ警衛

消防士消防機關士月報表

Table for '消防士消防機關士月報表' showing monthly salaries for fire fighters across different districts (消防士分署長, 消防士, 消防機關士).

Table for '監獄書記看守月俸表' showing monthly salaries for prison clerks and wardens in different districts like 石川島支署 and 市ヶ谷支署.

○巡査俸給 (明治二十四年八月勅令第百六十九號)

朕茲ニ巡査俸給ノ件ヲ裁可ス 第一條 巡査ノ月俸ハ左ノ如シ 一級 十圓 二級 九圓 三級 八圓 第二條 巡査勤続滿九年以上ノ者ハ月俸十二圓滿十二年以上ノ者ハ月俸十五圓ヲ給スルコトヲ得 第三條 巡査教習所ニ於テ職務教習中ノ者ニ限リ月俸六圓ヲ給ス但地方ノ便宜ニ依リ其半額迄ハ之ヲ減スルコトヲ得 第四條 本令ハ明治二十五年四月一日ヨリ施行ス

○巡査看守俸給支給規則

明治十九年十月 内務省令第二十三號 巡査看守俸給支給規則左ノ通相定ム 但來十一月一日ヨリ施行スヘシ

○巡査看守俸給支給規則

第一條 巡査看守ノ月俸ハ毎月末日ヲ以テ支給ノ定日トス但休日ニ當ルトキハ繰上トス(二十三年內務省令第二十三號ヲ以テ改正) 第二條 巡査教習中ハ認可ヲ經テ定額ノ俸給ヲ減少支給スルコトヲ得 第三條 免職ノトキハ當月分ノ俸給日割ヲ以テ支給スヘシ 第四條 願濟休暇旅行ノ者及ヒ私事ノ故障(自己ノ病氣ヲ除ク)ニ由リ出署セサルモノ日數二十日後ハ日割ヲ以テ俸給ノ半額ヲ減スルモノトス 第五條 豫備及後備軍籍ニアル者召集ノ節其出發ノ日ヨリ歸署ノ前日迄ハ俸給ヲ支給セス 第六條 右ニ掲クルモノ、外ハ「判任官俸給支給細則」ニ依ル(判任俸給令支給細則ハ二十三年大藏省令第十號文官俸給支給細則ヲ以テ廢ス)

○北海道廳高等官俸給 (明治二十四年七月勅令第百十九號)

朕茲ニ北海道廳高等官俸給ノ件ヲ裁可ス 第一條 北海道廳高等官ノ年俸左ノ如シ 長官 四千圓

第二類 第一章 第二款 官職 俸給 旅費 二百六十五

書記官 上級二千二百圓
下級二千圓
警部長 千八百圓
財務長 千八百圓
參事官 千圓
典獄 八百圓
郡區長 六百圓

第二條 內務大臣ニ於テ特ニ指定スル各郡區ノ郡區長ハ年俸八百圓ヲ給ス但其人員ハ七人以內トス

第三條 書記官ハ上級俸下級俸各一八トス

第四條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○北海道中特別俸ヲ給スル郡ノ指定

明治二十四年八月十六日
內務省告示第四十一號

明治二十四年七月
勅令第百十九號第二條ニ依リ北海道中左ノ郡ヲ指定ス

檜山郡久遠郡與尻郡大橋郡瀬棚郡南志保郡
小樽郡高島郡忍路郡余市郡古平郡美瑛郡釧路郡
根室郡花咲郡野付郡標津郡日根郡國後郡色丹郡得撫郡新知郡占守郡
札幌郡空知郡夕張郡樺戸郡雨龍郡上川郡石狩郡厚田郡濱益郡千歳郡
増毛郡留萌郡苫前郡天鹽郡中川郡上川郡
釧路郡厚岸郡川上郡廣尾郡當麻郡十勝郡中川郡河西郡河東郡上川郡白糠郡阿寒郡足寄郡
紗那郡振別郡樺捉郡羅臼郡

○札幌農學校高等官俸給
明治二十四年七月
勅令第百四十三號

朕茲ニ札幌農學校高等官俸給ノ件ヲ裁可ス

第一條 學校長舍監ノ年俸左ノ如シ

學校長 二千圓
舍監 五百圓

第二條 教授ノ年俸ニ關シテハ本年勅令第百三十九號帝國大學文部省直轄諸學校及圖書館高等官俸給令第二號表中文部省直轄諸學校教授年俸表並第三條第四條ヲ適用ス

第三條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○札幌農學校教官俸給減額方

明治二十五年三月
勅令第百二十號

朕茲ニ札幌農學校教官俸給ノ件ヲ裁可ス

札幌農學校教官ノ俸給ハ其授業ノ時間及學科ノ輕重難易等ニ依リ年俸等級相當ノ額ヲ減給スルコトヲ得

○地方高等官俸給令

明治二十四年七月
勅令第百二十號

朕茲ニ地方高等官俸給令ヲ裁可ス

地方高等官俸給令

第一條 府縣知事書記官警部長收稅長及典獄ノ年俸左ノ如シ
東京府知事四千圓

京都府知事、大阪府知事、神奈川縣知事、兵庫縣知事、長崎縣知事、新潟縣知事、愛知縣知事、宮城縣知事、廣島縣知事、熊本縣知事三千五百圓
其他ノ縣知事三千圓

書記官	二千圓	其他ノ諸縣	千五百圓
警部長	千四百圓		千五百圓
收稅長	千四百圓		千五百圓
典獄	八百圓		六百圓

第二條 東京府書記官ハ特ニ年俸二千二百圓ヲ給スルコトヲ得

大阪府警部長ハ特ニ年俸千八百圓ヲ給スルコトヲ得
大阪府典獄ハ特ニ年俸千圓ヲ給スルコトヲ得

第三條 參事官ノ年俸ハ一人ヲ千圓トシ一人ヲ七百圓トス

第四條 郡長ノ年俸ハ六百圓トス
內務大臣ニ於テ特ニ指定スル各郡ノ郡長ハ年俸八百圓ヲ給ス但其人員ハ二百人以內トス

第五條 島司ノ年俸ハ千二百圓トス

第六條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

明治二十三年勅令第百二十六號地方官官等俸給令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

○郡長ニ特別俸ヲ給スル郡ヲ指定ス

明治二十三年十一月
內務省告示第三十九號

明治二十三年十月勅令第百二十六號地方官官等俸給令第四條第八條ニ依リ左ノ郡ヲ指定ス

- 東京府 荏原郡 北豐島郡 東多摩郡南豐島郡
京都府 與謝郡 天田郡 紀伊郡 加佐郡
大阪府 西成郡 南郡日根郡 石川郡八上郡古市郡安宿郡錦郡
郡志紀郡丹南郡
神奈川縣 南多摩郡 三浦郡 足柄下郡
兵庫縣 明石郡 津名郡 城崎郡美含郡
長崎縣 西彼杵郡 南高來郡 北松浦郡
新潟縣 中頸城郡 北蒲原郡 古志郡 雜太郡加茂郡羽茂郡
埼玉縣 北足立郡新座郡 入間郡高麗郡 秩父郡
群馬縣 東群馬郡南勢多郡 西群馬郡片岡郡
千葉縣 千葉郡市原郡 印旛郡下埴生郡南相馬郡 安房郡平郡朝夷郡長狹郡海上郡匝瑳郡

茨城縣 新治郡 眞壁郡
 栃木縣 河内郡 下都賀郡
 奈良縣 添上郡 添下郡 山邊郡 廣瀨郡 平群郡 宇智郡 吉野郡
 三重縣 度會郡 三重郡 勒明郡 桑名郡 阿拜郡 山田郡
 愛知縣 渥美郡 額田郡 知多郡 愛知郡
 靜岡縣 長上郡 敷知郡 濱名郡 賀茂郡 那賀郡 有渡郡 安倍郡 駿
 東郡
 山梨縣 中巨摩郡 南都留郡
 滋賀縣 滋賀郡 犬上郡
 岐阜縣 大野郡 益田郡 吉城郡 安八郡
 長野縣 東筑摩郡 上水内郡 小縣郡 下伊那郡
 宮城縣 牡鹿郡 志田郡 玉造郡 柴田郡 刈田郡 宮城郡
 福島縣 伊達郡 信夫郡 北會津郡 南多郡 磐前郡 磐城郡
 巖手縣

西磐井郡 東磐井郡 東閉伊郡 中閉伊郡 北閉伊郡 南九戸郡 北九戸郡
 青森縣 東津輕郡 三戸郡
 山形縣 飽海郡 西田川郡 南村山郡
 秋田縣 南秋田郡 仙北郡 北秋田郡
 福井縣 坂井郡 南條郡 今立郡 遠敷郡
 石川縣 鹿島郡 能美郡 鳳至郡
 富山縣 射水郡 礪波郡 上新川郡
 鳥取縣 會見郡 河入郡 久米郡 河村郡 八橋郡
 島根縣 那賀郡 島根郡 秋鹿郡 意宇郡
 岡山縣 西北條郡 東南條郡 淺口郡 見島郡
 廣島縣 安藝郡 御調郡 世羅郡 深津郡 沼隈郡 安那郡 佐伯郡
 山口縣 吉敷郡 阿武郡 三島郡 玖珂郡
 和歌山縣 名草郡 海部郡 西牟婁郡

德島縣 那賀郡 板野郡
 香川縣 那珂郡 多度郡 大内郡 寒川郡 三木郡
 愛媛縣 南宇和郡 北宇和郡 風早郡 和氣郡 温泉郡 久米郡 越智郡
 野間郡
 高知縣 幡多郡 高岡郡 土佐郡
 福岡縣 企救郡 三潞郡 遠賀郡
 大分縣 大分郡 下毛郡 日出郡
 佐賀縣 東松浦郡 佐賀郡
 熊本縣 熊田郡 鹿野郡 宇土郡 天草郡 玉名郡
 宮崎縣 宮崎郡 北那珂郡 東臼杵郡 北諸縣郡
 鹿兒島縣 鹿兒島郡 霧山郡 北大隅郡 高城郡 薩摩郡 甌島郡 南伊佐郡
 始其郡 桑原郡 西嚙吹郡

收稅屬ノ俸給ハ本年勅令第八十三號判任官俸給令ニ依ラシム
 但俸給定額ノ都合ニヨリ十圓又ハ八圓ノ俸給ヲ支給スルコト
 ヲ得
 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス明治二十三年勅令
 第七十五號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

○廳府縣看守俸給及休職
明治二十三年十月
勅令第二百二十九號
 除廳府縣看守俸給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

勅令第二百二十八號集治監留置看守人員及俸給ノ件中俸給
 及休職ニ關ル規定ハ廳府縣看守ニモ適用ス

○町村制不施行島嶼戸長以下給料
明治二十二年一月
勅令第二號
 旅費並浦役場費
 除町村制ヲ施行セサル島嶼ノ戸長以下給料旅費並浦役場費ノ
 件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

町村制ヲ施行セサル島嶼ハ別ニ勅令ヲ以テ其制ヲ定ムル迄本
 屬府縣ニ於テ町村制施行ノ後ニ要スル戸長以下給料旅費並浦
 役場費ハ其町村ノ負擔トス但東京府管轄小笠原島伊豆七島ハ
 從前ノ通國庫ヨリ支給ス

○戸長身分取扱及俸給支給方
明治十九年十月
內務省令第二十一號
 戸長身分取扱方ハ勅令第三十六號判任官々々三等以下ニ準シ

○收稅屬俸給
明治二十四年七月
勅令第六十號
 除茲ニ收稅屬俸給ノ件ヲ裁可ス

以テ在校者ハ昇校セザル者ニハ其當日ヨリ歸校者ハ昇校ノ前日マテ手當金ヲ給セズ
 生徒懲戒則ニ依リ處分シタル者ニハ手當金ヲ給セザルノ限ニ在ラス
 第四條 手當金規則第五條ニ依リ既ニ給與シタル手當金ヲ償還セシムルニハ生徒ヲ免シタル當日ヨリ三十日限リ身元引受人ヲシテ償還セシムルモノトス
 第五條 手當金規則第七條ニ依リ兵學校生徒ニ被服費ヲ給スルハ其亡失シタル被服ノ價格五圓以上ノモノニ限リ現費ヲ以テ之ヲ給ス但被服費ヲ給スルトキハ海軍大臣ノ認可ヲ受クヘシ
 第六條 手當金ハ翌日五日マテニ所屬ノ校ニ於テ前月分ノ金額ヲ給ス但生徒ヲ罷メタルトキハ其際之ヲ給ス

海軍造船工學校生徒手當金規則

明治二十四年六月 勅令第五十三號

朕茲ニ海軍造船工學校生徒手當金規則ヲ裁可ス

海軍造船工學校生徒手當金規則
 第一條 海軍造船工學校生徒ニハ糧食ヲ給セス被服其他日用物品ノ費用トシテ一日貳拾五錢ノ手當金ヲ給ス
 第二條 傷疾疾病ニ依リ入院セシムルトキハ其當日ヨリ歸校ノ前日マテ一日貳錢ノ手當金ヲ給ス但入院中ハ海軍糧食條例ニ依リ糧食ヲ給スルモノトス
 第三條 手當金ハ生徒ヲ命シタル日ヨリ披手見習ヲ命シタル前日マテ之ヲ給ス死亡若クハ生徒ヲ免シタルトキハ其當日

マテ之ヲ給ス(明治二十四年勅令第五十三號ヲ以テ本條中改正)
 第四條 處刑留置收禁拘留逃亡若クハ遞傳護送中ノ者其他事故ヲ以テ在校セザル者ニハ手當金ヲ給セズ
 第五條 品行不正課業怠惰又ハ試驗成績不良ニ因リ生徒ヲ免シタルトキハ其日ヨリ三十日限リ身元保證人ヲシテ既ニ給與シタル手當金ヲ辨償セシム
 第六條 手當金ハ毎月下旬ニ於テ之ヲ給ス

海軍造船工學校生徒手當金支給區分

明治二十四年六月 海軍省達第百二十七號

海軍造船工學校生徒手當金支給區分ヲ定ムルコト左ノ如シ
 一 處刑留置收禁拘留逃亡若クハ遞傳護送中ノ者其他事故ヲ以テ在校セザル者ノ手當金ハ其當日ヨリ歸校ノ前日マテ之ヲ給セズ
 二 手當金ハ毎月末日(十二月ハ二十五日又休暇所轉應ニ於テ之ヲ給ス但生徒ヲ罷メタルトキハ其際之ヲ給ス)

海軍在外國學生資金規則

明治二十三年二月 勅令第十五號

朕海軍在外國學生資金規則ヲ裁可ス

海軍在外國學生資金規則
 第一條 在外國學生ニハ修學ノ難易ニ應シ別表ニ依リ學資金ヲ給ス
 第二條 在外國學生在官者ナルトキ若クハ在官者ニシテ外國軍艦ニ乘組ミタルトキ別表ノ年額ニテ不足スル場合ニ限リ

年額二千五百圓以内ノ學資金ヲ給スルコトヲ得
 第三條 本則ニ關スル支給細則ハ海軍大臣之ヲ定ム

別表

國名	歐	米	洲	各	國	亞	細	亞	洲	各	國
等級	一等	二等	三等	四等	五等	一等	二等	三等	四等	五等	
年額	千四百圓	千二百圓	千	四百圓	六百圓	七百圓	六百圓	六百圓	四百圓	四百圓	三百圓

海軍在外國學生學資金支給細則

明治二十三年二月 海軍省達第六十二號

在外國學生學資金支給細則左ノ通定ム

在外國學生學資金支給細則
 第一條 學資金ハ留學中一切ノ費用ニ充ツル爲メ之ヲ給ス
 第二條 學資金ハ月割計算トシ留學ノ月數ニ應シ會計局ニ於テ之ヲ給ス
 第三條 留學ヲ命シタルトキ別ニ學資金等級ノ令違ナキ者ニハ五等學資金ヲ給ス
 第四條 留學地ニ到着ノ月若クハ歸朝ノ爲メ留學地ヲ發程シタル月ノ學資金ハ其發著當日ヲ以テ十五日前後ニ區分シ全額若クハ半額ヲ給ス
 外國在留ノ者ニ留學ヲ命シタルトキハ辭令書到達ノ月ヨリ學資金ヲ給シ該書到達ノ日ヲ以テ十五日前後ニ區分シ全額又ハ半額ヲ給ス

第四條 本則ハ明治二十三年四月一日ヨリ施行ス
 第五條 留學滿期トナリ若クハ歸朝ノ命ヲ受ク其日ヨリ十五日ヲ經過シ故ナク發程セザルトキハ留學滿期ノ日若クハ歸朝ノ命ヲ受クタル日ノ翌日ヨリ日割計算ヲ以テ學資金ノ支給ヲ止ム
 第六條 學資金ヲ増額シタルトキハ發令ノ月ヨリ之ヲ給シ減額シタルトキハ其翌月ヨリ之ヲ給ス留學地ヲ轉シタル爲メ學資金ノ増額トナリタルトキハ轉シタル地ニ到着ノ月ヨリ之ヲ給シ減額トナリタルトキハ其翌月ヨリ之ヲ給ス
 第七條 留學ヲ罷メタルトキ若クハ死亡シタルトキハ其月マテ學資金ヲ給ス
 第八條 學資金ヲ給シタル後事故アリ追徴スルキモノアルトキハ翌月以降ノ學資金ヨリ扣除ス

海軍上等技工及工夫手當金加給方

明治二十二年七月 勅令第九十七號

海軍上等技工及工夫手當金加給ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第二類 第一章 第二款 官職 俸給 旅費

二百七十六

海軍上等技工及工夫ヲ定時間外ニ服務セシムルハ及潜水器ヲ用アル事業ニ從事セシムルトキハ一時間ニ付等級相當技術手當金ノ五分ノ二ヲ最上限トシ加給スルコトヲ得

職工人夫給與規則 明治二十五年八月 海軍省達第六十三號

職工人夫給與規則

第一條 職工人夫ハ現ニ服業セシ日數ニ依リ日給ヲ給ス 第二條 職工人夫ハ就業シタル日ト雖モ午前ニ退業シタルトキハ日給ヲ給セス午後ニ退業シタルトキハ日給ノ半額ヲ給ス但公務負傷ノ爲メ退業スルトキハ此限ニ在ラス 第三條 職工人夫傳染病ニ因リ隔離法施行ノ爲メ服業ヲ禁シ

タルトキハ其日數中日給ノ半額ヲ給ス 第四條 職工人夫公務ニ原因シ傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ爲ニ服業セサルトキハ其翌日ヨリ百日マテハ日給五分ノ一ヲ給ス但入院治療ヲ必要トセサルトキハ其治療日數ハ軍醫官ノ定ムル所ニ依ル 第五條 職工人夫公務ニ原因シ傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ治療セシムルトキハ其治療費等ハ患者費用規則第三條ノ規定ニ依ル 第六條 職工人夫公務ニ原因シ死傷シタル者ニハ明治八年第五十四號達ニ依リ相當ノ扶助料及埋葬料ヲ給ス 第七條 各工場ニ使役スル職工定時間外又ハ潜水其他特種ノ事業ニ服スルトキハ左表ニ依リ日給ヲ加給ス但公暇日ニ服業セシムルモ定時間外ハ加給スルノ限ニ在ラス

種 類	區 別	第 一		第 二		第 三	
		定時間外服業	潜水	潜水	潜水	潜水	潜水
第一	停業時限後三時間以内	日給十分ノ一	水底五尋未滿	水底五尋以上	五月及十月	十一月ヨリ四月マテ	壹錢五厘乃至三錢
	停業時限後三時間外六時間間迄及始業時限前滿二時間以内	日給二十分ノ三	水底五尋以上	水底五尋以上	五月及十月	十一月ヨリ四月マテ	貳錢乃至五錢
第二	停業時限後六時間外及始業時限前二時間外	日給十分ノ二	水底五尋未滿	水底五尋以上	五月及十月	十一月ヨリ四月マテ	貳錢乃至五錢
	停業時刻後始業時刻マテ當直トシ艦船ニ服務スル者ニ限ル	日給三十分ノ一	水底五尋未滿	水底五尋以上	五月及十月	十一月ヨリ四月マテ	壹錢乃至貳錢五厘
第三	潜水器ヲ用ヒサル水中ノ事業	日給十分ノ一	水底五尋未滿	水底五尋以上	五月及十月	十一月ヨリ四月マテ	壹錢乃至貳錢五厘
	潜水器ヲ用ヒサル水中ノ事業	日給十分ノ一	水底五尋未滿	水底五尋以上	五月及十月	十一月ヨリ四月マテ	壹錢乃至貳錢五厘

第二類 第一章 第二款 官職 俸給 旅費

二百七十七

考 備	第 四		第 五		第 六	
	腰及脚下ヲ水中ニ入ルヘキ事業	五月及十月	十一月ヨリ四月マテ	傳染病アリタル艦船内ノ服業	天災其他非常防禦ノトキノ服業	艦船ニ重底及二重底ノ如キ狹隘ノ艦内ニ修繕ノ服業
第一第二ニ於ケル端時間ハ三十分毎ニ一時間ノ割合額ヲ給ス	壹錢五厘乃至三錢	貳錢乃至五錢	貳錢乃至五錢	艦船ニ重底及二重底ノ如キ狹隘ノ艦内ニ修繕ノ服業	天災其他非常防禦ノトキノ服業	艦船ニ重底及二重底ノ如キ狹隘ノ艦内ニ修繕ノ服業
第三ニ於ケル端時間ハ十分毎ニ一時間ノ割合額ヲ給ス	壹錢五厘乃至三錢	貳錢乃至五錢	貳錢乃至五錢	艦船ニ重底及二重底ノ如キ狹隘ノ艦内ニ修繕ノ服業	天災其他非常防禦ノトキノ服業	艦船ニ重底及二重底ノ如キ狹隘ノ艦内ニ修繕ノ服業
第四ニ於ケル端時間ハ十分毎ニ一時間ノ割合額ヲ給ス	壹錢五厘乃至三錢	貳錢乃至五錢	貳錢乃至五錢	艦船ニ重底及二重底ノ如キ狹隘ノ艦内ニ修繕ノ服業	天災其他非常防禦ノトキノ服業	艦船ニ重底及二重底ノ如キ狹隘ノ艦内ニ修繕ノ服業
第五ニ於ケル端時間ハ十分毎ニ一時間ノ割合額ヲ給ス	壹錢五厘乃至三錢	貳錢乃至五錢	貳錢乃至五錢	艦船ニ重底及二重底ノ如キ狹隘ノ艦内ニ修繕ノ服業	天災其他非常防禦ノトキノ服業	艦船ニ重底及二重底ノ如キ狹隘ノ艦内ニ修繕ノ服業
第六ニ於ケル端時間ハ十分毎ニ一時間ノ割合額ヲ給ス	壹錢五厘乃至三錢	貳錢乃至五錢	貳錢乃至五錢	艦船ニ重底及二重底ノ如キ狹隘ノ艦内ニ修繕ノ服業	天災其他非常防禦ノトキノ服業	艦船ニ重底及二重底ノ如キ狹隘ノ艦内ニ修繕ノ服業
第七ニ於ケル端時間ハ十分毎ニ一時間ノ割合額ヲ給ス	壹錢五厘乃至三錢	貳錢乃至五錢	貳錢乃至五錢	艦船ニ重底及二重底ノ如キ狹隘ノ艦内ニ修繕ノ服業	天災其他非常防禦ノトキノ服業	艦船ニ重底及二重底ノ如キ狹隘ノ艦内ニ修繕ノ服業
第八ニ於ケル端時間ハ十分毎ニ一時間ノ割合額ヲ給ス	壹錢五厘乃至三錢	貳錢乃至五錢	貳錢乃至五錢	艦船ニ重底及二重底ノ如キ狹隘ノ艦内ニ修繕ノ服業	天災其他非常防禦ノトキノ服業	艦船ニ重底及二重底ノ如キ狹隘ノ艦内ニ修繕ノ服業
第九ニ於ケル端時間ハ十分毎ニ一時間ノ割合額ヲ給ス	壹錢五厘乃至三錢	貳錢乃至五錢	貳錢乃至五錢	艦船ニ重底及二重底ノ如キ狹隘ノ艦内ニ修繕ノ服業	天災其他非常防禦ノトキノ服業	艦船ニ重底及二重底ノ如キ狹隘ノ艦内ニ修繕ノ服業
第十ニ於ケル端時間ハ十分毎ニ一時間ノ割合額ヲ給ス	壹錢五厘乃至三錢	貳錢乃至五錢	貳錢乃至五錢	艦船ニ重底及二重底ノ如キ狹隘ノ艦内ニ修繕ノ服業	天災其他非常防禦ノトキノ服業	艦船ニ重底及二重底ノ如キ狹隘ノ艦内ニ修繕ノ服業
第十一ニ於ケル端時間ハ十分毎ニ一時間ノ割合額ヲ給ス	壹錢五厘乃至三錢	貳錢乃至五錢	貳錢乃至五錢	艦船ニ重底及二重底ノ如キ狹隘ノ艦内ニ修繕ノ服業	天災其他非常防禦ノトキノ服業	艦船ニ重底及二重底ノ如キ狹隘ノ艦内ニ修繕ノ服業

第八條 各工場ニ使役スル職工人夫ノ疎虞懈怠過失等刑法ニ該ラサル事項ニシテ懲戒スヘキ所爲アリタルトキハ廠長部長其所犯ノ情狀ニ依リ半日分以上七日分以内ノ日給ヲ減給スルコトヲ得 第九條 職工人夫ノ増給減給ハ其命令ヲ受ケタル當日ヨリ之ヲ給シ死亡者ノ日給ハ其當日マテ之ヲ給ス 第十條 職工人夫ノ日給ハ毎月二十日ヲ以テ締切毎月末日マテニ之ヲ給ス但死亡解雇ノ場合ニ於テハ其翌日之ヲ給ス(二十年九月海軍省達第七十四號ヲ以テ改正) 第十一條 各工場ニ使役スル職工人夫ノ事業ノ須要ニ依リ左ノ被服類ヲ貸與ス 一 事業帽及帽章 二 常時貸與

一 事業服 臨時貸與 一 前掛 同上 一 手籠 同上 一 頭巾 同上 ○艦船ノ乗員俸給及糧食料前渡ノ場合 明治二十三年七月 勅令第五百十號 艦船ノ乗員俸給前渡及糧食料前渡ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍糧食條例第七條ニ依リ糧食ニ代ヘ給スル現金ハ航海ニ際シテハ其見積リ日數以內其他ノ場合ニ於テハ一箇月以內ニ於テ前金渡スルコトヲ得

○在外國本邦郵便電信局長郵便局長等月手當金

在外國本邦郵便電信局長郵便局長以下局員月手當金ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

在外國本邦郵便電信局長郵便局長以下局員月手當金ハ別表定ムル所ニ依リ其給與細則ハ遞信大臣之ヲ定ム

國名	官名		手當額
	局長	郵便局長	
清國	局長	郵便局長	金五拾圓
	書記	書記	金三拾圓
朝鮮國	局長	郵便局長	金貳拾五圓
	書記	書記	金拾五圓

○在外國本邦郵便電信局長郵便局長

等月手當金給與細則 明治二十四年七月 遞信省令第七號

在外國本邦郵便電信局長郵便局長以下局員月手當金給與細則

第一條 在外國本邦郵便電信局長及郵便局長以下局員ノ月手當金ハ任地著翌日ヨリ歸朝又ハ任地替等ノ爲メ其地出發前日マテ之ヲ支給ス

第二條 任地ニ於テ他應ヘ轉任セシ者ノ月手當金ハ事務引繼濟ノ當日迄其退官又ハ非職トナリシ者ノ月手當金ハ辭令接受ノ當日迄之ヲ支給ス但其退官又ハ非職者ニシテ特ニ事務引繼ヲ命シタルトキハ他應ヘ轉任ノ例ニ依リ

第三條 歸省其他私事旅行中ノ日數ハ月手當金ヲ支給セズ

第四條 轉官ノ爲メ月手當金ノ増減ハ總テ辭令接受ノ翌日ヨリ計算ス

第五條 在勤中死亡セシ者ノ其月分ノ手當金ハ全額ヲ支給ス

第六條 第一條乃至第四條ノ場合ニシテ一箇月未滿トナル月ノ手當金ハ總テ其月ノ日割ヲ以テ計算ス

第七條 月手當金ハ毎月末日支給スルモノトス但休假日ニ當ル時ハ繰上ケトス

○三等郵便電信局長、郵便局長、電信局長手當金年額 明治二十四年八月 遞信省令第十二號

三等郵便電信局長郵便局長電信局長手當金年額ヲ改定シ左表ニ依リ支給ス

其勤勞顯著ナル者ハ特ニ左表ノ範圍ニ拘ラス漸次年額四百圓迄ヲ給與スルコトアルヘシ

- 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス
- 一級 九拾六圓
 - 二級 八拾四圓
 - 三級 七拾貳圓
 - 四級 六拾四圓
 - 五級 四拾八圓
 - 六級 三拾六圓
 - 七級 貳拾四圓
 - 八級 拾八圓
 - 九級 拾貳圓
 - 十級 九圓六拾錢

○宿直徹夜勤務使役ノ者ニハ適宜食料給與

明治六年大藏省達第六十一號及明治二十二年閣令第四號廢止ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治六年大藏省達第六十一號及明治二十二年閣令第四號ハ本年三月三十一日限り廢止ス但宿直又ハ徹夜勤務使役ノ者ニハ適宜食料現品又ハ給與シ又特別用ノ文具ハ官廳ニ備ヘテ使用セシムルコトヲ得

○警部巡查給與規則

明治八年十一月十二日常省乙第百六十八號ヲ以テ相違候警部巡查給與規則及十年二月第十五號同年四月乙第四十五號ヲ以テ相違候右規則追加増補共都テ相廢シ更ニ別冊之通相定メ來ル十一月一日ヨリ施行候條此旨相違候事

警部巡查給與規則 (別冊)

第一條 (十九年十月十六日內務省令) (第二十三號ヲ以テ削除ス)

- 第二條 巡查一年ノ被服並ニ器具ハ現品ヲ以テ給與ス
- 第三條 但保存期限ノ儀ハ各府縣適宜相定ムヘシ
- 第四條 自革胴締手帖捕縛繩呼子笛棒提灯或ハランプハ保存期限ニ照シ支給スト雖モ期ニ至リ猶ホ用ニ堪エル物ハ用ニ堪ヘサルヲ待テ後ニ引替ヘシ
- 第五條 胴締手帖呼子笛等保存期限ニ至ラスト雖モ職務上ニ關シ破損スル者ハ速ニ換與スヘシ
- 第六條 但本條物品ノ外現品支給ノ分破損スト雖モ概ク換與スルコトヲ許サス然レハ職務ニ關シ事情止ムヲ得サル者ハ檢査ノ上換與スルコトアルヘシ
- 第七條 被服帽靴等保存期限ヲ過ル分ハ之ヲ本人ニ付與スルヲ得ヘシ
- 第八條 警部巡查給與規則 (別冊)
- 第九條 警部巡查給與規則 (別冊)
- 第十條 警部巡查給與規則 (別冊)
- 第十一條 警部巡查給與規則 (別冊)
- 第十二條 警部巡查給與規則 (別冊)
- 第十三條 警部巡查給與規則 (別冊)
- 第十四條 警部巡查給與規則 (別冊)
- 第十五條 警部巡查給與規則 (別冊)
- 第十六條 外勤警部巡查夜警ノ節辦當料一度金三錢五厘以內

ヲ以テ適宜其給否ヲ定ムルヲ得

○監獄署押丁給與品ヲ定ム
明治十四年三月内務省達乙第十七號

- 一笠 備前 晴雨 共用
- 一筒袖法服 色紺地 實木綿
- 一腹引 同上
- 一雨衣 桐油 色黒
- 一縛繩
- 一手帖
- 一呼子笛

○尋常師範學校男生徒ノ學資給與方

明治十九年六月文部省訓令第四號

勅令第十三號師範學校令第九條尋常師範學校男生徒ノ學資ハ左ノ要項ニ據リ支給スヘシ

- 第一項 生徒ノ學資ハ左ノ五種目ヲ支辨スルモノトス
 - 一食物
 - 一被服
 - 一日用品
 - 一修理及湯浴
 - 一週間手當
- 第二項 食物ハ主ハラ衛生上ニ注意シテ之ヲ賄フヘシ
- 第三項 被服ハ左ノ九種トシ一定ノ時期ニ於テ之ヲ給シ若シ所定ノ期限内ニ於テ之ヲ損傷シ更ニ交付スルヲ要スルトキハ其費用ハ本人ヨリ徴收スヘシ

- 一冬衣袴
- 一夏衣袴
- 一冬シャツ袴下
- 一夏シャツ袴下
- 以上四種ハ入學ノ初年各二組ヲ給シ次年ヨリ各一組ヲ給ス
- 一外套
- 在學中一枚ヲ給ス
- 一靴
- 一脚絆
- 以上二種ハ一箇年各二足ヲ給ス
- 一帽子 師ノ字ノ徽章ヲ付ス
- 在學中二箇ヲ給ス
- 一靴下
- 一箇月二足ヲ給ス

第四項 日用品ハ左ノ六種トシ時ノ需要ニ應シテ適宜之ヲ給スヘシ

- 一墨、墨汁
- 一紙 半紙洋紙等
- 一筆 筆用紙等
- 一筆ペン、ペン軸石筆
- 一鉛筆 常用
- 一石油
- 一炭

第五項 修理ハ被服ノ洗濯及靴ノ修履トス湯浴ハ寄宿舎構内ニ其場ヲ設クヘシ

第六項 一週間手當ハ毎土曜日ニ於テ其日在學ノ生徒一人ニ

付金拾錢ヲ給スヘシ

第七項 給與シタル被服及日用品ハ卒業シテ退學スルモノニ在テハ之ヲ返納セシムルヲ要セスト雖モ半途退學ヲ命シタルモノハ其時ノ現存品ヲ悉皆返納セシムヘシ

第八項 夏季休業中ハ生徒ニ食費及一週間手當ヲ給シ歸郷セシムヘシ

第九項 發病ノ生徒ニ療養ヲ命シタルトキハ其費用ヲ給スヘシ

○官吏准官吏公務上傳染病豫防等ニ從事感染死亡シタル者ヘ手當金給與方

明治十九年七月閣令第二十三號

官吏准官吏公務ニ依リ傳染病豫防救済ニ從事シ爲メニ感染シ又ハ死亡シタルトキハ左ノ區別ニ從ビ手當金ヲ給ス

- 一手當金ヲ分チ吊祭料、救治料、療治料ノ三種トス
- 一救助料ハ感染者又ハ死亡シタル者ノ遺族ニ之ヲ給ス
- 一療治料ハ感染者治療看護ノ雜費トシテ之ヲ給ス
- 一吊祭料ハ年俸十二分ノ一若シハ月俸一箇月分若シハ日給三十日分ヲ給ス
- 但官ヨリ埋葬スル者ハ之ヲ給セス
- 一救助料ヲ分テ二等トス
 - 一等 俸給五箇月分日給百五十日分
 - 二等 俸給三箇月分日給九十日分
- 一感染者死亡シタルトキハ一等救助料ヲ給シ死亡セザルトキハ二等救助料ヲ給ス
- 一療治料ハ一日壹圓ヲ給ス但官ヨリ治療スル者ハ之ヲ給セ

○宿直等ノ食料給與并特別用文具備付方

明治二十四年三月閣令第二十七號

朕明治六年大藏省達第百六十一號及明治二十二年閣令第四號廢止ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治六年大藏省達第百六十一號及明治二十二年閣令第四號ハ本年三月三十一日限り廢止ス但宿直又ハ徹夜勤務使役ノ者ニハ適宜食料現品及代料ヲ給與シ又特別用ノ文具ハ官廳ニ備ヘテ使用セシムルコトヲ得

○海軍省判任官以下食料給與方

明治二十四年三月海軍省達第六十二號

明治二十三年三月達第百二十三號判任官以下辨當料ノ件明治二十四年三月三十一日限り廢止シ食料給與ノ件左ノ通定メ明治二十四年四月一日ヨリ施行ス
判任官及傭人職工人夫 定時間外服業ノ手當金若クハニシテ徹夜勤務使役スルトキハ三日以内ノ食料現品及代料ヲ給與スルコトヲ得但宿直者若クハ夜中交番ヲ以テ不寐番ヲ爲ス者ニハ食料ヲ給スル限リニアラス

○大林區署特別用文具備付規則

明治二十四年四月農商務省訓令第十八號

特別用文具備付規則左ノ通相定ム

特別用文具備付規則

第一條 左ノ文具ハ事務上必要ト認ムルトキハ共用トシテ備ヘ置キ隨時使用セシムルコトヲ得

第一類 保存品

一文鎖 製圖用特種ノモノ

一コンパス 同上

一鳥口 同上

一定木 雲形定木三角定木長定木等

一尺度 比例尺測尺卷尺等

第二類 消耗品

一筆 製圖上特種ノモノ又ハ標本等大文字認メ用ノ類

一鉛筆 製圖上特種ノモノ

一ペン先 同上

一墨 同上

一イオンキ 製圖上特種ノモノ及復寫器用

第二條 前條文具ヲ備付ントスルトキハ共用主任ヲ定メテ之レニ交付シ該主任ヲシテ使用ノ手續ヲ爲サシムヘシ

第三條 特別用文具使用ノ手續取締ノ方法ハ大林區署長之ヲ定ムヘシ

○大林區署宿直及徹夜者食料支給方

明治二十四年四月 農商務省訓令第十九號

宿直及徹夜者食料支給方左ノ通相定メ本年四月一日ヨリ施行ス但小林區署派出所在勤員ニハ食料支給ノ限リニアラス

一 宿直ノ者ニハ一直ニ付官吏備員ハ金七錢小使ハ金五錢

ヲ支給ス
二 徹夜ノ者ニハ一夜ニ付官吏備員ハ金拾錢五厘給仕小使ハ金七錢五厘支給ス
三 食料ハ每一箇月分ヲ取纏メ翌月三日迄ニ支給シ休日ニ當ルトキハ繰下トス

○小林區署用品代料支給規則

明治二十三年九月 農商務省訓令第五十一號

明治二十二年十月當省訓令第三十七號小林區署用品支給規則左ノ通改正シ本年十月ヨリ施行ス

但現行支給規則ニ據リ支給スヘキ本年八九月分ノ用品代料ハ本月末日ニ之ヲ支給スヘシ

小林區署用品代料支給規則

第一條 此規則ニ於テ用品ト稱スルハ小林區署ニ於テ通常使用スル左ノ物品ヲ總稱ス

桶類 鉢類 糊鍋 鐵瓶 土瓶 茶碗 茶盆 炭取

火箸 柄杓 五徳 十能 帚 雪掻 塵取 雜巾

布巾 刷毛 草履 薪 炭 油 蠟燭 生糞

付木 燈心

第二條 用品ハ現品ヲ以テ給セス左ノ三等ニ分チ代料ヲ小林區署官舎居住ノ官吏ニ支給ス

一等 一箇年金五圓

二等 一箇年金四圓五拾錢

三等 一箇年金四圓

第三條 大林區署長ハ事務ノ繁閑區員ノ多寡等ヲ酌量シ前條

ノ等級内ニ於テ小林區署ノ等級ヲ定メ山林局長ニ届出ヘシ

第四條 用品代料ハ年額ヲ二分シ其年九月及翌年三月ノ兩度ニ之ヲ支給スヘシ但支給定日ハ判任官俸給ト同日トス

第五條 用品代料ノ支給ヲ受クヘキ資格ヲ生シ又ハ其資格ノ止ミタル月ノ代料ハ日割ヲ以テ支給スヘシ(二十四年農商務省訓令第十九號ニ改メ但書ヲ附ス)

附則

一 本規則ハ派出所ニモ之ヲ適用ス

二 從來派出所ニ交付シタル本規則第一條ノ物品ハ不用品ト同一ノ方法ニ據リ賣却スヘシ但用品代料ノ支給ヲ受クヘキ資格アル當該官吏ニハ此際特ニ之ヲ拂下シルコトヲ得

○内國旅費規則

明治十九年六月 閣令第十四號

内國旅費規則ヲ定ムルコト左ノ如シ但明治九年太政官第六十四號達旅費定則中内國ノ部ハ廢止ス

内國旅費規則

第一條 内國旅費ハ官吏公務ニ依リ本邦内ヲ旅行スルトキ旅行中一切ノ費用ニ充ツル爲メ之ヲ支給ス

第二條 内國旅費ハ分テ四等トシ別表ノ定ムル所ニ從ヒ順路ノ路程ニ依リ汽車賃汽船賃車馬賃及日當ヲ支給ス(二十四年勅令第六十六號ヲ改正ス)

第三條 汽車賃ハ汽車旅行、汽船賃ハ汽船旅行、車馬賃ハ陸路旅行、日當ハ宿泊料及其他ノ諸費ニ充ツル爲メ之ヲ支給ス

第四條 官有ノ舟車馬及各官廳ニ於テ借入備入タル舟車馬等

ニテ旅行シ若クハ旅行ノ性質ニ依リ特ニ舟車馬等ノ實費拂ヲ許可シタルトキハ本令ノ汽車賃汽船賃及車馬賃ヲ支給セ

第五條 汽車賃ハ哩數、汽船賃ハ海里數、車馬賃ハ里數、日當ハ日數ニ應シ之ヲ支給スヘシ

第六條 外國旅費ノ日當ヲ給スルトキハ本條ノ日當ヲ支給セス

第七條 (赴任又ハ管外旅行ノ爲メ其管内ヲ通過スルトキハ其路程ハ管外ニ準シ又管内巡回ノ際其便宜ニ依リ管外ヲ通過スルトキハ其路程ハ管内ニ準スヘシ)(二十四年八月六日勅令第六十六號ヲ以テ本條ヲ改メ但書ヲ附ス)

第八條 日當ハ陸路六里未滿、汽車十哩未滿及汽船十海里未滿ノ旅行ニハ支給セサルモノトス但公務ノ都合ニ依リ宿泊ヲ要スルトキハ宿泊ノ數ニ應シテ日當ヲ支給スヘシ

第九條 汽車賃汽船賃及車馬賃ハ其種類毎ニ經過セシ路程ノ總數ヲ合算シ之ヲ支給スヘシ但其一位未滿ノ端數ハ計算セサルモノトス

第十條 旅行ノ兩會計年度ニ跨ルトキハ各年度毎ニ之ヲ區別シ旅費ヲ計算スヘシ但汽車賃及汽船賃ハ會計年度ニ係ハラ

第十一條 檢田測量及土木工事等ノ爲メ現場ヲ巡視スルトキハ車馬賃ヲ給セス日當額ニ三割ヲ増給スヘシ

第十二條 赴任旅費ハ舊任地ヨリ新任地ニ至ルマテ本官相當ノ車馬賃汽車賃若クハ汽船賃ノ二倍ヲ支給スヘシ

第十三條 廢官若クハ退官ノ際事務引繼發務取調其他公務ノ爲メ旅行セシムルトキハ前官相當ノ旅費ヲ支給スヘシ

第十四條 新任用スル爲メ召喚スルモノハ其新任官相當ノ

第二類 第一章 第二款 官職 俸給 旅費

二百八十四

旅費ヲ支給スヘシ

第十四條 旅行中歸省其他私事ノ爲メ許可ヲ得テ迂路ヲ通過スルトキハ順路ノ路程ニ應シ旅費ヲ支給スヘシ

第十五條 旅行中廢官死亡又ハ論旨退官シタルモノハ前官相當ヲ以テ舊任地マテノ旅費ヲ支給スヘシ

第十六條 前二條ノ場合ニ於テ日當ヲ支給スル爲メ其日數ヲ計算スルハ汽車旅行ハ一日二百哩請、汽船旅行ハ一日百海里請、陸路旅行ハ一日十二里請トス但距離接近シテ數種ノ旅行ニ跨ルトキハ各其路程十二分ノ一ヲ以テ一時間ノ行程トシ一日ノ旅行時間ハ十二時間トシ其日數ヲ計算スヘシ

第十七條 各省大臣ハ大藏大臣ト協議シ平常旅行ヲ要スル官吏ニ對シ特ニ其旅費額ヲ定メ月額ヲ以テ之ヲ支給スルコトヲ得(二十四年八月六日勅令第六十)

第十八條 各省大臣ハ大藏大臣ト協議シ定額ノ旅費ヲ減少スルコトヲ得(同上)

第十九條 (二十年六月二十三日閣令第十七號ヲ以テ削除ス)

第二十條 海陸軍武官文官及警察官ノ旅費ハ主任大臣大藏大臣ト協議シ別ニ之ヲ定ムヘシ(二十年三月二十一日閣令第六號ヲ以テ(武官)ノ下(文官)ノ二字ヲ加フ)

第二十一條 神官及雇員其他本令ニ明文ナキモノ、旅費ハ主任大臣大藏大臣ト協議シテ之ヲ定ムヘシ

附則 (二十四年八月六日勅令第六十六)
(二十六號ヲ以テ本項ヲ追加ス)

本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

別表 (二十四年八月六日勅令第六十六)
(十六號ヲ以テ本表ヲ改正ス)

一等親任官八	錢十	錢二十八錢四	圓
二等勅任官七	錢八	錢二十錢	圓五十錢
三等奏任官六	錢六	錢十五錢	圓六十錢
四等判任官四	錢五	錢十	錢七十錢

一強雨積雪及道路險惡ノ爲メ定額ノ車馬賃ニテ支辨シ難キ場合ハ車馬賃ノ五割以內ヲ増給スルコトヲ得

一北海道廳管轄內ハ毎年十一月ヨリ翌年三月マテ五箇月間車馬賃ニ限リ定額ノ二倍以內ヲ増給スルコトヲ得

○內國旅費規則第四條官船ニ乗組出張ノ者食卓料支給方 明治二十二年四月閣令第十四號

明治十九年六月閣令第十四號內國旅費規則第四條ニ據リ官船若クハ各廳ニ於テ借入傭入ノ船舶ニ乗込出張スル場合ニ於テ官ヨリ賄ヲナサハルトキハ左ノ食卓料ヲ支給ス

親任官 一日 金壹圓七拾錢

勅任官 一日 金壹圓五拾錢

奏任官 一日 金壹圓貳拾錢

判任官 一日 金九拾錢

○內國旅費附則 明治十九年十二月閣令第三十四號

第一條 北海道廳、沖繩縣、東京府小笠原島廳、長崎縣對馬島廳、鹿兒島大島々廳所轄地及東京府管轄伊豆七島內ハ管内巡回ト雖モ管外旅行ニ準シ旅費ヲ支給スルコトヲ得

第二條 北海道廳沖繩縣管轄內ハ車馬賃ニ限リ管外額ノ五割

第二類 第一章 第二款 官職 俸給 旅費

二百八十五

以內ヲ増給スルコトヲ得

但北海道廳管轄內ハ毎年十一月ヨリ翌年三月マテ五箇月間車馬賃ニ限リ管外額ノ二倍以內ヲ増給スルコトヲ得

第三條 各省大臣ハ前二條ニ據リ旅費額ヲ定メタルトキハ大藏大臣ニ通知スヘシ

○內國旅費支給心得方 明治十九年六月大藏省訓令第二十八號

閣令第十四號ヲ以テ定メラタル旅費支給方左ノ通心得ヘシ

一北海道廳集治監典獄ハ內國旅費規則四等旅費ヲ給ス(二十四年三月二十日大藏省訓令第二十一號ニ依リ本項並ニ表共刪除ス)

一北海道廳府縣ノ判任官并ニ準判任官新官制ニ據リ官等ハ屬官御用掛ノ外ト雖總テ常省訓令第二十三號第一項ニ據リテ旅費ヲ給ス但地方稅支辨ノ官吏ト雖國庫ヨリ旅費ヲ給スルトキ亦同シ

一支給上新舊旅費規則相跨リタル場合ニ於テハ新規則施行期日後直ニ到着セシ御用地ヲ以テ打切り又巡迴中ノ者ハ該期日ヲ押ヘ新舊支給方ヲ區分スヘシ

○地方官內國旅費支給心得方 明治十九年六月大藏省訓令第二十三號

閣令第十四號ヲ以テ內國旅費規則ヲ定メラタルニ付左ノ通心得ヘシ

一府縣大少書記官ハ三等旅費收稅長ハ四等旅費應官判任御用掛ハ月俸四十圓以上五等旅費月俸四十圓未滿六等旅費ヲ給スヘシ

一北海道廳長官府知事縣令ハ旅行ヲ命スルトキハ豫メ事務ノ

便宜路程ノ近便等ヲ計リ經過ノ路筋旅行日數ヲ定ムヘシ

一海灣河湖等ノ海里ヲ以テ路程ヲ算セサル場合ハ里數ニ應シテ車馬賃ノ額ヲ支給スヘシ

一非常急行上司隨行等ノ如キ場合ニ於テ定額ノ車馬賃ヲ以テ支辨シ難キト見認ルトキハ北海道廳長官府知事縣令ノ見込ヲ以テ隨時實費拂ヲ許可スヘシ

一海里ノ距離ハ明治五年第三百三十號布告ニ據ルヘシ

一赴任旅費ハ在官者ニシテ在勤地ヲ轉シタル時ニ限リ之ヲ支給スヘシ

一新ニ任用ノ者ハ在勤地マテ規則第十三條ノ旅費ヲ支給スヘシ

一兼官者ハ兼官ノ用務ニ據リ旅行スルトキハ兼官相當ノ旅費ヲ給シ本官兼官ノ用務ヲ兼ルトキハ本官相當ノ旅費ヲ給スヘシ

但兼官無給ナルトキハ其旅費額ハ本官ノ給額ニ依ル

○警察官吏其他內國旅費概則 明治十九年六月內務省令第十一號

警察官吏司獄官吏「神官」及等外吏雇員其他內國旅費概則左ノ通相定ム

但來七月一日ヨリ施行スヘシ

警察官吏其他內國旅費概則

第一條 警視廳警部警部補ノ旅費ハ閣令第十四號內國旅費規則ニ據リ支給スヘシ但警部長ハ四等旅費府縣ノ警部月俸四拾圓以上ハ五等旅費月俸四拾圓未滿及警部補ハ六等旅

第二類 第一章 第二款 官職 俸給 旅費

費ヲ支給スルモノトス

第二條 警視及警部警部補ノ持區内ヲ巡廻スルトキハ旅費ヲ給セス一切ノ費用トシテ日當ヲ支給スヘシ但其給與方ハ左ノ各項ニ依ルヘシ

警視日當 金壹圓貳拾錢
警部日當 金八拾錢

第一項 十二里以上ノ巡廻ハ其日數ニ應シ日當ヲ支給スヘシ

第二項 六里以上十二里未滿ノ巡廻ハ其日數ニ應シ日當半額ヲ支給スヘシ

第三項 六里以上ニ涉ル巡廻中滞在スルトキハ其滞在ノ日數ニ應シ日當半額ヲ支給スヘシ

第四項 六里未滿ノ巡廻ハ日當ヲ給セス但宿泊ヲ要スルトキハ其泊數ニ應シ日當半額ヲ支給スヘシ

第五項 官有ノ舟車馬及各官廳ニ於テ借入備入タル舟車馬等ニテ派出シ又ハ特ニ舟車馬等ノ賃費拂テ許可シタルトキハ日數ニ應シ日當半額ヲ支給スヘシ但里程六里未滿ノトキハ第四項ニ依ル

第六項 水上警察署ノ區内ハ里數ニ拘ハラズ一泊毎ニ日當半額ヲ支給スヘシ

第三條 巡査ノ旅費ハ左ノ各項ニ依ルヘシ

第一項 巡査ハ甲號表面ノ旅費ヲ各給スヘシ

第二項 召募旅費及免職歸國旅費ノ給與例ハ一里毎ニ金五錢ヲ支給スヘシ但程三里未滿ハ給與セス

第三項 免職歸國旅費ハ奉職期限ニ至ラサル者ニハ支給セス但職務上重傷ヲ受ク又官ノ都合ニヨリ免職スルモノハ支給スヘシ

第四項 職務上死シ及奉職中病死スル者ハ奉職期限ニ拘ハラズ歸國旅費ノ額ヲ手當トシテ支給スヘシ

第四條 巡査持區内ヲ巡廻スルトキハ旅費ヲ給セス一切ノ費用トシテ日當ヲ支給スヘシ但其給與方ハ左ノ各項ニ依ルヘシ

巡査日當 金三拾錢

第一項 巡廻中宿泊スルトキハ其泊數ニ應シ日當ヲ支給スヘシ

第二項 至急ノ派出ヲ要シ特ニ舟車馬ノ借入ヲ許可シタルトキハ該賃費ヲ支拂フヘシ但此場合ニ於テモ日當ハ前項ニ依ル

第五條 集治監及假留監典獄副典獄書記看守長御用掛ノ旅費ハ左ノ各項ニ依ルヘシ

第一項 典獄ハ開令第十四號内國旅費規則ノ四等旅費額
典獄ハ同五等旅費ヲ支給スヘシ

第二項 書記看守長判任御用掛ハ月俸四拾圓以上ハ開令第十四號内國旅費規則ノ五等旅費月俸四拾圓未滿ハ同六等旅費ヲ支給スヘシ

第六條 (二十四年内務省令第五十五號ヲ以テ)
第七條 看守等外吏等外御用掛及雇員ハ甲號表面ノ旅費ヲ支給スヘシ

第一項 看守等外吏等外御用掛及雇員ハ甲號表面ノ旅費ヲ支給スヘシ

第二項 看守ノ召募旅費及免職歸國旅費ハ第三條ノ第二項第三項第四項ニ依ルヘシ

第二類 第一章 第二款 官職 俸給 旅費

第三項 押丁給仕小使職工等ハ乙號表面ノ旅費ヲ支給スヘシ

第四項 華族及從六位勳六等以上ノ士民ヲ公務ニテ旅行セシムルトキハ開令第十四號内國旅費規則ノ三等旅費其他有位帶勳ノ士民同上ノ節ハ同四等旅費ヲ支給スヘシ(二十四年内務省令第五十五號ヲ以テ)
(四等ヲ三等ニ六等ヲ四等ニ改ム)

第五項 一般ノ人民同上ノ節ハ甲號表面ノ旅費ヲ支給スヘシ

第八條 支給ノ方法ハ第二條及第三條ノ第二項第三項第四項第四條及第七條ノ第二項ヲ除クノ外總テ開令第十四號内國旅費規則ニ依ルヘシ

第九條 地方ノ情況ニ據リ認可ヲ經テ定額ノ旅費ヲ節減スルコトヲ得

甲號表(二十四年内務省令第五十五號ヲ以テ改定)

汽車賃一哩	汽船賃一海里	車馬賃一里	日當
金三錢	金四錢	金七錢	金五十錢

乙號表(二十四年内務省令第五十五號ヲ以テ改定)

汽車賃一哩	汽船賃一海里	陸路雜費一里	日當
金二錢	金三錢	金四錢	金三十錢

○監獄醫及教誨師ノ判任待遇者旅費

額 明治二十四年八月
内務省令第十六號

監獄醫及教誨師ニシテ判任待遇ヲ受クル者ノ旅費ハ左表ノ金額ヲ得

汽車賃一哩	汽船賃一海里	車馬賃一里	日當
金三錢	金四錢	金八錢	金六十錢

○司獄官吏旅費支給方 明治二十二年三月
内務省令第十號

集治監及假留監官制被定候ニ付テハ典獄副典獄書記看守長監獄醫ノ旅費ハ明治十九年六月開令第十四號内國旅費規則ニ據リ「官等」相當ノ旅費ヲ支給スヘシ

○警察官吏持區内巡廻日當支給方 明治二十四年四月
内務省令第二十五號

警察官吏ニシテ其持區内ヲ巡廻スルトキ給與スヘキ日當ハ特ニ其月額ヲ定メ本大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ支給スルコトヲ得

○公務ニテ往復スル警察官及囚徒護送ノ官吏汽車賃支給方 明治二十一年二月
内務省令第二號

明治二十年五月勅令第十二號私設鐵道條例第二十一條公務ヲ以テ往復スル警察官吏及第二十二條囚徒護送ノ官吏ニシテ半價ヲ以テ乘車スル場合ニ於テハ明治十九年六月開令第十四號及同年六月內務省令第十一號内國旅費ニ屬スル汽車賃半額ヲ支給ス

○官船乗込出張ノ巡查看守及雇員等食卓料支給額

明治十九年六月内務省令第十一號警察官吏其他内國旅費概則中巡查看守及雇員其他ノ者官船若クハ各應ニ於テ借入雇入ノ船舶ニ乗込出張スル場合ニ於テ官ヨリ賄ヲサハルトキハ左ノ食卓料ヲ支給スヘシ

- 巡查看守雇員 一日 金五拾錢
押丁給仕小使職工 一日 金三拾錢
華族及從六位勳六等以上ノ士民ハ本年四月閣令第十四號奏任官ノ額其他有位勳ノ士民ハ同判任官ノ額及一般ノ人ハ本訓令第一項ノ額ヲ給ス

○市町村吏國庫支辨ノ用務旅行ノ旅費支給方

市町村吏ヲシテ國庫支辨ノ用務ニ付旅行セシムルトキハ明治十九年本省令第十一號警察官吏其他内國旅費概則甲號表面ノ旅費ヲ同年閣令第十四號内國旅費規則ニ據リ支給スヘシ

○北海道廳集治監典獄判任等外吏傭等旅費支給方

閣令第十四號ヲ以テ定メラレタル旅費支給方左ノ通心得ヘシ
一北海道廳集治監典獄ハ内國旅費規則四等旅費ヲ給ス
(二十三年大藏省訓令第二十八號)
(二十一年大藏省訓令第二十一號)
一北海道廳府縣ノ判任官並ニ准判任官新官制ニ據リ官等ハ屬官御

用掛ノ外ト雖總テ當省訓令第二十三號第一項ニ據リテ旅費ヲ給ス但地方稅支辨ノ官吏ト雖國庫ヨリ旅費ヲ給スルトキ亦同シ

○北海道廳警察官吏旅費支給方

明治十九年六月内務省訓令第九號
其廳警察官吏「及神官」ノ旅費ハ當省令第十一號ニ據リ支給スヘシ

○北海道廳府縣内國旅費支給方心得

閣令第十四號ヲ以テ内國旅費規則ヲ定メラントルニ付左ノ通心得ヘシ
一府縣「大少書記官」ハ三等旅費收稅長ハ四等旅費屬官判任御用掛ハ月俸四拾圓以上五等旅費月俸四拾圓未滿六等旅費ヲ給スヘシ
一北海道廳長官府知事「縣令」ハ旅行ヲ命ズルトキ豫メ事務ノ便宜路程ノ近便等ヲ量リ經過ノ路筋旅行日數ヲ定ムヘシ
一海灣河湖等ノ海里ヲ以テ路程ヲ算セサル場合ハ里數ニ應シテ車馬賃ノ額ヲ支給スヘシ
一非常急行上司隨行等ノ如キ場合ニ於テ定額ノ車馬賃ヲ以テ支辨シ難キト見認ルトキハ北海道廳長官府知事「縣令」ノ見込ヲ以テ隨時實費掛ヲ許可スヘシ

○學校職員及郡區書記戶長旅費額

明治二十年六月當省訓令第三十七號學校職員及郡區書記戶長旅費額左ノ通り改正シ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス
明治十九年勅令第六十五號同年閣令第三十五號ノ學校職員及郡區書記戶長等國庫費支辨ニ屬スル用務ヲ以テ旅行セシムルトキ學校職員ニシテ其委任待遇ヲ受クルモノハ三等旅費判任待遇ヲ受クルモノ及郡區書記戶長ハ四等旅費ヲ内國旅費規則ニ依リ支給スヘシ

○蠶種検査員解備旅費

明治二十年十一月内務省訓令第四十八號
蠶種検査員等ノ如キ一時限リ備入ノモノ解備ノトキハ本年二月訓令第九條ニ準シ旅費支給スヘシ

○租稅検査員旅費支給方

明治十九年八月大藏省訓令第三十六號租稅検査員旅費支給方左ノ通り施行ス
一租稅検査員受持検査區内ノ巡迴旅費ハ月額金十三圓ヲ支給スヘシ其巡迴日數一箇月ニ滿タサル者ハ月額三十分一ノ割合ヲ以テ其日數ニ應シ支給スヘシ(二十三年大藏省訓令第六十六號)
一府縣廳下検査區内ノ旅費月額ハ實地ノ狀況ニ依リ大藏大臣ノ認可ヲ經テ適宜減額支給スヘシ
一府縣廳下外ノ検査區ト雖モ廳下所屬検査區ト其狀況ヲ同フスル地方ハ前項ニ依リ適宜減額支給スヘシ(二十三年大藏省訓令第六十六號)
(加テ)

○土地検査ノ收稅屬旅費支給方

明治二十二年六月大藏省訓令第四十八號
土地検査ノ爲メ出張スル收稅屬ノ旅費ハ本年七月一日以降月額ヲ廢シ内國旅費規則ニ依リ支給スヘシ

○内國稅徵收費支辨旅費支給方

明治二十四年三月大藏省訓令第二十一號
内國稅徵收費支辨旅費支給方左ノ通り相定メ明治二十四年四月一日ヨリ施行ス
但明治十九年六月當省訓令第二十八號第二項及明治二十三年十一月訓令第四百七十七號本年一月訓令第六號ハ本訓令施行ノ日ヨリ相廢ス
一月額ヲ以テ支給スヘキハ費ノ外總テ内國旅費規則ニ據リ支給スヘシ(二十四年大藏省訓令第六十六號)
(十七號ヲ以テ本項改正)

一土地検査員所轄内ノ巡回旅費ハ月額金十五圓ヲ支給スヘシ
 一関稅検査員所轄内ノ巡回旅費ハ月額金十二圓ヲ支給スヘシ
 一土地及關稅ノ検査員其分署所在地市町村内ノ巡回ハ旅費ヲ給セス
 一分署所在地市町村ニ接續スル町村若ハ其町村ノ一部落大小ヲ總ニシテ分署所在地市町村ト別ニ區分ヲ要セサルモノハ大藏大臣ノ認可ヲ經テ分署所在地市町村ニ準スルコトヲ得
 一土地及關稅ノ検査員巡回日數一箇月ニ滿テサルモノハ月額三十分一ノ割合ヲ以テ其日數ニ應シテ支給スヘシ
 一土地ノ便利其他ノ狀況ニ依リ府縣知事大藏大臣ノ認可ヲ經テ適宜減額支給スルコトヲ得
 一雇員ノ旅費ハ府縣知事適宜其支給額ヲ定メ大藏大臣ノ認可ヲ經ヘシ

○司法省備外國人及備員以下内國旅費定則

備外國人及備員以下内國旅費定則左ノ通相定ム
 但七月十日ヨリ施行スヘシ
 第一條 旅費支給ノ方法ハ附令第十四號内國旅費規則ニ據ル
 第二條 備外國人ハ旅費額三等ヲ給ス
 但勅任取扱ノモノハ此限ニ非ス
 第三條 備月給金十二圓以上日給金四十錢以上ハ旅費額六等ヲ給ス
 第四條 備月給金十二圓以下日給金四十錢以下及給仕小使等

附屬官學生 支那籍者等	六錢	六錢	八錢	六錢	五錢	拾錢	四拾錢
給仕小使等	三錢	三錢	五錢	四錢	三錢	拾錢	貳拾五錢

○司法省新官等級ニ敘任セサル官吏旅費

新官等級ニ敘任セサル官吏旅費ノ儀ハ判事檢察事俸月割八圓以上ハ三等旅費同六十五圓以下ハ四等旅費及判事補檢事補書記等ノ判任月俸四十圓以上ハ五等旅費同三十五圓以下ハ六等旅費支給スヘシ

○裁判所管内外ヲ兼出張ノ者旅費支給方

管内外公務ヲ兼出張スル者及ヒ管外出張中臨時管内ノ公務ヲ爲ス者並赴任途中同斷ノ者ハ自今管外旅費ヲ支給ス但管内出張ノ者更ニ管外ニ出張スル者ハ管外ニ向テ出發ノ日ヨリ管外旅費ヲ支給ス可シ

○司法省海路旅費支給方

旅費規則第二條ニ基キ旅費支給方左ノ通り相定ム
 一海路旅行ハ汽船ノ都合ニ依リ寄港スト雖トモ直路ノ汽船賃ヲ支給スヘシ
 但汽船ノ乗替ヲナサシムハ難到場所ハ此限ニ非ラス

○司法省轉任新任者採用廳へ到着シ辭令交付前日當支給方

轉任又ハ新任ノ爲メ他所ノ者ヲ呼出シ其採用廳へ到着スルモ休暇又ハ其廳ノ都合ニ依リ即日辭令書ヲ交付セサルトキハ辭令交付ノ當日マテ内國旅費規則ノ日當ヲ支給スヘシ

○林區署管内旅費規則

林區署管内旅費規則左ノ通改正シ明治二十三年四月一日ヨリ施行ス

大林區署管内旅費規則

第一條 林區署管内旅費ハ林區署管内旅行中一切ノ費用ニ

充ツル爲メ左表甲號ノ定ムル所ニ從ヒテ之ヲ支給ス

第二條 一日ノ内普通旅行ト現場巡視ト交渉スル場合ニ於テ現場巡視外ノ旅行陸路ハ六里以上汽車ハ十哩以上汽船ハ十海哩以上アルトキハ之ニ應シテ並日當ト車馬賃及汽車汽船賃ヲ給シ巡視日當ヲ支給セス
 第三條 事業場前切中ハ左表乙號ノ定ムル所ノ日當ノミヲ支給ス
 第四條 大林區署官林被害事件ニ由リ管外ニ派出シタルキノ旅費ハ管内額ヲ支給ス
 但被害事件ノ爲メ裁判所ノ召喚ニ應シ又ハ大林區署長ノ命令ニ依リ派出シタルトキハ此限ニアラス
 第五條 小林區署員ニハ管内通常旅行一切ノ費用ニ充ツル爲メ左表乙號定ムル所ノ月額旅費ヲ支給ス
 但月額旅費ハ管轄區域ノ廣狹事務ノ繁閑等ヲ量リ本表定ムル所ノ等級内ニ於テ小林區署ノ等級ヲ定メ其等級ニ應シテ支給ス
 第六條 小林區署官林被害事件ニ依リ裁判所ノ召喚ニ應シ又ハ大林區署長ノ命令ニ依リ管外又ハ部外へ派出スルトキハ普通旅費部外ハ管内額ヲ支給ス
 第七條 小林區署員常務外ノ事務ニ從事シタルトキハ部内ト雖モ普通旅費ヲ支給ス
 第八條 小林區署員新任轉勤在勤中ノ非職廢官退官及死亡ノトキ當月分ノ月額旅費ハ上下半月ノ區分ヲ以テ其全額又ハ半額ヲ支給ス(二十三年農商務省令第五十四號)
 但大林區署管内ニ於テ轉勤ノ場合ニハ重複ニ支給セス
 第九條 小林區署員一箇月中十日以上續テ常務ニ從事セサル

トキ又ハ一箇月中十日以上普通旅費ノ支給ヲ受ケタルトキハ當月分ノ月額旅費ハ半額ヲ支給ス

但一箇月中二十日以上續テ常務ニ從事セサルトキ又ハ一箇月中二十日以上普通旅費ノ支給ヲ受ケタルトキハ當月分ノ月額旅費ハ支給セズ

第十條 甲小林區署在勤者乙小林區署ヲ兼務シ兼務地ニ旅行スルトキ其往復及之點御用費ヨリ甲區署迄旅費ハ普通旅費ヲ支給ス

但(二十三年農商務省訓令第(三十一)號ヲ以テ但依別例)

第十一條 甲小林區署在勤者乙小林區署ヲ兼務スルトキノ月額旅費ハ其多キ方ヲ支給ス(二十三年農商務省訓令第(三十一)號ヲ以テ但依別例)

第十二條 本規則ニ掲載ナキモノハ一般ノ定則ニ據ルヘシ(二十三年農商務省訓令第(三十一)號ヲ以テ但依別例)

附則

一 派出所在勤員ノ旅費ハ小林區署員ニ準シテ支給ス

但月額旅費ハ左ノ等級ニ依ルヘシ

一等 三四五拾錢 二等 三四 三等 貳圓五拾錢

一 小林區署在勤ト派出所在勤トヲ兼務スルトキハ月額旅費ハ多キ方ヲ支給ス

甲號表(二十四年農商務省訓令第(三十四)號ヲ以テ但依別例)

等級	汽車	汽船	馬	賃日	當
一等	五錢	五錢	拾貳錢	壹圓	
二等	參錢	參錢	八錢	五拾錢	
三等	貳錢	貳錢	七錢	四拾錢	

乙號表		官行事業所詰日當	
等級	月額	官行事業所詰日當	金
一等	金三圓	金拾	錢
二等	金貳圓五拾錢	金拾	錢
三等	金貳圓		

農商務省雇及官林巡邏旅費規則

明治十九年七月 農商務省訓令第十二號

明治十三年七月 內務省第五十四號達中旅費ニ關スル事項ヲ廢シ更ニ左ノ通り相定メ本年八月一日ヨリ施行ス

雇及官林巡邏旅費規則

第一條 官林保護費ヲ以テ支給スル雇及官林巡邏旅費ハ左表定ムル所ニ從ヒ之ヲ支給ス

第二條 官林巡邏擔當官林ヲ巡視スルハ其常務ナルヲ以テ旅費ヲ給セズ殊更ニ出張申附及官林被害事件ニ付地方廳又ハ警察署等へ出張スル時ニ限り旅費ヲ支給スルモノトス

第三條 前條ノ外支給方法ハ內國旅費規則ニ據ル

別表(二十三年五月農商務省訓令第(二十五)號ヲ以テ但依別例)

事項	官林巡邏	管外車	管內車	管外日當	管內日當
汽車賃 <td>一哩每</td> <td>一哩每</td> <td>一哩每</td> <td>一日每</td> <td>一日每</td>	一哩每	一哩每	一哩每	一日每	一日每
汽船賃 <td>一海里</td> <td>一海里</td> <td>一海里</td> <td></td> <td></td>	一海里	一海里	一海里		
馬賃 <td>一里每</td> <td>一里每</td> <td>一里每</td> <td></td> <td></td>	一里每	一里每	一里每		
管外車 <td>金貳錢</td> <td>金貳錢</td> <td>金七錢</td> <td>金四錢</td> <td>金五拾錢</td>	金貳錢	金貳錢	金七錢	金四錢	金五拾錢
管內車 <td>金貳錢</td> <td>金貳錢</td> <td>金七錢</td> <td>金四錢</td> <td>金五拾錢</td>	金貳錢	金貳錢	金七錢	金四錢	金五拾錢
管外日當 <td></td> <td></td> <td></td> <td>金三拾錢</td> <td></td>				金三拾錢	
管內日當 <td></td> <td></td> <td></td> <td>金三拾錢</td> <td></td>				金三拾錢	

鑛業條例中ノ出張吏員旅費日當納附手續

鑛業條例第十四條第三十一條第四項及ヒ第四十五條ニ依リ旅費日當ヲ納付スル手續左ノ通り相定ム

第一條 鑛業條例第十四條第一項第三十一條第四項及第四十五條第一項ニ依リ吏員ノ出張ヲ命シタルトキハ鑛山監督署長ハ出張吏員ノ氏名及ヒ旅費日當ノ概算額ヲ出願人又ハ鑛業人ニ通知スヘシ

第二條 出願人又ハ鑛業人ハ前條ノ通知書到達ノ日ヨリ十四日以内ニ旅費日當ノ概算額ヲ出張吏員ニ交付スヘシ

第三條 出張吏員ハ實地臨檢ヲ終ヘタル後旅費日當ノ精算ヲ爲シ過不足アルトキハ鑛山監督署長ヨリ之ヲ出願人又ハ鑛業人ニ通知シ出張吏員ヲシテ超過額ヲ返付シ又ハ不足額ヲ追求セシムヘシ

海軍內國旅費規則

明治二十二年八月 海軍省達第三百二號

海軍內國旅費規則左ノ通り改正ス

第一條 海軍內國旅費ハ命ヲ受ケ本邦内ヲ旅行スル者ニ之ヲ給ス

第二條 旅費ハ汽車料船料馬賃及日當ノ四種トシ順路ノ路程ニ依リ之ヲ給ス

車馬賃ハ汽車ノ便ナキ地方ノ陸路旅行ニ際シ里數ニ應シ之

ヲ給シ日當ハ宿泊料其他ノ諸費ニ充ル爲メ之ヲ給ス

第三條 旅費ノ等級ヲ分テ八等トシ日當及車馬賃ハ第一號表ニ依リ之ヲ給シ汽車料船料ハ第二號表ニ依リ之ヲ給ス

第二號表面ノ地ヲ旅行スルトキ汽車船料ノ兩路アル場所ニ在テハ汽車料ヲ給ス

第四條 第二號表面外ノ地ヲ旅行スルトキハ其路程ニ應シ汽車料船料ノ定價及日當五割増ヲ給ス但旅行ノ各種ニ跨ル當日ハ日當ノ多額ヲ給ス

第五條 第二號表面ノ各地間ヲ旅行スルトキハ特ニ令達アルモノ、外ハ他ノ路程ヲ經過スルモ該表ニ依リ其額ヲ給シ日當ハ旅行ノ現日數ニ拘ハラス一日汽車路二百哩海路二百哩詰ヲ以テ計算シ之ヲ給ス但汽車路ト海路トニ跨ル旅行ハ其合計里數ヲ以テ日數ヲ算出ス其十位以上ノ端數ハ一日ニ計算ス

第六條 旅行中歸省其他私事ノ爲メ迂路ヲ經過スルトキハ其迂路ニ入りタル日ヨリ再ヒ順路ニ出タル前日マテハ旅費ヲ給セズ

第七條 旅行中病氣或ハ船待若クハ道路壅塞等ニ依リ滞在スルトキハ其事實ノ確證アルニ非サシハ日當ヲ給セズ(二十三年一月十七號ヲ以テ)

第八條 文官奏任三等以上ハ上長官四等以下ハ士官試補及判任一等ハ准士官判任二等以下及見習ハ下士ノ旅費等級ニ準シ相當ノ額ヲ給ス(二十三年七月二十八日海軍省達第(二百七十)號ヲ以テ但依別例)

第九條 文官奏任三等以上ハ上長官四等以下ハ士官試補及判任一等ハ准士官判任二等以下及見習ハ下士ノ旅費等級ニ準シ相當ノ額ヲ給ス(二十三年七月二十八日海軍省達第(二百七十)號ヲ以テ但依別例)

第八條 將核准將校ノ生徒ニハ旅費等級六等其他ノ生徒ニハ旅費等級七等ノ額ヲ給ス

第八條乙 旅行中任官進級等ニ依リ旅費等級變シタルトキハ准士官以上及文官ニハ辭令書日附ノ當日ヨリ相當ノ旅費ヲ給シ下士官及雇員以下ニハ辭令書本人ニ到達ノ日ヨリ相當ノ旅費ヲ給ス(二十三年一月十六日陸軍省令)

第九條 勤務廳所在及乘組艦船碇泊ノ市町村内ニ止ル旅行ニハ旅費ヲ給セス

第十條 陸路六里汽車路十二哩海路十二哩未滿ノ旅行ニハ日當ヲ給セス但勤務廳所在若クハ乘組艦船碇泊ノ市町村外ニ宿泊ヲ要スルトキハ其泊數ニ應ジ日當ヲ給ス

第十一條 軍艦若クハ官有車馬又ハ各廳ニ於テ借入備入タル車馬等ニテ旅行スルトキハ日當ノミヲ給ス

第十二條 官有船舶又ハ各廳ニ於テ借入備入タル船舶ニテ旅行スルトキモ亦前項ニ同シ但旅行二日以上ニ涉リ官ヨリ附テナサハル場合ニ於テハ旅費等級一等ニハ日當四割増ヲ給シ旅費等級二等以下ニハ日當五割増ヲ給シ各種ニ跨ル當日ハ日當ノ多額ヲ給ス(同上ヲ以テテ)

第十三條 前二項ノ場合ニ於テ艦船乘組ノ辭令書ヲ與ヘ出張セシムル者及軍艦ニ便乗シ命ヲ轉勤轉乘セシムル者ニハ日當ヲ給セ

第十四條 艦船試運轉若クハ大砲水雷試射ノ爲メ艦船ニ乘組二日以上旅行スルトキハ其日數ニ應ジ日當ノミヲ給ス(二十三年十月二日陸軍省令)

第十五條 旅行中死亡シタルトキハ本人ノ居宅マテ從前ノ資格ヲ以テ第十四條ニ準シ單ニ汽車料船舶料及車馬賃ヲ給ス但下士官及從僕制寮刺夫ハ此限ニアラス

第十六條 免官廢官若クハ免役トナリ事務引繼或ハ殘務取扱等ヲ命セラシテ旅行スル者ニハ從前ノ資格ヲ以テ相當ノ旅費ヲ給ス

第十七條 武文官ニ任用スル爲メ召喚セラレタルトキハ新任官相當ヲ以テ通常ノ旅費ヲ給ス兵學校生徒志願者入校試驗ニ及第シタル者ニ生徒ヲ命スル爲メ召喚スルトキハ日當三拾五錢ヲ給ス其支給法ハ第二十五條ニ依ル(二十三年五月三日陸軍省令)

第十八條 左ニ掲クル事項ノ一ニ該ルトキハ第一號表ノ日當並ニ汽車料船舶料ノ定價及車馬賃トシテ陸路一里毎ニ旅費等級四等以上ニ當ル者ニハ十錢五等以下ニ當ル者ニハ六

若クハ家族所在地ヨリ乙艦所在地ニ家族ヲ携帶シ若クハ移轉セシムル時

五 出張中甲艦若クハ甲艦船ヨリ乙艦若クハ乙艦船ニ轉勤轉乘ヲ命セラシテ直ニ赴任スル者甲艦若クハ甲艦船所在地若クハ家族所在地ヨリ乙艦若クハ乙艦船所在地ニ家族ヲ移轉セシムル時

六 乘組艦船所轄シテ家族所在地ヨリ本艦所轄鎮守府軍港ニ家族ヲ移轉セシムル時

第十四條 前條ニ依リ別ニ汽車料船舶料及車馬賃ヲ給スルトキ第二號表面ノ各地間ハ其汽車料若クハ船舶料ノ額ヲ給シ其他ノ路程ハ總テ車馬賃ヲ給ス但陸路ヲ以テ計算セサル渡海ノ場所ハ海路二哩ヲ陸路一里ニ計算シ車馬賃ヲ給ス

第十五條 募兵檢閱視察陸地測量等ノ爲メ現場ヲ巡視スルトキハ其地ヘ到達ノ翌日ヨリ發程前日マテ車馬賃ヲ給セス其日數ニ應ジ日當三割増ヲ給ス但官有若クハ官備ノ船舶車馬ヲ使用セシムルトキハ三割増ヲ給セス(二十二年十月九日海軍省令)

第十六條 私立造船所ニ依リシタル造船工事ニ關シ若クハ建築工事又ハ物品検査ニ關シ現場ニ出張シ若クハ三十日以上ニ及ブトキハ同地ニ滞在ノ日數ニ限リ日當十分ノ三ヲ給シ滞在中他ニ出張スルトキ發着ノ當日ハ日當全額ヲ給ス(二十二年十月九日海軍省令)

第十七條 甲地ヨリ乙地ニ移ルトキハ通常ノ旅費ヲ給ス

第十八條 水路測量出張ノトキハ測地到達ノ翌日ヨリ發程前日マテ車馬賃ヲ給セス日當一割増ヲ給ス(海軍省令)

甲地ヨリ乙地ニ移ルトキハ通常ノ旅費ヲ給ス

第十七條 入學通學若クハ練習乘組ヲ命セラレタルトキハ其學校若クハ艦船所在地マテ通常ノ旅費ヲ給シ休職者某地滞在ヲ命セラレタルトキハ其地マテ通常ノ旅費ヲ給ス

第十八條 賜暇歸省又ハ養病ノ爲メ旅行中轉勤轉乘ヲ命セラレ若クハ休職トナリ某地滞在ヲ命セラレ舊在勤地若クハ舊艦船ニ歸到セシメテ直ニ指定ノ地ニ赴クトキハ其所在地ヨリ指定地マテ其路程ニ應ジ相當ノ旅費ヲ給ス但本條ノ旅行中ニ於テハ第二十三條第七項ニ該ル者ニ給スル旅費モ亦本條ニ準ス

第十九條 旅行中免官廢官若クハ免役トナリタルトキハ舊在勤地若クハ舊艦船マテ從前ノ資格ヲ以テ相當ノ旅費ヲ給ス

第二十條 旅行中死亡シタルトキハ本人ノ居宅マテ從前ノ資格ヲ以テ第十四條ニ準シ單ニ汽車料船舶料及車馬賃ヲ給ス但下士官及從僕制寮刺夫ハ此限ニアラス

第二十一條 免官廢官若クハ免役トナリ事務引繼或ハ殘務取扱等ヲ命セラシテ旅行スル者ニハ從前ノ資格ヲ以テ相當ノ旅費ヲ給ス

第二十二條 武文官ニ任用スル爲メ召喚セラレタルトキハ新任官相當ヲ以テ通常ノ旅費ヲ給ス兵學校生徒志願者入校試驗ニ及第シタル者ニ生徒ヲ命スル爲メ召喚スルトキハ日當三拾五錢ヲ給ス其支給法ハ第二十五條ニ依ル(二十三年五月三日陸軍省令)

第二十三條 左ニ掲クル事項ノ一ニ該ルトキハ第一號表ノ日當並ニ汽車料船舶料ノ定價及車馬賃トシテ陸路一里毎ニ旅費等級四等以上ニ當ル者ニハ十錢五等以下ニ當ル者ニハ六

錢ヲ給ス

但第七項第八項ニ當ル者ハ陸路十二里計ヲ以テ日數ヲ算出シ又汽車路及海路ハ第五條ノ例ニ依リ日數ヲ算シ日當ヲ給ス旅行ノ各種ニ跨リ端數ヲ生ズルトキハ之ヲ通算ス

一 銃砲射撃若クハ艦隊操練若クハ對抗運動見學及學術研究等ノ爲メ出張ヲ命ゼラレタル時

二 拜謁或ハ賢所參拜ヲ仰付ラレ又ハ敘位敘勳若クハ昇等轉任等ノ爲メ召喚セラレタル時

三 會計監督部諸員其職務ヲ以テ各應艦團隊ニ臨檢ノ爲メ旅行スル時

四 下士卒職業或ハ學術受驗ノ爲メ召喚セララル、時

五 乘艦生徒下士卒及從僕刺刺夫公暇上陸中ニ本艦出港ノ際退尾歸艦若クハ所管艦ニ歸到セシムル時

六 生徒下士卒及從僕刺刺夫傷疾疾病ニ罹リ治療ノ爲メ入院シ若クハ退院シ若クハ治療場所ヲ移轉セシムル時但重傷或ハ病症ニ依リ別ニ船舶車馬若クハ肩輿等ヲ要スルトキハ所轄長ノ認可及ヒ軍醫ノ診斷ニ依テ其實費ヲ給ス

七 准士官以上休職ヲ命ゼラレ辭令領受ノ日ヨリ一週日以内若クハ豫備後備ニ入り又ハ退後トナリ現役ヲ離ル、日ヨリ一週日以内ニ本人ノ居室ニ歸住スル時

八 豫備後備者召集ニ應スル時

九 旅費等級六等以下ニ當ル軍人軍屬職務上自己ノ不注意若クハ誤認ニ原因スル事件ニ付質問説明等ノ爲メ召喚

セラル、時

第二十四條 左ニ掲クル事項ノ一ニ該ルトキハ汽車料船舶料ノ定價及前條同額ノ車馬賃ヲ給シ日當ハ給セス

一 准士官以上學術受驗ノ爲メ召喚セララル、時

二 准士官以上公暇上陸中ニ本艦出港ノ際退尾歸艦若クハ所管艦ニ歸到セシムル時若クハ軍醫ノ診斷ニ依リ入院或ハ陸地療養ノ後歸艦スル時

三 准士官以上ノ軍人及軍屬被害事件ニ依リ軍法會議ニ於テ審問ノ爲メ召喚セララル、時

四 會葬式ニ依リ施行スル准士官以上ノ葬式葬事若クハ其補助若クハ陪極者ニ指名サレタル時

五 旅費等級五等以上ニ當ル軍人軍屬職務上自己ノ不注意若クハ誤認ニ原因スル事件ニ付質問説明等ノ爲メ召喚セララル、時

六 職工人夫ヲ派遣シ使役スル時

第二十五條 左ニ掲クル事項ノ一ニ該ルトキハ一日陸路十二里計ノ陸路ニ乘リシル海路ニ乘リシル場所ヲ以テ下士ハ日當五十錢卒及從僕刺刺夫ハ日當四十錢ヲ給ス官有若クハ官備ノ汽車船舶等ニテ旅行セシムル時ハ其日數ニ應シ本條ノ日當半額ヲ給ス但旅行ノ各種ニ跨リ日當ハ日當ノ多額ヲ給ス又重傷或ハ病症ニ依リ別ニ船舶車馬或ハ肩輿等ヲ要スルトキハ所轄長ノ認可及ヒ軍醫ノ診斷ニ依テ其實費ヲ給ス

一 豫備兵後備兵又ハ歸休兵ノ歸郷シ若クハ召集セララル、時

二 下士卒滿期ニ依リ現役ヲ退キ若クハ免官免役トナリ歸

郷スル時

三 從僕刺刺夫解備トナリ其備入地ニ歸到スル時但品行不正若クハ犯罪ニ因ル者ハ此限ニアラス

第二十六條 左ニ掲クル事項ノ一ニ該ルトキハ休泊船料及其他ノ諸費トシテ旅費等級二等以上ニ當ル者ハ日當八十錢四等以上ニ當ル者ハ日當五十錢五等以下ニ當ル者ハ日當三十錢以内ニ止ルノ實費ヲ給ス又船舶車馬ヲ要スル場合ニハ汽車料船舶料ノ定價又ハ船舶車馬賃ノ實費ヲ給ス

一 演習行軍或ハ端舟乘組出張衛兵交代其他隊伍ヲ組ミ旅行スル時及行軍演習ノ際旅費等級二等以上ニ當ル者ノ從者隨行スル時但隊伍ニ屬スル者及艦船ノ乘員本項ニ掲クル職務ヲ以テ單身旅行スルトキハ本條ニ依ル

二 生徒下士卒從僕刺刺夫四人以上同地ニ旅行スル時及准士官以上ノ引率スル時但第十一條第四項、第十五條、第十六條、第二十三條第六項及第二十七條ノ場合ハ此限ニアラス

第二十七條 生徒下士卒及雇員以下被害事件若クハ懲罰處分ニ依リ旅行シ又ハ刑期滿限ニ依リ歸艦應ルハ艦隊校モスルトキハ汽車料船舶料ノ定價及第二十三條ニ掲クル車馬賃ト同額ノ車馬賃ノミヲ給ス但滞在或ハ途中宿泊ヲ要スルトキハ其泊數ニ應シ別ニ一日二十五錢ヲ給シ單ニ食事ノミヲ要スルトキハ一食ニ付四錢ヲ給ス

第二十七條乙 被告人ノ護送者被告人ヲ護送スル爲メ同車同船ヲ要スル場合ニ於テ被告人ノ旅費等級護送者ノ旅費等級

ヨリ上級ナルトキハ之ニ被告人ト同等ノ汽車料船舶料ノ定價ヲ給ス

第二十八條 軍法會議ニ於テ證人鑑定人醫師若クハ通辨人ヲ呼出シタルトキハ刑法附則第四十九條第五十條ニ依リ旅費ヲ給ス

第二十九條 公務ノ爲メ華士族及平民ニ旅行セシムルトキハ華族及從六位勳六等以上ノ者ニハ旅費等級四等正七位勳七等以下ノ者ニハ旅費等級六等無位無勳ノ者ニハ旅費等級八等ノ額ヲ給ス

第三十條 備外國人ニ旅行セシムルトキハ其身分取扱ニ依リ勅任官相當ノ者ニハ旅費等級二等奏任官相當ノ者ニハ旅費等級三等判任官相當ノ者及別ニ身分取扱ヲ定メサル教師ニハ旅費等級四等其他ノ者ニハ總テ旅費等級七等ノ額ヲ給ス

第三十一條 車馬賃ヲ給スル爲メ里數ヲ計算スルニハ出發地ノ原標若クハ中央ヨリ指定地ノ原標若クハ中央マヲ通算ス

發著地ノ市町村原標若クハ中央ト汽車停車場又ハ船舶ニ乘組ム埠頭トノ間一里ニ滿タス若クハ其間該市町村原標若クハ外ニ涉ル場所アルモ一里ニ滿タサルトキハ總里數ニ算入セス旅行ノ各種ニ跨ル場合ニ於テモ亦同シ

但總里數一里以上ノ里數ヲ算入スルトキ里ノ端數ハ總テ切捨トス

沿道中ニ在ル河海灣等ノ渡船場ニシテ海里ヲ以テ計算セラル場所ハ總テ陸路里數ニ算入ス但甲乙地間ノ里數ニ包含

現行日本法令大全

第二類 第一章 第二款 官職 俸給 旅費

二百九十八

ニ依テ其旅費ヲ給スルノ限ニアラス

第三十二條 第十三條第十七條第二十三條第六項ノ事項及其

他轉勤轉乘等ニ依リ旅行スル場合ニ於テ本人ノ請求アルト

キハ前應ニ於テ見附額以内ヲ以テ其旅費ヲ支給決算シ其給

額ヲ後應ヘ通知スヘシ(二十三年一月十六日海軍省達
第十七號ヲ以テ本條中改正ス)

後應ハ前應ノ通知ニ依リ其給額ヲ精算シ追給スヘキモノハ

之ヲ給シ過給ハ追徴スヘシ但前應ニ於テ旅費ヲ支給セザル

トキ及會計ヲ異ニスル應ヘ轉シタルトキハ總テ後應ニ於テ

支給ス(同上ヲ以テ本
項中刪除ス)

下士卒及雇員以下刑期限滿歸國旅費ノ支給ハ前二項ニ同シ

(二十二
年十月九日海軍省達第
百十二號ヲ以テ本項ヲ追加ス)

第三十三條 甲應職員乙應ヲ兼務シ往返スルトキハ本人到達

ノ應ニ於テ其旅費ヲ給シ一日以内ニ往返スルトキハ往返トモ

出發應ニ於テ之ヲ給ス但臨時委員ヲ兼ル者ハ此限ニアラス

第三十四條 甲應職員乙應ニ於テ借用スルトキハ往返トモ

借用應ニ於テ其旅費ヲ給ス其他借用中旅行セシムルトキモ

亦同シ

圓隊ニ在リ各應ニ勤務スル下士卒勤務應ノ公務ニテ旅行ス

ルトキハ勤務應ニ於テ其旅費ヲ給ス(二十三年一月十六日海軍省
達第十七號ヲ以テ本項ヲ追
加ス)

第三十五條 旅費ハ第三十二條以下ノ各條ニ依リ支給スルト

キヲ除クノ外總テ本人所轄ノ應ニ於テ支給ス

第三十六條 旅行ノ兩會計年度ニ跨ルトキハ船舶料及汽車料

ハ其船舶又ハ汽車ノ發程當日ノ年度ニ編入シ日當及車馬賃

ハ年度分界ノ日ニ依テ區分スヘシ

第三十七條 他官應ノ官吏ヲ借入シ旅行セシムルトキハ本則

ニ依テ其旅費ヲ給スルノ限ニアラス

第三十八條 本則ハ本年九月一日ヨリ施行ス

附則

旅費等級表

第一號表

旅費等級

官職

職名

等親任官

勅任官

長官

士官

准士官

候補生

下士卒

雇員

以下

一等

二等

三等

四等

五等

六等

七等

八等

旅費等級	一等	二等	三等	四等	五等	六等	七等	八等
日當	四圓三圓	四圓	四圓	四圓	四圓	四圓	四圓	四圓
車馬賃	五拾錢	四拾錢	四拾錢	四拾錢	四拾錢	四拾錢	四拾錢	四拾錢

地名	一等	二等	三等	四等	五等	六等	七等	八等
橫須賀長浦間	〇六〇	〇五〇	〇四〇	〇三〇	〇二〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇
橫濱長崎間	八七五	五五〇	五〇〇	四〇〇	三〇〇	二〇〇	一〇〇	〇一〇
橫濱半田間	三九〇	一七〇	一三〇	一〇〇	七〇	四〇	二〇	〇一〇
橫濱四日市間	三〇〇	一八〇	一四〇	一〇〇	八〇	五〇	三〇	〇一〇
橫濱清水間	三三〇	一〇一〇	七五〇	五〇〇	四〇〇	三〇〇	二〇〇	一〇〇
橫濱函館間	六三〇	四七〇	三〇〇	二二〇	一五〇	一〇〇	七〇	五〇

第二號甲表 船舶料

地名	一等	二等	三等	四等	五等	六等	七等	八等
東京品川間	〇四〇	〇三〇	〇二〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇
品川橫濱間	一七〇	一三〇	一〇〇	〇七〇	〇五〇	〇三〇	〇二〇	〇一〇
橫濱大船間	一三〇	一〇〇	〇七〇	〇五〇	〇三〇	〇二〇	〇一〇	〇一〇
大船逗子間	〇六〇	〇五〇	〇四〇	〇三〇	〇二〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇
逗子橫須賀間	〇五〇	〇四〇	〇三〇	〇二〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇
大船國府津間	二二〇	一七〇	一三〇	一〇〇	〇七〇	〇五〇	〇三〇	〇二〇
國府津江尻間	七五〇	五八〇	四五〇	三三〇	二二〇	一五〇	一〇〇	七〇
江尻大府間	一三〇〇	九八〇	七五〇	五八〇	四五〇	三三〇	二二〇	一五〇
大府武豐間	一五〇	一三〇	一〇〇	〇七〇	〇五〇	〇三〇	〇二〇	〇一〇
大府名古屋間	一四〇	一三〇	一〇〇	〇七〇	〇五〇	〇三〇	〇二〇	〇一〇
名古屋米原間	五八〇	四三〇	三三〇	二五〇	一八〇	一三〇	一〇〇	七〇
米原長濱間	〇五〇	〇四〇	〇三〇	〇二〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇	〇一〇
長濱金ヶ崎間	三三〇	二五〇	一八〇	一三〇	一〇〇	七〇	五〇	三〇
京都大阪間	三三〇	二五〇	一八〇	一三〇	一〇〇	七〇	五〇	三〇
大阪神戸間	二二〇	一八〇	一四〇	一〇〇	〇八〇	〇六〇	〇四〇	〇三〇
兵庫姫路間	二〇〇	一六〇	一二〇	九〇	七〇	五〇	三〇	二〇

第二號乙表 汽車料

地名	一等	二等	三等	四等	五等	六等	七等	八等
神戸吳間	一七六〇	一三三〇	一〇三〇	五九〇	三九〇	二七〇	一八〇	一三〇
神戸廣島間	一八六〇	一四〇〇	一〇六〇	六三〇	三九〇	二七〇	一八〇	一三〇
神戸長崎間	三六〇〇	二六〇〇	二〇六〇	一三三〇	七五〇	五三〇	三九〇	二八〇
神戸馬關間	三六〇〇	二六〇〇	二〇六〇	一三三〇	七五〇	五三〇	三九〇	二八〇
吳廣島間	一七〇	一三〇	一〇〇	七〇	五〇	三〇	二〇	一〇
吳河原江田島小間	一七〇	一三〇	一〇〇	七〇	五〇	三〇	二〇	一〇
廣島江田島間	一七〇	一三〇	一〇〇	七〇	五〇	三〇	二〇	一〇
廣島馬關間	一三〇〇	九〇〇	七〇〇	四〇〇	二五〇	一八〇	一三〇	一〇〇
馬關長崎間	一七〇〇	一三〇〇	九〇〇	五七〇	三六〇	二六〇	一八〇	一三〇
長崎嚴原間	一五五〇	一三〇〇	九〇〇	五七〇	三六〇	二六〇	一八〇	一三〇
長崎佐世保間	五五〇	四〇〇	三〇〇	二〇〇	一五〇	一〇〇	七〇	五〇
長崎鹿兒島間	一九〇〇	一四〇〇	一〇〇〇	六五〇	四一〇	二九〇	二〇〇	一五〇
函館小樽間	三六五〇	二九〇〇	二二〇〇	一四八〇	八八〇	五五〇	三九〇	二八〇
鹿兒島那覇間	四八〇	三六〇	二六〇	一八〇	一四〇	一〇〇	七〇	五〇
清水神戸間	三三〇	二五〇	一八〇	一三〇	一〇〇	七〇	五〇	三〇
四日市神戸間	二四〇	二〇〇	一六〇	一三〇	一〇〇	七〇	五〇	三〇
馬關博多間	二四〇	二〇〇	一六〇	一三〇	一〇〇	七〇	五〇	三〇
橫濱神戸間	四一〇	三三〇	二五〇	一八〇	一三〇	一〇〇	七〇	五〇

現行日本法令大全

第二類 第一章 第二款 官職 俸給 旅費

二百九十九

現行日本法令大全

高崎横川間	二二〇	一三〇	一三〇	〇七〇	〇五〇	難波堺間	〇七〇	〇五〇	〇五〇	〇一五
輕井澤直江津間	一一〇	八三〇	六五〇	三三〇	二〇〇	湊町龜瀬間	一六〇	一三〇	〇六〇	〇三〇
小山水戸間	四六〇	三七〇	二六〇	一六〇	一〇〇	目黒新宿間	〇五〇	〇五〇	〇三〇	〇一〇
岩切越前間	〇五〇	〇五〇	〇五〇	〇一〇	〇一〇	新宿八王子間	二六〇	二〇〇	一五〇	〇六〇
博多雜餉限間	〇五〇	〇五〇	〇五〇	〇一〇	〇一〇	新宿赤羽間	〇七〇	〇五〇	〇五〇	〇一〇
二日市鳥栖間	一三〇	〇六〇	〇六〇	〇五〇	〇一〇	小山宇都宮間	二〇〇	一五〇	一三〇	〇六〇
鳥栖久留米間	〇五〇	〇五〇	〇五〇	〇一〇	〇一〇	宇都宮岩切間	一八〇	一三〇	一〇〇	〇六〇
雜餉限二日市間	〇五〇	〇五〇	〇五〇	〇一〇	〇一〇	宇都宮日光間	三〇〇	二〇〇	一六〇	一〇〇
品川目黒間	〇三〇	〇一〇	〇一五	〇一〇	〇〇五	岩切一ノ關間	六〇〇	四六〇	三六〇	二〇〇
東京野上赤羽間	〇七〇	〇五〇	〇五〇	〇一〇	〇一〇	小山前橋間	六〇〇	四五〇	三三〇	二〇〇
赤羽大宮間	一三〇	〇五〇	〇五〇	〇五〇	〇三〇	前橋高崎間	〇七〇	〇五〇	〇五〇	〇一〇
大宮小山間	三三〇	二六〇	二二〇	一三〇	〇八〇	米原草津間	三四〇	二五〇	二〇〇	一三〇
大宮高崎間	五三〇	四一〇	三三〇	一六〇	一三〇	草津京都間	一六〇	一五〇	一三〇	〇七〇
赤間箱崎間	二〇〇	一五〇	一三〇	〇七〇	〇五〇	四日市草津間	五九〇	四四〇	三三〇	二〇〇
箱崎博多間	〇一五	〇一〇	〇一〇	〇〇五	〇〇三	有年岡山間	四七〇	三三〇	二六〇	一六〇
松山三津間	〇五〇	〇五〇	〇五〇	〇一〇	〇一〇	門司赤羽間	三三〇	二二〇	一六〇	一〇〇
九龜多度津間	〇三〇	〇一〇	〇一五	〇一〇	〇〇五	久留米高瀬間	四一〇	三三〇	二五〇	一五〇
多度津琴平間	〇八〇	〇六〇	〇五〇	〇三〇	〇二〇	一ノ關盛岡間	六七〇	五〇〇	三六〇	二二〇
姫路有年間	一六〇	一五〇	一三〇	〇六〇	〇五〇					

第二類 第一章 第二款 官職 俸給 旅費

三百一

現行日本法令大全

外國旅費規則	明治二十五年五月 附令第十二號
第一條	外國旅費ハ官吏公務ニ依リ外國ニ旅行スルトキ其行 程日數ニ應シ旅行中一切ノ費用ニ充ツル爲メ之ヲ支給ス
第二條	外國旅費ハ船舶料、汽車料、客舍料、食卓料、日當及支 度料ノ六種トス
第三條	客舍料、食卓料、日當、支度料ハ各官等ニ依リ分テ五等 トシ第一號表ニ照シ船舶料、汽車料ハ勅奏到任官ハ一等、備 員ハ二等ノ額ヲ以テ第二號表ニ照シ之ヲ支給ス
第四條	表面外ノ地ニ旅行スルトキ勅奏到任官ハ汽船、汽車賃 ノ一等定價、備員ハ二等定價ヲ支給ス其ニ等ナキ場合ハ一等 ヲ支給ス
汽船、汽車ノ設キキ地方ヲ旅行スルトキハ舟、車、馬賃ノ實費 ヲ支給ス	
定價及實費ヲ支給スル場合ニ於テハ私屬ノ荷物三十五貫目 マテノ運賃ハ官費支給スルコトヲ得	
第五條	前條ノ場合ニ於テハ旅行者ヨリ旅行日記、受取書等精 確ナル證明書ヲ出シシメ之ニ基キ支給スヘシ
旅行者ハ精密ナル旅行日記ヲ作り毎日ノ行程、宿泊ノ場所、 旅店名稱船名、賃銀等ヲ記入スヘシ	
旅行者ハ成ルヘク運輸會社或ハ運輸營業人ノ受取書其他舟、 車、馬賃ノ證明トナルヘキモノヲ取置ヘシ	
第六條	船舶料、汽車料ハ官ヨリ船、車ヲ供スルトキハ之ヲ支 給セズ
第七條	食卓料ハ官ヨリ船舶ヲ供スルモ膳ヲ爲サハルトキニ 限リ航海ノ日數ニ應シ之ヲ支給ス

外國旅費規則

明治二十五年五月
附令第十二號

外國旅費規則左ノ通相定本年七月一日ヨリ施行ス

第一條 外國旅費ハ官吏公務ニ依リ外國ニ旅行スルトキ其行
程日數ニ應シ旅行中一切ノ費用ニ充ツル爲メ之ヲ支給ス

第二條 外國旅費ハ船舶料、汽車料、客舍料、食卓料、日當及支
度料ノ六種トス

第三條 客舍料、食卓料、日當、支度料ハ各官等ニ依リ分テ五等
トシ第一號表ニ照シ船舶料、汽車料ハ勅奏到任官ハ一等、備
員ハ二等ノ額ヲ以テ第二號表ニ照シ之ヲ支給ス

第四條 表面外ノ地ニ旅行スルトキ勅奏到任官ハ汽船、汽車賃
ノ一等定價、備員ハ二等定價ヲ支給ス其ニ等ナキ場合ハ一等
ヲ支給ス

汽船、汽車ノ設キキ地方ヲ旅行スルトキハ舟、車、馬賃ノ實費
ヲ支給ス

定價及實費ヲ支給スル場合ニ於テハ私屬ノ荷物三十五貫目
マテノ運賃ハ官費支給スルコトヲ得

第五條 前條ノ場合ニ於テハ旅行者ヨリ旅行日記、受取書等精
確ナル證明書ヲ出シシメ之ニ基キ支給スヘシ

旅行者ハ精密ナル旅行日記ヲ作り毎日ノ行程、宿泊ノ場所、
旅店名稱船名、賃銀等ヲ記入スヘシ

旅行者ハ成ルヘク運輸會社或ハ運輸營業人ノ受取書其他舟、
車、馬賃ノ證明トナルヘキモノヲ取置ヘシ

第六條 船舶料、汽車料ハ官ヨリ船、車ヲ供スルトキハ之ヲ支
給セズ

第七條 食卓料ハ官ヨリ船舶ヲ供スルモ膳ヲ爲サハルトキニ
限リ航海ノ日數ニ應シ之ヲ支給ス

食卓料ハ客舍料ト重複ニ支給セズ

第八條 客舍料ハ陸地宿泊ノ數ニ應シ之ヲ支給ス

航海途中汽船ノ寄港シタル場合ニ於テ自己ノ便宜ヲ以テ上
陸宿泊スルトキハ客舍料ヲ支給セズ

第九條 日當ハ本邦出發港拔錨ノ日ヨリ本邦歸着港ニ投錨ノ
日マテ日數ニ應シテ支給ス

第十條 支度料ハ各省大臣ニ於テ豫メ旅程ノ遠近、日數ノ多少、
公務ノ性質等ヲ斟酌シ第一號表ニ掲ケル範圍内ニ於テ相當
ノ額ヲ定メ支給スヘシ

支度料ハ本邦ヨリ外國ニ旅行ヲ命シタルトキ之ヲ支給シ其
外國ニ在テ甲國ヨリ乙國ニ旅行ヲ命スルコトアルモ之ヲ支
給セザルモノトス

第十一條 奏任官四等以上ノ者從者ヲ伴ヒ外國ニ旅行スルト
キ從者一人ニ限り願ニ依リ表面二等ノ船舶料、汽車料、表面外
ニ乗ル及五等ノ食卓料ヲ支給スルコトアルヘシ

第十二條 外國ニ旅行ヲ命セラレタル者出發前死去又ハ官ノ
都合ニ由リ旅行ヲ免シタルトキハ支度料ノ半額ヲ支給ス

第十三條 外國旅行中退官ノ者ハ其地ヨリ本邦出發地マテ從
官相當ノ旅費ヲ支給ス但自己ノ便宜又ハ刑事裁判ニ由リ退
官ノ者ハ此限ニアラス

外國旅行中死亡ノ者ハ其地ヨリ本邦出發港マテ從官相當ヲ
以テ第二號表汽車料、船舶料ノ一割増ヲ支給シ第一號表ノ旅
費ハ支給セズ

在外各廳在勤中死亡ノ者モ前項ニ準ス(二十三年十月二十二日勅
令第二百五十九號ヲ以テ
本項ヲ
追加ス)

第十四條 外國旅行中許可ヲ得テ公務ヲ終ルノ後尙私事ノ爲

第二類 第一章 第二款 官職 俸給 旅費

三百一

現行日本法令大全

滞留スルトキ其間ハ一切旅費ヲ支給セズ但病氣ハ此限ニ
 アラス
 許可ヲ得テ私事ノ爲メ迂路ヲ經過スルトキハ其迂路ニ就キ
 メル日若クハ場所ヨリ其再ハ順路ニ就クノ日若クハ場所マ
 ヲハ順路ニ應スル船舶料、汽車料ノ一割増ヲ支給シ日當、客
 舍料ハ支給セズ
 第十五條 第十三條及第十四條ニ據リ死亡者及許可ヲ得テ迂
 路ヲ經過スル者ニ順路船舶料、汽車料ヲ支給スルトキ表面外
 ノ地ニ於テハ陸地ハ一英里ニ付金七錢海路ハ一海里ニ付金
 六錢ノ割ヲ以テ支給ス
 表面外ノ地ノ里程ハ各地運輸會社或ハ各國政府ノ公認セル
 里程表ニ基キ旅行者或ハ遺族ヨリ精確ノ證明書ヲ出サシム
 ルモノトス
 第十六條 傭員中特別ノ取扱ヲ要スル者(傭外國人等)及其他本則ニ
 明文ナキモノ、旅費ハ主任大臣大藏大臣ト協議シ之ヲ定ム

第一號

官級	旅費			客舍料		食卓料	日當	支度料
	等	諸外國	支那國	朝鮮國	支那國			
親任官	一等	八	四七	四四	四四	四四	四七	四四
勅任官	二等	七	四六	四三	四三	四三	四六	四三
奏任官	三等	六	四五	四二	四二	四二	四五	四二
判任官	四等	五	四四	四一	四一	四一	四四	四一
傭員	五等	四	四三	四〇	四〇	四〇	四三	四〇

第十七條 交際官、領事等別段ノ旅費規則アルモノニハ本則ヲ
 適用セズ
 第十八條 各省大臣ハ大藏大臣ト協議シ定額ノ旅費ヲ減少ス
 ルコトヲ得
 附則
 外國旅費ハ內國旅費ト重複ニ支給スルコトナシ
 外國旅行ノ爲メ本邦内ヲ通過シ及出發港ニ滞在スルキハ內
 國旅費規則ニ據リ旅費ヲ支給ス
 出發港後船中後郵船ノ都合ニ由リ本邦内ニ寄港シ上陸滞在
 スルトキハ其間ハ內國旅費規則ニ據リ日當ヲ支給ス
 歸朝ノ際目的ノ港ニ達スヘキ直航船ナキカ爲メ一旦本邦内
 ニ寄港シ其地ヨリ汽船ヲ乗替ルトキハ其寄港シタル日以後
 ニ起ル旅行ハ內國旅費規則ニ據リ旅費ヲ支給ス

第二類 第一章

第二款

官職

俸給

旅費

現行日本法令大全

第二號表ノ甲

汽船賃表

橫濱 香港間	一等	百四圓	八拾三圓貳拾錢
同 柴棍間	一等	百九拾五圓	百五拾六圓
同 新嘉坡間	一等	百九拾五圓	百五拾六圓
同 マニラ間	一等	貳百五拾三圓五拾錢	貳百貳圓八拾錢
同 パタゴイヤ間	一等	貳百四拾七圓	百九拾七圓六拾錢
同 カルカッタ間	一等	三百五拾壹圓	貳百八拾圓八拾錢
同 ボンデチユリ マド ラス間	一等	三百三拾壹圓五拾錢	貳百六拾五圓貳拾錢
同 錫 蘭 コロンボ間	一等	三百拾貳圓	貳百四拾九圓六拾錢
同 亞丁間	一等	三百九拾圓	三百拾貳圓
同 蘇西間	一等	五百七圓	四百五圓六拾錢
同 ホルトサイト間	一等	五百貳拾圓	四百拾六圓
同 不 留 那 塞間	一等	五百三拾九圓五拾錢	四百三拾壹圓六拾錢
同 耳 塞 メルボルン間	一等	四百六拾八圓	貳百八拾六圓
同 プリンデッ ウ エニス間	一等	五百拾三圓五拾錢	貳百九拾貳圓五拾錢
同 シドネー イ 間	一等	四百六拾八圓	貳百八拾六圓
同 サンフランシ スコ 間	一等	三百貳拾五圓	貳百圓

第二類 第一章

第二款

官職

俸給

旅費

現行日本法令大全

第二類 第一章 第二款 官職 俸給 旅費

同 上海間	六拾五圓	三拾九圓
同 天津間	九拾七圓五拾錢	五拾七圓貳拾錢
同 芝罘間	八拾四圓五拾錢	四拾九圓四拾錢
同 元山間	七拾圓貳拾錢	四拾壹圓六拾錢
同 釜山間	五拾五圓貳拾錢	三拾貳圓五拾錢
同 仁川間	七拾圓貳拾錢	四拾壹圓六拾錢
同 浦潮斯德間	八拾八圓四拾錢	五拾貳圓
米國桑港ホノル、間	九拾七圓五拾錢	三拾貳圓五拾錢
米國紐育英國リパノール間	百三拾圓	五拾貳圓
橫濱英國サウスアンプトン間	五百四拾六圓	三百貳拾五圓

第二號表ノ乙 歐米各所汽車賃表

佛國馬耳塞リオン間	拾壹圓貳拾錢	八圓三拾錢
佛國馬耳塞巴里間	貳拾七圓六拾錢	貳拾圓五拾錢
佛國リオン巴里間	拾六圓四拾錢	拾貳圓貳拾錢
佛國巴里英國倫敦間	拾九圓五拾錢	拾四圓六拾錢
佛國巴里和蘭海牙間	拾三圓八拾錢	拾圓拾錢
佛國巴里澳國維也納間	四拾七圓八拾錢	三拾五圓九拾錢

現行日本法令大全

第二類 第一章 第二款 官職 俸給 旅費

佛國巴里伊國羅馬間	五拾五圓七拾錢	四拾圓
佛國巴里伊國ナトブル間	六拾圓六拾錢	四拾三圓四拾錢
佛國巴里瑞西國ベルン間	拾七圓七拾錢	拾三圓三拾錢
佛國巴里瑞典國ストックホルム間	五拾九圓三拾錢	四拾四圓七拾錢
佛國巴里丁抹國コペンハーゲン間	四拾貳圓九拾錢	三拾貳圓
佛國巴里白耳義國ブラセル間	拾圓拾錢	七圓五拾錢
佛國巴里西班牙國マドリット間	五拾壹圓	三拾八圓七拾錢
佛國巴里葡國リスボン間	七拾六圓七拾錢	五拾八圓
佛國巴里那威國クリスチヤンナ間	六拾六圓八拾錢	四拾九圓七拾錢
佛國巴里獨國伯林間	三拾三圓	貳拾四圓貳拾錢
佛國巴里土國コンスタンチノール間	百三拾壹圓六拾錢	九拾八圓
佛國巴里露國彼得堡間	八拾三圓七拾錢	六拾貳圓拾錢
露國彼得堡モスコイ間	貳拾貳圓四拾錢	拾壹圓七拾錢
露國彼得堡オデッサ間	七拾九圓	五拾四圓六拾錢
露國彼得堡アボイ港間	貳拾壹圓四拾錢	拾貳圓七拾錢
露國彼得堡澳國シフコイ間	四拾八圓七拾錢	三拾六圓拾錢
露國彼得堡獨國エードクテン間	三拾圓貳拾錢	貳拾貳圓四拾錢
獨國エードクテン伯林間	拾九圓貳拾錢	拾四圓三拾錢
獨國伯林澳國維也納間	拾九圓八拾錢	拾四圓九拾錢

第二類 第一章 第二款 官職 俸給 旅費

獨國伯林白耳義國ブラッセル間	貳拾四圓八拾錢	拾三圓三拾錢
獨國伯林英國倫敦間	三拾六圓四拾錢	貳拾六圓六拾錢
獨國伯林蘭國アムステルダム間	拾壹圓四拾錢	八圓四拾錢
伊國ナイブル羅馬間	六圓八拾錢	四圓九拾錢
伊國羅馬ウエニス間	拾七圓四拾錢	拾貳圓
伊國ウエニス澳國維也納間	拾八圓七拾錢	拾三圓八拾錢
伊國ウエニス澳國トリノスト間	四圓四拾錢	三圓拾錢
澳國トリノスト維也納間	貳拾四圓八拾錢	拾五圓六拾錢
澳國維也納シラコト間	拾貳圓三拾錢	九圓拾錢
英國倫敦リパブール間	九圓四拾錢	七圓拾錢
英國倫敦サウサンプトン間	五圓	三圓六拾錢
瑞典ストックホルムマルモ間	拾五圓六拾錢	拾壹圓六拾錢
丁抹國コペンハーゲンコルセル間	貳圓九拾錢	貳圓貳拾錢
米國桑港盛頓間	貳百〇四圓拾錢	百三拾六圓五拾錢
米國桑港紐育間	貳百〇四圓拾錢	百三拾六圓五拾錢

○海軍外國旅費定額表及附則

明治二十年十月 海軍省令第二十七號

海軍外國旅費定額表及附則ヲ定ムルコト左ノ如シ
海軍外國旅費定額表

官等	旅費等級	客舍		食卓料	日當	支度料
		支那	朝鮮			
親任官	一等	四七	四四	四壹圓七拾錢	四	四六圓四角以內
將官及同等官	二等	四六	四三	四壹圓五拾錢	三	四四圓四角以內
上長官	三等	四五	四二	四壹圓三拾錢	貳	四三圓五角以內
士官	四等	四四	四一	四壹圓貳拾錢	壹	四貳圓四角以內
准士官	五等	四三	四〇	四壹圓拾錢	零	四圓四角以內
候補士官	六等	四二	三九	四壹圓八拾錢	八	四圓四角以內
下士	七等	四一	三八	四壹圓六拾錢	七	四圓四角以內
卒	八等	四〇	三七	四壹圓四拾錢	六	四圓四角以內

附則
一 文官委任三等以上ハ上長官同四等以下ハ士官判任一等ハ准士官同二等以下ハ下士生徒及傭員ハ卒ニ準シ表面ノ旅費ヲ支給ス
一 船舶料及汽車料ハ本年五月閣令第十二號外國旅費規則第二號表ニ依リ武官准士官及文官判任以上ハ一等ノ額其他ハ總テ二等ノ額ヲ支給ス
一 船舶料及汽車料ノ實費ヲ給スルトキモ亦前項ノ區別ニ從ヒ其一等定價又ハ二等定價ヲ支給ス但二等ナキ場合ニ在テハ總テ一等定價ヲ支給スヘシ
一 將校准將校ノ生徒ニ船舶料及汽車料ノ實費ヲ給スルトキハ一等定價ヲ支給ス
一 傭外國人ハ其身分ノ取扱ニ依リ勅任相當ノ者ハ旅費等級ノ

二等委任相當ノ者ハ同三等判任相當ノ者及判ニ身分取扱ヲ定メサルモ教師ハ同四等ノ額ヲ支給シ其他ハ總テ同七等ノ額ヲ支給ス但船舶料及汽車料ハ判任相當以上ノ者及教師ハ一等其他ハ總テ二等ノ額ヲ支給シ其實費ヲ給スルトキモ亦之ニ準ス
一 在外國ノ我艦船ニ乗組ヲ命シタル者ニハ支度料ヲ支給セス
一 海軍艦船ニテ渡航スルトキハ其艦船乗員ト同一ノ食料ヲ支給シ表面ノ食卓料ハ支給セス
一 行軍及隊伍ノ旅行ハ總テ實費ヲ支給ス單身旅行ト雖モ其職務ヲ帶フル者ハ尙ホ之ニ準ス
一 下士以下四人以上同地ニ旅行セシムルトキ及之ヲ引率セシムル准士官以上ニハ總テ實費ヲ支給ス但特命アル者ハ此限ニ在ラス(二十二年四月二十九日海軍省令第十二號ヲ以テ改正ス) (二十三年二月一日閣令第四十號ヲ以テ本項中改正ス)

一 在留ノ都府若クハ一市内ノ旅行ニハ特令アル者ノ外舟車馬賃ヲ給セス(二十三年二月二十日海軍省達第百二十三號ヲ以テ本項ヲ追加ス)

一 外國航海中陸地療養ノ末歸國若クハ歸艦スル者ニハ總テ實費ヲ給ス犯罪ニ依リ歸國若クハ歸艦スル者モ亦之ニ準ス(二十二年四月二十九日海軍省達第百十二號ヲ以テ本項中追加ス)

一 外國旅行中非職退職或ハ罷役又ハ退役免役トナリ歸國スル者ハ總テ選官者歸國ノ例ニ依ル

一 旅費支給應ノ區別ハ海軍内國旅費規則第三十二條以下ノ例ニ依ル(二十三年二月一日海軍省達第百四十九號ヲ以テ本項中改正ス)

一 旅行中任官進級等ニ依リ旅費等級變シタルトキハ准士官以上及文官ニハ辭令書日付ノ當日ヨリ相當ノ旅費ヲ給シ下士卒及雇員以下ニハ辭令書本人ニ到達ノ日ヨリ相當ノ旅費ヲ給ス(二十三年二月一日海軍省達第百四十九號ヲ以テ本項中改正ス)

一 前各項ニ該當スルモノ、外ハ總テ本年五月開令第十二號外國旅費規則ノ支給法ニ依ルモノトス

○旅費其外概算渡前金渡ノ件

明治二十二年十一月 勅令第百二十一號

朕旅費其外概算渡前金渡ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 内國及外國出張ヲ命シタル者ノ旅費ハ旅行ノ見積リ行程及日數ニ依リ概算渡ヲ爲スコトヲ得

第二條 外國留學ヲ命シタル者ニ支給スル學資金及諸手當ハ給額半箇年分以内ニ於テ前金渡ヲ爲スコトヲ得

第三條 地方稅ノ補助トシテ國庫ヨリ支出スル府縣警察費連帶支辨金ハ豫算ニ依リ概算渡ヲ爲スコトヲ得

第四條 本令ハ明治二十三年四月一日ヨリ施行ス

○帝國議會議長副議長議員歲費及旅費支給規則

明治二十三年十月 勅令第百六十三號

朕帝國議會議長副議長議員歲費及旅費支給規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

帝國議會議長副議長議員歲費及旅費支給規則

第一條 帝國議會議長副議長及議員ノ歲費ハ毎年七月ヨリ翌年六月ニ至ル十二箇月ヲ以テ一歲トシ計算ス

第二條 議長副議長及議員ノ歲費ハ其ノ前六箇月分ヲ帝國議會通常會開會ノ後三十日以内ニ其ノ後六箇月分ヲ閉會ノ後七日以内ニ支給ス

第三條 議長副議長ノ歲費ハ其ノ勅任セラレタル當月分ヨリ支給ス

議長副議長ニ勅任セラレタル議員ノ歲費ハ其ノ勅任セラレタル前月分マテ支給ス

第四條 貴族院勅任議員ノ歲費ハ其ノ勅任セラレタル當月分ヨリ支給ス(二十四年勅令第百七十號ヲ以テ但書刪除)

第五條 議長副議長及議員退職辭職除名ノ場合ニ於テハ其ノ當月分マテ支給ス

第六條 衆議院解散ヲ命セラレタルトキハ其ノ議長副議長及議員ノ歲費ハ解散ヲ命セラレタル當月分マテ支給ス

第七條 衆議院解散ヲ命セラレタル後選舉セラレタル議員及補缺議員ノ歲費ハ其選舉セラレタル當月分ヨリ支給ス

第八條 衆議院ノ議員貴族院ノ議員トナリタルトキ其ノ他如

何ナル場合ヲ問ハス歲費ハ同一人ニ對シ重複支給セス

第九條 官吏ニシテ議員タル者官吏ヲ罷メタルトキハ其ノ當月分ヨリ議員ニシテ官吏ニ任セラレタル者仍議員タルトキハ其ノ當月分マテ支給ス

第十條 議長副議長及議員ノ旅費ハ別表定ムル所ニ從ヒ之ヲ支給ス官吏ニシテ議員タル者亦同シ

上京旅費ハ歲費ノ前半額ト歸郷旅費ハ歲費ノ後半額ト同時ニ之ヲ支給ス

第十一條 旅費ハ當選區ノ何地ニ在ルヲ問ハス其住居地ヨリ直路ノ里程ヲ計算シテ之ヲ支給ス

第十二條 議院ヲ距ル三里以内ノ地ニ住居スル者ハ何地ノ議員タルヲ問ハス旅費ヲ支給セス

第十三條 汽車旅行ハ一日二百哩計汽船旅行ハ一日百海里計陸路旅行ハ一日十二里計ノ割合ヲ以テ直路ノ行程ニ應シ日當ヲ支給ス但シ一日ノ行程ニ滿テサル端數ハ切捨トス

第十四條 召集ニ應ヒサル議員ニハ事故ノ如何ヲ問ハス旅費ヲ支給セス

旅費表 (二十四年勅令第百七十號)

汽車一哩ニ付	汽船一海里ニ	車馬一里ニ付	日當
六錢五厘七	錢拾八	錢貳	圓

第三款 任免

○文官試驗試補及見習規則 明治二十七年七月 勅令第三十七號

朕文官試驗試補及見習規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

文官試驗試補及見習規則

第一 通則

第一條 本令ニ於テ文官ト稱スルハ奏任判任ノ文官ヲ總稱シ試補ト稱スルハ勅令第十三號學位令ニ依リ法學博士文學博士ノ學位ヲ受ク又ハ法科大學文科大學及舊東京大學法學部文學部ヲ卒業シ又ハ高等試驗ヲ經當選シテ高等官ノ實務ヲ練習スル者ヲ云ヒ見習トハ官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校及帝國大學ノ監督ヲ受クル私立法學校及司法省舊法學校ノ卒業證書ヲ有シ及普通試驗ヲ經當選シテ判任官ノ事務ヲ練習スル者ヲ云フ

本令ニ於テ司法官ト稱スルハ裁判官及檢察官ヲ總稱ス

第二條 第三條第四條ニ掲ケルモノヲ除クノ外本令ニ依リ定規ノ試驗ヲ經當選シタル者ニアラザルハ試補及見習ニ任命スルコトヲ得ス又實務練習ヲ終リタル者ニアラザルハ本官ニ任スルコトヲ得ス

第三條 三年以上分科大學ノ教授ニ任シタル者ハ高等試驗及實務練習ヲ要セス直ニ本官ニ任シ法學博士文學博士ノ學位ヲ受ケタル者又ハ法科大學文科大學及舊東京大學法學部文學部ノ卒業生ハ高等試驗ヲ要セス試補ニ任スルコトヲ得

司法官タルノ資格ヲ有スル者ニシテ他官ヨリ司法官ニ轉スルトキ又ハ司法官タルノ資格ヲ有シ三年以上代官人タル者ハ實務練習ヲ要セス直ニ本官ニ任スルコトヲ得

第四條 官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校及帝國大學ノ監督ヲ受クル私立法學校及司法省舊法學校ノ卒業證書ヲ有スル者ハ普通試驗ヲ要セス判任官見習ヲ命ス

ルコトヲ得

第五條 試験ヲ分テ高等試験普通試験ノ二種トス
 高等試験ハ試験ニ任用セラシメテ望ム者ノ爲ニシテ普通
 試験ハ判任官見習ニ任用セラシメテ望ム者ノ爲ニス

第六條 試験ハ筆記口述ノ二様トス筆記試験ニ落第シタル者
 ハ口述試験ヲ受クルコトヲ得ス

第七條 試験ハ筆記口述ノ二様ニ就キ各科目ノ點數ヲ合算シ
 タル一定ノ平均點數ヲ以テ合格ヲ定メ時々官廳ノ需要ニ應
 ジ人員ヲ限リ内閣ニ於テ合格者中ヨリ選拔シテ當選者ヲ定
 ム但一科目ニ付一モ點數ナキ者ハ合格者トスルコトヲ得ス

第八條 前條ノ選拔ニ當ラサル者ハ合格者ト雖モ再ヒ文官ノ
 任用ヲ望ムトキハ更ニ本令ニ依リ試験ヲ受クヘシ

第九條 試験ニ必要ノ参考書類及紙墨ハ試験室ニ備ヘ置キ受
 験人ノヲ携帶スルコトヲ許サス

第十條 試験當選者ノ姓名ハ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第十一條 第九條ヲ犯シ若クハ不正ノ方法ヲ以テ當選シ他日
 其事ノ發覺シタルトキハ當選ノ効ナキモノトス

第十二條 第九條ヲ犯シタル者及第十一條ノ處分ヲ受ク又ハ
 不正ノ方法ヲ以テ當選セント企テタル者ハ再ヒ試験ヲ受ク
 ルコトヲ得ス

第十三條 第十八條第二十三條第三十三條第三十六條ノ履歷
 書中事實ヲ隱匿シ又ハ之ヲ偽リタル者ハ試験ヲ受クルコト
 ヲ得ス

第十四條 試験ニ關スル細則ハ閣令ヲ以テ之ヲ定ム

第十五條 本令施行ノ後五箇年間に事務練習中ト雖モ本官ノ
 缺アルトキハ其練習ノ満期ヲ待スシテ本官ニ任スルコトヲ

ルヘシ

五箇年以上奏任官ヲ勤メタル者ニシテ高等試験ヲ經營選シ
 タル者ハ事務練習ヲ要セス直ニ本官ニ任スルコトヲ得

第二 高等試験

第十六條 高等試験ハ各官廳ノ須要ニ從ヒ時々東京ニ於テ試
 験委員之ヲ行フ其期日及場所ハ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第十七條 高等試験ヲ受クルコトヲ得ル者左ノ如シ

一 丁年以上ノ男子

一 外國ニ於テ大學校又ハ之ト同等ナル學校ノ卒業證書ヲ
 有シ又ハ三年以上其學科ヲ修學シタル旨ヲ證明スル證
 書ヲ存スル者

一 文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學政治學又ハ
 理財學ヲ教授スル私立學校ノ卒業證書ヲ有スル者

一 高等中學校及東京商業學校ノ卒業證書ヲ有スル者

一 五箇年以上奏任官ヲ勤メタル者

第十八條 試験願書ハ其時々官報ヲ以テ公告スル期日前ニ左
 ノ證書ヲ取添之ヲ試験委員長ニ差出スヘシ

一 出願者ノ履歷書

一 第十七條ニ掲ケル卒業證書及修學證書ノ寫

一 身分職業年齡及兵役ニ關スル區戸長ノ證書

第十九條 高等試験ノ科目ハ試験ヲ行フ年毎ニ司法官又ハ行
 政官ノ別ニ依リ各官廳所掌ノ事務ヲ斟酌シテ文官試験局長
 官之ヲ選定シ試験ノ期日三箇月前ニ官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第二十條 第三條第四條ノ資格ヲ具スル者ヲ除クノ外教官技
 術官其他特別ノ學術技能ヲ要スルモノハ別段ノ試験法ヲ定
 ムルマテ各官廳ノ需要ニ從ヒ試験ヲ經スシテ之ヲ任用スル

コトヲ得

第三 試補

第二十一條 試補ハ所屬大臣ノ指命スル所ニ就キ定限ヨリ短
 カラサル期間間事務ヲ練習スヘシ

第二十二條 各官廳試補ノ定員ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第二十三條 法學博士文學博士ノ學位ヲ受ケタル者又ハ法科
 大學文科大學及舊東京大學法學部文學部ノ卒業生ニシテ行
 政官又ハ司法官ノ試補ヲラシムコトヲ望ム者ハ左ノ書類ヲ取
 添其旨ヲ文官試験局長官ニ出願スヘシ(二十一年十二月二十八日
 附令第九十八號ヲ以テ之ヲ
 添テ下ニ添テ試驗期日三十
 日前三ノ十二ノ字ヲ附ス)

一 出願者ノ履歷書

一 學位又ハ卒業證書ノ寫

一 身分年齡

第二十四條 行政官ノ試補ハ便宜ニ從ヒ少クモ一箇年半年ハ地
 方官廳一箇年半年ハ中央官廳ニ於テ其事務ヲ練習スヘシ

第二十五條 司法官ノ試補ハ便宜ニ從ヒ少クモ一箇年半年ハ治
 安裁判所一箇年半年ハ始審裁判所ニ於テ其事務ヲ練習スヘシ

第二十六條 試補ハ所屬大臣ノ指命スル所ニ就キ事務ヲ練習
 スルニ付テハ其主務長官ノ指揮監督ヲ受クヘシ

第二十七條 主務長官ハ事務練習ノ終ニ於テ試補練習ノ功程
 ヲ所屬大臣ニ具シ其意見ヲ提出スヘシ

第二十八條 所屬大臣ハ練習期限中ト雖モ試補官吏ニ必要ナ
 ル品位ヲ失ヒタルモノト認ムルトキハ試補ヲ免スヘシ

第二十九條 在職ノ判任官ニシテ高等試験ヲ經營選シタル者
 ハ事務練習ヲ要セス缺員アル場合ニ於テハ直ニ本官ニ任ス
 ルコトヲ得

第三十條 試補ノ命ヲ承ケ所屬大臣ノ指命スル所ニ就キ事
 務ヲ練習セサル者ハ試補ヲ免スヘシ

第四 普通試験

第三十一條 中央官廳ニ於テ要スル判任官ノ普通試験ハ各官
 廳ノ普通試験委員之ヲ行フ其期日場所ハ時々各官廳ヨリ官
 報ヲ以テ之ヲ公告ス

第三十二條 地方官廳ニ於テ要スル判任官ノ普通試験ハ又官
 廳ノ需ニ應シ府縣ノ普通試験委員之ヲ行フ其期日場所ハ時
 々普通試験委員長ヨリ新聞紙又ハ其他ノ方法ヲ以テ之ヲ公
 告ス

第三十三條 試験願書ハ本人自ラ之ヲ認メ其時々公告スル期
 日前ニ左ノ證書ヲ取添之ヲ普通試験委員長ニ差出スヘシ

一 出願者ノ履歷書

一 身分職業年齡及兵役ニ關スル區戸長ノ證書

第三十四條 普通試験ノ科目ハ各官廳所掌ノ事務ヲ斟酌シテ
 普通試験委員之ヲ選定シ文官試験局長官ノ認可ヲ經テ試験
 ノ期日一箇月前ニ官報又ハ其他ノ方法ヲ以テ之ヲ公告スヘ
 シ

第五 判任官見習

第三十五條 各官廳ハ其需要ニ從ヒ官立府縣立中學校又ハ之
 ト同等ナル官立府縣立學校及帝國大學ノ監督ヲ受クル私立
 法學校又ハ司法省發法學校ノ卒業證書ヲ有シ及普通試験ニ
 及第シタル者ニ判任官見習ヲ命スヘシ

判任官見習ヲ命セフシタル者ハ所屬長官ノ指命スル所ニ就
 キ二箇年ヨリ短カラサル期間間事務ヲ練習シ判任官ノ缺員
 ヲ待テ本官ニ任セラルヘシ

第三十六條 官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校及帝國大學ノ監督ヲ受クル私立法學校又ハ司法省舊法學校ノ卒業證書ヲ有シ判任官見習ヲシテコトヲ望ム者ハ普通試驗期日三十日前ニ左ノ書類ヲ添ヘ主務官廳ニ出願スヘシ

一 出願者ノ履歷書

一 卒業證書ノ寫

一 身分職業年齢及兵役ニ關スル區戶長ノ證書

第三十七條 所屬長官ハ判任官見習官吏ニ必要ナル品位ヲ失ヒタル者ト認ムルトキハ判任官見習ヲ免スルコトヲ得

第三十八條 本令施行ノ前二箇年以上各官廳ニ於テ雇員トナルコトヲシテ事務ニ熟練シタル者ト本屬長官ニ於テ認ムルトキハ試驗ヲ要セス直ニ判任官ニ任スルコトヲ得

第三十九條 本令ハ明治二十一年一月ヨリ施行ス

○文官試驗試補及見習規則ニ關スル

細則 明治二十年七月 附令第十八號

勅令第三十七號文官試驗試補及見習規則ニ依リ細則ヲ定ムルコト左ノ如シ

文官試驗試補及見習規則ニ關スル細則

第一條 高等試驗ハ左ノ科目中司法官ハ五科目以上行政官ハ三科目以上ヲ以テ試驗ヲ行フノ定限トシ試驗ノ期日及場所ト共ニ三箇月以前ニ文官試驗局長官官報ヲ以テ之ヲ公告ス
(二十年七月二十日附令第二十號ヲ以テ第二項ヲ削除ス)
一 民法

- 二 訴訟法
- 三 刑法
- 四 治罪法
- 五 商法
- 六 憲法
- 七 行政
- 八 財政
- 九 理財
- 十 國際法

第二條 (同上ヲ以テ本條ヲ削除ス)

第三條 高等試驗ハ國語及漢字交リノ文ヲ以テ之ヲ行フ特ニ外國語及外國文ヲ以テ試驗ヲ受クシコトヲ願フ者ハ豫メ文官試驗局長官ノ許可ヲ受クヘシ

第四條 勅令第三十七號文官試驗試補及見習規則第三條ノ資格ヲ具スル者ヲ除クノ外教官技術官其他特別ノ學術技能ヲ要スル者ノ試驗ヲ爲ストキハ其試驗ノ科目ハ試驗ノ期日及場所ト共ニ三箇月以前ニ文官試驗局長官官報ヲ以テ之ヲ公告ス

第五條 高等試驗ハ勅委任官ニシテ文官試驗局長ノ許可ヲ得タル者ノ外傍聽ヲ許サス

第六條 筆記試驗ハ受驗人總員ヲ一室又ハ數室內ニ閉鎖シ一室毎ニ試驗委員一名監視シテ之ヲ行フヘシ但受驗人一名ナルトキハ試驗委員二名監視スルヲ要ス

第七條 筆記試驗ノ問題ハ試驗局長官定ムル所ノ方法ニ依リ各受驗人ヲシテ之ヲ知悉セシメ豫定ノ時間内ニ答辯書ヲ差出サシムヘシ

第八條 筆記試驗ノ問題ノ數ハ各科目ニ付試驗委員ノ職定シタル所ニ依ル

第九條 試驗室ニ備ヘ置クヘキ必要ノ參考書類ハ法律類集官報其他公然ノ法章ニ限ル

第十條 口述試驗ハ筆記試驗ヲ終リタル後試驗委員長ノ上席ヲ以テ試驗委員半數以上ノ列席ニ於テ受驗人一名毎ニ試問シテ即時答辯ヲ爲シムヘシ(二十年七月二十日附令第二十號ヲ以テ本條中改正ス)

第十一條 口述試驗ハ受驗人ニ付半時間以上一時間以内トス
第十二條 高等試驗ハ受驗人ノ果シテ學理上ノ原則ニ通曉スルヤ現行ノ法律命令ヲ解得スルヤ又法律命令ヲ實務ニ應用シ及之ヲ口述スルニ確實敏捷ナルヤ否ヲ試驗スルヲ以テ目的トスヘシ

第十三條 高等試驗ヲ經タル各科目ノ點數及其全體ノ效果ニ關シ合格者ヲ定ムルハ試驗委員ノ議定シタル平均點數ニ依ル

第十四條 當選者ハ各合格者ニ就キ試驗委員長ノ具狀スル所ニ依リ各官廳ノ需要ニ應ジ人員ヲ限リ内閣ニ於テ之ヲ定ム
第十五條 前條ノ合格者中ヨリ當選者ヲ查定スルハ其試驗ヲ行ヒタル日ヨリ四週間以内ニ之ヲ結了シ官報ヲ以テ其姓名ヲ公告スヘシ

第十六條 試驗委員長ハ試驗委員ノ職務ニ屬スル職決ノ數ニ入ラス若シ其議決ニ關シ試驗委員ノ說可否相半スルトキハ試驗委員長ノ定ムル所ニ依ル

第十七條 受驗人ハ其試驗ヲ受クルノ際試驗手續ニ關スル規則及試驗委員ノ命令ヲ遵守スヘシ犯ス者ハ監視ノ試驗委員ニ於テ退室ヲ命シタルノ後之ヲ試驗委員長ニ報告シ其試驗

ヲ拒ムコトヲ得
第十八條 高等試驗ノ手續ニ關スル細目ハ文官試驗局長官ノ定ムル所ニ依ル

第十九條 普通試驗ニ關スル細則ハ文官試驗局長官ノ認可ヲ經各官廳ノ普通試驗委員ノ定ムル所ニ依ル

○高等試驗手續 明治二十年十二月二十六日文官試驗局長官官報
高等試驗手續左ノ通相定

高等試驗手續

第一條 文官試驗試補及見習規則第十八條ノ試驗願書ハ書式ニ從ヒ試驗期日二十日前迄ニ差出スヘシ其履歷書ニハ生年月住所ノ移動學事及職業ノ經歷實罰身代限ノ有無等ヲ詳記シ品行ニ關スル證書アラハ其寫ヲ添ヘシ

第二條 外國ノ大學校又ハ之ト同等ナル學校ノ卒業證書ヲ有シ又ハ三年以上其學科ヲ修メタル旨ヲ證明スル書類ヲ有スル者ハ内閣若シハ外國ニ於テ修メタル大學豫備ノ學科又ハ其他特ニ修メタル學科アルトキハ之ヲ履歷書中ニ詳記シ證書アラハ其寫ヲ添ヘシ

第三條 高等中學校及高等商業學校(舊東京商業學校)ノ卒業證書ヲ有スル者別ニ法律政治又ハ理財ノ學科ヲ修メタルキハ之ヲ履歷書中ニ詳記シ證書アラハ其寫ヲ添ヘシ

第四條 五箇年以上委任官ヲ勤メタル者法律政治又ハ理財ノ學科及之ニ要スル豫備ノ學科ヲ修メタルトキハ之ヲ履歷書中ニ詳記シ證書アラハ其寫ヲ添ヘシ

第五條 兵役ニ關スル區戶長ノ證書ハ免役及猶豫ヲ證明シタ

ル者タルヘシ
 第六條 試験出願者文官試験局ニ於テ定メタル日時ニ出席セサルトキハ当期ノ試験ヲ受クルコトヲ得ス
 第七條 受験人多クシテ同日ニ試験ヲ施行スル能ハサルトキハ試験委員ニ於テ試験期日ヲ異ニスルコトヲ得ヘシ
 第八條 高等試験ノ科目ハ文官試験局長官各官廳ノ須要ニ從ヒ所定ノ科目中ヨリ之ヲ定メテ公告スルモノトス
 第九條 試験委員ハ受持試験ノ三日前ニ筆記試験問題ヲ試験委員長ニ差出スヘシ
 第十條 試験ハ午前九時ニ始リ正午ニ終ル試験室ハ九時十分前ニ開キ九時ニ閉ツルモノトス但口述試験ハ午後ニ亘ルコトアルヘシ
 第十一條 文官試験局ハ受験人名簿ヲ調製シ各受験人ノ番號ヲ定メテ記入シ之ヲ受験人ニ通知スルモノトス
 第十二條 試験委員ハ筆記試験ノ終リタル後二週間以内ニ答辯書ヲ添ヘテ試験成績ノ報告ヲ試験委員長ニ差出スヘシ
 第十三條 試験委員ハ口述試験ヲ終リタル後三日以内ニ試験成績ノ報告ヲ試験委員長ニ差出スヘシ
 第十四條 各科目ノ點數ハ一百ヲ以テ滿點トシ各科目ノ點數ヲ通計シ得ル所ノ和ヲ科目ノ數ヲ以テ除シ得タルモノヲ平均點數トス平均點數ハ六十點ヲ以テ最下限トス但一科目ノ點數五十ニ達セサル者ハ合格者トスルコトヲ得ス
 第十五條 高等試験ハ通常毎年十月ニ於テ之ヲ施行スルモノトス
 第十六條 受験人ハ試験時間中退室スルコトヲ得ス退室シタルトキハ当期ノ試験ヲ受クルヲ得サルモノトス

第十七條 受験人ハ室内ニ在リテ靜肅ヲ旨トシ舉措進退總テ試験委員ノ指揮ニ遵フヘシ
 第十八條 受験人ハ試験問題ニ就キ試験委員ニ質問スルコトヲ得ス
 第十九條 受験人ハ午前八時三十分マテニ受験人控所ニ參集シ當日ノ試験ヲ了リタル後ハ直ニ退出スヘシ
 第二十條 答辯書ハ其主意ヲ明瞭ニ記載シ文字ハ楷書若クハ行書ニテ分明ニ記スヘシ
 第二十一條 受験人ハ試験答辯書ニ豫定ノ番號ヲ記スヘシ其姓名ヲ掲クルコトヲ得ス
 第二十二條 受験人ハ書類ヲ携帶シテ室内ニ入ルコトヲ得ス(書式略之)
 ○文官試験方 明治二十三年二月 勅令第八號
 朕文官試験ノ件ヲ裁可シ之ヲ公布セシム
 第一條 前ニ奏任文官ヲ勤メタル者及滿三年以上判任文官ヲ勤續シタル者ハ明治二十年勅令第三十七號ニ依リ高等試験ヲ受クルコトヲ得
 第二條 明治二十年勅令第三十七號ニ依リ高等試験ヲ受ケテ合格シタル者ハ文官試験局長官ヨリ高等試験合格證書ヲ付與スヘシ
 高等試験合格證書ヲ得タル者ハ官廳ノ需要アルニ當リ高等官試験ニ任スルコトヲ得
 第三條 滿三年以上奏任文官ヲ勤メ退官シタル者及滿五年以上判任文官ヲ勤メ退官シタル者ハ試験及事務練習ヲ要セス

シテ前官同等者ハ其ノ以下ノ文官ニ任スルコトヲ得
 第四條 奏任又ハ判任ノ文官ヨリ轉任シタル官立學校ノ教官及府縣立學校ノ職員ハ更ニ前官同等者ハ其ノ以下ノ文官ニ轉任スルコトヲ得
 第五條 各官廳ハ其ノ需要ニ從ヒ官立府縣立中學校又ハ此ト同等ナル官立府縣立學校及特別認可學校又ハ司法省舊法學校ノ卒業證書ヲ有スル者又ハ明治二十年勅令第三十七號ニ依リ普通試験ニ及第シタル者ヲ擧ゲテ直チニ判任文官ニ任スルコトヲ得
 第六條 試験ハ本邦ノ成法慣例及一般ノ學理ヲ以テ問題ト爲スヘシ但シ受験者應答ヲ爲スニ當リ外國ノ法例ヲ參照ニ引擧スルコトヲ得
 特別ノ必要ニ依リ外國語ヲ試験問題ト爲スハ前項ノ限ニ在ラス
 第七條 本令ハ明治二十年勅令第三十七號第二十條ニ依リ試験ヲ經スシテ任官シタル者並ニ明治二十一年以後郡區長ノ試験ニ及第シテ任官シタル者ニ適用セス
 ○文官試験補及見習ノ待遇並ニ任用方 明治二十年十一月 勅令第五十七號
 朕試験補及見習ノ待遇並ニ任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 本年七月勅令第三十七號文官試験補及見習規則ニ據リ試験補見習ヲ命セラル者ノ待遇ハ試験補ヲ委任トシ見習ヲ判任トス

同則ニ據リ試験補及見習ヲ本官ニ任用スルニハ試験補ハ奏任官四等以下トシ見習ハ判任官五等以下トス
 ○文官試験補及見習規則中司法省舊法學校正則卒業生ニ關スル規定 明治二十年十二月 勅令第二十號
 明治二十年七月勅令第三十七號文官試験補及見習規則第一條第三條及第二十三條中舊東京大學法學部卒業生ニ關スル規定ハ司法省舊法學校正則卒業生ニモ適用スルモノトス
 ○判任官高等試験ヲ受クル者 明治二十年十二月 勅令第六十四號
 朕判任官高等試験ヲ受クルコトヲ得ルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 本年七月勅令第三十七號文官試験補及見習規則施行ノ後五箇年間に五箇年以上官務ニ從事シ判任官五等以上ニ敘セラシタル者ハ同則第十七條第五項ニ準シ高等試験ヲ受クルコトヲ得其當選シタル者ノ本官ニ任スルハ同則第二十九條ニ據ル
 ○在職判任官ニシテ高等試験ノ當選者本官ニ任用年限 明治二十年十一月 勅令第二十三號
 本年七月勅令第三十七號文官試験補及見習規則第二十九條在職判任官ニシテ直ニ本官ニ任スルヲ得ル者ハ在職三年ニ滿ル者ニ限ル若三年ニ滿サル者ハ先試験補ニ任用シ前後ヲ通算シテ三年ニ滿ルヲ待テ本官ニ任スルモノトス

現行日本法令大全

○高等商業學校主計專修科ノ卒業生
判任官見習ニ任用方
明治二十二年三月
高等商業學校主計專修科ノ卒業證書ヲ有スル者ハ普通試験ヲ要セス各官廳判任官見習ヲ命スルコトヲ得

○特別認可學校卒業生判任官見習ニ
任用方
明治二十二年十月
開令第二十六號

文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學政治學又ハ理財學ヲ教授スル私立學校ノ卒業證書ヲ有スル者ハ普通試験ヲ要セス各官廳判任官見習ヲ命スルコトヲ得

○教官技術官ノ資格ヲ有スル者行政
官ニ任用方
明治二十年十一月
勅令第五十八號

朕教官技術官ノ資格ヲ有スル者ヲ以テ行政官ニ任用スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
各般ノ學務及特別ノ學術技藝ニ關スル行政官ハ教官技術官ノ資格ヲ有スル者ヲ以テ之ニ任用スルコトヲ得

○技術官及特別ノ學術技藝ヲ要スル
者任用例規
明治二十年十二月
開令第二十八號

本年七月勅令第三十七號文官試驗試補及見習規則第二十條ニ據リ別段ノ試験法ヲ定ムルマテハ技術官及特別ノ學術技藝ヲ要スル者ヲ任用スルニハ左ノ例規ニ依ルヘシ
一 奏任官ハ本則第三條ニ準シ各種ノ學術技藝ニ就キ一定

ノ資格アル者又ハ第十七條ニ準シ其經歷ニ依リ相當ノ資格アリト認めヘキ者ヲ選ヒ本人ノ履歷學術技藝ニ關スル證書ノ寫身分年齡等ノ書類ヲ添ヘ文官高等試驗委員ノ銜ヲ經各省大臣ヨリ奏問ノ手續ニ及フヘシ(二十年三月開令第二號)

一 判任官ハ本則第四條ニ準シ各種ノ學術技藝ヲ修メ一定ノ資格アル者ヲ命シ其他ノ者ハ經歷ニ依リ相當ノ資格アリト認めヘキ者ヲ選ヒ本人ノ履歷學術技藝ニ關スル證書ノ寫身分年齡等豫メ普通試驗委員長ノ調査ヲ經テ之ヲ命スヘシ

本年七月勅令第三十七號文官試驗試補及見習規則其他之ニ關スル法令中試驗ニ關スル條項ノ外通則試補判任官見習ニ就キ規定シタルモノハ技術官及特別ノ學術技藝ヲ要スルモノニモ適用スルモノトス

○技術官任用方
明治二十四年九月
勅令第九十一號

朕技術官タルノ資格ヲ有スル者ヲ直チニ本官ニ任用スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
技術官タルノ資格ヲ有スル者ハ實務練習ノ必要ナシト認めル場合ニ限り直チニ本官ニ任用スルコトヲ得

○高等試驗及實務練習ヲ要セス司法
官ニ任スルノ件
明治二十年七月
開令第十九號

四箇年以上裁判官檢察官ノ職ヲ奉シ他ニ轉官シ又ハ四箇年以上舊參事院議官又ハ議官補ノ職ヲ奉シタル者四箇年以上司法

現行日本法令大全

省ノ民事局長刑事局長又ハ參事官ノ職ヲ奉シタル者及代官人試驗ニ及第シ五箇年以上代官人タル者ハ當分ノ内高等試驗及實務練習ヲ要セス司法官ニ任スルコトヲ得

○學習院卒業生任用方
明治二十五年三月
勅令第二十四號

朕學習院卒業生高等試驗並ニ任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
學習院高等學科卒業證書ヲ有スル者ハ明治二十年勅令第三十七號ニ依リ高等試驗ヲ受クルコトヲ得
前項ノ卒業證書ヲ有スル者及學習院中等學科卒業證書ヲ有スル者ハ判任官見習ヲ命シ又ハ直チニ判任文官ニ任スルコトヲ得

○東京農林學校及舊駒場農學校卒業
生任用方
明治二十二年十月
二十三年六月勅令第
九十二號ヲ以テ東京
農林學校ヲ帝國
大學分科トス

朕東京農林學校及舊駒場農學校卒業生任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
東京農林學校及舊駒場農學校本科卒業生ハ高等試驗ヲ要セス其修メタル學科ニ關スル行政官試補ニ同校別科、舊速成科、舊簡易科、及舊駒場農學校別科卒業生ハ普通試驗ヲ要セス其修メタル學術ニ關スル判任官見習ニ採用スルコトヲ得

○札幌農學校卒業生任用方

朕札幌農學校卒業生任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
札幌農學校農學科及工學科卒業生ハ高等試驗ヲ要セス其修メタル學科ニ關スル行政官試補ニ採用スルコトヲ得

明治二十二年十二月
勅令第三十七號

朕札幌農學校卒業生任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
札幌農學校農學科及工學科卒業生ハ高等試驗ヲ要セス其修メタル學科ニ關スル行政官試補ニ採用スルコトヲ得

○外務省留學生高等官ニ任用方
明治二十五年三月
勅令第三十一號

朕外務省留學生任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
第一條 外務省留學生ニシテ自耳義國大學校ニ於テ外交學科ヲ修メ外交官合格試驗及第證書ヲ有スル者ハ高等試驗ヲ要セス文官高等試驗委員ノ銜ヲ經テ外務省試補ヲ命シ事務練習ノ後外務省高等官及ヒ外交官ニ任用スルコトヲ得
第二條 前條ニ依リ任用シタル外務省高等官及ヒ外交官ハ高等試驗ヲ經ルニ非ザルハ其他ノ高等官ニ轉任スルコトヲ得

○外務省派遣清國留學生判任官ニ任
用方
明治二十二年二月
開令第五號

外務省派遣清國留學生卒業者ニシテ在清國公使領事館又ハ在香港領事館附屬學生ト爲リ事務ヲ練習シタル者ハ直ニ同省判任官ニ任スルコトヲ得

○副領事特別任用令
明治二十五年二月
勅令第十三號

朕副領事特別任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

副領事特別任用令

第一條 領事常書記生ニシテ二級以上ノ俸給ヲ受ク引續三箇年以上領事代理ヲ勤務シ功績顯著ナル者ハ高等試験ヲ要セ
 第二條 前條ニ依リ副領事ニ任用セラレタル者ハ高等試験ヲ經シテ領事ニ陞任スルコトヲ得
 第三條 本令ニ依リ任用シタル領事及副領事ハ高等試験ヲ經ルニアラザレハ他ノ高等官ニ轉任スルコトヲ得ス

朝鮮國在勤警部巡查任用及支給規則

明治二十五年二月 勅令第十四號

朕茲ニ朝鮮國在勤警部巡查任用及支給規則ヲ裁可ス

朝鮮國在勤警部巡查任用及支給規則
 第一條 朝鮮國在勤警部及巡查ハ外務大臣之ヲ任命ス
 第二條 朝鮮國在勤警部ノ任用ハ一般任用官ノ任用法ニ從テ
 朝鮮國在勤巡查ノ任用法ハ外務大臣之ヲ定ム
 第三條 朝鮮國在勤警部及巡查ハ同國駐劄帝國公使又ハ同國各地駐在帝國領事又ハ其代理者ノ指揮監督ニ屬ス
 第四條 朝鮮國在勤警部及巡查ハ引續三箇年間勤務スヘキモノトス
 傷痕若クハ疾病ニシテ職務ニ從事スルコト能ハサルモノト認ムルトキハ外務大臣ハ前項ノ期限ニ拘ラス其辭職ヲ許可スルコトヲ得
 第五條 朝鮮國在勤警部巡查三箇年以上勤績シタルトキハ外務大臣ハ公務差支ナキ場合ニ限り本人ノ願ニ依リ往復日數ヲ除キ警部ハ三箇月巡查ハ二箇月以內賜暇歸朝ヲ許可スルコトヲ得

第六條 朝鮮國在勤巡查ニシテ其職務執行ニ關スル規則又ハ上官ノ命令ニ違背シ又ハ職務上怠慢アルトキハ公使又ハ領事ニ於テ其情狀ヲ審察シ月俸百分ノ一以上一箇月以下ノ罰俸ヲ科ス但犯狀最モ輕キ者ハ譴責ニ止ム
 第七條 前條ニ依リ罰俸ヲ科シタルトキハ月俸三分ノ一以內ノ額ヲ毎月俸給ヨリ控除シテ完納セシム
 罰俸完納前ニ於テ本人其職ヲ免セラレ又ハ死亡シタルトキハ之ヲ追徵スルコトナシ
 第八條 朝鮮國在勤警部ノ月俸ハ明治二十四年勅令第八十三號判任官俸給令ニ依ル
 朝鮮國在勤巡查ノ月俸ハ八圓乃至拾五圓トス但俸給支給方ハ前項ニ同シ
 第九條 朝鮮國在勤警部及巡查ニハ月俸ノ外任地著翌日ヨリ任地出發前日マテ在勤月手當ヲ給ス其金額左ノ如シ
 警部 一箇月拾圓乃至參拾圓
 巡查 一箇月拾五圓乃至貳拾圓
 第十條 臨時ノ須要ニ依リ朝鮮國在勤巡查ニ代用スル傭員ニハ月俸拾圓以內ヲ給シ在勤手當ヲ給セス
 第十一條 朝鮮國在勤警部及巡查ノ旅費ハ明治二十年閣令第十二號外國旅費規則ニ依ル但巡查ハ總テ傭員ノ例ニ倣フ
 第十二條 旅費ハ警部及巡查ノ赴任、官用歸朝、賜暇歸朝、任所

替其他官務旅行ノトキニ限リ給スルモノトス

第十三條 朝鮮國在勤巡查又ハ其遺族ニハ左ノ諸項ニ依テ給助ヲ爲ス

第一 勤績四年ニシテ退職スル者ハ一時金貳拾五圓ヲ給ス
 四年以上九年マテハ一年毎ニ金拾圓ヲ増給ス勤績十年ニシテ退職ノ者ニハ一時金百圓ヲ給シ十年以上ハ一年毎ニ金拾五圓ヲ増給ス
 同上ノ年限間勤績シテ死亡シタルトキハ各同上ノ金額ヲ其遺族ニ給ス
 第二 職務ノ爲メ負傷又ハ疾病ニ罹ル者ハ傷痕又ハ病症ノ輕重ニ依リ適宜療治料ヲ給ス
 第三 職務ノ爲メ負傷シ終身不具トナリタル者ハ一時金百圓以上百五拾圓以下ニ於テ適宜之ヲ給ス
 第四 職務ノ爲メ死亡シタルトキハ第一項賜金ノ外一時金貳百圓ヲ其遺族ニ給ス
 左ニ掲ケル事項ノ一ニ當ルトキハ給助ヲ爲サス
 第一 他ノ報酬ヲ受クヘキ官職ニ轉シタルトキ
 第二 懲罰ニ依リ免職セラレタルトキ
 第十四條 明治十九年外務省令第二號朝鮮國在勤巡查給與規則ハ此規則施行ノ日ヨリ廢止ス

稅關監吏及監吏補任用方

明治二十三年七月 勅令第四百四十四號

朕稅關監吏及監吏補任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

稅關監吏及監吏補ハ大藏大臣別ニ試驗規則ヲ定メ之ヲ採用ス

第二類 第一章 第三款 任免

三百十九

ルコトヲ得其規則ニ依リ採用セラレタルモノハ普通試驗ヲ經ルニアラザレハ他ノ判任官ニ轉任スルコトヲ得ス

理事主理ノ試驗及試補練習方

明治二十年三月 勅令第十號

朕理事主理ノ試驗及試補ノ練習ニ關スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

理事及主理ハ高等試驗ニ於テ司法官ノ例ニ依リ理事試補ハ陸軍省若クハ陸軍軍法會議主理試補ハ海軍省若クハ海軍軍法會議ニ於テ三年以上事務ヲ練習セシム

陸海軍士官並同官以上文官任用方

明治二十年十二月 勅令第六十三號

朕陸海軍士官並同官以上ノモノハ更ニ試驗ヲ要セス文官ニ之ヲ公布セシム

陸海軍士官並同官以上ノモノハ更ニ試驗ヲ要セス文官ニ任用スルコトヲ得

陸軍下士文官採用規則

明治二十年十二月 勅令第八十三號

朕陸軍下士文官採用規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸軍下士文官採用規則
 第一條 陸軍下士ニシテ左ニ掲ケル者ハ文官奉職ヲ請願スルコトヲ得(二十三年勅令第八十六號) 號ヲ以テ各項共改正

一 戰役若クハ公務上ノ傷痕疾病ニ因リ免官シ尙文官ノ勤務ニ堪ヘ且伎倆證明書ヲ所持スル者
二 現役七箇年以上服役満期ノ下士ニシテ伎倆證明書ヲ所持スル者

第二條 陸軍下士ハ本人ノ請願ニ因リ前條恰當ノ者ハ試験ヲ要セスシテ判任官トナルコトヲ得(二十三年勅令第八十號ヲ以テ本條改正)

第三條 海軍省ヲ除クノ外各官廳ニ於テ判任官ヲ任用スルニハ少クモ五人ニ付一人ハ陸軍下士ノ文官請願者ヲ以テス可キモノトス

第四條 文官タラントテ望ム者ハ服役満期前一箇月間又満期若クハ免役後三箇月間ニ之ヲ請願ス可シ(二十三年勅令第八十號ヲ以テ改正)

第五條 請願者ニ於テ教育技術官タラントテ望ム者アルトキハ之ヲ採用セントスル官廳ニ於テ相當ノ試験ヲ施行スルコトヲ得

第六條 請願者ノ名簿ハ本人請願ノ順序ニ從テ調製シ之ヲ陸軍省ニ備置ク可シ

第七條 請願者ノ採用ハ其同年内ニ係ルモノハ第一條各項ノ順序ニ從ヒ其同項内ニ於テハ服役時日ノ多キ者ヨリ採用シ其服役時日ノ同シキ者ハ請願時日ノ順序ニ從ヒ採用ス可シ
本人ノ伎倆及任務ノ必要ニ依リテハ前項ノ順序ニ拘ハラズ採用スルコトアルヘシ(二十三年勅令第八十號ヲ以テ本項追加)

第八條 各官廳ニ於テ請願者ヲ採用スルトキハ陸軍省ニ照會シ直ニ本人ヲ其廳ニ呼出ス可シ

第九條 陸軍省ニ於テハ前條ノ照會ニ依リ第七條ニ照シ請願者ノ氏名及履歷書ヲ其官廳ニ交付ス可シ

第十條 請願者ニ於テ其請願ヲ取消サント欲スルトキハ陸軍

省ニ届出可シ
第十一條 本則施行ニ要スル細則及伎倆證明書ノ規定ハ陸軍大臣之ヲ定ム可シ(二十三年勅令第八十號ヲ以テ改正)

陸軍下士文官採用細則 明治二十一年二月 陸軍省令第二號

陸軍下士文官採用細則左ノ通定ム

陸軍下士文官採用細則

第一條 本則ニ於テアルモノハ陸軍下士文官採用規則ニ從ヒ之ヲ以テ之
請願セント欲スル者ニシテ第一項ニ該當スル者ハ第一書式第二項ニ該當スルモノハ第二書式及第三書式ニ據ルヘシ
第一書式 紙製表紙

某戰役(公務上)ノ傷痕(疾病)ニ因リ過ル年月日免官相成候ニ付陸軍下士文官採用規則ニ因リ文官奉職仕度候間御採用相成度別紙履歷書(陸軍省令後ノ經歷及賞罰等ヲ詳細ニ記載シ正並ニ診斷書(陸軍省令後ノ傷痕若クハ疾病ヲ證明スルモノ)及伎倆證明書(陸軍省令後)添此段奉願候也(二十三年八月三十日陸軍省令)

道廳(府)(縣)(國郡)(區)(町)(村)族籍
元何官

年月日 姓 名 印
年號月何年何箇月

前書之趣調査候處相違無之候也

年月日 姓 名 印
年號月何年何箇月

第二書式

某 儀

來ル(過ル)年月日現役満期相成候ニ付陸軍下士文官採用規則ニ因リ文官奉職仕度候間御採用相成度別紙履歷書並ニ伎倆證明書相添此段奉願候也(二十三年八月三十日陸軍省令)
兵種隊號(所管)豫備役(後備軍)(艦員)

年月日 官 姓 名 印
年號月何年何箇月

(所管長官)
職官姓名名殿

第三書式

某 儀

過ル年月日現役満期相成候ニ付陸軍下士文官採用規則ニ因リ文官奉職仕度候間御採用相成度別紙履歷書並ニ伎倆證明書相添此段奉願候也(同上)

道廳(府)(縣)(國郡)(區)(町)(村)族籍
元何官

年月日 姓 名 印
年號月何年何箇月

前書之趣調査候處相違無之候也

道廳(府)(縣)(區)(長)(村)戸長

第二條 本則第五條ニ因リ教育技術官タラントテ望ム者及某官廳ニ限リ奉職セントシテ望ム者ハ其志願ノ應名ヲ願書中ニ記載シ又教育技術官志願ノ者在テハ其志願シテ學術

ヲ履歷書中ニ記載シテ差出ス可シ
但教育技術官タルノ志願ヲナシ合格セサル者ハ更ニ普通判任官タルヲ請願スルコトヲ得

第三條 本則第一條ノ資格ヲ有スト雖モ服役以來左ノ項目ニ觸ル、者ハ請願スルヲ得ス又既ニ請願ノ者ハ其請願無効ニ屬ス
一 禁錮ノ刑ニ處セラレタル者
一 賭博犯ニ付懲罰ニ處セラレタル者

第四條 本則第一條ニ因リ請願スル者アルトキハ所管長官又ハ北海道廳長官府縣知事ニ於テ其請願書類ヲ審査シ陸軍大臣ニ進達ス可シ

第五條 本則第五條ニ因リ各官廳ニ於テ試験ヲ爲セシトキハ其試験ノ科目及ヒ合格不合格ノ旨ヲ直ニ陸軍省ニ通牒スルモノトス

第六條 各官廳ニ於テ請願者ヲ採用セシ上ハ直ニ其官等ヲ陸軍省ニ通牒スルモノトス

第七條 教育技術官タラントテ望ム者受職ノ爲メ官廳ニ往復スル旅費ハ總テ自辨タルヘシ

第八條 本則第十條ニ因リ其請願ヲ取消サント欲スルトキ又ハ請願者ノ身上ニ異動ヲ生シ或ハ轉居轉籍若クハ處刑等ニテ履歷上改正ヲ要スルコトアルトキハ其旨ヲ詳記シ最初願出ノ手續ニ因リ届出ツ可シ

陸地測量官任用規則 明治二十三年三月 勅令第三十五號

陸地測量官任用規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 陸地測量師ハ陸地測量手中其任ニ適スルモノヲ選ミ陸地測量部修技所ニ於テ二年以上高等ノ學科ヲ修業セシメ卒業シタル者ヲ以テ之ニ任ス

第二條 陸地測量手ハ陸地測量部修技所生徒ノ卒業シタル者ヲ以テ之ニ任ス

第三條 本則ニ依リ陸地測量官ニ任セラレタル者他ノ技術官ニ轉任セントスルトキハ技術官任用ノ例規ニ依ル但他ノ技術官ヨリ轉任シタル者ハ此限ニアラス

第四條 本則第一條第二條ニ掲クルモノ、外技術官其他學術技藝優等ノ者ニシテ陸地測量部ニ於テ實地試業ノ上適當ト認ムルトキハ陸地測量官ニ轉任セシメ若クハ任用スルコトヲ得

第五條 本則施行ノ前陸地測量部ニ出仕スル技術官陸軍屬又ハ官員ニシテ陸地測量事業ニ從事シ學術技藝優等ナル者ハ陸地測量官ニ轉任セシメ若クハ任用スルコトヲ得

○陸軍武官進級令 明治二十二年五月 勅令第六十一號

朕陸軍武官進級條例ヲ廢止シ陸軍武官進級令制定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸軍武官進級令

第一條 陸軍武官ノ進級ハ級ヲ逐テ歷進セシム又缺員ナキトキハ補除スルコトヲ得

第二條 陸軍武官ハ實役停年最下期限ヲ超ユルニアラザルハ進級スルコトヲ得ス

第三條 實役停年最下期限ヲ定ムルコト左ノ如ク
二等軍曹ヨリ一等軍曹ニ進ムハ實役停年半年一等軍曹ヨリ

曹長ニ進ムハ實役停年一年曹長ヨリ少尉ニ進ムハ實役停年二年

少尉ヨリ中尉ニ中尉ヨリ大尉ニ進ムハ實役停年各二年大尉ヨリ少佐ニ進ムハ實役停年四年

少佐ヨリ中佐ニ進ムハ實役停年三年中佐ヨリ大佐ニ進ムハ實役停年各二年

少將ヨリ中將ニ進ムハ實役停年三年

中將ヨリ大將ニ進ムハ實役停年三年就キ特旨ヲ以テ親任スルヲ例トシ最下期限ヲ定ムルコトヲ得

第四條 戰時ニ在テハ各官ノ實役停年ヲ其半ニ減スルコトヲ得

第五條 休職停職ノ年月ハ實役停年ニ算入セス但敵ノ捕虜トナリ休職ニ入ル者正當ノ理由アルトキハ其年月ヲ實役停年ニ算入スルコトヲ得

第六條 陸軍武官進級ノ法ニアリテ停年補除トシテ拔擢補除トス

第七條 停年補除トハ實役停年最下期限ヲ超ユル順次ニ依リ進級セシムルヲ云ヒ拔擢補除トハ實役停年最下期限ヲ超ユル者ニ就キ拔擢進級セシムルヲ云フ其區別左ノ如ク

二等軍曹ヨリ一等軍曹ニ一等軍曹ヨリ曹長ニ進ムハ皆拔擢トス

少尉ヨリ中尉ニ進ムハ停年三分二拔擢三分一トス

中尉ヨリ大尉ニ進ムハ停年拔擢相半ス

大尉ヨリ少佐ニ少佐ヨリ中佐ニ中佐ヨリ大佐ニ進ムハ皆拔擢トス

第八條 將校ハ職權ニ依テ部下ヲ拔擢スルノ權ヲ有ス但直屬

長官アル者ハ其監督ノ下ニ在テ之ヲ行フ

第九條 將官ノ進級及將官ニ進級スルハ上裁ニ出ルト雖モ先ツ內旨ヲ陸軍大臣ニ論スルヲ例トス

第十條 曹長ノ少尉ニ進級スルハ特例トス此選ニ當ルヲ得ル者ハ功績拔擢ノシテ士官タルノ學力ヲ有スルモノニ限ル

第十一條 陸軍大臣ハ毎年將校ノ實役停年名簿ヲ作り之ヲ奏上スヘシ

第十二條 將校ノ拔擢進級候補ハ上裁ニ出ルモノトス陸軍大臣ハ上旨ヲ奉シテ決定候補名簿ヲ調製スヘシ

第十三條 下士ノ進級候補ハ師團長及之ト同等以上ノ權アル長官並ニ會計局長醫務局長之ヲ裁決シテ決定候補名簿ヲ調製スヘシ

第十四條 決定候補名簿ハ其調製ノ日ヨリ次年決定候補名簿調製ノ日迄之ヲ用ユヘシ

第十五條 左ノ場合ニ在テハ前諸條ノ例ニ依ラス進級セシムルコトヲ得

一 敵前ニ在テ殊勳ヲ奏シ首將之ヲ全軍ニ布告セシ者

二 敵前ノ軍隊ニ在テ人員缺乏シ補除定規ヲ履ム能ハサルトキ

第十六條 輿軍ノ日ニ方リテ戰地ニ臨ムノ首將ニハ特ニ進級補除ノ權ヲ假スコトアルヘシ

第十七條 將校相當官並軍吏部衛生部軍樂部ノ下士及諸工下長ノ進級ハ本令ヲ適用ス

砲工兵監護ノ砲工兵上等監護ニ進ミ軍樂次長ノ二等軍樂長ニ進ムハ下士進級ノ例ニ同シ但實役停年ヲ二年トス

二等軍樂長ノ一等軍樂長ニ進級スルハ實役停年五年以上ニ

シテ隊長ノ職ヲ奉シ功勞顯著ナル者ニ就キ進級セシム(明治二十三年勅令第百三十七號ヲ以テ改正)

○志願軍吏獸醫生ヲ陸軍軍吏部並獸醫部豫備士官ニ補任方 明治二十三年九月 勅令第九十五號

朕志願軍吏志願獸醫生ヲ陸軍軍吏部並獸醫部豫備士官ニ補任スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

一 志願軍吏生ニシテ陸軍豫備後備將校補充條例第六條ニ依リ實地ノ試験ニ及第シタル者ハ當該監督部長本人所屬隊ノ軍吏ヨリ其勤務勉勵品行方正學術適當ノ者ニシテ軍吏部士官タルヲ得ヘキ保證書ヲ出サシメ且自ラ是認シタル後其意見書ヲ添ヘ三等軍吏ニ補任ノコトヲ會計局長ニ稟申ス會計局長ハ之ヲ審査シ意見ヲ附シ陸軍大臣ニ進達ス若シ監督部長之ヲ否認シタルトキハ其事由ヲ悉シ會計局長ニ稟申シ會計局長ハ更ニ理由ヲ具ヘ陸軍大臣ニ進達シ大臣ニ於テ見習士官ノ分限ヲ除クコトヲ裁定ス此裁定ヲ受クタル者ハ一等醫

記ニ任シ豫備役ニ編入ス

二 志願獸醫生ニシテ陸軍豫備後備將校補充條例第六條ニ依リ實地ノ試験ニ及第シタル者ヲ獸醫部豫備士官ニ補任スルハ陸軍獸醫部現役士官補充條例第十五條ニ依ル但シ獸醫部士官タルノ資格ナシト認ムルモノハ獸醫長ヨリ其事由ヲ具シテ軍務局獸醫課長ニ呈シ獸醫課長ハ之ヲ審査シテ軍務局長ニ上申シ軍務局長ハ之ヲ陸軍大臣ニ進達シ大臣ニ於テ見習士官ノ分限ヲ除クコトヲ裁定ス此裁定ヲ受クタル者ハ蹄鐵

工長ニ任シ豫備役ニ編入ス

現行日本法令大全

○海軍准士官並服役滿期下士判任文官ニ任用方

明治二十二年七月 勅令第六十五號

海軍准士官並服役滿期下士判任文官ニ任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍准士官並服役滿期ノ下士ハ普通試驗ヲ要セス海軍省選信省鐵道局ノ判任文官ニ任用スルコトヲ得

○海軍高等武官任用條例

明治二十二年七月 勅令第九十一號

海軍高等武官任用條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍高等武官任用條例

第一條 海軍高等武官ハ少尉候補生少校候補生少軍醫候補生少藥劑官候補生少主計候補生ヨリ任用ス

海軍ノ官費生徒ト爲リ外國ニ留學シ適當ノ卒業證書ヲ得タル者ハ其成績ニ應ジ特ニ其學科相當ノ本官ニ任スルコトアルヘシ

第二條 候補生ハ現役海軍軍人トシ其身分ハ委任ノ待遇ヲ受クルモノトス

第三條 候補生ハ各其本官ノ職務ヲ實地ニ於テ練習スルモノトス

第四條 少尉候補生ハ海軍兵學校ノ全學科ヲ卒業シタル者ヨリ採用ス

士候補生ヲランコトヲ志願シ身體檢查學術試驗ニ合格シタル者ヨリ採用ス
第六條 少軍醫候補生ハ海軍軍醫學校ノ全學科ヲ卒業シタル者ヨリ採用ス
第七條 少藥劑官候補生ハ藥舖開業免狀藥劑師免狀或ハ醫科大學藥學科ノ卒業證書ヲ有シ少藥劑官候補生ヲランコトヲ志願シ身體檢查學術試驗ニ合格シタル者ヨリ採用ス
第八條 少主計候補生ハ總テ海軍少主計候補生採用規則ニ依リ採用ス
第九條 左ニ掲ケル事項ノ一ニ當ル者ハ少校候補生及少藥劑官候補生ヲ出願スルコトヲ得ス
一 年齡二十年未滿及二十八年以上ノ者
二 禁錮以上ノ刑ヲ受ケタル者
三 賭博犯ノ處分ヲ受ケタル者
四 身代限ノ處分ヲ受ケ其辨償ヲ終ヘサル者
第十條 候補生ヲ本官トスルニハ一箇年以上試用ノ後學術試驗ヲ行ヒ合格者ニ就キ海軍省ニ於テ候補名簿ヲ作リ本官ニ缺員アル毎ニ順次海軍大臣ヨリ奏上シ之ヲ任ス
第十一條 候補名簿ハ學術試驗毎ニ合格者ヲ武官名簿ノ順序ニ從ヒ記列ス但停年同キ者ハ試驗成績ノ順序ニ從フ
第十二條 候補生ヲ直轄スル各長官ハ一箇年以上試用セル各候補生ノ材能品行及勤惰等ノ事實ヲ詳記シ毎年一回海軍大臣ニ報告スヘシ
第十三條 候補生ヲ直轄スル各長官ハ品行不正或ハ傷痕疾病等ノ故ヲ以テ高等武官ニ適セスト認ムル候補生アルトキハ海軍大臣ニ具申スヘシ

現行日本法令大全

第十四條 候補生學術試驗ニ合格セザルトキハ六箇月ノ後再試驗ヲ行ヒ仍ホ不合格ノ者ハ之ヲ免ス

第十五條 現今海軍主計學校ニ在ル生徒ハ全學科卒業ノトキ海軍少主計候補生ニ採用ス

○海軍少主計候補生採用規則

明治二十二年二月 勅令第十八號

海軍少主計候補生採用規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍少主計候補生採用規則

第一條 海軍少主計候補生ヲランコトヲ欲スル者ハ海軍大臣ノ告示ニ遵ヒ出願ス可シ

海軍大臣ハ委員ヲ設ケ身體檢查學術試驗ヲ行ヒ合格ノ者ヲ採用ス

第二條 左ニ掲ケル事項ニ當ル者ハ候補生ヲ出願スルコトヲ得ス

一 年齡二十年未滿及二十八年以上ノ者

二 有妻ノ者

三 禁錮以上ノ刑ヲ受ケタル者

四 賭博犯ノ處分ヲ受ケタル者

五 身代限ノ處分ヲ受ケ其辨償ヲ終ヘサル者

第三條 候補生ニ採用シタル者ハ一箇年間海軍主計學校ニ於テ修學セシメ卒業ノ後ハ實地ニ試用シ本官ニ缺員アルトキ

順次本官ニ採用ス

第四條 候補生海軍主計學校ニ於テ卒業試驗ニ落第スルトキハ候補生ヲ免ス但成業ノ目的アル者ハ六箇月以内修學セシメ再試驗ヲ行フコトアル可シ

第五條 候補生海軍主計學校ニ於テ修學中傷痕疾病等ニ因リ課程ヲ踐ミ難クシテ定期中學校ヲ修得シ能ハサル者ハ尙ホ六箇月以内修學セシメ卒業試驗ヲ行フコトアル可シ但此試驗ニ落第スルトキハ候補生ヲ免ス

第六條 候補生ハ情願ヲ以テ辭退スルコトヲ許サス

第七條 候補生中左ニ掲ケル事項ニ當ル者ハ候補生ヲ免ス

一 品行不正ニシテ改悛ノ目的ナキ者

二 傷痕疾病等ニ罹リ卒業ノ目的ナキ者

○海軍高等武官進級條例

明治二十四年八月 勅令第七十八號

海軍高等武官進級條例改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍高等武官進級條例

第一條 海軍高等武官トハ海軍少尉以上及其相當官ヲ云フ
第二條 高等武官ノ進級ハ超級ノ陞進ヲ許サス而シテ左ニ掲ケル實役停年海上勤務ヲ經タル者ニアラザラハ陞進セシメス又缺員ナキトキハ除任ヲ行ハス

實役停年 實役停年中海上 最下期限 勤務最下期限

少尉	少機關士	少技士	少軍醫	少藥劑官	少主計	三年
大尉	大機關士	大技士	大軍醫	大藥劑官	大主計	五年
少佐	機關少監	少技監	軍醫少監		主計少監	三年
大佐	機關大監	大技監	軍醫大監		主計大監	四年
少將						三年

海上勤務トハ航行シ得ル艦船ニ乗組ミ服務スルヲ云フ但機關大監軍醫大監軍醫少監主計大監主計少監大技監少技監大技士少技士及大藥劑官少藥劑官ハ海上勤務ヲ要セス
 實役停年最下期限ヲ終アルモ海上勤務日數ハ其最下期限ニ足ラサルコトアルニ當リ前官ニ於テ其海上勤務最下期限外ニ上官ノ職ヲ奉シタル海上勤務日數アルトキハ之ヲ其不足日數ニ併算スルコトヲ得
 第三條 中將ノ大將ニ進ムハ歴戰者或ハ違征ニ從事シタル者ニ就キ特旨ヲ以テ親任セラル、ヲ例トス
 第四條 海上勤務ノ者ニシテ公務ニ原因セサル傷疾疾病其他公務ニ非サル事故ニ依リ陸上ニ在ルノ日數ハ海上勤務ニ算入セス
 第五條 休職停職收禁及處刑中ノ日數ハ實役停年ニ算入セス
 第六條 敵ノ捕虜ト爲ルモ正當ノ理由アル者ハ其年月ヲ實役停年ニ算入スルコトヲ得
 第七條 戰時ニ在テハ各官ノ實役停年海上勤務最下期限ヲ其半ニ減スルコトヲ得
 第八條 進級ハ總テ拔擢ヲ以テス但停職中ノ者ハ進級セシムス

第九條 將官ノ進級並ニ大佐及相當官ノ少將及相當官ニ進ムハ上裁ヲ以テ除任セラル、ヲ例トス
 第十條 海軍大臣ハ上長官士官進級順序ヲ定ムル爲メ各所管長官ヲシテ候補名簿ヲ出サシメ須要ニ應ジテ進級會議ノ調査ニ附シ決定候補名簿ヲ作ルモノトス
 決定候補名簿ヲ作ルノ法ハ候補名簿中ヨリ進級セシムヘキ者ヲ選抜シ其順序ニ依リ列序ヲ定ム
 進級會議ハ各司長官將官會議員及軍醫總監主計總監ヲ以テ編制ス
 決定候補名簿ハ其調製ノ日ヨリ次年決定候補名簿調製ノ日マテ之ヲ用ユヘシ
 第十一條 海軍高等武官決定候補名簿ハ海軍大臣ヨリ奏上シ置キ補缺ヲ要スル毎ニ其順序ニ從ヒ敘任ノ事ヲ奏上スヘシ
 第十二條 准士官ハ士官ニ進級スルヲ得サルヲ例トスト雖モ志操確實士官タルニ堪ヘ且學術技藝拔群ノ者ハ臨時検査ノ上士官ニ進級セシムルコトヲ得
 第十三條 戰役ニ於テ功勞アル者若クハ多年軍務ニ從事シ進級資格ヲ備ヘタル者ニシテ海軍將校分限令第六條第一項第

二項第四項第五項及第七條第八條ニ依リ現役ヲ退クトキハ其際特ニ進級セシムルコトヲ得但恩級ヲ受クル資格ニ在テハ前官ニ依ル
 第十四條 左ノ場合ニ在テハ定規ニ依ラス進級セシムルコトヲ得
 一 敵前ニ在テ殊勳ヲ奏シ首將之ヲ全軍ニ布告セシ者
 二 戰地ニ在テ人員缺乏シ補除定規ヲ履ム能ハサルトキ
 第十五條 典軍ノ日ニ方リ戰地ニ臨ムノ首將ニハ進級補除ノ權ヲ假スルコトアルヘシ

陸海軍將校同等官名譽進級方

陸海軍將校及同相當官退後ノ際名譽進級ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸海軍將校及同相當官現役中多年軍務ニ從事シ且ツ戰役ニ於テ功勞アル者ニシテ陸海軍將校分限令第五條第一項第二項第四項第五項及第六條第七條ニ依リ現役ヲ退クトキハ特ニ官等ヲ進ムルコトヲ得但恩給ヲ受クル資格ニ在テハ前官等ニ依ル

海軍下士任用進級條例

明治二十三年七月 勅令第五十二號
 海軍下士任用進級條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
 第一條 海軍下士ハ三等ヲ初任トシ海上勤務一箇年半以上若

シハ陸上勤務二箇年以上ノ實役停年ヲ經タル一等卒中ヨリ左ノ區別ニ從ヒ任用ス
 一 三等兵曹ハ砲術練習艦若クハ水雷術練習艦卒業ノ一等水兵若クハ兵曹適任證書ヲ有スル一等水兵又ハ學術検査ニ合格シタル一等水兵ヨリ任用シ三等信號手ハ信號卒業證書ヲ有スル一等信號兵又ハ學術検査ニ合格シタル一等信號兵ヨリ任用ス(二十四年三月三十日勅令第三十一號ヲ以テ本條ヲ改正ス)
 二 三等機關手ハ機關學校卒業ノ一等火夫又ハ水雷術練習艦ニ於テ水雷教程ヲ卒業シタル一等火夫一等鍛冶ヨリ任用ス
 三 三等軍樂手ハ一等軍樂生中三等船匠手ハ一等木工中三等鍛冶手ハ一等鍛冶中三等主帳ハ一等廚夫中海軍大臣ノ定ムル所ノ教育規則ニ依リ卒業シタル者ヨリ任用ス
 四 三等看護手ハ學術検査ニ合格シタル一等看護夫ヨリ任用ス
 技工ハ前項ニ依ラス造船工學校卒業ノ生徒又ハ海軍大臣ノ定ムル任用試験ニ及第シタル者ヨリ任用ス
 第二條 年齡二十年未滿ノ者ハ下士ニ任用スルコトヲ得ス(二十四年三月三十日勅令第三十一號ヲ以テ本條ヲ改正ス)
 第三條 進級ハ超級ノ陞進ヲ許スコトナク缺員アルニアラザラハ進級セシムルコトナシ又機關學校ヲ卒業シタル機關手特別教育規則ニ依リ卒業シタル主帳ノ外ハ學術検査ニ合格シタル者ニアラザラハ進級セシムルコトヲ得ス
 第四條 三等下士ニシテ海上勤務一箇年半以上若クハ陸上勤務二箇年以上二等下士ニシテ海上勤務二箇年以上若クハ陸上勤務二箇年八箇月以上一等下士ニシテ海上勤務三箇年以

上若クハ陸上勤務四箇年以上ノ實役停年ヲ經タル者ハ各其上級ノ官ニ進級セシムルコトヲ得

第五條 戰時ニ在ラハ實役停年最下期限ヲ其半ニ減スルコトヲ得

第六條 敵ノ捕虜トナリ正當ノ理由アル者ハ其年月ヲ實役停年ニ算入スルコトヲ得

第七條 收禁處刑及歸休中ノ日數ハ實役停年ニ算入セス

第八條 停年ヲ算スルニハ三月一日ヲ以テ終期トス

第九條 海上勤務ト稱スルハ軍艦ニ乘組ミ服務スルヲ云フ

第十條 公務ニ原因セサル傷痕疾病ニ依リ上陸療養ノ日數ハ海上勤務ニ算入セス

第十一條 海上勤務ヨリ陸上勤務ニ轉シタル者ノ停年ハ海上勤務日數ノ三分一ヲ加算シ陸上勤務ヨリ海上勤務ニ轉シタル者ノ停年ハ陸上勤務日數ノ四分一ヲ減算スルモノトス

第十二條 下士ノ任用進級ハ海兵團在籍ノ區別ニ從ヒ各鎮守府司令長官之ヲ行フモノトス但艦隊ニ屬スル下士ノ任用進級ハ艦隊司令長官之ヲ行ヒ一等下士ノ進級及進兵廠火藥工廠水路部ニ勤務セシムル技工ノ任用進級ハ海軍大臣之ヲ行フモノトス

第十三條 艦團隊長各應長ハ毎年學術檢査終ルノ後部下ノ下士及一等卒中進級セシムヘキ者ヲ選拔シ下士任用進級候補名簿ヲ調製シ所屬ノ鎮守府司令長官艦隊司令長官ニ出ス可シ但練習生タル下士ノ進級候補名簿ハ在籍海兵團ヲ管スル鎮守府司令長官ニ出スヘシ

鎮守府ニ屬セサル艦長應長ノ調製セル下士任用進級候補名簿ハ候補者ノ在籍海兵團ヲ管スル鎮守府司令長官ニ出ス可シ

シ但技工ノ候補名簿ハ海軍大臣ニ出ス可シ

第十四條 兵曹機關手ノ任用進級候補名簿技工ノ進級候補名簿ハ左ノ如ク區別ス可シ

甲 兵曹

一 掌砲ノ職ニ充ツ可キ者

二 掌水雷ノ職ニ充ツ可キ者

三 掌帆ノ職ニ充ツ可キ者

四 按針ノ職ニ充ツヘキ者(二十四年三月三十日勅令第三十一號ヲ以テ本項ヲ改正ス)

乙 機關手

一 汽關部員ノ職ニ充ツ可キ者

二 水雷工ノ職ニ充ツ可キ者

丙 技工

一 造船ノ職ニ充ツ可キ者

二 汽機汽罐製造ノ職ニ充ツ可キ者

三 造兵ノ職ニ充ツ可キ者

四 火藥製造ノ職ニ充ツ可キ者

五 水路測量ノ職ニ充ツ可キ者

第十五條 鎮守府司令長官ハ部下ノ軍港司令官參謀長軍港内ニ在ル部下艦團隊長ヲ會同シ艦隊司令長官ハ部下ノ司令官參謀長同港ニ在ル部下ノ艦長ヲ會同シ下士任用進級候補名簿ニ就キ候補者ノ技能ノ優劣ニ依リ順序ヲ定メ下士任用進級決定候補名簿ヲ調製シ海軍大臣ニ出ス可シ

艦隊司令長官決定候補名簿ヲ調製スルニハ軍艦ノ本管ニ依リ鎮守府毎ニ區別ス可シ鎮守府司令長官他鎮守府本管ノ艦ヲ管轄スルコトアルトキ亦同シ

第十六條 決定候補名簿ノ効ハ次回ノ決定候補名簿調製迄ノ

モントス

決定候補名簿ニ登載ノ後任用進級セシムル能ハサル事由ヲ生シタル者ハ之ヲ除名ス可シ

第十七條 定員外ノ下士ハ進級ノ順次ニ當ルト雖モ定員ニ充ラサル後ニ非サレハ敘任スルコトヲ得ス

練習生ハ豫備艦非役艦ノ定員ニ充ツ可キ現員不足アルトキニ進級セシムルコトヲ得

第十八條 左ノ場合ニ在ラハ前諸條ノ例ニ依ルコトナク任用シ又ハ進級セシムルコトヲ得

一 敵前ニ在テ殊勳ヲ奏セシ者アル時

二 戰地ニ在テ人員多ク缺乏シ補給規定規ヲ履ム能ハサル時

第十九條 鎮守府司令長官艦隊司令長官司令官ハ與軍ノ日ニ方リ戰地ニ派遣スル艦長ニ下士任用進級ノ權ヲ假スコトヲ得

第二章 受験資格

第五條 判事檢事登用試験ヲ受クルコトヲ得ル者ハ成年以上ノ男子ニシテ左ノ各項ノ一ニ該ル者ニ限ル

一 第一及第三高等中學ニ於テ法科ヲ卒業シタル者

二 文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學ヲ教授スル私立學校ノ卒業證書ヲ有スル者

三 外國ノ大學校又ハ之ト同等ナル學校ニ於テ法律學ヲ修メ卒業證書ヲ有スル者

第六條 裁判所構成法第六十六條ニ該ル者ハ試験ヲ受クルコトヲ得ス

第三章 第一回試験

第七條 第一回試験ハ司法省ニ於テ之ヲ行フ試験ノ期日ハ試験委員長之ヲ定メ官報ヲ以テ公告ス

第八條 試験志願者ハ其志願書ニ左ノ證書ヲ添ヘ之ヲ試験委員長ニ差出スヘシ

一 履歷書

二 身分年齢及兵役ニ關スル證明書

三 第五條ニ定メタル要件ノ證明書

第九條 試験ハ受験者ノ學識ヲ試験スルヲ以テ目的トシ筆記口述ノ二様トス

第十條 筆記試験ハ民法商法民法刑事訴訟法刑事訴訟法ノ各法ニ就キ之ヲ施行ス

第十一條 試験委員筆記答案ヲ調査シタル後口述試験ヲ爲スニ足ルヘキモノト認メタルトキハ口述試験ノ爲メ志願者ヲ呼出スヘシ

第十二條 口述試験ハ民法商法民法刑事訴訟法刑事訴訟法ノ

○判事檢事登用試験規則

明治二十四年五月 司法省令第三號

第一章 試験委員

第一條 判事檢事登用試験委員ハ委員長一名委員數名ヲ以テ之ヲ組織ス

第二條 判事檢事登用試験委員長及委員ハ大審院控訴院ノ判事檢事司法省高等官ノ中ヨリ試験舉行毎ニ司法大臣之ヲ命ス

第三條 判事檢事登用試験委員長ハ委員ヲ監督シ試験ニ關スル一切ノ事務ヲ總理ス

第四條 試験委員附屬ノ書記ハ司法屬又ハ裁判所書記ノ中ヨリ試験舉行毎ニ司法大臣之ヲ命ス

呼出スヘシ

第十二條 口述試験ハ民法商法民法刑事訴訟法刑事訴訟法ノ

中少クトモ三科目ニ就キ之ヲ施行ス

第十三條 受験者ノ及第落第及及第者ノ優劣ハ筆記試験口述試験ノ成績ニ對スル委員過半数ノ意見ニ從テ之ヲ決ス

第十四條 志願者口述試験ニ闕席シタルトキハ試験ハ成立タルモノトス

第十五條 試験委員長ハ及第者ノ氏名及其試験ノ成績ヲ司法大臣ニ報告スヘシ

第十六條 帝國大學法律科卒業生ニシテ司法官ノ任用ヲ望ム者ハ第八條ノ規程ヲ準用シ志願書ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

第四章 實地修習

第十七條 試補ハ區裁判所及地方裁判所並其檢事局ニ於テ一名若ハ數名ノ判事又ハ檢事ニ附屬シテ事務ヲ修習スヘシ

第十八條 修習事務直接ノ指揮監督ハ地方裁判所長之ヲ爲ス檢事ノ事務ヲ修習スルトキハ檢事正之ヲ爲ス

裁判所長若ハ檢事正ハ毎年末ニ試補ノ職務上及職務外ノ行狀並職務ニ關ル成績ノ證明書ヲ作り控訴院長檢事長ヲ經由シテ之ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

第十九條 試補ハ修習目録ヲ作り其取扱ヒタル事件ヲ記載スヘシ

此目録ハ毎月直接指揮監督者ニ差出シ檢閱ヲ受クヘシ

第二十條 試補ノ疾病又ハ兵役履行ノ爲メ修習ヲ缺キタル日數一箇年間一箇月以内ハ修習日數ニ算入ス

賜暇其他ノ原因ニ由リ修習ヲ缺キタル日數一箇年間一箇月以内亦同シ

第二項第二項ノ場合併起スルトキハ通計シテ二箇月以内ニ

非サレハ算入スルコトヲ得ス

第二十一條 試補ノ直接指揮監督者ハ試補職務上ノ義務ヲ怠リ又ハ職務上若ハ職務外ニ於テ其身分ニ適セサル行狀アルトキハ之ヲ諭告スヘシ此場合ニ於テハ指揮監督者ハ諭告ヲ爲シタルコトヲ試補ノ履歷ニ記入スヘシ

第二十二條 試補職務上若ハ職務外ノ行狀其職務ヲ執ルニ不適當ナルカ又ハ其修習ノ進歩不十分ニシテ第二回試験ニ及第ノ見込ナキトキハ直接指揮監督者ハ控訴院長檢事長ヲ經由シテ之ヲ司法大臣ニ報告スヘシ

司法大臣前項ノ報告ヲ受ケタルトキハ試補ヲ免スルコトアルヘシ

第五章 第二回試験

第二十三條 第二回試験ハ控訴院ニ於テ之ヲ行フ

試験ノ場所ハ司法大臣之ヲ定メ試験ノ期日ハ試験委員長之ヲ定ム

第二十四條 試補第二回試験ヲ受クルニハ直接指揮監督者ヲ經由シテ志願書ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

志願書ニハ修習目録ト陸海軍ノ現役ヲ終ヘ又ハ之ヲ免セラレタルコトヲ證明スル書面トヲ添フヘシ

第二十五條 司法大臣ハ第二回試験ヲ受クヘキ試補ノ氏名ヲ試驗委員長ニ通知シ試験ヲ行ハシム

第二十六條 第二回試験ハ受験者ノ實務ニ習熟シタルヤ否ヲ試験スルヲ以テ主タル目的トシ筆記口述ノ二様トス

第二十七條 試驗委員ハ試補ニ筆記試験ノ爲メ二件以上ノ訴訟記録ヲ付與スヘシ

第二十八條 受験者ハ付與セラレタル訴訟記録ニ就キ事實及

理由ヲ詳示シタル判決案ヲ答案トシテ差出スヘシ

答案ハ二十日ノ期間内ニ之ヲ差出スヘシ若シ此期間内ニ答案ヲ差出サ、ルトキハ試験ハ成立タルモノトス

第二十九條 口述試験ハ民法商法刑法民事訴訟法刑事訴訟法ノ中少クトモ三科目ニ就キ之ヲ施行ス

又訴訟記録ニ就キ問ヲ發シ之ヲ答ヘシムヘシ其記録ハ試験期日ノ三日前ニ之ヲ付與ス

第三十條 左ノ場合ニ於テハ司法大臣ハ試験委員長ノ報告ニ因リ試補ヲ免ス

一 第二回試験ニ及第セサルトキ

二 第二回試験ノ成立ヲサルトキ

第三十一條 前條第二ノ場合ニ於テ試補已ムテ得サル事故アリシコトヲ證明シ試験委員之ヲ正當ト認メタルトキハ其旨ヲ司法大臣ニ報告スヘシ

司法大臣前項ノ報告ヲ受ケタルトキハ其試補ニ一回ヲ限リ次期ノ試験ヲ引續キ修習ヲ爲サシムルコトアルヘシ

第三十二條 第一回試験ニ關ル第十一條及第十三條乃至第十五條ノ規程ハ第二回試験ニモ亦之ヲ適用ス

○裁判所書記登用試験規則

明治二十四年五月
司法省令第四號

裁判所書記登用試験規則左ノ通相定ム

裁判所書記登用試験規則

第一章 試驗

第一條 裁判所書記登用試験ハ文官試驗ニ關ル勅令ノ外本則

ノ規程ニ從フ

第二條 試驗ハ各控訴院ニ於テ之ヲ行フ

第三條 試驗委員ハ控訴院判事檢事書記長又ハ其管内地方裁判所ノ判事檢事ノ中ヨリ司法大臣之ヲ命ス

試驗委員長ハ委員中官等最高者ヲ以テ之ニ充ツ

第四條 試驗ハ作文筆寫取算簿記ノ外民法商法刑法民事訴訟法刑事訴訟法ノ中ニ就キ之ヲ施行ス

第五條 試驗委員長ハ受験者ノ申立アルトキハ地方裁判所ニ於テ筆記試験ヲ受ケシムルコトヲ得此場合ニ於テ試験問題ノ答案ハ其裁判所ノ官吏監督シテ之ヲ作ラシム

第六條 試驗委員筆記答案ヲ調査シタル後口述試験ヲ爲スニ足ルヘキモノト認メタルトキハ口述試験ノ爲メ受験者ヲ呼出スヘシ

第七條 受験者口述試験ニ闕席シタルトキハ試験ハ成立タルモノトス

第八條 試驗ニ及第シタル者ニハ試験委員長及試驗委員ノ連署シタル及第證書ヲ授與ス

第九條 試驗委員長ハ及第者ノ氏名及其試験ノ成績ヲ司法大臣ニ報告スヘシ

第二章 實地修習

第十條 試驗ニ及第シタル者ハ裁判所書記見習ヲ命セラルコトヲ得

裁判所書記見習ハ區裁判所及地方裁判所並其檢事局ニ於テ實地修習ヲ爲スヘシ

第十一條 實地修習ノ順序ハ控訴院檢事長協議シテ之ヲ定ム

第十二條 實地修習ノ指揮監督ハ地方裁判所長若ハ檢事正又

ハ區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事若ハ檢察事ヲ爲ス
 指那監督者ハ修習ノ事務ヲ直接ニ指示スヘキ官吏ヲ定ムヘシ
 第十三條 裁判所書記見習職務上ノ義務ヲ怠リ又ハ職務上若
 ハ職務外ニ於テ其身分ニ適セサル行狀アルトキハ指那監督
 者之ヲ諭告スヘシ
 第十四條 裁判所書記見習職務上若ハ職務外ノ行狀其職務ヲ
 執ルニ不適當ナルコト又ハ其修習ノ進歩不十分ナリト認ムル
 トキハ指那監督者ハ控訴院長檢察長ニ之ヲ報告スヘシ
 第十五條 指那監督者ハ裁判所書記見習其指那監督ニ係ル修
 習ヲ終リタルトキハ修習ニ關ル證明書ヲ作り修習ノ成績並
 職務上及職務外ノ行狀ヲ記載シテ之ヲ控訴院長檢察長ニ差
 出スヘシ
 若シ行狀ニ就キ諭告シタルコトアルトキハ其旨ヲ證明書ニ
 附記スヘシ
 控訴院長檢察長ハ證明書ニ意見ヲ附シ之ヲ司法大臣ニ差出
 スヘシ
 第十六條 本章ノ規程ハ試驗ヲ經シテ裁判所書記見習トナ
 リタル者ノ實地修習ニモ亦之ヲ適用ス

○執達吏登用規則 明治二十三年八月
 司法省令第二號
 明治二十三年二月法律第六號裁判所構成法第九十五條及第九十
 九條ニ依リ執達吏登用規則左ノ通相定ム

執達吏登用規則
 第一條 執達吏ニ任セラル、ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ
 要ス

第一 年齡滿二十五歲以上ナルコト
 第二 陸海軍ノ現役ヲ終ヘ又ハ之ヲ免セフシタルコト
 第三 身體健全ナルコト
 第四 家計ノ整理シタルコト
 第五 品行方正ナルコト
 第六 試驗ニ及第シタルコト
 第七 左ニ掲ケル者ハ執達吏ニ任セラル、コトヲ得ス
 第一 重罪ヲ犯シタル者但國事犯ニシテ復権シタル者ハ此
 限ニ非ス
 第二 定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者
 第三 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ義務ヲ免カレサル者
 第四 懲戒ノ處分ニ由リ免職セラレタル者
 第三條 執達吏ノ試驗ヲ受クントスル者ハ少クトモ六箇月間
 區裁判所ニ於テ主トシテ執達吏ノ職務ヲ修習シ傍ラ書記ノ
 職務ヲ修習スルコトヲ要ス
 職務ノ修習ヲ爲ス者ハ職務上ノ秘密ヲ漏洩スヘカラス
 第四條 職務修習ヲ願フニハ願書ニ兵役ニ關ル證書及履歷書
 ヲ添付シ之ヲ控訴院長ニ差出シ其許可ヲ受クヘシ
 第五條 職務修習ノ許可ヲ爲シタルトキハ控訴院長ハ修習者
 ノ屬スヘキ區裁判所ヲ指定スヘシ
 區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事ハ授業ヲ擔當スヘキ執
 達吏及裁判所書記ヲ選定シ職務ノ訓練ヲ爲シムヘシ
 第六條 控訴院長ハ修習者ノ行狀執達吏トナルニ不適當ナリ
 ト認ムルトキハ其修習ヲ止ムルコトヲ得
 第七條 職務修習者試驗ヲ受クントスルニハ第一條第一乃至
 第五ノ諸件ヲ具備シタルコト及第二條ノ諸件ニ觸レサルコ
 トヲ得

トテ證明シ遊修習ノ日數ヲ記入シタル願書ヲ區裁判所ノ一
 人ノ判事若ハ監督判事ヲ經由シテ控訴院長ニ差出スヘシ
 區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事ハ前項ノ願書ニ意見ヲ
 付スヘシ
 控訴院長ハ書類ヲ調査シ試驗ノ許否ヲ定ムヘシ
 第八條 試驗ハ地方裁判所ニ於テ毎年一回之ヲ行フ
 第九條 試驗委員長及試驗委員ハ地方裁判所及區裁判所ノ判
 事檢事ノ中ヨリ試驗舉行毎ニ司法大臣之ヲ命ス
 第十條 控訴院長ハ試驗ヲ受クヘキ修習者ノ名簿ヲ試驗委員
 長ニ送付スヘシ
 前項ノ送付アリタルトキハ試驗委員長ハ試驗期日ヲ定メ之
 ヲ修習者ニ告知スヘシ
 第十一條 試驗ハ筆記口述ノ二様トス
 口述試驗ハ筆記試驗ニ及第シタル者ニ之ヲ行フ
 第十二條 試驗ハ左ノ科目ニ就キ之ヲ行フ
 第一 民事訴訟法及治罪法ノ中書類送達及執行ニ關ル規程
 第二 執達吏ニ關ル諸規則
 第三 算術(加減乘除分數比例)
 第四 體書筆寫
 第十三條 筆記試驗問題ノ答案ハ裁判所ノ官吏監督シテ之ヲ
 作ラシム試驗委員長ハ受験者ノ申立アルトキハ區裁判所ニ
 於テ筆記試驗問題ノ答案ヲ作ラシムルコトヲ得
 第十四條 受験者ノ及第落第及及第者ノ優劣ハ筆記試驗口述
 試驗ノ成績ニ對スル委員過半數ノ意見ニ從テ之ヲ決ス
 及第落第ニ付テノ意見相半スルトキハ落第ト看做スヘシ
 第十五條 試驗ニ及第シタル者ニハ試驗委員長及試驗委員ノ

連署シタル及第證書ヲ授與ス
 第十六條 試驗ニ落第シタル者ハ更ニ三箇月以上修習ヲ爲ス
 ニ非ザルハ再ヒ試驗ヲ受クルコトヲ得ス
 第十七條 不正ノ方法ヲ以テ及第シタル者ハ再ヒ試驗ヲ
 受クルコトヲ得ス其及第シタル者ハ及第ノ效ナキモノトス
 第十八條 試驗委員ハ試驗ノ問題及成績ヲ記錄ニ記載スヘシ
 第十九條 試驗委員長ハ及第者ノ氏名及其試驗成績ヲ控訴院
 長ニ報告スヘシ
 第二十條 左ニ掲ケル者ハ試驗ヲ要セス執達吏ニ任セラル、
 コトヲ得
 第一 官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學
 校、司法舊法學校又ハ帝國大學ノ監督ヲ受ケタル舊
 私立法學校及文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ
 法律學ヲ教授スル私立學校ノ卒業證書ヲ有スル者
 第二 裁判所書記ノ登用試驗ニ及第シタル者
 第三 判任官以上ノ職ヲ現ニ奉シ又ハ曾テ奉シタル者
 第四 陸軍下士ニシテ文官奉職ヲ請願スルコトヲ得ル者
 第二十一條 第三條乃至第六條ノ規程ハ前條ニ掲ケタル者ニ
 モ亦之ヲ適用ス
 前條第四ニ該ル者ハ職務修習ノ願書ニ修習ヲ爲サントスル
 區裁判所書記職シ陸軍大臣ヲ經由シテ司法大臣ニ差出スヘ
 シ司法大臣ハ願書ヲ管轄控訴院長ニ送付スヘシ
 區裁判所書記ハ職務修習ヲ要セス執達吏ニ任セラル、コト
 ヲ得(二十四年司法省令第六號)
 第二十二條 試驗及第者及第二十條ニ掲ケタル者ニシテ職務
 修習ヲ終リタル者並ニ區裁判所書記ヨリ轉任スル者ノ任補

ハ執達吏ノ缺員アルヲ待テ控訴院長之ヲ攝行ス(二十四年司法省令第六號ヲ以テ)

第二十三條 執達吏ニ任セラレタル者ハ任補ノ日ヨリ三十日
内ニ保證金ヲ管轄地方裁判所ニ納ムヘシ若シ其期間内ニ保
證金ヲ差出サ、ルトキハ職務ヲ罷免ス

保證金ハ五百圓以下ニ於テ土地ノ情況ニ從ヒ控訴院長之ヲ
定ム

保證金ハ相當ノ價格アル公債證書若ハ日本銀行株券ヲ以テ
之ニ代ユルコトヲ得

第二十四條 執達吏保證金ヲ納メタルトキハ裁判所ハ官印ヲ
交付ス

執達吏ハ官印ノ交付ヲ得タル後ニ非サシハ職務ヲ行フコト
ヲ得ス

附則

第二十五條 本則實施ノ際ハ職務修習ヲ要セス試験及任補ヲ
行フコトヲ得

○營林主事補及森林監守任用方

明治二十三年十二月
勅令第八十二號

營林主事補及森林監守任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシ
ム

林區署所在地方ニ居住シ近接森林ノ狀況並ニ土地ノ慣習ニ通
曉セル者ヲ營林主事補及森林監守ニ選任スルノ必要アルトキ
ハ農商務大臣定ムル所ノ採用規則ニ依リ之ヲ選任スルコトヲ
得但該規則ニ依リ選任シタル營林主事補及森林監守ハ他ノ判

任官ニ任スルコトヲ得ス

○營林主事補及森林監守特別採用

明治二十三年三月
農商務省令第四號

明治二十一年農商務省令第三號營林主事補及森林監守特別採
用規則左ノ通改正ス

營林主事補及森林監守特別採用規則

第一條 大林區署所轄内ニ居住シ森林ノ狀況並ニ土地ノ慣習
ニ通曉セル者ヲ營林主事補及森林監守ニ選任スヘキ必要アル
トキハ第二十六條ニ掲クル者ヲ除クノ外左ノ科目ニ就キ
試験ヲ行フ

一 現行法令講讀

二 作文

三 算術

四 筆寫

五 當該大林區署所轄内森林ノ狀況及土地ノ慣習

六 簿記(特別ノ必要アルトキ又ハ受

七 地圖(驗者ノ望ニ依リ之ヲ試験ス

第二條 試験ヲ受ケント欲スル者並ニ第二十六條ニ依リ試験
ヲ要セスシテ任用セラル、者ハ相當ノ期限内當該大林區署
所轄内ニ現住スル者又ハ居住セシコトアル者ニ限ル

第三條 試験ハ大林區署長ニ於テ署員二名以上ヲ選定シ委員
ヲ命シテ之ヲ行ハシム

第四條 試験ノ期日ハ大林區署長之ヲ定メ試験期日二十日前
便宜ノ方法ヲ以テ公告スヘシ

第五條 受験者ノ人員ハ採用スヘキ人員ノ五倍ヨリ少カラザ
ル數ニ限ルコトヲ得但シ此場合ニ於テハ試験ノ期日ト共ニ
其ノ人員ヲ公告スヘシ

第六條 試験ヲ受ケント欲スル者ハ試験期日七日前迄ニ履歷
書及第七條ノ證明書ヲ添ヘ願書ヲ當該大林區署ニ差出スヘ
シ其ノ願書履歷書ハ第一號及第二號書式ニ據リ本人自ラ之
ヲ認ムヘシ

第七條 試験出願者ハ身分職業年齢及免役延期豫備徵員一年
志願兵等ニ關スル事項ヲ證明シタル市區町村長ノ證明書ヲ
要ス

第八條 第五條ノ場合ニ於テ受験出願者滿員ノトキハ試験期
日七日前ト雖モ其ノ願書ヲ受理セス

第九條 試験問題試験日時制及受験人心得ハ大林區署長之ヲ
定メ各受験人ニ知悉セシムヘシ

第十條 試験ノ問題ハ林務ニ關スル事項ヲ參酌シ專ラ實務ニ
適應セシムルコトヲ要ス

第十一條 大林區署長ハ營林主事補ト森林監守ト試験問題ヲ
異ニシ或ハ同一トナスコトヲ得

第十二條 試験ハ筆記及口述ノ二種トス口述試験ハ筆記試験
ヲ終リタル後之ヲ行フ

第十三條 受験人ハ其ノ試験ヲ受クルノ際受験人心得及試験
委員ノ命令ヲ遵守スヘシ犯ス者ハ當該試験委員ヨリ直ニ退
場ヲ命スヘシ其ノ退場ヲ命セラル者ハ當期ノ試験ヲ受
クルコトヲ得ス

第十四條 不正ノ方法ヲ以テ合格シ其ノ事ノ發覺シタルトキ
ハ合格ノ効ナキモノトス

第十五條 第十四條ニ依リ合格ノ効ヲ失ヒ又ハ不正ノ方法ヲ
以テ合格セント企テタル者ハ再ヒ試験ヲ受クルコトヲ得ス

第十六條 履歷書中事實ヲ隱匿シ又ハ之ヲ偽リタル者ハ試験
ヲ受クルコトヲ得ス

第十七條 試験各科目ノ點數ハ一百ヲ以テ最上點トシ各科目
ノ點數ヲ通計シ得ル所ノ和ヲ試験科目ノ數ヲ以テ除シ得
ルモノヲ諸科目平均點數トス諸科目平均點數六十點ヲ以テ
最下限トシ諸科目平均點數六十點未滿又ハ一科目ノ點數五
十點未滿ナルトキハ合格者トスルコトヲ得ス

第十八條 試験ヲ經タル各科目ノ點數及其ノ全體ノ効果ニ關
シ合格者ヲ定ムルハ大林區署長上席ヲ以テ試験ニ列席シ
ル委員ノ議定シタル平均點數ニ據ル

第十九條 大林區署長ハ試験ノ終リタル後二十日以内ニ各科
目試験ノ成績ヲ取調ヘ其ノ需用ニ應シ人員ヲ限リ合格者中
ヨリ選拔シテ當選者ヲ定メ應答ノ書類ヲ添付シテ上申スヘ
シ

第二十條 試験合格者ノ氏名ハ其ノ試験ヲ終リタル日ヨリ七
日以内ニ便宜ノ方法ヲ以テ之ヲ公告スヘシ

第二十一條 本則ニ依リ試験ヲ受ケテ合格シタル者ハ大林區
署長ヨリ營林主事補又ハ森林監守試験合格證書ヲ附與スヘ
シ

第二十二條 試験ニ及第シ合格證書ヲ得テ當選シタル者ヲ採
用スルトキハ見習ヲ命シ又ハ本官ニ任ス

第二十三條 營林主事補ト森林監守ト試験問題ヲ異ニシ森林
監守ノ試験ニ及第シ採用セラル者ト雖モ事務熟練ノモ
ト認メタルトキハ別ニ試験ヲ要セス營林主事補ニ任用ス

第二類 第一章 第三款 任免

三百三十六

ルコトアルヘシ

第二十四條 試補合格證書ヲ得テ其ノ際當選セザル者ハ他日當該大林區署ニ於テ需用アルトキ別ニ試驗ヲ要セス採用スルコトアルヘシ

合格證書有効ノ年限ハ其ノ日付ヨリ滿三年トス

第二十五條 試驗合格者中其ノ試驗ノ成績ニ據リ營林主事補ノ志願者ヲ森林監守ニ森林監守ノ志願者ヲ營林主事補ニ任用スルコトアルヘシ

第二十六條 左ニ掲クル者ハ試驗ヲ要セス營林主事補及森林監守ニ任用ス

- 一 前ニ判任文官ヲ勤メタル者
- 二 陸軍滿期ノ下士及陸軍滿期ノ上等兵ニシテ下士適任證書ヲ有スル者
- 三 滿二年以上巡査又ハ看守ヲ勤績セシ者
- 四 滿二年以上府縣立中學校公立小學校ノ教員ヲ勤績セシ者
- 五 本則施行ノ前ヨリ各官廳ノ雇員トナリ滿二年勤績ノ者

第二十七條 本則ニ依リ任用スルモノハ大小林區署判任官官等俸給令別表ニ據リ其ノ初任營林主事補ハ九等上級以下森林監守ハ十等三級以下ノ月俸ヲ支給ス

見習ヲ命シタルトキハ拾圓以下ノ月俸ヲ支給ス

第二十八條 本則ニ掲クルモノ、外試驗ニ關スル手續ハ大林區署長ノ定ムル所ニ據ル

書式用紙及簿籍等ノ施行ノ内ニテ

書式明瞭ニ記載シ一號二號各一通

(第一號)

受験願

族籍戸主又ハ何某嗣子二三男兄弟

職業 氏 名 生年月

現住所 氏 名 印 生年月

(何)大林區署長何某宛

(第二號)

履歷書

何府縣華士族平民 氏 名 生年月

本籍

一何府縣何市區郡何町村何番地戸主又ハ何某兄弟伯叔父等

現ニ本籍地ニ居住スルトキハ(現今本地ニ居住)

ノ數字ヲ加ヘ次項ノ現今寄留地ヲ名クヘシ

現今寄留地

一何府縣何市區郡何町村何番地(何某方)寄留

住所ノ移動

一何年何月何日何地ニ生シ何年何月マテ居住

一何年何月何地ニ移轉シ何年何月マテ居住

(住所ヲ移轉セシ毎ニ之ヲ記スヘシ)

學事

一何年何月ヨリ何地何某ニ就キ又ハ官公立何學校ニ於テ何學ヲ修メ何年何月ニ至ル所修ノ科目大略何々

一何年何月ヨリ何地官公立學校ニ入り何學科ヲ修メ何年何

第二類 第一章 第三款 任免

三百三十七

月卒業ス其證書ノ寫別紙ノ如シ修業何年何月間ニシテ其ノ科目ハ何々

一何年何月何地何學校若クハ其ノ他ニ於テ何々ノ試驗ヲ受ケ及第ス其ノ證書若クハ免許狀ノ寫別紙ノ如シ受験ノ科目ハ何々

職業

一何年何月何日官公立何學校何科教員トナリ教授ニ從事シ

何年何月辭職其ノ間何々ヲ兼勤シ何々ノ事務ニ從事ス其ノ辭令書寫左ノ如シ

(辭令書寫ハ各其ノ全文ヲ掲クヘシ又私立學校等ニテ辭令書ナキモノハ其ノ俸給等ヲ本文ニ記スヘシ)

一何年何月何日何官廳ニ於テ何々拜命何年何月何日マテ何々ノ事務ニ從事シ何年何月何日辭職其ノ官記辭令書寫左ノ如シ

(官記辭令書寫ハ各其ノ全文ヲ掲クヘシ)

一何年何月ヨリ何地何會社ニ傭ハン(給料何圓)何々ノ業務ニ從事シ何年何月ニ至テ解僱何年何月何日増給減額

一何年何月ヨリ何年何月マテ何業ニ從事ス

一何年何月ヨリ何々ノ著譯ニ從事シ何年何月ニ至ル其ノ著譯スル所ノ書名左ノ如シ

(洋書ハ其ノ著譯ノ原名ヲモ掲クヘシ)

賞罰

一何年何月何地ニ於テ何々ノ事由ニ依リ賞ヲ受ク其ノ辭令書寫左ノ如シ

(辭令書寫ハ其ノ全文ヲ掲ク辭令書ナキモノハ本文中ニ受賞ノ事由ヲ記スヘシ)

一何年何月何地ニ於テ何々ノ事由ニ依リ罰ヲ受ク其ノ辭令書寫要領左ノ如シ(辭令書アルモノハ其ノ全文ヲ掲ク辭令書ナキモノハ其ノ要領ニ據リ其ノ事由ヲ記シ又裁判所ノ宣告書ハ其ノ要領ニ據リ其ノ事由ヲ記スヘシ)

身代限處分ノ有無

一何年何月何地ニ於テ身代限ノ處分ヲ受ク

(裁判所ノ申渡書寫ヲ記スヘシ)

一身代限ノ處分ヲ受ケタルコトナシ

右之通相違無之候也

右

年月日 氏 名 印

○鐵道廳驛長任用方 明治二十三年九月 勅令第二百號

鐵道廳驛長任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

鐵道廳驛長ハ鐵道廳長官別ニ試驗規則ヲ定メ之ヲ採用スルコトヲ得

本令發布以前ヨリ驛長ノ職ニ就キ現ニ其事務ヲ執ルモノハ試驗ヲ要セス直ニ驛長ニ採用スルコトヲ得

前二項ニ依リ採用セラレタルモノハ普通試驗ヲ經ルニ非ラザレハ他ノ判任官ニ轉スルコトヲ得ス

○三等郵便局長任用方 明治二十年十二月 勅令第六十六號

三等郵便局長任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

三等郵便局長ハ其地ニ在住シ相當ノ資産アル者ヲ選任スルノ必要アルヲ以テ遞信大臣別ニ採用規則ヲ定メ之ヲ選任スヘシ

シ但該規則ニ依リ選任シタル三等郵便局長ハ他ノ判任官ニ任
スルコトヲ得ス

○三等郵便局長採用規則 明治二十一年四月
選任省令第二號
明治二十年十二月勅令第六十六號ニ據リ三等郵便局長採用規則
左ノ通之ヲ定ム

三等郵便局長採用規則

- 第一條 三等郵便局長ハ左ノ各款ヲ具備スル者ヨリ之ヲ採用
スヘシ
- 第一款 其三等郵便局所在地ニ在住スル者
- 第二款 實價貳百圓以上ノ土地又ハ家屋ヲ所有スル者
但滿三年以上郵便又ハ電信事務ニ従事スル官吏
ハ記名公債證書ヲ以テ之ニ充用スルコトヲ得
(二十三年五月二十九日選任省令
第十一號ヲ以テ本項ヲ追加ス)
- 第三款 日常ノ算筆ニ通スル者
- 第四款 別ニ定ムル三等郵便局長服務規約ヲ遵奉スル者
- 第五款 年滿二十一年以上ノ男子
- 第二條 誠實ニ職務ヲ奉シタル三等郵便局長老年又ハ疾病其
他ノ事故ニ依リ其職ヲ辭スルカ或ハ在官中死亡セシトキ其
嗣子又ハ相繼人タル男子年滿十六年以上ニ及フモノハ第
一條第五款ノ制限ニ拘ハラズ特ニ採用スルコトアルヘシ
- 第三條 非戸主ニシテ其戸主實價貳百圓以上ノ土地又ハ家屋
ヲ所有スル者保證スルニ於テハ其本人ノ資産第一條第二款
ニ適合セサルモ特ニ之ヲ採用スルコトアルヘシ

○北海道廳管下二等郵便局長採用方

明治二十二年四月
選任省令第五號

北海道廳管下ノ三等郵便局長ハ當分ノ内三等郵便局長採用規
則第一條第二款ノ制限ニ滿テサル者ト雖採用スルコトアルヘ
シ

○二等郵便局長採用ニ關シ郡區長戸

明治二十一年五月
選任省令第四號選任管理局

三等郵便局長ノ採用ニ關シ郡區長戸長ハ選任管理局長ノ照會
又ハ依リ應シ便宜處辨候様豫メ郡區長戸長ニ達示スヘシ

○二等郵便局長採用手續

- 第一條 三等郵便局長ノ採用ヲ要スルトキ選任管理局長ハ三
等郵便局長採用規則ニ合格スルモノ、中ニ就キ郵便事務ニ
適當ナリト認ル者ヲ撰出シ被撰人ノ諸否及身元引受人ノ有
無ヲ取調履歷書(書式)ヲ添ヘテ之ヲ推薦スヘシ
但辭職出願者又ハ死亡者若クハ犯罪ニ依リ官職ヲ失ヒタ
ル者アルトキ後任ヲ要スル場合ヲ除ク外ハ本大臣ノ指揮
ヲ待テ後選出スヘシ
- 第二條 選任管理局長ハ時宜ニ依リ三等郵便局長ノ選出ヲ郡
區長ニ囑托スルコトヲ得
- 第三條 選任管理局長ニ於テ三等郵便局長ノ任官辭令書ヲ傳
達スルトキハ受書(書式)及身元引受證書(書式)本人非戸主ナル

トキハ戸主ノ保證(書式)ヲ差出サシメ之ヲ本大臣ニ報告シ且
採用ノ旨ヲ其地方長官及郡區長ニ通知スヘシ其免官ノト
キ亦同シ

第四條 三等郵便局長ヲシテ爲替又ハ貯金ヲ取扱ハシムルト
キハ選任管理局長ニ於テ別ニ定ムル規程ノ保證品ヲ徵收ス
ヘシ

第五條 被選人ヨリ差出シタル書類及前條ノ保證品ハ選任管
理局ニ保管スヘシ
(書式略ス)

○三等電信局長選任及手當方

明治二十一年六月
勅令第四十五號

三等電信局長ノ選任及手當ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシ
ム

三等電信局長ハ三等郵便局長ノ例ニ依リテ選任シ手當ヲ支給
スヘシ

○東京郵便電信學校卒業生任用方

明治二十四年九月
勅令第九十二號

東京郵便電信學校卒業生任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セ
シム

東京郵便電信學校ノ卒業證書ヲ有スル者ハ文官普通試驗及事
務練習ヲ要セス直ニ郵便電信ニ關スル判任官ニ任用スルコト
ヲ得

但本令ニ依リ任用セラレタルモノハ普通試驗ヲ經ルニアラ
ザレハ他ノ判任官ニ任スルコトヲ得ス

○郵便及電信局並郵便爲替貯金局書

明治二十三年七月
勅令第三百三十號

郵便及電信局並郵便爲替貯金局書記補任ノ件ヲ裁可シ茲ニ之
ヲ公布セシム

郵便電信書記補郵便書記補電信書記補並郵便爲替貯金局書記
補ハ選任大臣別ニ試驗規則ヲ定メ之ヲ採用スルコトヲ得其規
則ニ依リ採用セラレタルモノハ普通試驗ヲ經ルニアラザレハ
他ノ判任官ニ任スルコトヲ得ス

○郵便及電信局並郵便爲替貯金局

明治二十三年八月
選任省令第十六號

明治二十三年七月勅令第三百三十號ニ據リ郵便及電信局並郵
便爲替貯金局書記補試驗規則左ノ通之ヲ定ム

郵便及電信局並郵便爲替貯金局書記補

試驗規則

- 第一條 年滿十七歲以上四十五歲以下ニシテ一年以上郵便
電信又ハ郵便爲替貯金ノ業務ニ従事シタル者ハ書記補ノ試
驗ニ應スルコトヲ得
- 第二條 郵便電信局郵便局電信局並郵便爲替貯金局ニ於テ
書記補ノ任用ヲ要スル時ハ其局長ハ第一條ニ適合スル者ニ
就キ別ニ定ムル試驗手續ニ依リ試驗ヲ執行シタル上其成績

ヲ遞信大臣へ申出ツヘシ

遞信大臣ハ遞信省文官普通試験委員ニ下附シテ之ヲ點查セシメ合格者中所需ノ人員ヲ採用スルモノトス

第三條 左ニ掲クル事項ノ一ニ當ル者ハ試験ヲ要セス直ニ書配補ニ任用スルコトヲ得

- 一 本規則施行ノ前二年以上郵便電信局郵便局電信局又ハ郵便爲替貯金局ノ雇員トナリ現ニ其職ニ在ル者ニシテ
- 遞信大臣ニ於テ事務ニ熟練シタルト認ムル者
- 二 遞信省規定ノ電氣通信技術員養成規則ニ依リ電氣通信技術ノ傳習ヲ卒業シ六箇月以上其業務ニ從事シタル者

○東京電信學校ノ卒業證書ヲ有スル者遞信技手ニ任用方
明治二十一年五月 勅令第八號

東京電信學校ノ卒業證書ヲ有スル者ハ事務練習ヲ要セス直ニ遞信技手ニ任スルコトヲ得

○會計検査官任用資格
明治二十二年六月 勅令第八十號

會計検査官資格ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
會計検査院法第六條ニ依リ會計検査官ハ左ノ資格ヲ具フル者ヲ以テ之ニ任ス

- 第一 年齡滿三十歳以上ノ者
- 第二 五年以上検査官補又ハ五年以上他ノ高等行政官タル者但試補勤務年數ハ之ヲ算ス

○會計検査官補特別任用
明治二十五年七月 勅令第六十一號

朕検査官補特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 會計検査院屬ニシテ五年以上検査院ニ奉職シ現ニ三級以上ノ俸給ヲ受ケ功績顯著ナル者ハ高等試験ヲ要セス高等試験委員ノ銓衡ヲ經テ検査官補ニ任用スルコトヲ得

○北海道郡區長試験ヲ要セス判任官
明治二十二年一月 勅令第三號

第二條 本令ニ依リ任用シタル検査官補ハ高等試験ヲ經ルニアラサレハ検査官及他ノ高等官ニ轉任スルコトヲ得ス

○北海道集治監分監長及北海道廳典獄特別任用方
明治二十四年七月 勅令百十三號

朕北海道集治監分監長及北海道廳典獄特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
第一條 北海道集治監分監長及北海道廳典獄ハ五箇年以上官務ニ從事シ現ニ判任官六級以上ノ俸給ヲ受ケタル者ニ限リ當分ノ内試験ヲ要セス文官高等試験委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

第二條 前條ニ依リ文官高等試験委員ノ銓衡ヲ經テ任用シタル北海道集治監分監長及北海道廳典獄ハ高等試験ヲ經ルニ

非ツレハ他ノ高等官ニ轉任スルコトヲ得ス

附則

第三條 本令ハ明治二十四年八月十六日ヨリ施行ス

○府縣參事官及典獄特別任用令
明治二十三年十月 勅令第二百二十七號

朕府縣參事官及典獄特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
府縣參事官典獄特別任用令

第一條 府縣參事官典獄ハ五箇年以上官務ニ從事シ判任官「三等以上」ノ現職ニ在ル者ニ限リ當分ノ内試験ヲ要セス高等試験委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

○郡區長ハ當分内務大臣ノ指定科目
明治二十年七月 勅令第二十號

第二條 前條ニ依リ高等試験委員ノ銓衡ヲ經テ任用シタル府縣參事官典獄ハ高等試験ヲ經ルニ非ツレハ各地ノ高等官ニ轉任スルコトヲ得ス

○郡區長試驗條規
明治二十年十二月 內務省令第五號

但郡區長ハ高等試験ヲ經タル者ニ非ツレハ他ノ高等官ニ轉スルコトヲ得ス

郡區長試驗ニ關シ左ノ條規ヲ定ム

第一條 郡區長ノ試験ハ左ノ科目ヲ以テ内務省ニ於テ之ヲ行フ

- 一 就職スヘキ地方ノ風土慣例及物産
- 一 郡區長職務ニ必要ナル法令
- 一 郡區長職務ニ關スル公文ノ立案

第二條 郡區長ノ試験ヲ受ケタルハ滿三十年以上ノ者タルヘシ但該地方ニ於テ五箇年以上奏任官又ハ郡區長ノ職ヲ奉シタル者ハ此限ニアラス

第三條 試験出願者ハ願書ニ就職スヘキ地名ヲ記入シ履歷書ヲ取添ヘ北海道廳又ハ府縣廳ヲ經テ試験委員長ニ差出スヘシ

第四條 試験委員ハ内務大臣内務省ノ高等官若クハ他官廳ノ高等官ヨリ選テ之ヲ命シ又ハ囑託シ内務省總務局長ヲ以テ委員長トス

第五條 試験委員ハ必要アル場合ニ於テハ問題ヲ選定シテ北海道廳長官府縣知事ニ送付シ該地方高等官三名以上ノ列席ニ於テ其應答ヲ爲シタルコトヲ得

第六條 試験ノ手續ニ關スル細目ハ試験委員長ノ定ムル所ニ依ル

○郡區長特別任用方
明治二十三年二月 勅令第九號

朕郡區長任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
第一條 郡區長ハ五箇年以上官務ニ從事シ判任官「五等以上」ノ現職ニ在ルモノニ限リ當分ノ内試験ヲ要セス郡區長試験

委員長ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

第二條 郡區長試驗委員長銓衡ヲ經テ郡區長ニ任用シタル者他ノ道廳府縣ノ郡區長ニ轉任スルトキハ更ニ郡區長試驗委員長ノ銓衡ヲ經ヘン

第三條 郡區長試驗委員長ノ銓衡ヲ經テ任用シタル郡區長ハ高等試驗ヲ經ルニアラサシハ他ノ高等官ニ轉任スルコトヲ得ス

○府縣立師範學校長特別任用令

明治二十四年八月十八日
勅令第七十三號

朕府縣立師範學校長特別任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

府縣立師範學校長特別任用令

第一條 府縣立師範學校長ハ高等師範學校ノ卒業證書ヲ有スル者若クハ本令施行ノ際尋常師範學校長ノ現職ニ在ル者又ハ五箇年以上教育ニ關スル公務ニ從事シ現ニ四拾圓以上ノ月俸ヲ受クル判任官又ハ判任待遇ノ者ニ限リ當分ノ内試驗ヲ要セス文官高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

第二條 前條ニ依リ任用シタル府縣立師範學校長ハ高等試驗ヲ經ルニ非サシハ他ノ高等官ニ轉任スルコトヲ得ス

附則

第三條 本令ハ明治二十五年四月一日ヨリ施行ス

○警視特別任用令

明治二十四年四月
勅令第三十七號

朕警視署長ニ補スヘキ警視特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 警察署長ニ補スヘキ警視ハ五箇年以上警部ニ奉職シ判任官ニ等以上ノ現職ニ在ル者ニ限リ當分ノ内試驗ヲ要セス高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

第二條 前條ニ依リ任用シタル警視ハ高等試驗ヲ經ルニ非サシハ他ノ高等官ニ轉任スルコトヲ得ス

○巡查現職ノ者警部同補ニ任用方

明治二十三年二月
勅令第十號

朕巡查奉職滿五年以上ノ者ヲ警部警部補ニ任用スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

巡查奉職滿五年以上ニシテ精勤證書ヲ有シ現ニ其職ヲ奉スル者ハ文官試驗試補及見習規則第一條ノ規定ニ據ラス文官普通試驗委員長ノ銓衡ヲ經テ警部警部補ニ任用スルコトヲ得

但試驗ヲ經スシテ任用シタル警部警部補ハ普通試驗ヲ經ルニアラサシハ他ノ判任官ニ轉任スルコトヲ得ス

○看守現職者看守長看守副長ニ任用方

明治二十三年七月
勅令第四十六號

朕看守奉職滿五年以上ノ者ヲ看守長(看守副長)ニ任用スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

看守奉職滿五年以上ニシテ精勤證書ヲ有シ現ニ其職ヲ奉スル者ハ文官試驗試補及見習規則第二條ノ規定ニ據ラス文官普通試驗委員長ノ銓衡ヲ經テ看守長看守副長ニ任用スルコトヲ得

但試驗ヲ經スシテ任用シタル看守長看守副長ハ普通試驗ヲ經ルニアラサシハ他ノ判任官ニ轉任スルコトヲ得ス

○巡查採用規則

明治二十四年九月
內務省勅令第二十一號

第一條 巡查ハ必試驗ノ上採用スヘキモノトス但巡查精勤證書ヲ有スル者ハ此限ニアラス

第二條 巡查志願者ハ品行方正年齡二十三年以上四十年未満ニシテ徵兵ニ相當セス且ツ左ノ諸項ニ抵觸セサル者タルヘシ

一 重罪ノ刑又ハ重禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ同上ノ刑ニ處セラレヘキ罪ヲ犯シ單ニ監視ニ附セラレタル者及輕禁錮ノ刑ニ處セラレ滿期後五年ヲ經過セサル者但舊法ニ依リ施體ノ刑ニ處セラレタル者ハ總テ本文ノ權衡ニ準ス

二 賭博犯處分規則ニ依リ懲罰ニ處セラレタル者

三 巡查懲罰例又ハ官吏懲罰例ニ依リ免職セラレ若クハ故ナク巡查ヲ辭職シ二年ヲ經過セサル者

四 身分不相應ノ負債アル者又ハ家資分散者タルノ宣告ヲ受ケ未タ復權ヲ得サル者又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ未タ辨償ノ義務ヲ終ヘサル者(二十四年十月內務省勅令第三十三號)

五 酒癖アル者又ハ暴行ノ癖アル者

第三條 巡查體格ノ検査ハ左ノ諸項ニ適合スル者ヲ以テ合格トス

一體質善良ナル者即チ左ニ記載スル等ノ缺所ナキ者

四肢完具セサル者但執筆把握ニ差支サル指ノ萎小彎屈強直等ノ類ハ此限リニアラス

胸腔機關及腹內臟器若クハ皮膚病顯著ノ疾病アル者但

較著ノ疾病ニアラサルモ全身諸機關ノ機能減衰ノ者亦同シ

服裝又ハ運動ニ不便ナル者

贅生物畸形等容貌醜惡ナル者

二 身幹五尺一寸以上ニシテ胸圍大約身長ノ半ニ等シク呼吸縮長ノ差一寸以上ノ者

三 兩眼共視力三分ノ二以上ニシテ辨色力完全ノ者

四 聽力六尺ノ距離ニ於テ低語ヲ聽識シ得ル者

五 言語應答明瞭ニシテ充分ノ發聲ニ堪ユル者

六 精神完全ナル者即チ精神病及神經病(發癲癲狂癡狀及舞蹈病癲癩等ノ病)ナキ者

第四條 巡查技藝ノ試驗ハ左ノ諸項ニ適合スル者ヲ以テ合格トス

一 刑法刑事訴訟法警察法規等ノ大要ニ通スル者

二 本邦歴史及地理ノ大略ニ通スル者

三 假名交リノ論文及普通往復文ヲ作り得ル者

四 算術加減乘除ヲ爲シ得ル者

第五條 巡查ノ試驗ハ廳府縣巡查教習所ニ於テ警部二名以上立合ノ上巡查教習所長之ヲ施行スヘン

第六條 試驗ノ上巡查ニ採用スヘント定リタル者ハ警視廳ニ於テハ巡查本部長北海道廳及府縣ニ於テハ警部長親ク左ノ諸件ヲ宣告シ誓書ヲ徵シタル上採用ス可シ

一 巡查タル者ハ官吏服務紀律ヲ恪守スヘキハ言ヲ俟タス常ニ上官ノ命令ヲ遵守シ勤務中ハ勿論勤務ニ服セサルトキト雖モ猥ニ政治ノ是非得失ヲ論評スルカ如キコト決シテ

アルマシキ事
 一 巡査タル者ハ常ニ人民ノ保護者タルコトヲ記憶シ之ニ對シテ丁寧切テ旨トシ而モ之ト相押職スルカ如キコトナク職務上ニ於テ負擔スル百般ノ責務ハ最モ嚴正忠實ニ之ヲ踐行スヘキ事
 一 巡査タル者ハ一端奉職ノ上ハ他念ナク職務ニ從事シ五箇年未滿ニシテ一身ノ故ヲ以辭職スルカ如キコト決シテアルマシキ事
 一 巡査タル者ハ自身ハ勿論家族ニ至ル迄專ラ品行ヲ正シクシ警察官吏タリ又其家族タル體而テ汚損スルカ如キ所業決シテアルマシキ事
 第七條 巡査タルヘキ者ヨリ呈セシムヘキ誓文ハ左ノ如シ但前條各官ノ面前ニ於テ本人ヲシテ自書捺印セシム可シ
 誓文

某 儀

今般何(廳府縣)巡査志願仕候ニ付御採用ヲ被ルニ於テハ官吏服務規律ヲ恪守仕ルヘキハ勿論人民ニ對シテハ丁寧親切ニ職務ヲ執行シ且ツ總テノ法律命令ヲ遵守シ職任上般ノ責務ハ嚴正忠實ニ踐行仕ルヘク又奉職五箇年ニ滿タズシテ一身ノ故ヲ以テ自ラ職務御免相願候様ノ儀決シテ無之且ツ自身ハ勿論家族ニ至ル迄品行方正ニ相保テ警察官吏タリ又其ノ家族タル體而テ汚損致シ候様ノ所業決シテ仕マシク依テ誓文如件
 明治 年 月 日
 府縣國郡市町村番地身分
 何 某實印

第八條 新ニ採用スル巡査ハ先ツ三級俸ヲ給スヘシ其陸軍現役滿期ノ下士及巡査精勤證書ヲ有スル者ニ係ルトキハ直ニ二級俸ヲ給スルコトヲ得但陸軍現役滿期ノ下士ニシテ士官適任證書ヲ有スル者ハ特ニ一級俸ヲ給スルコトヲ得

○陸軍現役滿期下士巡査志願ノ者採用方
明治二十二年七月 內務省勅令第三十號

陸軍現役滿期下士ニシテ巡査志願ノ者ハ學術試驗ヲ要セス採用スルコトヲ得

○陸軍將校分限令
明治二十一年十二月 勅令第九十一號

陸軍現役滿期下士ニシテ巡査志願ノ者ハ學術試驗ヲ要セス採用スルコトヲ得

陸軍將校分限令
明治二十一年十二月 勅令第九十一號

第一條 將校ハ終身其官ヲ保有シ其制服ヲ著シ其官ニ對スル禮遇ヲ享ク之ヲ將校ノ分限トス
 第二條 將校ハ左ニ掲ケル事項ノ一ニ因ルニ非レハ其分限ヲ失フコトナシ
 第一 本人ノ請願ヲ許容シ其官ヲ免セラレタルトキ
 第二 日本人タルノ分限ヲ失ヒタルトキ
 第三 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキ
 第四 剝官ノ宣告ヲ受ケタルトキ
 第五 禁錮ニ處セラレ其官ヲ失ヒタルトキ
 第六 武官タルノ本分ニ背キ勅裁ニ依リ免官トナリタルトキ

第三條 將校ノ位置ヲ分ツコト左ノ如シ
 第一 現役
 第二 豫備
 第三 後備
 第四 退役
 第四條 現役トハ現ニ軍務ヲ奉スル者修學ヲ命セラレタル者及陸海軍將校各其部内ノ文官ニ任セラレタル者ヲ云フ休職及停職ニ在ル者ハ現役ニ準ス
 休職トハ左ニ掲ケル事項ノ一ニ因リ職務ナキ者ヲ云フ
 一 解隊
 二 廢職
 三 定員改正
 四 滿期解任
 五 停房トナリタル者歸朝シ他員已ニ代リテ其職ニ在ルトキ
 六 特別ノ職務ヲ終ヘ又ハ修學滿期ニシテ就職ノ命ナキトキ
 七 傷痕若クハ疾病六箇月ニ至リ尙快復ノ候ナキトキ但本人ノ請願或ハ職務ニ因リ代員ヲ必要トスルトキハ六箇月ヲ待ツノ限ニアラス
 八 本人ノ請願ニ依リ修學ヲ許容シタルトキ
 九 陸海軍上長官士官各其部内ノ文官ニ專任シタルトキ停職トハ其行為懲戒スヘキコトアリ其情狀稍輕ク在職又ハ就職ヲ停メタル者ヲ云フ但停職者ハ一箇年ノ後ニ非レハ就職スルコトヲ得ス
 第五條 豫備トハ年齡滿限ニ至ラスシテ左ニ掲ケル事項ノ一

ニ因リ現役ヲ退キタル者及一年志願兵ヨリ士官ニ任シタル者ヲ云フ
 第一 恩給令ニ依リ旨ヲ諭サレ現役ヲ退キタルトキ
 第二 休職ニ入り五年ニ至リ就職セサルトキ
 但第四條第二項ノ第八第九ニ該ル者ハ此限ニアラス
 第三 停職ニ入り二年ニ至リ就職セサルトキ
 第四 陸海軍各外部ノ文官ニ專任シタルトキ
 第五 貴族院令第四條ニ依リ貴族院議員ト爲リタルトキ
(二十二年勅令第二百二十五號ヲ以テ本項追加)
 第六條 後備トハ年齡滿限ニ至リ現役ヲ退キタル者及豫備滿期ニ至リタル者ヲ云フ
 豫備後備ノ服役年期ハ別ニ之ヲ定ム
 第七條 退役トハ後備滿期ニ至リタル者又ハ傷痕疾病ノ爲メ永久服役ニ堪ヘスシテ現役又ハ豫備又ハ後備ヲ退キタル者ヲ云フ
 第八條 豫備後備者ハ召集ニ應スヘキモノトス
 第九條 本令ハ將校相當官ニ適用ス
 附則
 第十條 陸軍將校免職條例將官退職令及海軍將校免職條例ニ係ルハ廢止ス
 第十一條 陸軍將校免職條例及海軍將校免職條例ニ依リ待命若クハ非職タリシ者ノ位置ハ左ノ通之ヲ定ムヘシ
 一 待命ノ者ハ休職トス但陸軍將官ニシテ現ニ陸軍外部ノ文官ニ專任ノ者ハ豫備トス
 二 非職ノ者ハ休職トシ其停職解職ニ因テ非職タリシ者

ハ停職トシ其年數ハ各非職タリシ當日ヨリ起算ス但定期ノ年數ヲ越エタル者ハ豫備トス

三 「海軍將校ニシテ現ニ海軍部外ノ文官ニ專任ノ者ハ豫備トス」

第十二條 「海軍將校ニシテ年齡滿限ニ依リテ退職罷役ノ者ハ後備トス」

○海軍將校分限令 明治二十四年七月 勅令第七十九號

朕陸海軍將校分限中海軍將校分限令ニ關スル件ヲ廢シ海軍將校分限令制定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍將校分限令

第一條 海軍將校トハ大將中將少將大佐少佐大尉少尉ヲ云フ

第二條 將校ハ終身其官ヲ保有シ其制服ヲ著シ其官ニ對スル禮遇ヲ享ク之ヲ將校ノ分限トス

第三條 將校ハ左ニ掲ケル事項ノ一ニ依ルニ非レハ其分限ヲ失フコトナシ

第一 本人ノ請願ヲ許容シ其官ヲ免セザレタルトキ

第二 日本人タルノ分限ヲ失ヒタルトキ

第三 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキ

第四 劾官ノ宣告ヲ受ケタルトキ

第五 禁錮ニ處セラレ其官ヲ失ヒタルトキ

第六 武官タルノ本分ニ背キ勅裁ニ依リ免官トナリタルトキ

第四條 將校ノ位置ヲ分ツコト左ノ如シ

第一 現役

第二 豫備

第三 後備

第四 退役

第五條 現役トハ現ニ軍務ヲ奉スル者修學ヲ命セラレタル者將官海軍部内ノ文官ニ任セラレタル者及待命者ヲ云フ休職停職ニ在ル者ハ現役ニ準ス

待命トハ現職ナクシテ命ヲ待ツ者ヲ云フ

一 待命一箇年ヲ過タル者

二 傷痕若クハ疾病六箇月ニ至リ尙ホ快復ノ候ナキ者

三 本人ノ請願ニ依リ修學ヲ許容シタル者

四 前項ノ修學者ニシテ修學滿期ノ後就職ノ命ナキ者

五 上長官士官海軍部内ノ文官ニ專任シタルトキ

停職トハ其行為懲戒スヘキコトアリ其情狀稍輕ク在職又ハ就職ヲ停メラル、者ヲ云フ但停職者ハ一箇年ノ後ニ非レハ就職スルコトヲ得ス

第六條 豫備トハ年齡滿限ニ至ラスシテ左ニ掲ケル事項ノ一ニ依リ現役ヲ退キタル者ヲ云フ

第一 明治二十三年六月勅令第九十九號第三條ニ依リ現役ヲ退キタルトキ

第二 休職ニ入り二箇年ニ至リ就職セザルトキ但第五條第三項ノ第三ニ該ル者ハ此限ニアラス

第三 停職ニ入り一箇年半ニ至リ就職セザルトキ

第四 海軍部外ノ文官ニ專任シタルトキ

第五 貴族院令第四條第五條ニ依リ貴族院議員ト爲リタルトキ

第七條 後備トハ年齡滿限ニ至リ現役ヲ退キタル者及豫備滿期ニ至リタル者ヲ云フ

豫備後備ノ服役年期ハ別ニ之ヲ定ム

第八條 退役トハ後備滿期ニ至リタル者又ハ傷痕疾病ノ爲メ永久服役ニ堪ヘスシテ現役又ハ豫備又ハ後備ヲ退キタル者ヲ云フ

第九條 豫備後備者ハ召集ニ應スヘキモノトス

第十條 本令ハ將校相當官ニ適用ス

附則

第十一條 本令公布以前休職ニ入り二箇年ヲ過キタルモノハ本令公布ノ日ヨリ豫備トシ其他ハ休職ニ入りタル日ヨリ起算シ二箇年ニ至リ豫備ニ入ルモノトス

○官吏非職條例 明治十七年一月 大藏省達第三號

官吏非職條例左ノ通相定候條此旨相違候事

官吏非職條例

第一條 官吏御用以上並ニ出仕 奉職中各官廳ノ事務張弛其他疾病等ノ事故ニ因リ本屬長官ハ其僚屬ノ官吏ニ非職ヲ命スルコトヲ得但勅任官ノ非職ハ上裁ニ依リ奏任官ハ太政大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ命ス(十七年四月二十五日太政官達第一號)

第二條 非職員ハ其本官ヲ奉シテ常ニ其職務ニ從事セズ其他總テ在職官吏ニ異ナルコトナシ

第三條 本屬長官ハ事務ノ都合ニ依リ何時ニテモ非職員ヲシテ更ニ其職務ニ從事セシムルコトヲ得

非職員復職スルトキ勅任官ハ上裁ニ依リ奏任官ハ太政大臣

ノ認可ヲ經テ之ヲ命ス

第四條 非職ハ三年ヲ一期トス期滿レハ其官ヲ免ス

第五條 「非職中ノ俸給ハ現俸三分ノ一ヲ支給ス」(二十四年三月 第二十三號ヲ以テ本條ヲ削除ス)

第六條 廢廳廢官ノ際御用滞在ヲ命スル者アルトキハ本條例ニ準據ス(十七年四月二十五日太政官達第一號)

第七條 非職員ハ特ニ本屬長官ノ許可ヲ得テ市町村及學校病院會社其他法人ノ業務ニ從事シ其役員ト爲ルコトヲ得(十七年七月二十三日勅令第七十七號ヲ以テ本條ヲ改正ス)

非職員ハ特ニ本屬長官ノ許可ヲ得テ地方病院學校及農工商陸海運輸等會社ノ業務ニ從事シ其役員ト爲リ又ハ商業ヲ營ムコトヲ得但此場合ニ於テハ第五條ノ俸給ヲ支給セス(十七年七月二十五日勅令第七十七號ヲ以テ本項ヲ追加シ)

第八條 (同上ヲ以テ本條ヲ改正ス)

○官吏非職給改正 明治二十四年三月 勅令第二十三號

朕官吏非職條例中削除ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム本令ハ明治二十四年四月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

官吏非職條例第五條ヲ削除ス但シ明治二十四年四月一日現在ノ非職員ニハ其非職年限内仍ホ現俸四分ノ一ヲ支給ス

○非職給改正ニ付支給額訂正仕拂

命令方 明治二十四年三月 大藏省訓令第二十五號

二十一年度以前非職者俸給支給額從前令違ノ分明治二十四年四月一日以降變更ヲ來スヘキモ別ニ訂正令違セサルニ付本年

三勅令第二十三號但書ニ據リ支給額訂正仕擲命令ヲ發スヘシ

○非職官吏俸給下渡轉居及商業許可

明治十九年二月
勅令第一號

非職官吏ノ俸給下渡、住居移轉及商業ニ關シ左ノ通之ヲ定ム

第一條 凡ソ非職官吏ノ俸給ハ大藏省ニ於テ下渡スヘシ

第二條 本屬長官ハ非職官吏ノ官等俸給氏名住所及非職ノ年月日等ヲ大藏大臣ニ通知スヘシ

第三條 非職官吏ハ本屬長官ニ届出テ本屬官廳所在ノ地ノ外ニ住居スルコトヲ得

第四條 本屬長官前條ノ届出ヲ受ケタルトキハ大藏大臣ニ通知シ大藏大臣之ヲ地方官ニ通知シ該廳ヲ經由シテ俸給ノ下渡ヲ爲スヘシ

第五條 非職官吏移轉地ニ到着シタルトキハ其住所ヲ本屬長官及地方官ニ届出ヘシ嗣後更ニ其住所ヲ移轉スルトキモ亦同シ

第六條 非職官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得テ商業ヲ營ムコトヲ得

○非職官吏ノ俸給ハ所屬廳ヨリ下附

明治二十年三月
勅令第八號

非職官吏ノ俸給ハ明治二十二年度以降其所屬廳ニ於テ下渡ス可シ但明治二十二年三月三十一日マテハ非職ヲ命セザルニシテ官吏ノ俸給ハ從前ノ通大藏省ニ於テ下渡ス可シ

○非職官吏俸給支給方

明治二十年三月
大藏省令第五號

客年當省令第十七號ハ本月限り廢止シ非職官吏俸給ニシテ月俸ノ者ハ十二箇月分ヲノ儀ハ總テ客年當省令第十二號及ヒ第二十號高等官及ヒ判任官俸給支給細則ニヨリ支給ス

但非職俸給渡日ハ高等官ハ一箇年ヲ四期ニ分チ每期中ノ月四日、判任官ハ每月十五日ヨリ五日以内ト定ム

○非職官吏俸給支給期日指定

明治二十二年五月
大藏省訓令第三十五號

本年三月閣令第八號本文ニヨリ其應ニ於テ下渡スル非職俸給支給日ハ自今明治二十年三月當省令第五號但書ニ據ラス俸給支給細則中指定ノ期日ニ據ルヘシ

○非職官吏年限滿期届出

明治二十一年一月
大藏省訓令第四號

非職官吏ハ年限滿期ノ日ニ於テ本官自ラ消滅スヘキ筈ニ付其滿期本官消滅ノ者ハ十九年閣令第一號第二條ニ照準シ其官當省ハ届出ヘシ

○公吏ニシテ給料ヲ受クル非職官吏

明治二十三年八月
勅令第六十一號

ハ俸給ヲ支給セズ

○技術官ノ休職免職非職條例

明治二十三年十二月
勅令第二百八十六號

非職官吏ニシテ府縣郡市町村及公共組合ノ吏員トナリ其俸給ヲ受クル者ハ官吏非職條例第五條ノ俸給ヲ支給セズ

朕技術官ノ休職ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 技術官ノ休職ハ一年ヲ一期トス期滿ノハ其官ヲ免ス

第二條 技術官ノ休職ニ關シ特別ノ規定ナキモノハ總テ官吏非職ノ例ニ依ル

第三條 本令ハ明治二十四年二月一日ヨリ施行ス現ニ休職中ノ者ノ休職期限モ亦同日ヨリ起算ス

○裁判官檢察官裁判所書記ノ官名及裁判官休職ノ件

明治二十三年十月
勅令第二百五十四號

朕裁判官檢察官裁判所書記ノ官名及裁判官休職ニ係ル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 裁判所構成法實施ノ際在職ノ裁判官檢察官及裁判所書記ハ同法ニ定メタル判事檢察事及裁判所書記トス

第二條 裁判所構成法實施ノ際在職ノ裁判官ニシテ同法ニ依リ更ニ補職セラザル者ハ休職トス

第三條 判事十五年以上奉職ノ者裁判所構成法實施後疾病其他ノ事故ニ因リ職務ヲ執ルコト能ハサルニ至リ休職ヲ願出タルトキハ司法大臣ハ休職ヲ命スルコトヲ得但檢事ヨリ判事ニ轉任シタル者ハ檢事ノ勤務年數ヲ通算ス

第四條 休職中ノ俸給ハ現俸三分ノ一ヲ支給ス

第五條 休職判事ノ俸給支給ノ方法ニ付テハ一般非職官吏ノ例ニ依ル

○海軍武官待命休職條例

明治二十四年七月
海軍省令第四十六號

海軍武官待命休職條例左ノ通定ム

第一條 將官並ニ相當官ノ待命及休職者ハ直ニ海軍大臣ニ隸シ上長官以下ノ待命及休職者ハ第一局長ノ所轄トス

第二條 待命及休職者ハ東京府下ニ住居スルモノトス但休職者ハ海軍大臣ノ許可ヲ受ケ鎮守府所在ノ地ニ住居スルコトヲ得

第三條 待命及休職者ノ旅行其他住所届出手續等ハ一般ノ定規ニ依ルヘシ

第四條 待命及休職者傷痍疾病ニ罹リ服役ニ堪ヘ難キトキハ醫員ノ診斷書ヲ添ヘ速ニ届出ツヘシ

第五條 本條例ハ停職者ニ適用ス

○陸海軍軍人現役年限

明治二十三年六月
勅令第九十九號

朕陸海軍軍人現役年限ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 陸海軍軍人左ニ掲クル年限ノ年齢ニ達スルトキハ現役ヲ退クヘシ

陸軍

中將 七十年

少將 監督長 六十五年

軍醫總監 同 六十年

一等監督 軍醫監 同

憲兵屯田兵大中佐	同	五十七年
一二等軍醫正	同	五十四年
藥劑監 獸醫監	同	五十四年
步騎砲工輜重兵大中佐	同	五十四年
憲兵屯田兵少佐 監督補	同	五十四年
一等軍吏 一等軍醫	同	五十四年
一等藥劑官 一等獸醫	同	五十四年
步騎砲工輜重兵少佐	同	五十四年
憲兵屯田兵大尉	同	五十四年
二等軍吏 二等軍醫	同	五十四年
二等藥劑官 二等獸醫	同	五十四年
一等軍樂長 砲工兵上等監護	同	五十四年
步騎砲工輜重兵大尉	同	五十四年
憲兵屯田兵中少尉 三等軍吏	同	五十四年
三等軍醫 三等藥劑官	同	五十四年
三等獸醫 二等軍樂長	同	五十四年
砲工兵監護 諸工長	同	五十四年
諸工下長	同	五十四年
步騎砲工輜重兵中少尉	同	五十四年
憲兵屯田兵下士 軍吏部下士	同	五十四年
衛生部下士 軍樂部下士	同	五十四年
步騎砲工輜重兵下士	同	五十四年
憲兵屯田兵卒 看護手	同	五十四年
樂手補 雜卒 諸卒	同	五十四年
步騎砲工輜重兵卒	同	五十四年
海軍	同	五十四年

中將	同	六十五年
少將 機技總監	同	六十五年
軍醫總監 主計總監	同	六十五年
大佐 機關大監 大技監	同	六十五年
軍醫大監	同	六十五年
主計大監	同	六十五年
少佐 機關少監	同	六十五年
少技監 軍醫少監	同	六十五年
藥劑監	同	六十五年
主計少監	同	六十五年
上等兵曹 軍醫師	同	六十五年
機關師 上等技工	同	六十五年
船匠師	同	六十五年
大尉 大機關士	同	六十五年
大技士 大軍醫	同	六十五年
大藥劑官 大主計 下士	同	六十五年
少尉 少機關士 少技士	同	六十五年
少軍醫 少藥劑官	同	六十五年
少主計 卒	同	六十五年

社長又ハ役員トナルコトヲ得ス
 第八條 官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ其職務ニ關シ恩勞又ハ謝儀又ハ何等ノ名義ヲ以テスルモ直接ト間接トヲ問ハス總テ他人ノ贈遺ヲ受ルコトヲ得ス
 官吏外國ノ君主又ハ政府ヨリ授與セントスル所ノ勳章榮賜俸給並贈遺ヲ受クルニハ天皇陛下ノ裁可ヲ要ス
 第九條 左ニ掲ケタル者ト直接ニ關係ノ職務ニ居ルノ官吏ハ其職務ヲ受クルコトヲ得ス
 一官廳ノ工事ヲ受負フ者
 一官廳ノ爲替方又ハ出納ヲ引受クル者
 一官廳ノ補助金ヲ受クル起業者
 一官廳ノ用品ヲ調達スル者
 一官廳ト諸般ノ契約ヲ結フ者
 第十條 凡ソ上官タル者ハ職務ノ内外ヲ問ハス所屬官吏ヨリ贈遺ヲ受クルコトヲ得ス
 第十一條 官吏並ニ其家族ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ直接ト間接トヲ問ハス商業ヲ營ムコトヲ得ス
 第十二條 官吏ハ取引相場會社ノ社員タルコトヲ得ス及間接ニ相場商業ニ關係スルコトヲ得ス
 第十三條 官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ本職ノ外ニ給料ヲ得テ他ノ事務ヲ行フコトヲ得ス
 第十四條 浪費シテ產ヲ破リ其分ニ應セサル負債ヲ爲ス者ハ過失ノ一タルヘシ
 第十五條 官吏ハ私立郵船會社又ハ私立鐵道會社ヨリ無賃乘船無賃乘車切符ヲ受クルコトヲ得ス
 第十六條 凡ソ局長所長其他一部ノ長ハ各所屬官吏ヲ監督シ

○官吏服務紀律 明治二十年七月勅令第三十九號
 朕官吏服務紀律ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ施行セシム
 官吏服務紀律
 第一條 凡ソ官吏ハ天皇陛下及天皇陛下ノ政府ニ對シ忠順勤勉ヲ主トシ法律命令ニ從ヒ各其職務ヲ盡スヘシ
 第二條 官吏ハ其職務ニ付本屬長官ノ命令ヲ遵守スヘシ但其命令ニ對シ意見ヲ述ルコトヲ得
 第三條 官吏ハ職務ノ内外ヲ問ハス廉耻ヲ重シ貪汚ノ所爲アルヘカラス
 官吏ハ職務ノ内外ヲ問ハス威權ヲ濫用セス謹慎懇切ナルコトヲ務ムヘシ
 第四條 官吏ハ己ノ職務ニ關スルト又ハ他ノ官吏ヨリ聞知シタルトヲ問ハス官ノ機密ヲ漏洩スルコトヲ禁ス其職ヲ退シ後ニ於テモ又同様トス
 裁判所ノ召喚ニ依リ証人又ハ鑑定人ト爲リ職務上ノ秘密ニ就キ訊問ヲ受クルトキハ本屬長官ノ許可ヲ得タル件ニ限り供述スルコトヲ得
 第五條 官吏ハ私ニ職務上未發ノ文書ヲ關係人ニ漏示スルコトヲ禁ス
 第六條 官吏ハ本屬長官ノ許可ナクシテ擅ニ職務ヲ離レ及職務上居住ノ地ヲ離ル、コトヲ得ス
 第七條 官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ營業會社ノ

社長又ハ役員トナルコトヲ得ス
 第八條 官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ其職務ニ關シ恩勞又ハ謝儀又ハ何等ノ名義ヲ以テスルモ直接ト間接トヲ問ハス總テ他人ノ贈遺ヲ受ルコトヲ得ス
 官吏外國ノ君主又ハ政府ヨリ授與セントスル所ノ勳章榮賜俸給並贈遺ヲ受クルニハ天皇陛下ノ裁可ヲ要ス
 第九條 左ニ掲ケタル者ト直接ニ關係ノ職務ニ居ルノ官吏ハ其職務ヲ受クルコトヲ得ス
 一官廳ノ工事ヲ受負フ者
 一官廳ノ爲替方又ハ出納ヲ引受クル者
 一官廳ノ補助金ヲ受クル起業者
 一官廳ノ用品ヲ調達スル者
 一官廳ト諸般ノ契約ヲ結フ者
 第十條 凡ソ上官タル者ハ職務ノ内外ヲ問ハス所屬官吏ヨリ贈遺ヲ受クルコトヲ得ス
 第十一條 官吏並ニ其家族ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ直接ト間接トヲ問ハス商業ヲ營ムコトヲ得ス
 第十二條 官吏ハ取引相場會社ノ社員タルコトヲ得ス及間接ニ相場商業ニ關係スルコトヲ得ス
 第十三條 官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ本職ノ外ニ給料ヲ得テ他ノ事務ヲ行フコトヲ得ス
 第十四條 浪費シテ產ヲ破リ其分ニ應セサル負債ヲ爲ス者ハ過失ノ一タルヘシ
 第十五條 官吏ハ私立郵船會社又ハ私立鐵道會社ヨリ無賃乘船無賃乘車切符ヲ受クルコトヲ得ス
 第十六條 凡ソ局長所長其他一部ノ長ハ各所屬官吏ヲ監督シ

其過失若シ懲戒處分ヲ行フノ區域ノ内ニ在ラサル者ハ之ヲ訓告スルコトヲ務ムヘシ若シ懲戒處分ヲ要スト認ルトキハ事狀ヲ具ヘテ之本屬長官ニ稟告スヘシ其情ヲ知リ隱蔽シテ稟告セサル者亦過失タルコトヲ免レンス

官吏商業區分

明治八年四月 太政官達第六十五號

官吏商賈ノ營業不相成ハ勿論ニ候處其區分判然カラサルニ付自今左ノ通被定候條此旨相違候事

第一條

一 凡ソ官吏タルモノ并ニ其家族トモ他ノ物品ヲ買入レ之ヲ餘人ニ賣以テ利ヲ獲ルモノ或ハ他ノ生産ヲ買入レ製作ヲ加ヘ之ヲ販賣シテ利ヲ獲ル等ノ業一切禁止ノ事

第二條

一 官吏ノ家族自己ノ財ヲ以テ商賈ノ業ヲ營マント欲スル者ハ分籍別居ノ上相營ムヘキ事(二十年七月三十日勅令第一三十九號ニ依リ消滅ス)

第三條

一 左ノ數件ハ商賈ノ業ニアラサルニ付官吏タル者ト雖トモ禁制ニアラサル事

- 一 鐵山借區營業及ヒ田地ヲ所有シ其利ヲ獲ル事(八年五月太政官達第八十七號ヲ以テ本項ヲ改正ス)

- 一 田地家屋ヲ貸シテ地代宿賃ヲ獲ル事
- 一 金銀ヲ貸シテ利息ヲ獲ル事
- 一 所有地ヨリ生スル物産ニ製作ヲ加ヘ賣辦事

官吏會社ノ株主トナルヲ得ルノ區分

明治十四年五月 太政官達第三十七號

官吏商業區分ノ儀ニ付テハ兼テ相違候趣モ有之候處自今道路河港ノ修築海陸ノ運輸土地ノ開墾及ヒ殖産ノ事業ヲ以テ目的ト爲シ設立スル會社ノ株主トナルハ不苦候條此旨相違候事

官吏職務上直接關係アル會社ノ株主タルノ禁

明治十四年五月 內達

官吏ノ儀ハ濫リニ商社ニ加入等不相成ハ勿論今般第三十七號部内ノ會社ト雖トモ其人會社ニ直接關係アル者株主タルハ不都合ニ候條右等ノ儀無之樣取締可致此旨及內達候也

官地官林不用物品公賣ノ節其官廳ニ屬スル官吏投票ヲ禁ス

明治八年八月 太政官達

官地官林及ヒ不用ノ物品等公ノ入札法ヲ以テ拂下ケ候節其官廳ニ屬スル官員ニ限リ本人ハ勿論其代理人ト雖トモ投票爲致候儀不相成候條此旨相違候事

官吏公衆ニ對シ政事上學術上ノ意見演述ノ件

明治二十二年一月 內閣訓令

凡ソ官吏タル者ハ自今其職務外ト雖モ公衆ニ對シ政事上又ハ學術上ノ意見ヲ演述シ又ハ之ヲ敘述スルコトヲ得但各長官ノ

監督ニ從屬スヘシ

法律規則ヲ以テ特ニ制限セラレタル官吏ハ前項ノ限ニ在ラス

試補判任官見習ニテ一年志願兵トナル者服役方

明治二十二年三月 明令第十一號

試補及判任官見習ニシテ一年志願兵トナル者ハ在職ノ儘服役スルコトヲ得

但服役時日ハ實務練習ノ期限ニ算入セズ有給者ニハ俸給ヲ給セサルモノトス

海軍各軍法會議主理錄事服務並定員

明治二十三年十月 明令第二百四十六號

朕海軍各軍法會議主理錄事服務並定員ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 各軍法會議ノ上席主理ハ海軍治罪法ニ依リ職務ヲ執行スルノ外其軍法會議ノ庶務ヲ兼理ス

第二條 各軍法會議ノ上席主理ハ長官ヨリ處刑及治罪ニ關スル諮問アルトキハ其意見ヲ述ブ

第三條 各軍法會議ノ主理ハ海軍治罪法ニ依リ職務ヲ執行スルノ外上席主理ノ指揮ヲ受ケ軍法會議ノ庶務ニ從事ス

第四條 各軍法會議ノ錄事ハ海軍治罪法ニ依リ職務ヲ執行スルノ外主理ノ指揮ヲ受ケ庶務ニ從事シ又書類保存ノ事ヲ掌ル

第五條 主理錄事ノ定員左ノ如シ

東京軍法會議 主理 四 錄事 四

Table with 2 columns: 官廳, 人員. 橫須賀鎮守府軍法會議 (主理 三, 錄事 五), 吳鎮守府軍法會議 (主理 三, 錄事 四), 佐世保鎮守府軍法會議 (主理 三, 錄事 四)

第六條 主理試補ハ二人錄事見習ハ三人ヲ以テ定員トス

皇宮警察官服務規程

明治十五年五月 宮内省達第六號

皇宮警察官服務規程左ノ通相定ム

皇宮警察官服務規程

第一條 皇宮警察官ハ宮城離宮禁苑ノ巡邏查察諸御門ノ開閉通行人及出入物品ノ檢査惡疫流行病ノ豫防火災豫防及消防ノ事ヲ掌ル(二十一年十二月宮内省達ヲ以テ)

第二條 警察長ハ主殿頭ノ命ヲ承ケ前條ノ主務ヲ總管シ警部以下ヲ指揮監督ス警察次長ハ警察長ノ職務ヲ佐ケ其事故アルトキハ之ヲ代理ス

第三條 警部以下ハ警察長ノ命ヲ受ケ第一條ニ掲クル職務ヲ執行シ及異中ノ庶務ヲ整理ス(二十一年十二月宮内省達ヲ以テ本條改正)

第四條 前條服務規程ニ關スル細則ハ主殿頭ノ認可ヲ經警察長之ヲ定ム(二十一年十二月宮内省達ヲ以テ第四條以下第十一條迄ヲ削除シ第十二條ヲ第四條トス)

官吏懲戒例

明治九年四月 太政官達第三十四號

今般官吏懲戒例左ノ通相定候條此旨相違候事

官吏懲戒例

第二條 自今私罪ヲ除クノ外ハ官吏職務上ノ過失ハ本屬長官ニ於テ懲戒ノ權ヲ有スヘシ

第三條 懲戒ノ法三種トス第一罷責第二罰俸第三免職

第四條 罷責ハ懲戒ノ輕キモノトシテ本屬長官ヨリ罷責書ヲ付ス

第五條 罰俸ハ一月分拾分ノ壹ヨリ少カラズ三月分ヨリ多カラサルノ俸ヲ奪フ(第三年二月二十一日太政官達)

第六條 免職ハ其一月給俸半額以下ハ一月俸中ニテ追丁シ其以上ハ毎月給俸ノ半額ヲ「領世シ數滿テ」大藏省ニ「送付」ス(十九年三月六日閣令第三)

第七條 懲戒ヲ以テ免職スル者ハ本屬長官ノ意見ニ從ヒ其奏任ハ具狀奏請シテ之ヲ免シ位記ヲ返上セシム

第八條 但懲戒ニ由ルニアラスシテ免職スル者ハ長官旨ヲ諭シ本入ヨリ辭職ノ願ヲ差出サシメ然後ニ免許スヘシ

第九條 諸省長官ハ所屬奏列任官ヲ懲戒ス

第十條 府縣長官警視長官其所屬判任官ヲ懲戒スルニ其罷責ヲ專行スルコトヲ得ルヲ除クノ外其罰俸免職ヲ行フハ便宜處分ヲ速ニ「內務卿」ニ届出ツヘシ

第十一條 府縣官判任事ヲ兼ル者其所屬判任官ノ罰俸免職ヲ行フハ便宜處分ヲ速ニ「司法卿」ニ届出ツヘシ

第十二條 其有心故造私罪ニ入ル者ハ職務上ノ罪ト確モ之ヲ司法官ニ移シ本屬長官專ニ處分スルコトヲ得ス

○神官并準官吏等外等懲戒方
明治九年六月 太政官達第卅外
 本年四月第三十四號達官吏懲戒例ノ儀ニ付尙又左ノ通相違候事
 一 準官吏並ニ等外吏ハ本例ニ照シテ處分シ備其他種々ノ名義ヲ以テ公事ニ關スル者ハ本屬長官ノ見込ヲ以テ適宜處分スヘシ

一 官國幣社「神官」并ニ「教導職」ノ過失發見スル時ハ所在地方官ヨリ其狀ヲ具シテ「教部省」ニ届出スヘシ(十年一月十一日 閣令第四號)

一 巡査及ヒ學校其他諸工場等ノ如キ別ニ懲罰規則有之分ハ本例ノ限ニアラス

一 「民費」ヲ以テ給俸ニ充ル者ノ罰俸ハ各其「民費」ニ割戻スヘシ(十一年七月二十二日第十九號太政官布告ヲ以テ民費ヲ地方稅ト改メ)

○長官懲戒處分心得
明治九年四月 太政官達第卅外
 今般官吏懲戒例相定候ニ付テハ各長官ニ於テ懲戒處分左ノ通可相心得此旨内達候事

長官懲戒處分心得
 一 各長官ハ平生其所屬官ヲ監督シ若シ過失アルハ懲戒例ニ依リ處分スヘシ

一 過失トハ過誤失錯不注意ニ出ル者ヲ云其怠惰ニ出ル者亦過失トス其素行脩マフラスシテ官吏ノ體面ヲ汚ス者亦過失ニ推シテ懲戒ヲ加フヘシ

一 過失ノ事ニ害アル者ハ重キニ從テ論ス其事ニ害アリト云トモ猶モ改正スヘキ者及ヒ事ニ害ナキ者ハ輕キニ從テ論ス但シ其情狀ニ從ヒ輕重ヲ酌量スルハ專ラ本屬長官ノ所見ニ任ス

一 同僚ノ官吏共同シテ過失ヲ犯ス者ハ主任ノ上官(省務ハ省長 寮司務ハ寮司長 廳務ハ廳長 一科一局一掛ノ事務ハ各々其主任長)其實ニ任メシ而シテ次官以下遞ニ從テ以テ論ス上官其過意ヲ以テ處行シ猶モ上官ノ許可ヲ得タル者ハ上下官共ニ均ク其實ニ任メシ下官職權内ノ事ヲ以テ處行シタル者ハ上官其實ニ任メシ若シ下官其職權ヲ越ニ專斷處行シタル者ハ重キニ從テ論ス

一 所屬官自ラ過失ヲ覺擧シ進退伺ヲ捧クルトモハ本屬長官之ヲ推糾シ其過失ニ止マル者ハ例ニ依リ處分ス其有心故造ニ涉リ司法官ニ付スヘントスル者ハ懲戒例第十條ニ依リ長官ヨリ之ヲ司法官ニ移ス(明治九年七月二十二日閣令第四號)若シ司法官其有心故造ニ非ヌ又律ニ觸ラサルコトヲ判スルトモハ之ヲ本屬長官ニ還付シ長官ハ仍モ懲戒例ニ依リ處分スルコトヲ得

一 懲戒ニ依リ免職スル者ハ二年以上ノ後ニ非ラハ再マヒ收用スルコトヲ許サス

一 懲戒ニ依ルト否トテ論セズ凡ソ免職スル者ヲ他ノ官廳ヨリ收用セントスルトモハ必ス舊本屬長官ニ通牒シテ其意見ヲ問ヒ答復ヲ得ヘシ

一 過失ニ由ラズシテ免職スル者ハ長官ヨリ旨ヲ諭シ辭表ヲ捧クシ其旨ニ違ヒ辭表ヲ捧クサル者ハ直チニ免職スルコトヲ得

一 舊任中過失アル者轉任ノ後發覺若クハ自ラ覺擧スル者ハ舊

任本屬長官ト通牒シテ新任本屬長官ヨリ之ヲ懲戒スヘシ

○府縣立町村小學校長教員及書記
明治十六年五月 文部省達第二號
 官吏懲戒例並ニ「行政官吏服務紀律」等ノ儀ハ府縣立町村立學校長教員及府縣立學校書記ヘモ適用スヘキコト勿論ニ候條此旨相違候事(二十年七月三十日閣令第三十九號)

○公私立學校生徒集合シ躁暴奇異ノ舉動有時學校長教員懲戒方
明治十八年一月 文部省達第三號
 文部省本年一第貳號達ヲ以テ公私立學校生徒取締ノ儀相違候ニ付テハ今後若シ右様ノ舉動有之ニ於テハ其情狀ニ因リ生徒ハ文部省明治十六年十一月第拾八號達ニ據リ處分シ學校長教員等ハ文部省明治十四年七月第貳拾六號達同十六年五月第九號達及官吏懲戒例ニ據リ處分シ私立學校ハ停止スヘシ此旨相違候事

○戶長職務上ノ過失懲戒方
明治十八年二月 內務省達第四號
 戶長職務取扱上過失アルトモハ總テ官吏懲戒例ニ依リ處分スヘシ但明治十一年乙第八十號達第五項ハ廢止ス右相違候事

○有心故造私罪ニ入ル職務上ノ犯罪者處分方
明治九年四月 司法省達第十四號

官吏懲戒例第十條ニ其有心故違私罪ニ入ル者ハ職務上ト雖モ之ヲ司法官ニ移シ云々ト有之ニ付テハ以來右等ノ者ハ司法官若クハ檢察官ニ之ヲ受ク司法官若クハ檢察官ニ於テ其有心故造ニアラス又律ニ觸レサルコトヲ判スルトキハ之ヲ本局長官ニ還付シテ其處分ニ任スヘキ儀ト可相心得此旨相違候事

陸軍懲罰令

明治十四年十二月 陸軍省乙第七十三號

陸軍懲罰令 (別冊)

第一章 法例

第一條 此令ハ軍人ノ故意疎虞懈怠過失ノ輕犯ニシテ刑法ニ該テサル者及ヒ素行修マラス軍人ノ體面ヲ汚ス者アル時上官之ヲ懲戒スルノ罰典トス但他ノ法律規則ニ依テ論ス可キ者ハ各其法律規則ニ從フ

第二條 各所管ノ長官軍團長師團長旅團長及ヒ衛戍司令官ハ部下ノ軍人此令ヲ犯ス者アル時之ヲ罰ス可シ

第三條 各軍隊ノ隊長ハ左ノ區別ニ從テ處分スヘシ

- 一 聯隊長ハ部下ノ軍人三十日以内ノ謹慎營倉
二 大隊長ハ部下ノ士官十日以内ノ謹慎下士二十日以内ノ營倉兵卒三十日以内ノ營倉
三 中隊長ハ部下ノ下士十日以内ノ營倉兵卒二十日以内ノ營倉

第九條 軍屬及陸軍所屬ノ諸生徒此令ヲ犯ス者アルトキハ軍人ト同ク處分ス可シ但軍屬高等官ハ將校ニ判任官ハ下士ニ諸生徒其他ノ者ハ諸卒ニ準シテ處分ス

第二章 附令

第十條 將校及ヒ同等官ニ科ス可キ罰目

一 重謹慎

第十一條 下士ニ科ス可キ罰目

一 重營倉

二 輕營倉

第十二條 諸卒ニ科ス可キ罰目

一 重營倉

二 輕營倉

第十三條 謹慎ハ勤務ヲ停メ他出及ヒ外人ト接見通信スルコトヲ禁ス其日數ハ一日以上三十日以下ト爲ス

第十四條 謹慎限内疾病アルハ懲ヲ延クヲ許シ水火等ノ災害アル時ハ防救選徒スルコトヲ許ス

第十五條 下士上等兵履第十一條第十二條ノ處分ヲ受ク仍ホ檢改ノ狀ナク部下ノ儀表ニ堪ヘサル者ハ其官職ヲ免ス但兵

役ハ之ヲ免セス其官職ヲ免シタル者檢改ノ効アルトキハ之ヲ免シタル日ヨリ六月ノ後之ヲ復スルコトヲ得

項ニ軍樂隊長ハ第三項ニ同シ

第四條 參謀本部各局長陸軍大學校長砲工學校長陸地測量部

長士官學校長砲兵會議長工兵會議長乘馬學校長砲兵射的學校長幼年學校長要塞砲兵幹部練習所長大隊區司令官警備隊司令官軍吏學舍長軍醫學校長近衛軍醫長師團軍醫長ハ前條

第五條 前二條ニ因リ處分ヲ爲シタル時ハ各秩序ニ從ヒ其屬スル所ノ上官ニ申報ス可シ

第六條 甲所ニ於テ此令ニ揭クル犯行アル者未タ處分ヲ經スシテ乙所ニ轉スル時ハ甲乙互ニ通議シ乙所ニ於テ處分ス可シ

第七條 營外居住ノ者ヲ營倉ニ處スル時ハ囚獄ノ監倉ニ於テ之ヲ行フ

第八條 此令ニ揭クル所ノ犯行二箇以上俱ニ發スルトキハ各其罰ヲ科ス但一所爲二箇以上ノ犯行ニ觸ル、時ハ其一ヲ科ス

第十六條 重營倉ハ演習ノ外勤務ヲ停メ營倉ニ備シ器具ヲ貸與スルコトヲナク唯飯及ヒ水鹽ヲ給ス其日數ハ一日以上三十日以下ト爲ス但七十二時ノ内ニ二十四時間ハ輕營倉ニ移ス可シ

第十七條 輕營倉ハ演習ノ外勤務ヲ停メ營倉ニ備ス其日數ハ一日以上三十日以下ト爲ス

第十八條 營外居住ノ者ヲ營倉ニ處スル時ハ囚獄ノ監倉ニ於テ之ヲ行フ

第十九條 重營倉ニ處スル時營内居住ノ者ハ俸給十分ノ八ヲ減シ營外居住ノ者ハ其半額ヲ減ス

第二十條 第二十五條ニ揭クル所ノ犯行疎虞懈怠若クハ過失ニ係ル者ハ輕謹慎輕營倉ニ處シ其故意ニ係ル者ハ重謹慎重營倉ニ處ス

第二十一條 營倉ニ處ス可キ者下士上等卒諸生徒及ヒ營外居住ノ者ナル時ハ禁足ニ在營兵卒ナル時ハ苦役ニ換フルコトヲ得

第二十二條 禁足ハ勤務演習ノ外營外ニ出ルコトヲ禁ス

第二十三條 苦役ハ勤務演習ノ外營外ニ出ルコトヲ禁シ雜役ヲ執ラシム

現行日本法令大全

第二十四條 諸卒ハ犯行ノ情狀ニ因リ罰限滿ルノ後三十日以内仍キ其佩劔ヲ禁スルコトヲ得

第三章 犯行

第二十五條 犯行ノ款目左ノ如シ

- 一 職務ノ權限ヲ誤ル者
- 二 訓導ノ道ヲ失フ者
- 三 上申下達其他定期アル時日ヲ稽緩スル者
- 四 文書計算ヲ誤ル者
- 五 命令ヲ誤リ若クハ之ヲ誤リ傳フル者
- 六 物件ノ調製貯藏運搬支給ヲ誤ル者
- 七 職役若クハ屯營本隊ヲ離ルル者
- 八 他方ニ赴キ歸著ノ期ニ後ルル者
- 九 行軍ニ際シ發程及ヒ乘艦ノ期ニ後ルル者
- 十 召集ノ期ニ後ルル者
- 十一 受寄ノ財物若クハ借用物ヲ典却スル者
- 十二 官物ヲ擅用スル者
- 十三 注則命令ヲ違奉セス若クハ之ヲ誹謗スル者
- 十四 罵詈侮慢若クハ鬪爭スル者
- 十五 暴行脅迫スル者
- 十六 獵リニ劔ヲ拔ク者
- 十七 酩酊シテ事ヲ省セサル者
- 十八 官語所爲詐偽ニ涉ル者
- 十九 疾病事故ニ託シ勤務演習ヲ免ントスル者
- 二十 抗言恃頑從順ノ道ヲ失フ者
- 二十一 犯罪アルヲ知テ之ヲ曲庇スル者
- 二十二 勤務演習集合ノ期ニ後レシ若クハ之ヲ缺キ若クハ之ヲ懈ル者

懈ル者

- 二十三 服裝法ニ違フ者
- 二十四 敬禮ヲ闕ク者(二十一年八月十六日勅令第六)
- 二十五 官給ノ物件措置拭拂法ニ違フ者
- 二十六 物件ヲ誤毀遺失若クハ汚損スル者
- 二十七 失言過誤若クハ應答ノ事理ヲ誤ル者
- 二十八 軍人ノ態度ヲ失フ者
- 二十九 上ニ掲ケル犯目ノ外素行修マラサル者

○海軍懲罰令 明治二十二年十二月 勅令第三百三十四號

朕海軍懲罰令ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍懲罰令

- 第一條 本令ハ軍人ノ故意疎虞懈怠過失等ノ所爲ニシテ刑法ニ該テサル者及ヒ素行修マラズ軍人ノ體面ヲ汚ス者ヲ懲戒スルノ罰典トス但ヒ法律規則ニ依テ論ス可キ者ハ各其法律規則ニ從フ
- 第二條 司令官ト稱スルハ鎮守府司令長官軍港司令官要港司令官艦隊司令官官艦隊司令官ヲ謂フ
- 第三條 艦隊隊長ト稱スルハ海軍全般ノ艦隊隊長ヲ謂フ
- 第四條 各廳長ト稱スルハ海軍大臣ニ直屬スル各廳ノ長司令官ニ直屬スル參謀長部長及ヒ其他ノ長ヲ謂フ
- 第五條 所轄長ト稱スルハ各廳長ニ屬スル校部所及ヒ監獄等ノ長ヲ謂フ
- 第六條 司令官艦隊長及ヒ各廳長ハ部下軍人ノ本令ヲ犯シタル者ヲ處分ス

現行日本法令大全

第七條 艦隊副長及ヒ所轄長ハ部下ノ准士官十日以内ノ謹慎下士二十日以内ノ禁足卒三十日以内ノ禁足ニ該ル者ヲ處分ス

分隊長及ヒ分隊長ニ同シキ職權ヲ有スル者ハ部下ノ下士十日以内ノ禁足卒二十日以内ノ禁足ニ該ル者ヲ處分ス

第八條 懲罰權ノ全部ヲ有セサル各官部下軍人ノ犯行權限外ノ日數ニ該ルト認ムルトキハ意見ヲ附シテ上官ニ具申シ其處分ヲ請フ可シ

第九條 候補生及軍屬本令ヲ犯シタルトキハ軍人ト同シク處分ス海軍所屬生徒乘艦中本令ヲ犯シタルトキ亦同シ但奏任官及候補生ハ將校ト同シク處分シ判任官ハ准士官ト同シク處分シ生徒ハ下士ト同シク處分シ其他ノ軍屬ハ卒ト同シク處分ス(二十五年六月勅令第六)

第十條 罰目左ノ如シ

一 謹慎

二 禁足

第十一條 艦隊副長以上ニ科スル罰トシ禁足ハ下士以下ニ科スル罰トス

第十二條 艦隊副長以上ニ科スル罰トシ禁足ハ下士以下ニ科スル罰トス

第十三條 禁足ハ勤務及ヒ演習ノ外艦隊校若クハ居室ヲ出ツルコトヲ禁ス

第十四條 禁足ハ一日以上三十日以下トス

第十五條 禁足ハ居室又ハ艦隊校内ニ於テス

第十六條 居室ニ於テスル者ハ他出及ヒ外人ト接見通信スルヲ禁ス但疾病アレハ醫ヲ延クコトヲ得

第十七條 艦隊校内ニ於テスル者ハ外出及ヒ他人ト會集通信スルヲ禁ス

禁足ハ一日以上三十日以下トス

第十三條 軍中合圍ノ地若クハ艦隊校内ニ在テハ謹慎ニ處セザルナル者ヲシテ勤務ニ服セシムルコトヲ得其勤務日數ハ謹慎日數ニ算入ス

第十四條 規則ハ前項ノ場合ニ於テ亦之ヲ適用ス但其勤務ニ關シテハ此限ニ在ラス

第十五條 犯行二個以上俱ニ發スルトキハ各其罰ヲ科ス但一所爲二個以上ノ犯行ニ觸ルハトキハ其一ヲ科ス

第十六條 本令ニ依リ處分シタル軍屬ノ犯行ハ官吏服務規律ニ觸ルハモ懲戒處分ヲナスコトナシ

第十七條 甲所ニ於テ本令ヲ犯シ未タ處分ヲ受スシテ乙所ニ轉シタルモノハ甲所其罰ヲ擬定シ乙所之ヲ處罰ス(全上勅令第六)

第十八條 本令ヲ犯シタル者未タ處分ヲ受スシテ現役ヲ離レ若クハ非職ト爲リ若クハ海軍ノ名籍ヲ除カレタルトキハ其罰ヲ科セズ

第十九條 犯行ノ科目左ノ如シ

一 擅ニ艦隊校ヲ離ル者

二 職務ノ權限ヲ侵シ若クハ之ヲ誤リタル者

三 成規ニ違ヒタル處置ヲ爲シ若クハ命令ヲ怠リ若クハ之ヲ誤リ若クハ之ヲ誤リ傳ヘタル者

四 秘密ノ事件ヲ漏洩シタル者

五 上申下達其他定期アル事件ヲ稽延シタル者

六 服順ノ道ヲ失ヒタル者

七 演習集合ノ期ニ後レシ若クハ之ニ會セサル者

八 徵召ノ命ヲ受ク故ナク到着ノ期限ニ後レタル者

- 九 允許ヲ得テ他方ニ赴キ故ナク歸著ノ期限ニ後ラタル者
- 十 官語所爲詐僞ニシタル者
- 十一 暴行脅迫シタル者
- 十二 濫ニ銃砲ヲ發シ又ハ劍ヲ拔キタル者
- 十三 罵詈侮慢若クハ鬪爭シタル者
- 十四 犯罪アルコトヲ知テ之ヲ隱庇シタル者
- 十五 人ヲ懲罰ニ陥ル爲メ申告ヲ爲シタル者
- 十六 疎虞懈怠過失ニ因テ官ノ文書若クハ器具物品ヲ毀損亡失若クハ汚シタル者
- 十七 圖書計算ヲ誤リタル者
- 十八 各自擔當ノ鎖鑰ヲ怠リタル者
- 十九 兵器彈藥器械船具糧餉其他物品ノ調製貯藏運搬若クハ支給ノ法ニ違ヒ若クハ之ヲ誤リタル者
- 二十 故ラニ糧食分配ノ不均ヲ致シタル者
- 二十一 官物ヲ濫用若クハ浪費シタル者
- 二十二 兵器其他物品ノ配置保存法ニ違ヒタル者
- 二十三 允許ヲ得スシテ官給其他渡付ノ物品ヲ貸借シタル者
- 二十四 受寄ノ財物若クハ借用物ヲ典却シタル者
- 二十五 下士卒定數ノ被服ヲ所持セザル者
- 二十六 守兵ニ對シテ濫ニ談話ヲ爲シ又ハ之ニ戯シタル者
- 二十七 酌前シテ事ヲ省セザル者
- 二十八 軍人其態度ヲ失シタル者
- 二十九 禮節式ニ違ヒタル者
- 三十 服裝式ニ違ヒ又ハ制規外若クハ命令外ノ服ヲ著シタル者

- 三十一 法則命令ヲ誹謗シ若クハ之ニ違ヒタル者
- 三十二 素行修マラサル者
- 三十三 疎虞懈怠過失ニ因リ艦船若クハ其他ノ物件ヲ毀損シ或ハ艦船ヲ擱岸坐礁其他危險ニ付シタル者
- 三十四 艦船ノ乘員不能ニ因リ其艦船ヲ擱岸坐礁其他危險ニ付シ若クハ之ヲ毀損シタル者
- 三十五 允許ヲ得サル物品ヲ艦船ニ積載セタル者
- 三十六 砲具其他銃器ヲ可ラサル場所ニ銃リタル者
- 三十七 艦船團隊校內ニ於テ巡檢後故ナク寢所ヲ離レタル者
- 三十八 艦船團隊校內ニ於テ濫ニ他人ノ室ニ入りタル者
- 三十九 艦船團隊校內ニ於テ濫ニ庖厨ニ入りタル者
- 四十 艦船團隊校內ニ於テ允許ヲ得スシテ火藥其他破裂スヘキ物品ヲ携帶シタル者
- 四十一 艦船團隊校內ニ於テ定所外ヨリ物品ヲ出入若クハ投棄シタル者
- 四十二 艦船團隊校若クハ工場內ニ於テ醜行ヲ爲シタル者
- 四十三 舷側柵欄牆壁等ニ貼紙又ハ樂書シタル者
- 四十四 允許ヲ得スシテ艦船團隊校內ニ酒類ヲ入レ又ハ艦船團隊校內ニ於テ酒類ヲ授受若クハ賣買シ又ハ工場內ニ於テ飲酒シタル者
- 四十五 擅ニ艦船團隊校內ニ於テ鳥獸類ヲ蓄ヒ又ハ工場內ニ於テ濫ニ菓實貝藻ヲ採取シ若クハ樹木花卉ヲ折採シ又ハ魚鳥ヲ捕ル者
- 四十六 艦船團隊校內ニ於テ濫ニ定所外ニ睡眠シ又ハ工場內ニ於テ就業時間中睡眠シタル者

- 四十七 濫ニ砲門ヨリ艦內ニ出入シ又ハ柵欄牆壁等ヲ踰越シテ團隊校工場構內ニ出入シタル者
- 四十八 濫ニ團隊校工場構內ニ立入り故ナク諸方ヲ徘徊シ又ハ構內海岸へ著船シタル者
- 四十九 艦船團隊校內ニ於テ定所外ニ飲食シ又ハ工場內ニ於テ就業時間中喫飯若クハ喫飯ノ準備ヲ爲シタル者
- 五十 艦船團隊校工場內ニ於テ定時限ノ外又ハ禁制ノ場所ニ於テ燈火其他ノ火ヲ用ヒ又ハ火ノ取扱ヲ疎ニシ若クハ吸烟シタル者
- 五十一 守所又ハ整列就業中ニ在テ喧嘩穢語若クハ雜話シタル者
- 五十二 艦船團隊校若クハ工場內ニ於テ定所外ニ尿管シタル者
- 五十三 濫ニ裸體ト爲リタル者
- 五十四 工場內ニ於テ濫ニ禁止ノ場所ニ立入りタル者
- 五十五 工場內ニ於テ火ノ始末ヲ爲サスシテ退散シ又ハ濫ニ放火シタル者
- 五十六 工場內ニ於テ濫ニ遊戯放歌シ又ハ高聲ヲ發シタル者
- 五十七 工場內ニ於テ賭勝負及ヒ之ニ類スル所爲ヲ爲シタル者
- 五十八 工場內ニ在テ甚將棋雙六骨牌等ノ戯具ヲ携帶スル者
- 五十九 就業時間中私用ノ物品ヲ製造シ若クハ他人ノ依頼ニ應ジ之ヲ製造スル者又ハ之ヲ依頼シ及ヒ依頼ヲ

- 六十 紹介シタル者
 - 六十一 就業時間中濫ニ他ノ工場ニ至リ若クハ他人ノ工業ヲ妨害シ若クハ自己ノ工業ヲ休止シタル者
 - 六十二 工場內ニ於テ各自使用スヘキ器具材料ヲ整頓セスシテ散亂セシメタル者
 - 六十三 工場內ニ於テ揭示標札其他諸報告榜標等ヲ毀損シタル者
 - 六十四 工場內ニ於テ故ラニ職札ヲ毀損シ或ハ紛失セシメ又ハ札場ニ於テ投擲シタル者
 - 六十五 工場內ニ於テ職札ノ掛ケ外シテ他人ニ依頼シタル者及ヒ之ヲ承諾シテ掛ケ外シテ爲シタル者
 - 六十六 練習所病院監獄ニ於テ犯行ノ者ハ艦船團隊校內ニ於テル犯行ト同シク處分ス
- 判事懲戒法 明治二十三年八月 法律第六十八號
- 第一章 總則
- 第一條 凡ソ判事ヲ懲戒スルハ左ノ場合ニ於テ懲戒裁判所ノ裁判ヲ以テスヘシ
- 第一 職務上ノ義務ニ違背シ又ハ職務ヲ怠リタルトキ
- 第二 官職上ノ威嚴又ハ信用ヲ失フヘキ所爲アリタルトキ
- 第二章 懲罰
- 第一條 懲罰ハ左ノ如シ

現行日本法令大全

第一 罷責
 第二 減俸
 第三 轉所
 第四 停職
 第五 免職

第三條 前條何ノ懲罰ヲ適用スヘキヤ否ハ所犯ノ輕重ニ從ヒ懲戒裁判所之ヲ定ムヘシ懲戒裁判所ハ懲罰ノ適用ヲ定ムルニ當リ平生ノ行狀ヲ斟酌スルコトヲ得

第四條 減俸ハ一月以上一年以下年俸月割額ノ三分ノ一以內ヲ減ス

第五條 轉所ハ他ノ裁判所若ハ他ノ職ニ轉セシム但シ情狀ニ因リ減俸ヲ併セ科スルコトヲ得

第六條 停職ハ三月以上一年以下職務ノ執行ヲ停止ス

第七條 免職ノ旨渡ヲ受ケタル者ハ現任ノ官ヲ失ヒ及恩給ヲ受クルノ權ヲ失フ

第三章 懲戒裁判所

第八條 懲戒裁判所ハ各控訴院及大審院ニ之ヲ置ク

第九條 控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ハ控訴院長ヲ加ヘ其ノ院ノ判事五人ヲ以テ組立テ院長ヲ以テ長トス

大審院ニ於ケル懲戒裁判所ハ大審院長ヲ加ヘ其ノ院ノ判事七人ヲ以テ組立テ院長ヲ以テ長トス

第十條 控訴院長及大審院長ハ每年部長ト協議シ前以テ懲戒裁判所ノ判事ヲ定メ並ニ裁判所長判事差支アルトキノ代理順序ヲ定ム

第十一條 懲戒裁判所ノ判事ノ忌避回避ニ付テハ治罪法ノ規

程ヲ準用ス

第十二條 控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ノ檢事ノ職務ハ檢事長之ヲ行ヒ大審院ニ於ケル懲戒裁判所ノ檢事ノ職務ハ檢事總長之ヲ行フ

第十三條 控訴院ニ於ケル懲戒裁判所長ハ其ノ院ノ裁判所書記ノ中ヨリ懲戒裁判所ノ書記ヲ命シ大審院ニ於ケル懲戒裁判所長ハ其ノ院ノ裁判所書記ノ中ヨリ懲戒裁判所ノ書記ヲ命ス

第十四條 控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ハ院長及部長ヲ除ク外其ノ院ノ判事及其ノ管轄區域內ノ總テノ下級裁判所ノ判事ニ對スル懲戒事件ヲ管轄ス

第十五條 大審院ニ於ケル懲戒裁判所ハ左ノ事件ヲ管轄ス

第一 第一審ニシテ終審トシテ大審院ノ判事、控訴院長及控訴院部長ニ對スル懲戒事件

第二 控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ノ裁判ニ對スル抗告及控訴

第十六條 懲戒裁判所ノ管轄ハ所犯ノ地ニ拘ラス裁判手續開始ノトキ判事ノ奉職スル裁判所ニ依テ定マルモノトス

第四章 裁判手續

第十七條 懲戒裁判所ハ檢事ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ懲戒裁判ヲ開始スヘキヤ否ヲ決定ス但シ職權ヲ以テスル場合ニ於テハ檢事ノ意見ヲ聽クヘシ

第十八條 檢事ハ裁判手續ノ開始ヲ拒ミタル懲戒裁判所ノ決定ニ對シテハ七日ノ期間內ニ抗告裁判所ニ抗告ヲ爲スコトヲ得

第十九條 抗告裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後抗告ヲ裁判

現行日本法令大全

ス若シ抗告ヲ正當ナリト認メタルトキハ裁判手續開始ノ決定ヲ爲シ管轄懲戒裁判所ヲシテ其ノ後ノ手續ヲ爲サシムヘシ

第二十條 開始決定ニハ懲戒スヘキ所爲及證據ヲ開示スヘシ

第二十一條 開始決定ハ檢事及被告ニ送達スヘシ

第二十二條 懲戒裁判所ニ於テ下調ヲ必要ナリト決定スルトキハ懲戒裁判所長ハ懲戒裁判ヲ開始シタル院ノ判事若ハ管轄區域內ノ地方裁判所ノ判事ニ下調ヲ命スヘシ

第二十三條 下調ノ命ヲ受ケタル判事ハ必要ナル證據ヲ集取スヘシ

受命判事ハ被告ヲ呼出シテ事實ヲ陳述セシムルコトヲ得

被告ハ代理人ヲシテ代理セシムルコトヲ得

証人ハ治罪法ノ規程ニ從ヒ之ヲ訊問スヘシ

第二十四條 受命判事ハ証人訊問其ノ他證據集取ヲ他ノ裁判所ノ判事ニ囑託スルコトヲ得

第二十五條 受命判事ハ下調終了ノ後調書及一切ノ證據ヲ懲戒裁判所長ニ差出シ裁判所長ハ二十四時內ニ檢事ニ之ヲ送付スヘシ

第二十六條 檢事ハ三日內ニ意見ヲ付シ記録ヲ懲戒裁判所長ニ送付スヘシ

第二十七條 懲戒裁判所ハ下調十分ナリト思料スルトキハ口頭辯論ヲ爲スノ決定ヲ爲シ又ハ免訴ノ判決ヲ爲スヘシ

免訴ノ理由ヲキモ現時裁判ニ著手スルコトヲ得サルトキハ辨追停止ノ決定ヲ爲スヘシ

第二十八條 前條ノ裁判ハ檢事及被告ニ送達スヘシ

第二十九條 懲戒裁判所長ハ口頭辯論ノ期日ヲ定メ被告ヲ呼

出スヘシ

第三十條 辯論ハ之ヲ公行セス

第三十一條 口頭辯論ハ裁判所書記開始決定ヲ朗讀スルヲ以テ始マルモノトス

裁判長ハ先ツ被告ヲ審訊シ次テ證據調ヲ爲シ檢事及被告ヲシテ證據ノ結果ニ付辯論ヲ爲サシメ被告ニ最終ノ發言ヲ許スヘシ

第三十二條 懲戒裁判所ハ被告若ハ檢事ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ更ニ證據ヲ提出セシムルコトヲ適當ナリトスルトキハ之ヲ爲必要ナル命令ヲ發シ且辯論ヲ他日ニ延期スルコトヲ得

第三十三條 被告ハ他人ヲシテ辯護セシメ又ハ代理人ヲ用弗ルコトヲ得

第三十四條 懲戒裁判所ハ事件ノ辯論既ニ十分ナリトスルトキハ之ヲ終結シ評議判決スヘシ

第三十五條 判決ハ即時ニ之ヲ言渡ス若シ即時ニ之ヲ言渡スコト能ハサルトキハ七日內ニ判決ヲ被告及檢事ニ送達スヘシ

第三十六條 被告又ハ代理人辯論期日ニ出頭セスト雖判決ヲ言渡スコトヲ得

第三十七條 評議及言渡ニ關シテハ裁判所構成法ノ規程ニ從ヒ證據ノ判斷ニ關シテハ治罪法ノ規程ニ從フ

第三十八條 被告及檢事ハ十四日ノ期間內ニ控訴ノ申立ヲ爲スコトヲ得但シ其ノ期間ハ判決言渡ヨリ起算ス若シ被告出頭セサルトキハ判決ノ送達アリタルヨリ起算ス

第三十九條 控訴ノ申立ハ判決ヲ受ケタル懲戒裁判所ニ之ヲ

爲スヘシ
 第四十條 懲戒裁判所ハ控訴ノ申立及控訴狀ノ謄本ヲ對手
 入ニ送達スヘシ
 對手人ハ送達ヲ受ケタルヨリ十四日ノ期間内ニ答辯書ヲ差
 出スコトヲ得
 第四十一條 懲戒裁判所ハ前號ノ期間經過シタル後其ノ書類
 ヲ控訴裁判所ニ送付スヘシ控訴裁判所長ハ口頭辯論ノ期日
 ヲ定メ被告ヲ呼出スヘシ
 第四十二條 控訴裁判所ハ第一審ニ於テ申出ラサル證據ヲ提
 出シタルトキハ之ヲ取調フヘシ若シ第一審ニ於テ取調シタ
 ル證人ノ再取調ヲ申立ラタルトキハ其ノ重要ノ點ニ於テ陳
 述ヲ異ニシ又ハ新ナル重要ノ事實ヲ証言セントノ推測十分
 ナルトキニ限り之ヲ許ス
 職權ヲ以テスル取調ハ何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得
 第四十三條 第二審ニ於ケル裁判手續ハ第三十條乃至第三十
 七條ノ規程ヲ適用ス
 第四十四條 控訴ヲ理由ナシトスルトキハ判決ヲ以テ之ヲ棄
 却シ其ノ費用ヲ控訴人ニ負擔セシムヘシ
 控訴ヲ理由アリトスルトキハ第一審判決言渡ヲ取消シ控訴
 裁判所更ニ判決ヲ爲シ且其ノ費用ニ付裁判ヲ爲スヘシ
 控訴完結ノ後其ノ記録ハ第二審ニ於テ爲シタル判決ノ認證
 アル謄本ト共ニ原裁判所ニ之ヲ還付スヘシ
 第四十五條 調審ノ調製期間ノ計算及書類ノ送達ニ付テハ治
 罪法ノ規程ニ從フ

懲戒裁判手續ノ費用ハ刑事裁判費用ニ關ル規程ニ從フ
 第四十六條 懲戒裁判所ノ裁判ハ確定ノ後ニ非サレハ之ヲ執
 行スルコトヲ得ス
 第四十七條 懲戒裁判確定シタルトキハ懲戒裁判所長ハ司法
 大臣ニ事件ノ情況ヲ報告シ且判決ノ謄本ヲ差出スヘシ
 第四十八條 懲戒裁判所減俸轉所若ハ停職ノ裁判ヲ言渡シタ
 ルトキハ司法大臣其ノ執行ノ手續ヲ爲ス
 第五章 職務停止
 第四十九條 判事ハ左ノ場合ニ於テハ當然職務ヲ停止セラレ
 ルモノトス
 第一 刑事裁判手續ニ於テ拘留セラレタルトキ
 第二 刑事裁判ニ於テ官職ノ喪失ニ該ル刑ノ言渡ヲ受ケタ
 ルトキ
 第三 懲戒裁判ニ於テ免職ノ言渡ヲ受ケタルトキ
 第五十條 刑事裁判ニ依テ拘留ノ刑ノ確定裁判ヲ受ケタル
 トキハ其ノ刑期ノ終ルマテ當然職務ヲ停止セラレルモノト
 ス
 第五十一條 懲戒裁判所ハ懲戒事件ノ轉所停職若ハ免職ニ該
 當スルモノト思料スルトキハ何時ニテモ職權ヲ以テ又ハ檢
 事ノ申立ニ因リ懲戒裁判手續終了ニ至ルマテ被告ノ職務ヲ
 停止スルコトヲ決定スルヲ得但シ職權ヲ以テ決定ヲ爲スト
 キハ檢事ノ意見ヲ聽クヘシ
 刑事裁判手續中何レノ場合ニ於テモ懲戒裁判所ハ其ノ手續
 終了ニ至ルマテ被告ノ職務ヲ停止スルコトヲ決定スルヲ得
 第五十二條 懲戒裁判所ノ決定ニ因リ又ハ當然職務ヲ停止セ
 ラレタル後其ノ判事ノ爲シタル職務上ノ行爲ハ無効トス

第五十三條 被告ハ職務停止ノ決定ニ對シ上訴ヲ爲スコトヲ
 得ス
 第六章 懲戒裁判手續ト刑事裁判手續トノ關係
 第五十四條 刑事裁判手續中ハ同事件ニ付被告ニ對シ懲戒裁
 判手續ヲ開始スルコトヲ得ス
 懲戒裁判所ニ於テ判決ノ言渡前同事件ニ付被告ニ對シ刑事
 訴訟ノ始マリタルトキハ其ノ事件ノ判決ヲ終ルマテ懲戒裁
 判手續ヲ停止スヘシ
 第五十五條 刑事裁判ニ依テ法律ニ觸レサルニ因リ免職又ハ
 無罪ノ言渡ヲ受ケタルトキト雖同一ノ所爲ニ付懲戒裁判手
 續ニ於テ仍ホ訴訟スルヲ妨ケス
 刑事裁判ニ依テ官職ノ喪失ヲ起ササル刑ノ言渡ヲ受ケタル
 トキハ懲戒裁判手續ニ於テ仍ホ訴訟スルコトヲ得
 第七章 補則
 第五十六條 懲戒スヘキ所爲ハ本法實施前ニ關ルモノト雖本
 法ニ從ヒ之ヲ訴訟ス
 第五十七條 此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行ス
 ○稅關監吏補賞罰規則 明治二十三年十月
 勅令第三百十八號
 朕稅關監吏補賞罰規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一 贖責
 第二 罰俸
 第三 免職
 第三條 罰俸ハ月俸額百分ノ一以上一箇月以下トス
 第四條 罰俸ハ毎月俸給ヲ以テ納付セシム但月俸額三分ノ一
 ヲ超ルコトヲ得ス
 第五條 罰俸ニ處セラレタル者罰俸完納前退官免職又ハ死去
 スルトキハ之ヲ追徵セス
 第六條 大藏大臣ハ本規則ノ執行ヲ稅關長ニ委任スルコトヲ得
 ○巡查懲罰例 明治九年八月
 內務省乙第九十二號
 巡查懲罰例別紙ノ通改正候條此旨相違候事
 巡查懲罰例 (別紙)
 第一條 凡職務ノ規則ニ違背シ及ヒ怠慢失誤アル者ハ其情狀
 ヲ審按シ俸給一ヶ月百分ノ一ヨリ少カラス一ヶ月ヨリ多カ
 フナル罰金ヲ科シ輕キ者ハ呵責ニ止ム
 第二條 凡犯狀ノ職務ヲ耻カシムルニ係ル者ハ免職ス
 第三條 凡罰金未タ完納セサル中免職死亡等ニ係ル者ハ追徵
 スルコトヲ得ス
 第四條 凡罰金ハ毎月ノ俸金ヲ控除シテ完納セシム
 但月俸ノ三分一ヲ過クルコトヲ得ス
 第五條 凡官物ヲ遺失及ヒ毀損スル者ハ相當ノ罰金ヲ科シ尙
 其代價ヲ賠償セシム
 ○看守懲罰 明治十六年四月
 內務省乙第十七號

稅關監吏補賞罰規則

第一條 監吏補其職務上勤務アル者ハ事ノ大小難易ニ由リ每
 事五圓以下ノ賞ヲ與フ
 第二條 監吏補其職務上怠慢過失アル者ハ情狀ニ由リ左ノ懲
 罰ニ處ス

看守懲罰

明治十六年四月
 內務省乙第十七號

看守懲罰ノ義ハ自今巡査懲罰例ニ準據スヘシ此旨相違候事

第二章 勳章 紋位

第一款 勳章

○大勳章圖式并大勳章以下略綬ヲ

定ム 明治十年十二月 第九十七號達

明治九年中欽定ノ大勳位菊花大綬章大勳位菊花章圖式別冊ノ通ニ候事

(別冊略ス)

従前各種ノ略綬ヲ廢シ更ニ大勳章以下略綬別紙ノ通被定候事

(別紙略ス)

右相違候事

○勳章 明治八年四月 第五十四號布告

今般勳章別冊之通被定候條此旨布告候事

別冊

〔括弧内赤字〕

〔朕惟ニ凡ソ國家ニ功ヲ立テ績ヲ顯ス者宜ク之ヲ褒賞シ以テ之ニ酬ムヘシ仍テ勳等賞牌ノ典ヲ定メ人々ヲシテ寵異表彰スル所アルヲ知ラシメントス汝有司其斯旨ヲ體セヨ〕

〔明治八年二月〕

勳等賞牌

勳等ハ勳績及功勞アル者ヲ賞スル爲メニ設クル所ノ階級ニシテ位階ト異ナル故ニ各種ノ勳章ヲ佩用セシム 勳等ヲ分ツテ八級ト爲ス

止メニ等牌ノミ佩ナルカ如シ

一勳章ハ禮服ノトキ佩フヘシ平服ニハ佩フヘカラス平服ニハ略綬ヲ左襟見返ノ鈕穴ニ掛ケ其表トス

一ニ等勳章ハ幅廣キ綬ヲ以テ右肩ヨリ左脇ヘ斜ニ佩フ

一ニ等勳章ハ右肋ノ邊ヘ綬ヲ不用針ニテ挾ミ佩フ

一三等勳章ハ綬ヲ領ニ纏ヒ喉下ニ佩フ

一四等以下ノ勳章及從軍記章ハ左肋ノ邊ヘ左ニ列シ佩フ

勳	一 等	勳	二 等	勳	三 等	勳	四 等
牌	金日章 徑二寸五分 日赤佛笹笹 光線白佛笹笹	金日章 徑二寸五分 日赤佛笹笹 光線二重白佛笹笹	金日章 徑一寸八分 日赤佛笹笹 光線白佛笹笹	金日章 徑一寸五分 日赤佛笹笹 光線白佛笹笹	金日章 徑一寸五分 日赤佛笹笹 光線白佛笹笹	金日章 徑一寸五分 日赤佛笹笹 光線白佛笹笹	金日章 徑一寸五分 日赤佛笹笹 光線白佛笹笹
鈕	金五七桐 葉綠佛笹笹	無 鈕	金五七桐 葉綠佛笹笹	無 鈕	金五七桐 葉綠佛笹笹	無 鈕	金五七桐 葉綠佛笹笹
環	金圓形	無環佩針銀	金楕圓形	無	金圓形	無	金圓形
綬	幅四寸 紅 白 緋無 綬	幅一寸 紅 白 緋無 綬	幅一寸 紅 白 緋無 綬	幅一寸 紅 白 緋無 綬	幅一寸 紅 白 緋無 綬	幅一寸 紅 白 緋無 綬	幅一寸 紅 白 緋無 綬
牌	金銀日章 徑一寸五分 日赤佛笹笹 光線白佛笹笹	金銀日章 徑一寸五分 日赤佛笹笹 光線白佛笹笹	金銀日章 徑一寸五分 日赤佛笹笹 光線白佛笹笹	金銀日章 徑一寸五分 日赤佛笹笹 光線白佛笹笹	金銀日章 徑一寸五分 日赤佛笹笹 光線白佛笹笹	金銀日章 徑一寸五分 日赤佛笹笹 光線白佛笹笹	金銀日章 徑一寸五分 日赤佛笹笹 光線白佛笹笹
鈕	金五三桐 葉綠佛笹笹	銀五三桐 葉綠佛笹笹	無 鈕	無 鈕	無 鈕	無 鈕	無 鈕
環	金圓形	銀圓形	銀圓形	銀圓形	銀圓形	銀圓形	銀圓形
綬	幅一寸 紅 白 緋無 綬	幅一寸 紅 白 緋無 綬	幅一寸 紅 白 緋無 綬	幅一寸 紅 白 緋無 綬	幅一寸 紅 白 緋無 綬	幅一寸 紅 白 緋無 綬	幅一寸 紅 白 緋無 綬
牌	銀桐條紋圓章徑一寸						
鈕	銀						
綬	幅一寸 綠 白 緋						

(圖面略之)

○勳章増設ノ詔勅 明治二十一年一月三日
朕獲ニ勳位ヲ定メ佩章ノ制ヲ設ク茲ニ復潤飾増設シ新舊與ニ併行シ勳功アル者ヲ賞旌シ以テ獎勵ノ道ヲ擴ム汝衆庶此旨ヲ體セヨ

○金鷄勳章創設詔勅 明治二十三年二月十一日

朕惟ミルニ
神武天皇皇業ヲ恢弘シ繼承シテ朕ニ及ヘリ今ヤ負カニ登極紀元ヲ算スレハ二千五百五十年ニ達セリ朕此期ニ際シ

天皇撰定ノ故事ニ徴シ金鷄勳章ヲ創設シ將來武功拔群ノ者ニ授與シ永ク
天皇ノ威烈ヲ光ニシ以テ其忠勇ヲ獎勵セントス汝衆庶此旨ヲ體セヨ
○金鷄勳章佩用式 明治二十三年二月
朕金鷄勳章ノ等級製式佩用式ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
一金鷄勳章
功一級ヨリ功七級ニ至ル武功拔群ナル者ニ賜フ

功一級章		功四級章	
章	金徑二寸五分	章	金徑一寸五分
綬	幅二寸六分	綬	幅一寸二分
同 副章		同 副章	
章	金徑三寸	章	銀徑一寸五分
綬	幅二寸二分	綬	幅一寸二分
同 副章		同 副章	
章	金徑一寸八分	章	金長徑一寸七分
綬	幅一寸二分	綬	幅一寸二分
同 副章		同 副章	

功三級章		功七級章	
章	金徑一寸八分	章	銀長徑一寸七分
綬	幅一寸二分	綬	幅一寸二分
同 副章		同 副章	

○勳章等級製式大勳位菊花章頸飾

朕各種ノ勳章等級製式及ヒ大勳位菊花章頸飾ノ製式ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

一 寶冠章

勳一等ヨリ勳五等ニ至ル婦人ノ勳勞アル者ニ賜フ
章 寶冠ト竹櫻ノ形ヲ以テ飾ル
綬 地黄色雙線紅色

一 勳一等旭日桐花大綬章

旭日大綬章ノ上級トス勳勞アル者ニ賜フ
章 旭日ト桐花ノ形ヲ以テ飾ル
綬 地紅色雙線白色

一 瑞寶章

勳一等ヨリ勳八等ニ至ル勳勞アル者ニ賜フ
章 鏡珠ノ形ヲ以テ飾ル
綬 地淡藍色雙線橙黄色

一 大勳位菊花章頸飾

頸飾ハ大勳位ニ級セシ者ニ特別之ヲ賜フ
菊花葉ノ形ト明治二字古篆文ヲ以テ飾ル

○勳章佩用式 明治二十一年十一月

朕勳章佩用式ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

勳章佩用式

第一條 大勳位菊花章

菊花章ハ頸飾ヲ以テ喉下ニ佩ヒ其副章ヲ左肋ニ佩フ大綬章
以テ佩フル時ハ右肩ヨリ左脇ヘ垂レ其副章ハ左肋ニ佩フ
但菊花章ヲ賜ヒタル者ハ旭日桐花大綬章瑞寶一等章ヲ併
セ佩ルコトヲ得(二十年十一月一日勳令第
百八號ヲ以テ追加ス)

第二條 寶冠章

勳一等寶冠章ハ大綬章ヲ以テ右肩ヨリ左脇ヘ垂レ其副章
ヲ左肋ニ佩フ

第三條 旭日章

勳一等旭日桐花章並旭日章ハ大綬章ヲ以テ右肩ヨリ左脇
ヘ垂レ其副章ヲ左肋ニ佩フ

勳二等旭日章ハ右肋ニ佩ヒ其副章ヲ中綬ヲ以テ喉下ニ
佩フ

勳三等旭日章ハ中綬ヲ以テ喉下ニ佩フ
勳四等勳五等勳六等旭日章勳七等勳八等桐葉章ハ小綬

第二類 第二章 第一款 勳章

第四條 瑞寶章

- 一 勳一等瑞寶章ハ大綬ヲ以テ右肩ヨリ左脇ヘ垂レ其副章ヲ左肋ニ佩フ
- 二 勳二等瑞寶章ハ右肋ニ佩フ
- 三 勳三等瑞寶章ハ中綬ヲ以テ喉下ニ佩フ
- 四 勳四等瑞寶章以下ハ小綬ヲ以テ左肋ニ佩フ

各種勳章及大勳位菊花章頸飾ノ圖樣

第五條 別種ノ勳章ハ之ヲ併佩ス其大綬章ハ之ヲ併佩セス

勳章及大勳位菊花章頸飾圖樣

明治二十一年十一月

閣令第二十一號

明治二十一年一月勳令第一號各種ノ勳章及大勳位菊花章頸飾ノ圖樣左ノ如シ

勳一等寶冠章		同 副章	
草	金楕圓長徑二寸二分	草	金楕圓長徑二寸二分
鈕	桐	草	金楕圓長徑二寸二分
綬	幅二寸六分	草	金楕圓長徑二寸二分
勳二等寶冠章		勳三等寶冠章	
草	金楕圓長徑二寸二分	草	金楕圓長徑二寸二分
鈕	牡丹	草	蝶
綬	幅一寸二分	草	幅一寸二分
勳四等寶冠章		勳五等寶冠章	
草	金楕圓長徑一寸	草	銀楕圓長徑一寸
鈕	花紫色佛系依	草	銀楕圓長徑一寸
綬	幅一寸二分	草	幅一寸二分

第二類 第二章 第一款 勳章

勳一等瑞寶章		勳二等瑞寶章	
草	金徑二寸二分	草	金徑二寸五分
綬	幅三寸三分	草	金徑二寸五分
勳三等瑞寶章		勳四等瑞寶章	
草	金徑一寸八分	草	金徑一寸五分
綬	幅一寸二分	草	幅一寸二分
勳五等瑞寶章		勳六等瑞寶章	
草	銀徑一寸五分	草	銀徑一寸三分
綬	幅一寸二分	草	幅一寸二分
勳七等瑞寶章		勳八等瑞寶章	
草	銀徑一寸二分	草	銀徑一寸二分
綬	幅一寸二分	草	幅一寸二分
大勳位菊花章頸飾			
草	金徑一寸二分	草	銀徑一寸二分
綬	幅一寸二分	草	幅一寸二分

中央 圓形徑一寸三分

菊花金銀綠色佛萊嵌

連環 橢圓長徑九分

一ハ古案明ノ字一ハ清ノ字各金一ハ菊花金銀嵌色佛萊嵌

勳章記章佩用心得 明治二十二年二月 勳章局告示第一號

第一款 一等勳章ヲ有スル者更ニ別種ノ一等勳章ヲ受ケタル時ハ旭日桐花章ト旭日章トハ同 後ニ受ケタル一等勳章ノ正章並ニ其副章ト前ニ受ケタル一等勳章ノ副章トヲ併佩スヘシ

第二款 二等以下ノ勳章ヲ有スル者更ニ同種上級ノ勳章ヲ受ケタル時ハ其下級ノ勳章ヲ佩フルコトヲ止ム別種ノ同級若クハ上級ノ勳章ヲ受ケタル時ハ之ヲ併佩スヘシ

第三款 二等勳章若クハ一等ノ副章兩箇以上ヲ併佩スル時ハ後ニ受ケタルモノヲ前ニ受ケタルモノ、位置ニ付テ其上位ニ列佩スヘシ

第四款 三等勳章兩箇以上ヲ併佩スル時ハ後ニ受ケタルモノヲ前ニ受ケタルモノ、位置ノ上ニ佩フヘシ

第五款 四等勳章以下兩箇以上ヲ併佩スル時ハ後ニ受ケタルモノヲ前ニ受ケタルモノ、位置ノ右ニ佩ヒ其從軍記章若クハ褒賞ヲ有スル者ハ之ヲ勳章ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ

第六款 勳章ハ男子ハ大禮服及ヒ通常禮服(燕尾服)著用ノ時佩フヘシ從軍記章及ヒ褒賞ヲ有スル者亦同シ

通常禮服著用ノ時ハ大綬章ヲ上衣ノ下ニ佩ヒ其副章ヲ上衣ノ上ヘ其位置ニ佩フ又大綬章ヲ胸衣ノ下襯衣ノ上ニ佩ヒ副章ヲ上衣ノ上ヘ其位置ニ佩フルコトアリ時宜ニ依リ大綬章ヲ省キ其副章ノミヲ佩フルコトアルヘシ

旭日二等章ヲ有スル者通常禮服著用ノ節ハ其副章ヲ省クコトアルヘシ

トアルヘシ 第七款 勳章ハ婦人ハ大中小禮服著用ノ時佩フヘシ

一等勳章ヲ有スル者大禮服ニハ大綬章及ヒ副章ヲ佩フ中小禮服ニハ時宜ニ依リ大綬章ヲ省キ副章ノミ佩フルコトアルヘシ又通常禮服ニハ時宜ニ依リ副章ノミ佩フルコトアルヘシ

二等以下ノ勳章ヲ有スル者ハ通常禮服著用ノ時ニ於テモ時宜ニ依リ之ヲ佩フルコトアルヘシ

外國勳章記章

第八款 外國勳章佩用方ハ各彼ノ規則ニ依ル

第九款 我勳章ヲ有スル者我勳章ヲ佩ヒスシテ彼ノ勳章ノミヲ佩フヘカラス

第十款 彼我ノ大綬章ヲ有スル者ハ彼ノ大綬章ヲ佩ヒス之ニ屬スル副章ノミヲ我副章ノ位置ノ下若クハ次ニ列佩スヘシ但外交ノ時宜ニ依リ彼ノ大綬章及ヒ其副章ヲ佩フル時ハ我大綬章ヲ省キ我副章ハ併佩スヘシ

第十一款 彼我ノ綬ヲ用ヒサル勳章ヲ併佩スル時ハ彼ノ勳章ヲ我勳章ノ位置ノ下若クハ次ニ列佩スヘシ

第十二款 彼我ノ喉下ニ佩フル勳章ヲ併佩スル時ハ彼ノ勳章ヲ我勳章ノ位置ノ下ニ佩フヘシ

第十三款 彼我ノ左肋ニ佩フル勳章ヲ併佩スル時ハ彼ノ勳章ヲ我勳章ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ

第十四款 彼ノ左肋ニ佩フル勳章ヲ我從軍記章及ヒ褒章ト併佩スル時ハ我從軍記章及ヒ褒章ヲ彼ノ勳章ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ

佩スヘシ

第十五款 彼ノ記章ト我從軍記章及ヒ褒章ト併佩スル時ハ之ヲ我從軍記章及ヒ褒章ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ

略章略綬佩用心得 明治二十二年三月 勳章局告示第二號

一 各種勳章ノ略章(凡ソ徑曲尺五六分者クハ其以下ノ大サニシテ)ハ通常禮服著用ノ時或ル場合ニ於テ連鎖或ハ小綬ヲ以テ左肋ニ佩用スルヲ得外國勳章ノ略章モ亦同シ

二 略綬ハ通常禮服通常禮服著用ノ節左襟見返シノ鈕孔ニ掛ケ佩フヘシ

三 略綬ハ別種二箇以上ノ勳章ヲ有スル者各其綬ト同色ナル網ヲ以テ二箇若クハ數箇合併ノモノヲ製シ之ヲ佩用スルヲ得又内外數種ノ勳章ヲ有スル者ハ内外數箇合併ノ略綬ヲ製シ之ヲ佩用スルコトヲ得

四 我略綬ヲ佩ヒテ外國ノ勳章ヲ佩フルコトナシ

勳章佩用式說明 明治二十二年十一月 勳章局告示第一號

明治二十一年十一月一勳令第七十六號勳章佩用式第三條第二項ニアル勳二等旭日章ノ副章ハ其製式勳三等旭日章ニ異ナルコトナシ

勳章進級者下級勳章ヲ還納セシム

明治二十二年三月 勳令第三十八號 朕勳章還納ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

勳等進級シ同種ノ上級勳章ヲ受ケタル者ハ其下級ノ勳章ヲ賞勳局ヘ還納スヘシ

但勳記ハ還納スルノ限ニアラス

勳章還納手續 明治二十二年三月 勳令第九號

勳章還納手續ヲ定ムルコト左ノ如シ

勳章還納手續

第一條 同種上級ノ勳章ヲ授與セラレタル者ハ一週間以内ニ其下級ノ勳章ヲ賞勳局ヘ還納スヘシ

第二條 同種上級ノ勳章ヲ賞勳局ノ送達ニヨリ受領シタル者ハ直ニ其領票ト共ニ下級ノ勳章ヲ同局ヘ差出スヘシ

官廳ヲ經テ受領シタル者ハ其官廳ヘ差出シ官廳ハ之ヲ賞勳局ヘ送付スヘシ

第三條 外國人ノ勳等進級シ同種上級勳章ヲ受ケタル者モ亦此手續ニ從ヒ下級ノ勳章ヲ還納スヘシ其外國ニ在ル者ハ最寄我公使館又ハ領事館ヘ差出スヘシ

第四條 公使館又ハ領事館ニ於テ前條勳章ヲ領收シタルトキハ外務省ヘ送付シ同省ハ之ヲ賞勳局ヘ送付スヘシ

第五條 勳章還納ニ關スル費用ハ受章者ノ自辨トス又官廳ヨリ賞勳局ヘ送付スルモノハ其官廳ニ於テ支辨スヘシ

附則

一 從前同種勳章ニ進級シタル者ハ東京ハ二週間以内各地方ハ三十日以内ニ下級ノ勳章ヲ還納スヘシ我國在留ノ外國人亦同シ其外國ニ在ル者ハ手續第五條ニ依ルヘシ

但進級者既ニ死亡シタルトキハ本文ノ限ニアラス

○外國勳章佩用願規則

明治十八年十一月
勳章第三十五號

明治十一年六月第六拾五號布告外國勳章佩用免許願手續左ノ通改
正ス

外國勳章佩用願規則

第一條 外國ノ勳章ヲ受領シ之ヲ佩用セントスル者ハ賞勳局
總裁ヘ願出免許狀ヲ受クヘシ
第二條 佩用願書ニハ勳章勳記其他關係書類ヲ添ヘ勅奏任官
ハ直ニ賞勳局總裁ヘ華族ハ宮内卿判任官以下ハ本屬長官士
族平民ハ管轄廳ヲ經テ賞勳局總裁ヘ差出スヘシ
第三條 外國ノ勳章ヲ佩用スル者死亡シタルトキハ三十日以
内ニ其旨ヲ遺族又ハ親戚ヨリ華族ハ宮内卿士族平民ハ管轄
廳ヲ經テ賞勳局ヘ届出ヘシ
第四條 外國ノ記章從軍勳章人命救助記ヲ受領シ之ヲ佩用セント
スル者ハ總テ此規則ニ準據スヘシ

○皇族外國勳章佩用願手續內規

明治十八年一月
賞勳局並外務省內兩省ヘ達

皇族外國勳章佩用願手續內規左ノ通相定候條此旨相達候事

皇族外國勳章佩用願手續內規

一皇族ヨリ外國勳章ノ佩用ヲ願ハントスルトキハ勳章勳記其
他關係書類ヲ添ヘ「宮内卿」ヨリ賞勳局總裁ヘ照會スヘシ
二賞勳局總裁ハ勳章勳記ヲ審査シ上奏裁可ヲ得タルトキハ免

許狀ヲ「宮内卿」ニ傳達スルモノトス
三皇族ニ外國ヨリ勳章寄贈ノ通知ヲ得タルトキハ「外務卿」ハ
其旨ヲ賞勳局總裁ヘ通知スルモノトス
四外國ノ記章佩用願手續モ此內規ニ準據スヘキモノトス

○勳章年金褫奪及停止取扱手續改正

明治十六年六月
勳章第二十二號

狀沒收方

勳章ヲ有スル者其榮譽ヲ汚辱スルノ所爲アル時ハ勳章及年金
ヲ褫奪ス外國勳章ハ其佩用免許狀ヲ沒收ス
勳章ヲ有スル者重罪輕罪ノ訴ヲ受ク拘留若クハ保釋責付セラ
レタル時ハ勳章ヲ佩用スルコトヲ得ス又之ニ屬スル禮遇特權
及年金ヲ受クルコトヲ得ス

○勳章年金褫奪及停止取扱手續改正

明治十九年七月
勳章第十九號

明治十六年九月第三十九號達勳章年金褫奪及停止取扱手續ヲ改
正スルコト左ノ如シ

勳章年金褫奪及停止取扱手續

第一條 勳章ヲ有スル者左ノ項目ニ觸ル、トキハ榮譽ヲ汚辱
シタル者トス
第一項 重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者
但輕禁錮以下ノ刑ニ處セラレタル者ハ其所犯ノ情狀ニヨ
ル
第二項 賭博犯ノ處分ヲ受クタル者

第三項 懲戒例及免職條例ニヨリ免官セラレタル者
第四項 素行修マラス帶勳者タルノ面目ヲ汚ス者

第二條 第一條第一項ニ觸ル、者輕罪ヲ犯シタル者ナルトキ
ハ裁判確定ノ後裁判管轄長官ヨリ司法大臣又ハ陸海軍大臣
ヲ經由シテ宣告書寫ヲ添ヘ其旨ヲ賞勳局總裁ヘ具申スヘシ
其重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ普通刑法第三十一條第三十
二條陸軍刑法第二十八條第二十九條海軍刑法第十七條ニ依
リ處分ス

第三條 第一條第二項第三項第四項ニ觸ル、者アルトキハ所
轄長官又ハ地方官ヨリ其情狀ヲ賞勳局總裁ヘ具申スヘシ

第四條 賞勳局總裁ハ其具中ヲ審査シ重禁錮ノ刑ニ處セラレ
タル者ハ直ニ上奏シ其輕禁錮以下ノ刑ニ處セラレタル者及
ヒ第一條第二項第三項第四項ニ觸ル、者ハ職定官ノ會議ニ
於テ其褫奪ノ當否ヲ論定シ褫奪スヘキ者ハ奏請ス

第五條 褫奪ノ裁可アリタルトキハ賞勳局總裁ハ褫奪狀ヲ作
リ褫奪ノ具申ヲ爲シタル長官ヲ經由シテ本人ヘ傳達セシム
褫奪ニ及ハサルトキハ賞勳局總裁ヨリ褫奪ノ具申ヲ爲シタ
ル長官ヘ通知スヘシ

第六條 勳位進級セシ者ナルトキハ前級ノ勳章勳記ヲモ褫奪
スヘシ年金票モ亦同シ

第七條 褫奪シタル勳章勳記年金票ハ褫奪ヲ行ヒタル官廳ヨ
リ賞勳局ヘ還納スヘシ但其重罪ノ刑ニ處セラレタル者ニ係
ルトキハ其宣告書寫ヲ添フヘシ

第八條 勳章ヲ有スル者重罪輕罪ノ訴ヲ受ク拘留セラレタル
トキハ其年月日及事由ヲ裁判管轄長官ヨリ司法大臣又ハ陸
海軍大臣ヲ經由シテ賞勳局總裁ヘ具申スヘシ

但公訴權消滅シタルトキ若クハ放免ノ言渡ヲ爲シタルト
キハ亦其事狀ヲ詳記シテ之ヲ申告スヘシ
第九條 重罪輕罪ヲ犯シ未タ其訴ヲ受クスト雖モ現ニ拘留セ
ラレタルトキハ檢察官ヨリ前條ノ手續ニ從ヒ賞勳局總裁ヘ
具申スヘシ
第十條 外國勳章佩用免許狀ヲ沒收スルトキモ亦總テ此手續
ニ準據スヘシ

第二款 敘位

○敘位條例

明治二十年五月
勳令第十號

朕敘位條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

敘位條例

第一條 凡ソ位ハ華族勅奏任官及國家ニ勳功アル者又ハ表彰
スヘキ勳績アル者ヲ敘ス
第二條 凡ソ位ハ正一位ヨリ從八位ニ至ル十六階トス
第三條 凡ソ位ハ從四位以上ハ勅授トシ宮内大臣之ヲ奉ス正
五位以下ハ奏授トシ宮内大臣之ヲ宣ス
第四條 凡ソ位ハ懲戒ニ因リ返上セシムルカ又ハ刑法ニ因リ
公權ヲ剝奪セラル、ノ外終身之ヲ有スルヲ得
第五條 凡ソ位ハ從四位以上ハ爵ニ准シ禮遇ヲ享ク其准例左
ノ如シ

公	爵	侯	爵	伯	爵	子	爵	男	爵
從一位	正二位	從二位	正從三位	正從四位					

第六條 爵位ヲ併有スル者ハ高キニ從テ禮遇ヲ享ク

○位階奉宣方

明治二十年五月
內閣勅令

勅令第十號ヲ以テ位階奉宣ノ事ハ宮内大臣ニ委セラレタル處
華族及宮内官吏ノ爵位ヲ除ク外ハ從前ノ如ク內閣總理大臣ヲ
經テ上奏スヘシ内閣總理大臣奏聞裁可ヲ經タル後之ヲ宮内大
臣ニ移シ宮内大臣之ヲ奉宣ス

第三章 褒賞 恩給 恤救

第一款 褒賞

○褒章條例

明治十四年十二月
布告第六十三號

褒章條例別紙ノ通相定來明治十五年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

褒章條例 (別紙)

第一條 凡ソ自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救助セシ者又ハ德行
卓絶ナル者學子顯赫者又ハ實業ニ精勵シ衆民ノ模範タルヘキ
者又ハ公衆ノ利益ヲ興シ成蹟著明ナル者河橋鐵道築田ノ業或
又ハ公同ノ事務ニ勤勉シ勞効顯著ナル者(二十三年七月十
十六號ヲ)テ表彰スル爲メ左ノ三種ノ褒章ヲ定ム(二十三年四月三
日勅令第七十三號ヲ改正ス)

紅綬褒章

右自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救助セシ者ニ賜フモノトス

綠綬褒章

右德行卓絶ナル者又ハ實業ニ精勵シ衆民ノ模範タルヘキ者

ニ賜フモノトス

藍綬褒章

右公衆ノ利益ヲ興シ成蹟著明ナル者(又ハ公同ノ事務ニ勤勉
シ勞効顯著ナル者)(二十三年七月十六日勅令)ニ賜フモノトス

第二條 奇特ノ實行アリト雖モ褒章ヲ賜フヘキ場合ニ至ラサ
ルモノハ褒章ヲ與フコトアルヘシ

第三條 已ニ褒章ヲ賜ハリタルモノ再度以上同様ノ實行アリ
テ褒章ヲ賜フヘキトキハ其都度飾版一箇ヲ賜與シ其章ノ綬
ニ附加セシメ以テ標識トス

第四條 褒章ハ本人ニ限り終身之ヲ佩用シ及ヒ徽號トナスヲ
得然レトモ重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ之ヲ沒收シ其未
ダ授與セサル前同上ノ刑ニ處セラレタル者ニハ之ヲ授與セ
ス

(褒章ノ圖略之)

佩用式

一 褒章ハ左肋ノ邊ヘ佩フヘシ

但勳章及從軍記章ヲ有スル者ハ其章ノ左ヘ列シ帶フヘシ

○褒章ト金銀木杯若クハ金圓賜與

明治十六年二月
布告第一號

明治十四年十二月第六十三號布告褒章條例ニ依リ褒章ヲ賜フヘ
キ者又ハ公益ノ爲メニ金銀財產等ヲ寄附シタル者ハ金銀木杯
若クハ金圓ヲ賜ヒ又ハ褒章ト金銀木杯金圓ヲ併セ賜フコトアル
ヘシ

○黃綬褒章臨時制定

明治二十年五月
勅令第十六號

朕黃綬褒章臨時制定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 私財ヲ獻納シ防海ノ事業ヲ贊成スルモノニ授與スル
爲メ黃綬褒章ヲ制定シ分テ金章銀章ノ二種トス

第二條 黃綬褒章ヲ佩用シ又ハ沒收スルノ事項ハ明治十四年
十二月第六十三號褒章條例ニ據ル

第三條 黃綬褒章ノ圖式左ノ如シ
(圖式略之)

○褒章條例取扱手續

明治十四年十二月
太政官達第百三號

今般第六拾三號ヲ以テ褒章條例布告候ニ付取扱手續左ノ通相定
候條此旨相達候事

但明治八年七月第百貳拾壹號達ハ右條例施行ノ日ヨリ廢止候
事

第一條 凡ソ褒章ヲ賜フヘキ者アルトキハ其管轄長官ヨリ内
務卿又ハ農商務卿ニ具申シ内務卿又ハ農商務卿ハ其當否ヲ
審査スヘシ

但官吏職務上ニ於テ人命ヲ救助シ又ハ公益ヲ興シタルハ
褒賞ヲ賜フノ限ニアラス

第二條 内務卿又ハ農商務卿ニ於テ褒賞ヲ賜フヘキモノト思
量スルトキハ之ヲ賞勳局總裁ニ申牒スヘシ賞勳局總裁ハ其
申牒ニ據リ勅奏任官并ニ從六位以上及ヒ勳六等以上ノ者及
ヒ華族ノ戶主ニハ褒章ヲ直授シ其他ノ者ハ内務卿又ハ農商
務卿ヲ經由シ其管轄長官ヲシテ之ヲ傳達セシムヘシ
但外國人ニ危難救助ノ褒章ヲ賜フヘキトキハ外務卿ヨリ

賞勳局總裁ニ申牒スヘシ授與ノトキモ亦同卿ヲ經由シテ
之ヲ傳達セシムヘシ其公私備ニ係ル者ハ本條ニ同シ

第三條 褒狀ハ管轄長官ヨリ與フルモノトス然レトモ勅奏任
官并ニ從六位以上及ヒ勳六等以上ノ者及ヒ華族ノ戶主ハ内
務卿又ハ農商務卿ニ具申スヘシ内務卿又ハ農商務卿ハ之ヲ
太政官ニ上申シ太政官ニ於テ之ヲ賜フヘシ

○金銀木杯金圓賜與手續

明治十六年三月
太政官達第拾七號

本年第壹號布告ノ旨ニ依リ金銀木盃又ハ金圓賜與手續別紙ノ
通相定候條此旨相達候事

金銀木杯金圓賜與手續

第一條 褒章ヲ賜フヘキ者ニ金銀木盃又ハ金圓ヲ賜ヒ又ハ褒
章ト之ヲ併セ賜フトキハ其等差左ノ如シ

定例

第一等 木盃三組品格ナ三又ハ金拾圓ヨリ多カラス六圓ヨリ
少カラス

第二等 木盃三組品格ナ三又ハ金五圓ヨリ多カラス貳圓五拾
錢ヨリ少カラス

第三等 木盃壹個品格ナ三又ハ金貳圓ヨリ多カラス壹圓ヨリ
少カラス

但賜杯賜金ニ及ハサルモノハ褒狀ヲ與フルコト
アルヘシ

特例

第一等 金杯壹個又ハ三組又ハ金圓

第二等 銀杯壹個又ハ三組又ハ金圓

第二條 公益ノ爲メニ金銀財産等ヲ寄附シタル者ニ金銀木杯ヲ賜ヒ又ハ褒章ト之ヲ併セ賜フトキハ其等差左ノ如シ

寄附金額又ハ價格

拾圓未満 褒 狀

但壹圓未満ハ褒詞ヲ以テ褒狀ニ換フルコトアルヘシ

拾圓以上百圓未満 木杯壹個

但五拾圓未満ハ拾圓毎ニ五拾圓以上ハ貳拾五圓毎ニ品格ニ等差アリ

百圓以上五百圓未満 木杯三組

但三百圓未満ハ五十圓毎ニ三百圓以上ハ百圓毎ニ品格ニ等差アリ

五百圓以上貳千圓未満 銀杯壹個

但千圓毎ニ品格等差アリ

五千圓以上壹萬圓未満 金杯壹個

但貳千五百圓毎ニ品格等差アリ

壹萬圓以上 銀杯三組

第三條 金銀杯又ハ特別金圓又ハ褒章ト金杯又ハ金圓ヲ併セ賜フ事項ハ賞勳局總裁之ヲ管理スルモノトス

褒狀又ハ木杯又ハ定例金圓ノミヲ賜フハ警視總監府知事縣令管理施行スルモノトス

但勅委任官并從六位以上及ヒ勳六等以上ノ者及ヒ華族ノ戶主ニ賜フヘキトキハ第四條ニ準據スヘシ

第四條 金銀杯又ハ特別金圓又ハ褒章ト金銀木杯又ハ金圓ヲ併セ賜フヘキ者アルトキハ警視總監府知事縣令ヨリ内務卿又ハ農商務卿ニ具申シ内務卿又ハ農商務卿ハ之ヲ審査シ賞勳局總裁ニ申牒スヘシ

賞勳局總裁ハ其申牒ニ據テ勅委任官從六位以上及ヒ勳六等以上ノ者及ヒ華族ノ戶主ニハ之ヲ直授シ其他ノ者ハ内務卿又ハ農商務卿ヲ經由シ警視總監府知事縣令ヲシテ之ヲ傳達セシム

第五條 金銀木杯又ハ金圓褒狀ヲ受クヘキ者ニシテ其米ヲ授與セサル前重罪ノ刑ニ處セララルルキハ之ヲ授與セス

○賞與取調書式改正 明治十八年十二月 內務省達甲第三十八號

明治十七年一月內務農商務兩省乙第一號達賞與取調書式左ノ通改正候條此旨相違候事

明治何年自一月賞與施行表

人命救助	賞 品		金 杯	銀 杯	木 杯	金 圓	褒 狀	褒 詞
	故	賞						
	褒章	飾版	三組一個	三組一個	三組一個	甲 乙	甲 乙	

○圖書諸器物等寄附ニ係ル取計方

明治二十二年四月 內務省訓令第十八號

開令第十五號ヲ以テ明治十年十月太政官達第七十七號同十一年同第十三號ヲ廢セララルルヲ以テ自今各官廳へ圖書諸器物等ヲ寄附シ若クハ官費支辨ノ事業ニ對シ金銀其他ノ物件ヲ寄附スル者アルトキハ之ヲ受領シタル官廳ヨリ本人所在ノ地方廳ニ通知可相成ニ付右通知ヲ受ケタルトキハ明治十六年第一號布告同年太政官第十七號達ニ據リ取計フヘシ

○警察賞與規則 明治二十一年十月 內務省訓令第二十一號

警察賞與規則左ノ通相定ム

右之通候也	年 月 日	總 人 員	計 寄附金額	合 箇 數	金 銀 寄 附	公 益 ヲ 起 ス 者	德 行 ノ 者	警 視 總 監	府 知 事	縣 令	姓 名	印

警察賞與規則

第一條 警察上功勞アル者ハ本則ニ依リ賞與スヘキモノトス

第二條 警察賞與ヲ分テ左ノ三種トス

甲種 金三圓以上拾五圓以下

乙種 金五圓以下

特別賞 金拾五圓以上三拾圓以下

特別賞ハ事ノ重要ニ涉リ功勞ノ特ニ著明ナルモノニ限リ之ヲ給スルコトヲ得

第三條 犯罪事件ニ關スル功勞ノ賞與ハ左ノ各項ニ依リ

第一項 左ノ罪犯ヲ現行ノ場合ニ於テ捕獲シ又ハ容易ニ捕獲スルヲ得セシメタル者

甲種

- 一 國事ニ關スル重罪犯
- 二 兇徒聚衆ニ關スル重罪犯
- 三 貨幣偽造變造ニ關スル重罪犯
- 四 人命ニ關スル重罪犯
- 五 放火ニ關スル重罪犯
- 六 強盜ニ關スル重罪犯

乙種

- 一 貨幣偽造變造ニ關スル輕罪犯
- 二 竊盜ニ關スル罪犯

第二項 前項ノ罪犯ヲ分明ニ訴出タル者亦前項ノ區別ニ同シ

第三項 第一項ノ場合ニシテ罪犯暴行脅迫ヲ以テ抗拒シタルトキハ其難易ニ因リ及第一項ニ掲クル罪犯ニシテ其未遂ノ時ニ訴出タル者ハ其乙種ハ金三圓以上拾圓以下甲種ハ五圓以上貳拾圓以下ノ金額ヲ賞與スルコトヲ得

第四項 前數項ノ外其功勞ノ前數項ニ比シ相下ラサルモノハ其適度ニ應シ賞與スルコトヲ得

第五項 前數項ニ該當スルモノト雖モ事ノ最モ輕キモノ又ハ功勞ノ最モ甚キモノ若クハ金圓ヲ賞與シ難キ事情アル者ハ賞詞ヲ與フルコトヲ得

第四條 水火災其他犯罪ニ關セサル功勞ハ乙種ノ賞ヲ給與スヘシ但其ノ功勞ノ大ナル者ハ甲種ノ賞ヲ與フルコトヲ得

第五條 罪犯判決前ニ逃亡又ハ死去シタル場合若クハ賞與スヘキ事件ノ完結セサル前ト雖モ其疑ナキモノハ賞與ヲ施行スルコトヲ得

第六條 賞與ハ何等ノ場合ヲ問ハス一旦施行シタル後ハ之ヲ變更スルコトヲ得ス

第七條 本則ニ定メタル賞與ノ金額ハ一事件ノ賞トス但第三條第一項ノ場合ハ一罪犯ニ付テノ賞トス

數事件數罪犯ニテ功勞者一人ナルトキハ數事件數罪犯ノ賞ヲ各別ニ給與スヘシ

一事件若クハ數事件一名若クハ數名ノ罪犯ニシテ功勞者數人ナルトキ之ヲ賞與スルニハ一事件若クハ一罪犯ニ對スル金額又ハ數事件若クハ數罪犯ニ對スル金額ヲ適宜功勞者ノ人員ニ配當給與スヘシ

第八條 功勞者賞與施行前ニ死去シタルトキハ賞與ノ金額ハ親屬ノ最近ナル者ニ給ス若シ親ナキトキハ戶長ニ交付シテ祭祀料ニ充用セシムヘシ

其所在ノ不明ナルトキ亦同シ但親屬ナキ者ニシテ三十六ヶ月ヲ經過シタルトキハ賞與ヲ施行セス

第九條 公權ヲ剝奪セラレタル者ニハ賞與ヲ與ヘス

第十條 自己又ハ親屬ノ利害ニ關スル事件ニ付テハ賞與ヘス但其功勞ノ特ニ著明ニシテ一般ニ洪益ヲ及ボスモノハ時宜ニヨリ之ヲ賞與スルコトヲ得其被害者ト利害ヲ共ニスル者亦同シ

第十一條 犯罪其親屬ニ係ルトキハ總テ賞與スルコトヲ得ス

第十二條 第八條第十條第十一條ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第百十四條第百十五條ニ記載シタル者ヲ云フ

第十三條 巡查ニシテ左ノ各項ニ該當スル者ハ本則ニ定ムル賞與ノ區別ニ從ヒ甲種以下特別賞ヲ與フルコトヲ得

第一項 第三條ニ掲クル罪犯ヲ捜査シ又ハ捕獲シ其功勞著

シキ者

第二項 前項ニ該當セスト雖モ其功勞ノ前項ニ比シ相下ラサル者

第三項 第四條ニ掲クル事項及流行病ニ付其功勞著シキ者

第四項 自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救援シタル者

第十四條 巡查罪犯ヲ捕獲シテ功勞アリト雖モ未ダ拘留セサル前ニ逃走セシメタルモノハ賞與スルコトヲ得ス

第十五條 巡查中逃走セシメ其誘送者ニ於テ捕獲シタルトキ亦同シタルトキハ其職務上ニ於テ爲シタルモノト同一ノ賞ヲ與フヘシ

第十六條 巡查ニシテ一般人民共ニ人命ヲ救援シタルトキハ賞與スヘキ金額ヲ救援者ノ全數ニ分賦シ其巡查ニ屬スル金額ヲ賞與スヘシ

第十七條 本則第七條乃至第十一條ハ巡查ノ賞與ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第十八條 巡查ノ賞與ハ其所屬ニ於テ施行シ其他ハ左ノ區別ニヨリ各管轄廳ニ於テ施行スヘシ

第一項 訴ヲ受タル地ノ管轄廳

第二項 罪犯ヲ最初ニ受取タル地ノ管轄廳

第三項 犯罪事件ニ屬セサルモノハ其事件ノ生シタル地ノ管轄廳

第十九條 賞與スヘキ事件若クハ功勞者ノ數官廳ニ牽連スルモノハ互ニ協議シ盡シ其金額ヲ定メ之ヲ差分シ又ハ功勞ノ多少ニ依リ適宜分割シ各其應ニ於テ賞與スヘシ

第二十條 警部其他警察事務ニ從事スル者ニシテ功勞アルト

キハ巡查ノ例ニ準シ賞與スルコトヲ得

第二十一條 特別賞與ヲ行フタルトキハ其都度狀ヲ具シ報告スヘシ(二十年內務省訓令)

第二十二條 賞與ノ費額ハ各其所屬ノ經費ヲ以テ支辨スヘシ

○看守押丁賞與方明治二十二年一月 內務省令第一號

看守押丁ニシテ左ノ各項ニ該當スル者ハ明治二十一年十月內務省訓令第二十一號警察賞與規則ニ據リ功勞ノ適度ニ應シ金拾五圓以下ヲ賞與スヘシ

- 一 反獄ヲ鎮制スルニ當テ其功勞著シキ者
- 二 自己ノ監守ニ非サル在監人ニシテ逃走スル者ヲ捕獲シ其功勞著シキ者
- 三 監獄内ノ水火風震及ヒ流行病ニ付其功勞著シキ者
- 四 自己ノ危難ヲ顧ミス在監人ノ性命ヲ救援シタル者

○帝國憲法發布記念章明治二十二年八月 勅令第三百三號

朕帝國憲法發布記念章制定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 大日本帝國憲法發布記念章ハ金銀ノ兩種トス

第二條 記念章ヲ頒賜スルハ憲法發布式ニ關リタル親王以下ノ諸員ニ限ルヲ除ク

第三條 記念章ノ圖式左ノ如シ

章 圓形 直径九分 鍍金若クハ銀
 輪郭内表面ニ鑄刻シテ高御座並大勳位菊花御飾ノ圓蓋面ニ明治二十二年二月十一日大日本帝國憲法發布記念章ノ二十三字ヲ識ス
 環 圓形 金若クハ銀

綬 幅一寸二分 旭日桐花章ノ綬ヲ用フ

第四條 記念章ハ本人ニ限り終身之ヲ佩用シ子孫之ヲ保存ス

ルヲ許ス其ノ之ヲ沒收スルノ事項ハ明治十四年第六十三號
布告褒賞條例ニ依ル

(記念章ノ圖案之)

- 一 綴ヲ用テ左胸ニ佩フ
- 一 記念章ヲ四等以下ノ勳章若クハ記章褒章ト併佩スル時
ハ勳章ノ左記章褒章ノ右ニ列シテ佩フヘシ

第二款 恩給

官吏恩給法

明治二十三年六月
法律第四十三號

官吏恩給法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

官吏恩給法

- 第一條 文官判任以上ノ者退官シタルトキハ此法律ノ規定ス
ル所ニ依リ恩給ヲ受ケルノ權利ヲ有ス
- 第二條 在官滿十五年以上ノ者左ニ掲ケル事項ノ一ニ當ルト
キハ終身恩給ヲ給ス
 - 一 年齢六十歳ヲ超エ退官シタルトキ
 - 二 傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ其職ニ堪ヘズ退官ヲ許シ
タルトキ
 - 三 廢官廢應若クハ官廳事務ノ伸縮又ハ非職滿期ニ依リ退
官シタルトキ
- 第三條 左ニ掲ケル事項ノ一ニ當ル者ハ前條ノ年限ニ滿タサ
ルモ終身恩給ヲ給シ尙其最下金額十分ノ七マテノ増加恩給
ヲ給ス

- 一 公務ニ因リ傷痕ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ
準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘズ退官シタルトキ
- 二 公務ニ依リ健康ニ有害ナル感動ヲ受ケルヲ願ミルコト
能ハスシテ勤務ニ從事シ爲メニ疾病ニ罹リ一肢以上ノ
用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘズ
退官シタルトキ
- 第四條 滿五年以上國務大臣ノ職ニ在ル者退官シタルトキハ
第二條ノ制限ニ拘ハラズ恩給ヲ給ス
- 第五條 恩給ノ年限ハ退官現時ノ俸給ト在官年數トニ依リ之
ヲ定ム即チ在官滿十五年以上十六年未滿ニシテ退官シタル
者ノ恩給年額ハ俸給年額ノ二百四十分ノ六十トシ十五年以
後滿一年毎ニ二百四十分ノ一ヲ加ヘ滿四十年ニ至ラ止ム但
在官四十年以上ノ者ニ給スヘキ恩給ハ四十年ノ額又十五年
未滿ノ者ニ給スヘキ恩給ハ十五年ノ額トス
- 非職滿期ニ由テ退官シタル者ノ恩給ハ其在職最終ノ俸額ニ
依テ之ヲ算定ス
- 交際官及領事貿易事務官等ノ恩給ハ其官等ニ對スル普通文
官ノ俸額ニ依テ之ヲ算定ス
- 兼官ニ依テ受ケル加俸ハ恩給年額ヲ算定スルニ當リ之ヲ除
算スヘシ
- 恩給年額四位未滿ノ數ハ四位ニ滿タシム
- 第六條 恩給ヲ受ケ又ハ恩給ヲ受ケスシテ退官シタル者在官
中ノ公務ニ起因スル傷痕疾病引續キ重症ニ趨キタルトキ其
事由ヲ詳悉シ左ノ期限内ニ申出シハ査覈ノ上相當ノ恩給ヲ
給ス
 - 一 一肢ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ハ退官後二箇年

- 二 一肢ヲ亡シ或ハ二肢ノ用ヲ失ヒ又ハ兩眼ヲ盲シ若クハ
二肢ヲ亡シ若クハ之ニ準スヘキ者ハ退官後三箇年
- 第七條 在官年數ハ判任官以上初任ノ月ヨリ起算シ退官ノ月
ヲ以テ終リトス

- 六 自己ノ便宜ニ依リ退官シタル後又ハ懲戒處分若クハ刑
事裁判ニ依リ免官シタル後再ヒ任官シタル者ニ在テハ
其前官ノ月數
- 第十條 文官ニシテ從軍シタル者ハ軍人恩給法ノ算則ニ照シ
テ其從軍年ヲ加算ス
- 第十一條 恩給ヲ受ケル者再ヒ官ニ就キ滿一年以上在官シタ
ル後退官シタルトキハ左ノ區別ニ依リ恩給ヲ給ス
 - 一 退官現時ノ俸給前後相同シカラサルトキハ前官年數ヲ
後官ノ年數ニ通算シ後官ニ對スル恩給額ト前ノ恩給額
トヲ比較シ其多キ方ヲ給ス
 - 二 退官現時ノ俸給前後相同シキトキハ在官年數ニ依リ恩
給ヲ增加ス但前官十五年未滿ニシテ恩給ヲ受ケタル者
ニ在テハ前後通算シテ十六年以上ニ至ラサレハ增加セズ
- 第十二條 恩給ヲ受ケル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ日本臣
民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ恩給ヲ剝奪ス
- 左ニ掲ケル事項ノ一ニ當ルトキハ其間恩給ヲ停止ス
 - 一 判任以上ノ官ニ任シ政府ヨリ俸給ヲ受ケタルトキ但商業
ヲ營ムコトヲ得ヘキ官職ニ在ルトキハ此限ニアラス
 - 二 公權ヲ停止セラレタルトキ
- 第十三條 年齢未タ六十歳ニ至ラスシテ自己ノ便宜ニ依リ退
官シタル者又ハ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官シタル
者ハ恩給ヲ受ケルノ資格ヲ失フ
- 法律ヲ以テ設立シタル議會ノ議員ト爲リタルノ故ヲ以テ退
官シタル者ハ恩給ヲ受ケルノ資格ヲ失ハス
- 第十四條 政府ヨリ恩給ヲ受ケサル官吏及商業ヲ營ムヘキ官
吏並ニ高等官試補判任官見習ハ恩給ヲ受ケルノ權ナキモノ

- 第九條 左ニ掲ケル月數及日數ハ在官年數中ヨリ除算スヘシ
 - 一 年齢二十歳未滿者ノ在官月數
 - 二 高等官試補及判任官見習中ノ月數
 - 三 郡區書記ヲ除クノ外政府ヨリ俸給ヲ受ケサル官職ニ在
ル月數及商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官職ニ在ル月數
 - 四 御用掛雇等外出仕勤仕ノ月數
 - 五 第八條第一ニ掲ケル者ニ在テハ軍人恩給法ニ依リ除算
スヘキ日數

- 第十條 文官ニシテ從軍シタル者ハ軍人恩給法ノ算則ニ照シ
テ其從軍年ヲ加算ス
- 第十一條 恩給ヲ受ケル者再ヒ官ニ就キ滿一年以上在官シタ
ル後退官シタルトキハ左ノ區別ニ依リ恩給ヲ給ス
 - 一 退官現時ノ俸給前後相同シカラサルトキハ前官年數ヲ
後官ノ年數ニ通算シ後官ニ對スル恩給額ト前ノ恩給額
トヲ比較シ其多キ方ヲ給ス
 - 二 退官現時ノ俸給前後相同シキトキハ在官年數ニ依リ恩
給ヲ增加ス但前官十五年未滿ニシテ恩給ヲ受ケタル者
ニ在テハ前後通算シテ十六年以上ニ至ラサレハ增加セズ
- 第十二條 恩給ヲ受ケル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ日本臣
民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ恩給ヲ剝奪ス
- 左ニ掲ケル事項ノ一ニ當ルトキハ其間恩給ヲ停止ス
 - 一 判任以上ノ官ニ任シ政府ヨリ俸給ヲ受ケタルトキ但商業
ヲ營ムコトヲ得ヘキ官職ニ在ルトキハ此限ニアラス
 - 二 公權ヲ停止セラレタルトキ
- 第十三條 年齢未タ六十歳ニ至ラスシテ自己ノ便宜ニ依リ退
官シタル者又ハ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官シタル
者ハ恩給ヲ受ケルノ資格ヲ失フ
- 法律ヲ以テ設立シタル議會ノ議員ト爲リタルノ故ヲ以テ退
官シタル者ハ恩給ヲ受ケルノ資格ヲ失ハス
- 第十四條 政府ヨリ恩給ヲ受ケサル官吏及商業ヲ營ムヘキ官
吏並ニ高等官試補判任官見習ハ恩給ヲ受ケルノ權ナキモノ

トス但郡區書記ハ此限ニアラス
商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官吏並ニ高等官試補判任官見習ニ
シテ公務ノ爲メ傷病ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ此法律第三條
ニ該當スル者ニ限り退官又ハ罷免現時ノ俸給四分ノ一ヲ終
身支給スルコトヲ得

第十五條 恩給支給ノ期ハ退官ノ翌月ヨリ始マリ死亡ノ月ヲ
以テ終ルモノトス

第十六條 恩給ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三箇年內ニ
請求セザルハ其權利ヲ拋棄シタルモノトス

第十七條 恩給ノ支給ハ本屬長官ノ證明ニ依リ恩給局ノ審査
ヲ經テ内閣總理大臣之ヲ裁定ス

行政上ノ處分ニ因リ恩給ニ關スル權利ヲ障害セラレタリト
スル者ハ六個月以內ニ恩給局ニ具申シテ裁決ヲ請フコトヲ
得其裁決ニ服セザル者ハ一箇年以內ニ行政裁判所ニ出訴ス
ルコトヲ得但左ノ事件ニ關シテハ恩給局ノ裁決ハ終審確定
ノモノトス

一 傷痍疾病ノ原因及其輕重

二 職務ニ堪エルト否ヲサルト

第十八條 恩給ハ賣買讓與質入書入スルコトヲ得ス又負債ノ
抵償トシテ差押アルコトヲ得ス

第十九條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ恩給ヲ受ケタル者
ハ總テ其恩給令ニ依ルヘシ但其權利消滅及停止ハ此法律ニ
依ル

第二十條 此法律施行前ニ退官シタル者ノ恩給ハ明治十七年
達官吏恩給令ニ依ルヘシ但此法律施行ノ日ヨリ三箇年內ニ
請求セザルハ之ヲ受クヘキ權利ヲ拋棄シタルモノトス

第二十一條 此法律ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス
從前ノ命令ニシテ此法律ニ抵觸スルモノハ總テ廢止ス
○官吏恩給法施行規則 明治二十三年七月
閣令第三號
官吏恩給法施行規則左ノ通定ム

官吏恩給法施行規則

第一章 恩給ノ請求

第一條 官吏恩給法第二條第三條第六條及第七條第二項第十
四條第二項ニ依リ恩給ヲ受クヘキ者ハ恩給請求書ヲ退官當
時ノ本屬廳ノ長官ニ差出スヘシ但廢官廢廳ニ當リタルトキ
ハ其事務ノ引繼ヲ受ケタル官廳ノ長官ニ差出スヘシ

第二條 官吏恩給法第四條ニ依リ恩給ヲ受クヘキ者ハ恩給請
求書ヲ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

第三條 恩給請求書ニハ左ノ書類ヲ添付スヘシ
一 在官中履歷書
二 市町村長ノ證明シタル戶籍調査
但官吏恩給法第十四條第二項ニ掲ケタル者ハ之ヲ添付
スルニ及ハス

第四條 公務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ恩給ヲ請求
スル者ハ前條ニ掲ケル書類ノ外左ノ書類ヲ以テ其實情ヲ證
明スヘシ官吏恩給法第六條ニ依リ恩給ヲ請求スル者亦同シ
一 現認證書又ハ之ヲ證スル公文ノ寫若クハ口供書
二 醫師ノ診斷證書

第五條 恩給ノ請求ヲ受ケタル各廳長官ハ查覈ノ上請求ノ理
由アリト認ムルトキハ請求者ノ在官年數及恩給年額計算書

ヲ作リ證據書類ヲ添ヘ内閣總理大臣ニ差出スヘシ
各廳長官ニ於テ請求ノ理由ナシト認ムルトキハ意見ヲ具シ
テ之ヲ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

第六條 内閣ニ於テ前條ノ請求ヲ許可シタルトキハ恩給證書
ヲ作り本屬廳ヲ經テ本人居住地ノ地方廳ヲシテ之ヲ下付セ
シム但一時ノ支給ニ係ルモノハ辭令書ヲ用ユ

恩給證書若クハ辭令書ヲ下付シタルトキハ内閣ハ其旨ヲ大
藏省ニ通報スヘシ

第二章 恩給ノ支給

第七條 恩給ハ其年額ヲ四分シ四月七月十月一月ニ於テ其前
三個月分ヲ大藏省ヨリ本人居住地ノ地方廳ヲ經テ支給ス但
權利消滅ノトキ及一時支給ノ金額ハ期月ニ拘ハラズ之ヲ支
給ス

第八條 恩給ヲ受クル者其金額ヲ受領セントスルトキハ恩給
證書ヲ以テ其受領權アルコトヲ證明スヘシ

第九條 恩給ヲ受クル者他府縣ニ轉籍若クハ寄留スルトキハ
從來ノ居住地ノ地方廳及轉籍若クハ寄留地ノ地方廳ニ其旨
ヲ届出ヘシ

地方廳ニ於テ前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ大藏省ニ通知シ
各廳間互ニ其者ニ係ル恩給支給方ノ受領ヲ爲スヘシ
大藏省ニ於テ前項ノ通知ヲ受ケタルトキハ内閣恩給局ニ通
知スヘシ

第十條 官吏恩給法第十二條ニ當リタル者ノ恩給支給ノ終始
ハ左ノ各項ニ依ルヘシ

一 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ確定裁判ノ宣告ヲ受ケ
タル日、日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ其失ヒタ
ル日ヲ以テ支給ヲ終ル

二 判任官以上ニ任シ政府ヨリ俸給ヲ受クルトキハ俸給ノ
支給ヲ始ムル日ノ前日ヲ以テ支給ヲ終リ其退官シタル
トキハ俸給ノ支給ヲ終リタル日ノ翌日ヨリ支給ヲ始ム

三 公權ヲ停止セラレタルトキハ禁錮ノ刑ニ處セラレ若ク
ハ監視ニ付セラレヘキ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日ヲ
以テ支給ヲ終リ刑期滿限ノ日ノ翌日ヨリ支給ヲ始ム

第十一條 官吏恩給法第七條第二項ニ掲ケル月俸トハ明治四
年六月東京淺草米賣ノ平均相場ニ依リ當時ノ官祿一個月分
ニ相當スル金額トス

第十二條 官吏恩給法第三條ニ掲ケル最下金額十分ノ七マテ
ノ増加恩給ノ等差ハ左ノ如シ

第一項 兩眼ヲ盲シ若クハ二肢以上ヲ亡シタル
トキ

十分ノ七

第二項 前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病
ニ罹リタルトキ

十分ノ六

第三項 一肢ヲ亡シ若クハ二肢ノ用ヲ失ヒタル
トキ

十分ノ五

第四項 前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病
ニ罹リタルトキ

十分ノ四

第五項 一眼ヲ盲シ若クハ一肢ノ用ヲ失ヒタル
トキ

十分ノ三

第六項 前項ニ準スヘキ傷痕ヲ受ク若クハ疾病ニ罹リタルトキ 十分ノ二

傷痕疾病ノ等差ハ明治十八年達文官傷痕疾病等差例ニ依ル

第三章 恩給ノ停止

第十三條 恩給ヲ受クル者重罪若クハ禁錮ノ刑ニ處セラレ又ハ監視ニ付セラレタルトキハ其確定裁判ノ宣告ヲ爲シタル裁判所ヨリ之ヲ大藏省ニ通知スヘシ

第十四條 官吏恩給法第十二條第二項ノ第一ニ當ル者アルトキハ其任用シタル官廳ヨリ大藏省ニ通知スヘシ解任シタルトキモ亦同シ但此通知書ニハ本人恩給ノ支給ヲ受ケタル地方廳名及俸給ノ支給ヲ始ムル日(解任ノトキハ支給ヲ終リタル日)ヲ付記スヘシ

第十五條 恩給ヲ受クル者死去シタルトキハ其遺族ヨリ地方廳ニ届出ヘシ其遺族ニシテ扶助料ヲ受クヘキ權利ナキトキハ死去ノ届出ヲ爲スト同時ニ恩給證書ヲ返納スヘシ

地方廳ニ於テ前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ直ニ大藏省ニ通知シ其恩給證書ハ内閣恩給局ニ送付スヘシ

第十六條 大藏省ニ於テ第十三條第十四條第十五條ノ通知ヲ受ケタルトキハ之ヲ内閣恩給局ニ通知シ且第十三條第十四條ノ場合ニ於テハ地方廳ニ通知シテ其恩給ノ支給ヲ停止シ又ハ復給セシムヘシ

地方廳ニ於テ此通知ヲ受ケタルトキ其恩給ヲ剝奪スヘキモノハ恩給證書ヲ收メテ内閣恩給局ニ送付スヘシ

第四章 雜則

第十七條 水火災盜難等ニ由リ恩給證書ヲ亡失シタル者ハ居住地ノ地方廳ニ届出ヘシ

地方廳ニ於テ前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ其事實ヲ調査シ亡失ノ事由ヲ具シテ内閣恩給局ニ申出ヘシ此場合ニ於テ恩給局ハ恩給證書ノ謄本ヲ作り地方廳ヲ經テ本人ニ下付スヘシ

前項恩給證書ノ謄本ハ恩給證書ト同一ノ効力アルモノトス

第十八條 恩給ヲ受クル者改氏名シタルトキハ居住地ノ地方廳ニ届出ヘシ地方廳ハ恩給證書ノ裏面ニ其事實ヲ記載シ長官署名捺印ノ上本人ニ下付シ其旨ヲ内閣恩給局及大藏省ニ通知スヘシ

第十九條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ恩給ヲ受クル者左ノ場合ニ於テハ本則ニ依ル

一 死去又ハ權利消滅又ハ停止ノトキ

二 恩給證書ヲ亡失シタルトキ

三 改氏名又ハ他府縣ニ轉籍若クハ寄留スルトキ

第二十條 官吏恩給法第二十條ニ依リ恩給ヲ請求スル者ハ本則ニ依ルヘシ

第二十一條 市制町村制ヲ施行セタル地方ニ於テハ本規則ニ依リ市町村長ノ爲スヘキ職務ハ區戸長ニ於テ之ヲ行フヘシ

○文官傷痕疾病等差例 明治十八年三月十六號達

「官吏恩給令附則第五條」傷痕疾病等差例左ノ通相定候條右ニ據リ取調候儀ト可心得此旨相達候事

文官傷痕疾病等差例

公務ノ爲メ傷痕ヲ受ク又ハ疾病ニ罹リ遂ニ一肢以上ノ用ヲ失フニ等シキ不治ノ症トナリ「官吏恩給令附則第五條」ニ掲クル各項ニ該當スル者ニ等差ヲ付スルトコト概テ左ノ如シ

第一條 偏眼ヲ育スル者全鼻ヲ失スル者ハ共ニ第五項トシ之ニ偏耳ノ官能ヲ併セ廢スル者ハ第四項トス

第二條 兩耳ヲ聾スル者ハ第四項トス

第三條 偏眼兩耳ノ官能ヲ併セ廢スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第二項或ハ第三項トス

第四條 一眼ヲ失ヒ他ノ一眼暗昧シ僅ニ自己ノ用ヲ辨スルヲ得ル者ハ第二項トス

第五條 咀嚼言語ノ兩機ヲ併セ廢スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第一項或ハ第二項トス

第六條 咀嚼ノ用ヲ廢スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第二項或ハ第三項トシ幾分ノ障礙アル者ハ第五項其輕キ者ハ第六項トス

第七條 精神亡失或ハ錯亂シテ常ニ看護ヲ要スル者ハ第一項トス

第八條 癡呆若クハ健忘症ヲ遺シ常ニ看護ヲ要セサル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第三項若クハ第五項トス

第九條 神經痛ヲ遺シ常ニ看護ヲ要セサル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス

第十條 言語ノ機能ヲ廢スル者ハ第三項トシ言語ノ機能ヲ妨

クランタル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス

第十一條 胃腸膀胱等ニ尿管ヲ遺ス者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第二項或ハ第三項トス

第十二條 膈軟弱尼亞ヲ遺ス者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス

第十三條 陰莖或ハ睪丸ヲ全失スル者ハ第三項トス

第十四條 陰莖ヲ半失スル者偏睪丸ヲ失スル者ハ共ニ第六項トス

第十五條 頸項背腰諸筋ノ運用ヲ妨クル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス

第十六條 一肢ヲ失ヒ且他肢ノ用ヲ全廢スル者ハ第一項トス

第十七條 一上肢ヲ失フ者ハ肩關節ヨリ腕關節ニ至ル間ハ何レノ部位ヲ論ヘス第三項トス

第十八條 肩關節ヨリ腕關節ニ至ル間ノ關節作用ヲ廢スルモ全肢ノ用ヲ廢スルニ至ラサル者ハ第六項トス

第十九條 一手ニ於テ四指以上ヲ失スル者ハ第四項トシ五指癒若クハ強硬等ノ爲メニ把握探摘ノ用ヲ廢スル者ハ第五項トス

第二十條 一手ニ於テ四指或ハ五指ノ各一部ヲ失スルモ尙把握ノ用ヲ爲シ得ル者ハ第六項トス

第二十一條 一手ニ於テ拇指示指ヲ併セ失スル者或ハ拇指示指ヲ除キ他ノ三指ヲ失スル者ハ第六項トス

第二十二條 一下肢ヲ失スル者ハ股關節ヨリ踝關節ニ至ルノ間ハ何レノ部位ヲ論ヘス第三項トス

現行日本法令大全

- 第二十三條 股關節ヨリ踝關節ニ至ル間ノ作用ヲ妨ケラシムル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス
- 第二十四條 跗骨ヨリ趾骨ニ至ルノ部ヲ失スル者ハ何ノ部位ヲ論セス第四項トス
- 第二十五條 一足ニ於テ五指ヲ失スル者ハ第五項トシ第一指ヲ併セ三指ヲ失スル者ハ第六項トス
- 第二十六條 不治病ノ爲メ常ニ看護ヲ要スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第一項或ハ第二項トス
- 第二十七條 不治病前項ヨリ輕キモ歩行スル能ハサル者ハ第三項トス
- 第二十八條 不治病前項ヨリ輕キモ自己ノ用辨ニ妨碍アル者ハ第四項トス
- 第二十九條 不治病前項ヨリ輕キモ營業ヲ爲シ難キ者ハ第五項トス
- 第三十條 不治病前項ヨリ輕キモ營業ヲ妨ケサル者ハ第六項トス

○恩給扶助料ノ權利ニ關スル恩給局

裁決手續

明治二十四年六月 閣令第二號

行政上ノ處分ニ因リ恩給扶助料ノ權利ニ關スル恩給局裁決手續左ノ通定ム

第一條 行政上ノ處分ニ因リ恩給扶助料ニ關スル權利ヲ障害セラントスル者恩給局ノ裁決ヲ請ハントスルトキハ其事由ヲ文書ニ認メ身分職業住所年齢ヲ記載シ署名捺印シ之

ニ證據書類ヲ添ヘ内閣恩給局長ニ差出スヘシ
前項ノ書類ハ郵便ヲ以テ之ヲ差出スコトヲ得

第二條 恩給局ニ於テ前條ノ申立理由アリト認ムルトキハ其書類ヲ當該官廳ニ送付シ相當ノ期限ヲ定メ答辯書ヲ添ヘテ之ヲ恩給局ニ差出サシムヘシ

第三條 恩給局ニ於テ必要ト認ムルトキハ請求者又ハ當該官廳ノ官吏ヲ召喚シ口頭陳述ヲ爲サシムルコトヲ得

第四條 恩給局ニ於テ裁決シタルトキハ裁決書ニ通テ作リ請求者及當該官廳ニ交付スヘシ

○恩給及扶助料每期受領ノトキ

證書差出方

明治二十三年十月 大藏省令第二十四號

本年法律第四十三號第四十四號第四十五號ニ據リ恩給及扶助料ヲ受ケルモノハ每期受領ノトキハ本人生存證書ヲ恩給證書ニ添ヘ差出スヘシ

○文官判任官以上退官賜金

明治二十三年六月 勅令第九十八號

朕茲ニ文官判任官以上ノ者退官賜金ノ件ヲ裁可ス

文官判任以上ノ者在官滿一年以上十五年未滿ニシテ退官シタル者ニハ退官現時ノ俸給半箇月分ヲ以テ在官年數ノ一箇年ニ當テ其年數ニ應スル金額ヲ一時支給ス但非職滿期ニ由リ退官

現行日本法令大全

シタル者ハ其在職最終ノ俸給額ニ依リ之ヲ給ス

本令施行前ニ滿年賜金若クハ一時賜金ヲ受ケタル者又ハ前項ノ賜金ヲ受ケタル者再ヒ任官シ自後退官シタルトキハ前項ニ掲ケル在官年數ヲ其再任ノ日ヨリ起算ス

恩給ヲ受ケタル者並自己ノ便宜ニ由リ退官シタル者又ハ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ由リ免官シタル者ニハ本令ノ賜金ヲ給セズ

本令ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス

○宮内省官吏准官更恩給例並遺族扶助例

明治二十三年八月 宮内省令第十六號

明治二十年達第二號宮内省官吏恩給例明治二十二年達第二十號宮内省准官更恩給例ヲ廢シ宮内省官吏准官更恩給例同遺族扶助例左ノ通相定ム

宮内省官吏恩給例

- 第一條 宮内省官吏判任以上ノ者退官シタルトキハ本例ノ規定ニ依リ恩給ヲ給ス
- 第二條 左ノ事項ハ明治二十三年法律第四十三號官吏恩給法ニ規定ノ條項ヲ適用ス
 - 一 在官滿十五年以上ノ者ニ對シ恩給ヲ給スル場合及其給額
 - 二 傷痍疾病ニ罹リシ者ニ對シ恩給ヲ給スル場合及其給額
 - 三 在官年數ノ計算並明治四年七月以前ノ在官者ニ對スル支給方

四 恩給ヲ受ケル者再ヒ官ニ就キ退官シタルトキ支給ノ區別

五 恩給ノ停止及剝奪

六 恩給ヲ受ケル資格ノ存否

第三條 宮内大臣ノ在職年數ハ國務大臣ノ例ニ依ル

第四條 政府ノ文官ヨリ宮内官ニ轉任シタル者又ハ恩給ヲ受ケシテ政府ヲ退キタル後宮内官ニ任シタル者ハ政府ノ判任官以上ニ在リシ月數モ在官年數中ニ通算ス

第五條 准官更 宮内省官制ニ於テ特ニ指定シタルヨリ官吏トナリタル者ハ准官更在官年數五分ノ一ヲ減シテ官吏在官年數ニ通算ス

第六條 准官吏ヨリ官吏トナリタル當月ハ官吏在官年數中ニ算入ス

第七條 俸給ヲ受ケサル官吏並高等官試補判任官見習補助員顧問員評議員又ハ御用掛勤務殿學殿部其他何等ノ名稱ヲ付スルモ宮内省官制外ニ屬スル者ニハ恩給ヲ給スルコトナシ但高等官試補及判任官見習ノ傷痍疾病ニ對スルモノハ此限ニアラス

第八條 恩給ノ支給ハ其所管長所管長ナキ者ハ内事課長ノ證明ニ依リ調査課ノ審査ヲ經テ宮内大臣之ヲ裁定ス

第九條 前條ノ裁定ニ服セサル者ハ六箇月以内ニ宮内大臣ニ具狀シ再審査ヲ請求スルコトヲ得

第十條 前條再審査ノ請求アルトキ宮内大臣ハ特ニ審査委員ヲ命ジ審査ノ上裁決ス此裁決ヲ以テ終結トシ他ニ告訴スルコトヲ得ス

第十一條 恩給ハ賣却讓與質入書入スルコトヲ得ス又負債ノ